

たかだまみなみ      しょうぶえ      しょうぶえ  
**高掬南遺跡・菖蒲江1遺跡・菖蒲江2遺跡**  
発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第132集



平成16年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



たかだまみなみ

しょうぶえ

しょうぶえ

# 高掬南遺跡・菖蒲江1遺跡・菖蒲江2遺跡

## 発掘調査報告書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第132集

平成16年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター









# 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、高揃南遺跡、菖蒲江1遺跡、菖蒲江2遺跡の調査成果をまとめたものです。

これら3遺跡は、天童市南端の高揃地区に所在し、立谷川と村山高瀬川によって形成された複合扇状地「立谷川扇状地」の前縁帯に広がる豊かな水田地帯の中にあります。

この度、山形県警察本部事業「山形県総合交通安全センター（仮称）」建設に先立ってこれら3遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、古墳時代前期の集落跡が検出され、焼失家屋など当時の生活を物語る貴重な資料を得ることができました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い、事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育ててきた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、わたしたちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木村 宰

本書は、「山形県総合交通安全センター（仮称）」建設に係る「高揃南遺跡」、「菖蒲江1遺跡」、「菖蒲江2遺跡」の発掘調査報告書である。

既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は山形県警察本部の委託により財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

出土遺物、調査記録類は、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

## 調 査 要 項

遺 跡 名	①高揃 <sup>たかだまみなみ</sup> 南遺跡 ②菖蒲江 <sup>しょうぶえ</sup> 1遺跡 ③菖蒲江2遺跡
遺 跡 番 号	①県遺跡番号249 ②平成10年度登録 ③平成10年度登録
所 在 地	①山形県天童市大字高揃字菖蒲江 ②山形県天童市大字高揃字高田、菖蒲江 ③山形県天童市大字高揃字菖蒲江
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター 理 事 長 木村 宰
受 託 期 間	平成13年4月1日～平成14年3月31日
現 地 調 査	平成13年5月8日～平成13年7月6日
調 査 担 当 者	調 査 第 二 課 長 尾形 與典（調査主任） 主任調査研究員 伊藤 邦弘 調 査 員 長瀬えみ子
遺 跡 名	高揃南遺跡（第2次）
遺 跡 番 号	県遺跡番号249
所 在 地	山形県天童市大字高揃字菖蒲江
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター 理 事 長 木村 宰
受 託 期 間	平成14年4月1日～平成15年3月31日
現 地 調 査	平成14年5月8日～平成14年10月11日
調 査 担 当 者	調 査 第 二 課 長 尾形 與典（調査主任） 主任調査研究員 伊藤 邦弘 調 査 員 長瀬えみ子
遺 跡 名	高揃南遺跡 菖蒲江1遺跡 菖蒲江2遺跡
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター 理 事 長 木村 宰
受 託 期 間	平成15年4月1日～平成16年3月31日（報告書作成）
調 査 担 当 者	調 査 第 二 課 長 尾形 與典（調査主任） 主任調査研究員 伊藤 邦弘 調 査 員 長瀬えみ子
調 査 指 導	山形県教育庁社会教育課文化財保護室
調 査 協 力	山形県警察本部警務部会計課 山形県教育委員会村山教育事務所 天童市教育委員会

# 凡 例

1 本書の作成は、尾形與典と長瀬えみ子が行った。執筆は、Ⅲ－1とⅢ－4～7を長瀬えみ子が、その他を尾形與典が担当した。付編として樹種及び種子同定報告を巻末に付した。

2 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（測地成果2000）に拠り、高さは海拔高で表す。また、方位は座標北を表す。

3 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S T…竪穴住居	S K…土坑	S D…溝跡
S X…性格不明遺構	S G…河川跡	
E K…遺構内土杭	E P…遺構内ピット	R W…登録木器
p…土器	w…木質（含炭化物）	s…礫

4 本文中の遺物番号は、図版・観察表・写真図版ともに共通である。

5 遺構・遺物図版の縮尺、網点等の用法は各図に示した。

6 遺物観察表中、（ ）内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。

7 基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に拠った。

8 発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。（順不同、敬称略）

阿子島功、小沢洋、川崎利夫、田嶋明人、長澤一雄、宮本長二郎

9 委託業務は下記のとおりである。

遺構写真実測業務	株式会社シン技術コンサル
木製品保存処理業務	株式会社吉田生物研究所
自然科学分析業務（樹種等同定）	株式会社吉田生物研究所

# 目次

I	調査の経緯	
1	発掘に至る経緯	1
2	調査の方法と経過	1
II	遺跡の立地と環境	
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	4
3	基本層序	5
III	高揃南遺跡	
1	第1次調査の概要	9
2	第2次調査の概要	38
3	竪穴住居跡の方向と規模	123
4	出土木製品の分類	125
5	出土土師器の分類	129
6	管玉の製作工程	145
7	調整技法凡例	146
8	調査のまとめ	147
IV	菖蒲江1遺跡	
1	遺構と遺物	169
2	調査のまとめ	171
V	菖蒲江2遺跡	
1	調査の概要	175
2	遺構と遺物	176
3	調査のまとめ	190
	付編	
	「高揃南遺跡出土木製品の樹種調査結果」	
	「高揃南遺跡出土炭化材の樹種調査結果」	
	「高揃南遺跡出土植物遺体の同定調査」	
	報告書抄録	巻末

## 表

表 1 土師器組成表 (1) .....142	表16 土師器觀察表 (10) .....161
表 2 土師器組成表 (2) .....143	表17 土師器觀察表 (11) .....162
表 3 竪穴住居跡觀察表 .....149	表18 土師器觀察表 (12) .....163
表 4 土坑觀察表 .....150	表19 土師器觀察表 (13) .....164
表 5 溝跡觀察表 .....150	表20 土師器觀察表 (14) .....165
表 6 木製品觀察表 .....151	表21 土製品計測表 .....166
表 7 土師器觀察表 (1) .....152	表22 管玉及び同未成品計測表 .....166
表 8 土師器觀察表 (2) .....153	表23 石製品計測表 .....166
表 9 土師器觀察表 (3) .....154	表24 弥生土器觀察表 (1) .....167
表10 土師器觀察表 (4) .....155	表25 弥生土器觀察表 (2) .....168
表11 土師器觀察表 (5) .....156	表26 菖蒲江 1 遺跡出土土師器觀察表 .....174
表12 土師器觀察表 (6) .....157	表27 菖蒲江 2 遺跡出土縄文土器觀察表 (1) .....188
表13 土師器觀察表 (7) .....158	表28 菖蒲江 2 遺跡出土縄文土器觀察表 (2) .....189
表14 土師器觀察表 (8) .....159	表29 菖蒲江 2 遺跡出土土師器觀察表 .....190
表15 土師器觀察表 (9) .....160	表30 菖蒲江 2 遺跡出土石製品觀察表 .....190

## 図 版

第 1 図 調査区概要図 ..... 2	第 23 図 S K 26・27土坑及び同出土遺物 .....27
第 2 図 遺跡位置図 ..... 3	第 24 図 S K 28土坑及び同出土遺物 .....28
第 3 図 地形区分図 ..... 4	第 25 図 S K 31土坑 .....28
第 4 図 基本層序 ..... 5	第 26 図 S K 31土坑出土遺物 (1) .....29
第 5 図 高嶺南遺跡遺構配置図 ..... 7	第 27 図 S K 31土坑出土遺物 (2) .....30
第 6 図 S T 1 竪穴住居跡及び同出土遺物 .....10	第 28 図 S K 31土坑出土遺物 (3) .....31
第 7 図 S T 2～5 竪穴住居跡 .....11	第 29 図 S K 32土坑 .....32
第 8 図 S T 2～5 竪穴住居跡完掘図 .....12	第 30 図 S K 32土坑出土遺物 .....33
第 9 図 S T 2～5 竪穴住居跡出土遺物 .....13	第 31 図 S K 33土坑 .....34
第 10 図 S T 6 竪穴住居跡及び同出土遺物 .....14	第 32 図 S G 114河川跡 .....35
第 11 図 S T 7 竪穴住居跡及び同出土遺物 .....15	第 33 図 S G 114河川跡出土遺物 (1) .....36
第 12 図 S T 7 竪穴住居跡出土遺物 .....16	第 34 図 S G 114河川跡出土遺物 (2) .....37
第 13 図 S T 8 竪穴住居跡及び同出土遺物 .....17	第 35 図 畝状遺構 .....37
第 14 図 S T 8 竪穴住居跡出土遺物 .....18	第 36 図 S T 201竪穴住居跡 .....38
第 15 図 S T 9 竪穴住居跡及び同出土遺物 .....19	第 37 図 S T 201竪穴住居跡出土遺物 .....39
第 16 図 S T 10竪穴住居跡及び同出土遺物 .....20	第 38 図 S T 202竪穴住居跡 (1) .....40
第 17 図 S T 11竪穴住居跡 .....21	第 39 図 S T 202竪穴住居跡 (2) .....41
第 18 図 S T 12竪穴住居跡及び同出土遺物 .....22	第 40 図 S T 202竪穴住居跡出土遺物 (1) .....42
第 19 図 S T 12竪穴住居跡出土遺物 .....23	第 41 図 S T 202竪穴住居跡出土遺物 (2) .....43
第 20 図 S T 14竪穴住居跡及び同出土遺物 .....24	第 42 図 S T 202竪穴住居跡出土遺物 (3) .....44
第 21 図 S T 15竪穴住居跡及び同出土遺物 .....25	第 43 図 S T 202竪穴住居跡出土遺物 (4) .....45
第 22 図 S K 24土坑及び同出土遺物 .....26	第 44 図 S T 202竪穴住居跡出土遺物 (5) .....46

第 45 図	S T 202 竪穴住居跡出土遺物 ( 6 )	47	第 86 図	S D 262 溝跡	87
第 46 図	S T 204 竪穴住居跡	48	第 87 図	S D 262 溝跡出土遺物 ( 1 )	88
第 47 図	S T 205 竪穴住居跡出土遺物	49	第 88 図	S D 262 溝跡出土遺物 ( 2 )	89
第 48 図	S T 205 竪穴住居跡	50	第 89 図	S D 262 溝跡出土遺物 ( 3 )	90
第 49 図	S T 205 竪穴住居跡出土遺物 ( 1 )	51	第 90 図	S D 262 溝跡出土遺物 ( 4 )	91
第 50 図	S T 205 竪穴住居跡出土遺物 ( 2 )	52	第 91 図	S D 319 溝跡	92
第 51 図	S T 205 竪穴住居跡出土遺物 ( 3 )	53	第 92 図	S D 344 溝跡及び同出土遺物	93
第 52 図	S T 205 竪穴住居跡出土遺物 ( 4 )	54	第 93 図	S X 273 性格不明遺構	94
第 53 図	S T 206 竪穴住居跡	55	第 94 図	S X 273 性格不明遺構出土遺物	95
第 54 図	S T 206 竪穴住居跡出土遺物	56	第 95 図	S G 252 河川跡 ( 1 )	96
第 55 図	S T 208 竪穴住居跡	57	第 96 図	S G 252 河川跡 ( 2 )	97
第 56 図	S T 208 竪穴住居跡出土遺物	58	第 97 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 1 )	98
第 57 図	S T 209 竪穴住居跡	59	第 98 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 2 )	99
第 58 図	S T 209 竪穴住居跡出土遺物	60	第 99 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 3 )	100
第 59 図	S T 210 竪穴住居跡	61	第 100 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 4 )	101
第 60 図	S T 210 竪穴住居跡出土遺物	62	第 101 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 5 )	102
第 61 図	S T 211 竪穴住居跡 ( 1 )	63	第 102 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 6 )	103
第 62 図	S T 211 竪穴住居跡 ( 2 )	64	第 103 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 7 )	104
第 63 図	S T 211 竪穴住居跡出土遺物 ( 1 )	65	第 104 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 8 )	105
第 64 図	S T 211 竪穴住居跡出土遺物 ( 2 )	66	第 105 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 9 )	106
第 65 図	S T 211 竪穴住居跡出土遺物 ( 3 )	67	第 106 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 10 )	107
第 66 図	S T 211 竪穴住居跡出土遺物 ( 4 )	68	第 107 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 11 )	108
第 67 図	S T 212 竪穴住居跡	69	第 108 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 12 )	109
第 68 図	S T 212 竪穴住居跡出土遺物 ( 1 )	70	第 109 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 13 )	110
第 69 図	S T 212 竪穴住居跡出土遺物 ( 2 )	71	第 110 図	S G 252 川跡出土遺物 ( 14 )	111
第 70 図	S T 213 竪穴住居跡	71	第 111 図	包含層出土遺物 ( 1 )	112
第 71 図	S K 253・255・258 土坑	72	第 112 図	包含層出土遺物 ( 2 )	113
第 72 図	S K 253・258 土坑出土遺物	73	第 113 図	包含層出土遺物 ( 3 )	114
第 73 図	S K 278 土坑	74	第 114 図	包含層出土遺物 ( 4 )	115
第 74 図	S K 278 土坑出土遺物	75	第 115 図	包含層出土遺物 ( 5 )	116
第 75 図	S K 304・318・337 土坑及び同出土遺物	76	第 116 図	包含層出土遺物 ( 6 )	117
第 76 図	S K 340 土坑及び同出土遺物	77	第 117 図	包含層出土遺物 ( 7 )	118
第 77 図	S K 348 土坑及び同出土遺物	78	第 118 図	間層出土遺物 ( 1 )	119
第 78 図	S D 260 溝跡 ( 南東部 )	79	第 119 図	間層出土遺物 ( 2 )	120
第 79 図	S D 260 溝跡 ( 北西部 )	80	第 120 図	間層出土遺物 ( 3 )	121
第 80 図	S D 260 溝跡出土遺物 ( 1 )	81	第 121 図	間層出土遺物 ( 4 )	122
第 81 図	S D 260 溝跡出土遺物 ( 2 )	82	第 122 図	竪穴住居跡の軸長比	123
第 82 図	S D 260 溝跡出土遺物 ( 3 )	83	第 123 図	竪穴住居跡の主軸方向と規模	123
第 83 図	S D 260 溝跡出土遺物 ( 4 )	84	第 124 図	土師器分類図 ( 1 )	135
第 84 図	S D 261 溝跡	85	第 125 図	土師器分類図 ( 2 )	136
第 85 図	S D 261 溝跡出土遺物	86	第 126 図	土師器分類図 ( 3 )	137

第 127 図	土師器分類図 (4)	138	第 140 図	基本層序	176
第 128 図	土師器分類図 (5)	139	第 141 図	S D 1 溝跡	176
第 129 図	土師器分類図 (6)	140	第 142 図	泥炭層中の遺物分布	177
第 130 図	土師器分類図 (7)	141	第 143 図	泥炭層出土遺物 (1)	178
第 131 図	管玉製作工程図	144	第 144 図	泥炭層出土遺物 (2)	179
第 132 図	土師器調整痕凡例	145	第 145 図	泥炭層出土遺物 (3)	180
第 133 図	菖蒲江 1 遺跡遺構配置図	169	第 146 図	泥炭層出土遺物 (4)	181
第 134 図	基本層序	169	第 147 図	泥炭層出土遺物 (5)	182
第 135 図	S T 3 竪穴住居跡	170	第 148 図	泥炭層出土遺物 (6)	183
第 136 図	S T 3 竪穴住居跡出土遺物	171	第 149 図	泥炭層出土遺物 (7)	184
第 137 図	包含層出土遺物 (1)	172	第 150 図	泥炭層出土遺物 (8)	185
第 138 図	包含層出土遺物 (2)	173	第 151 図	泥炭層出土遺物 (9)	186
第 139 図	菖蒲江 2 遺跡調査区全区	175	第 152 図	泥炭層出土遺物 (10)	187

## 写真図版

巻頭 1	高嶺南遺跡 S T 202 竪穴住居跡調査風景	図版 23	高嶺南遺跡出土遺物 (6)
巻頭 2	高嶺南遺跡 S G 252 河川跡遺物出土状況	図版 24	高嶺南遺跡出土遺物 (7)
図版 1	調査前風景他	図版 25	高嶺南遺跡出土遺物 (8)
図版 2	S T 1 竪穴住居跡他	図版 26	高嶺南遺跡出土遺物 (9)
図版 3	S T 8 竪穴住居跡完掘状況他	図版 27	高嶺南遺跡出土遺物 (10)
図版 4	S K 31 土坑遺物出土状況他	図版 28	高嶺南遺跡出土遺物 (11)
図版 5	高嶺南遺跡第 2 次調査鍬入式他	図版 29	高嶺南遺跡出土遺物 (12)
図版 6	S T 202 竪穴住居跡遺物出土状況他	図版 30	高嶺南遺跡出土遺物 (13)
図版 7	S T 202 竪穴住居跡完掘状況他	図版 31	高嶺南遺跡出土遺物 (14)
図版 8	S T 208 竪穴住居跡完掘状況他	図版 32	高嶺南遺跡出土遺物 (15)
図版 9	S T 212 竪穴住居跡完掘状況他	図版 33	高嶺南遺跡出土遺物 (16)
図版 10	S K 318 土坑他	図版 34	高嶺南遺跡出土遺物 (17)
図版 11	S D 261 溝跡他	図版 35	高嶺南遺跡出土遺物 (18)
図版 12	S G 252 河川跡調査状況他	図版 36	高嶺南遺跡出土遺物 (19)
図版 13	S G 252 河川跡遺物出土状況他	図版 37	高嶺南遺跡出土遺物 (20)
図版 14	菖蒲江 1 遺跡 S T 3 竪穴住居跡他	図版 38	高嶺南遺跡出土遺物 (21)
図版 15	菖蒲江 2 遺跡調査状況他	図版 39	高嶺南遺跡出土遺物 (22)
図版 16	高嶺南遺跡出土遺物 (1)	図版 40	高嶺南遺跡出土遺物 (23)
図版 17	高嶺南遺跡出土遺物 (2)	図版 41	高嶺南遺跡出土遺物 (24)
図版 18	高嶺南遺跡出土遺物 (3)	図版 42	高嶺南遺跡出土遺物 (25)
図版 19	高嶺南遺跡出土遺物 (4)	図版 43	菖蒲江 1 遺跡出土遺物
図版 20	土器加飾部拡大他	図版 44	菖蒲江 2 遺跡出土遺物 (1)
図版 21	調整技法凡例他	図版 45	菖蒲江 2 遺跡出土遺物 (2)
図版 22	高嶺南遺跡出土遺物 (5)	図版 46	菖蒲江 2 遺跡出土遺物 (3)



# I 調査の経緯

## 1 発掘に至る経緯

高楯南遺跡は、昭和53年刊行の「山形県遺跡地図」に掲載されている周知の遺跡であるが、菖蒲江1遺跡と菖蒲江2遺跡は、山形県教育委員会により、平成10年度に登録された遺跡である。この度、山形県警察本部によって山形県総合交通安全センター（仮称）の整備事業が計画され、これに伴って、工事予定地内に所在するこれらの遺跡の範囲や性格を調べるための試掘調査が、山形県教育委員会によって平成10年8月と同年10月に行われ、菖蒲江1遺跡と菖蒲江2遺跡でそれぞれ6本、高楯南遺跡で19本の試掘溝が設定された。その結果、高楯南遺跡は古墳時代（前期）の集落跡、菖蒲江1遺跡は縄文時代、古墳時代（前期）、平安時代、中世と時期が複合する集落跡、菖蒲江2遺跡は縄文時代（後期）の包蔵地及び古墳時代の集落跡であると考えられた。

このような調査結果をもとに、関係機関による協議が行われた結果、緊急発掘調査により記録保存を図ることになり、記録保存部分については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが県から委託を受けて発掘調査を実施することになったものである。

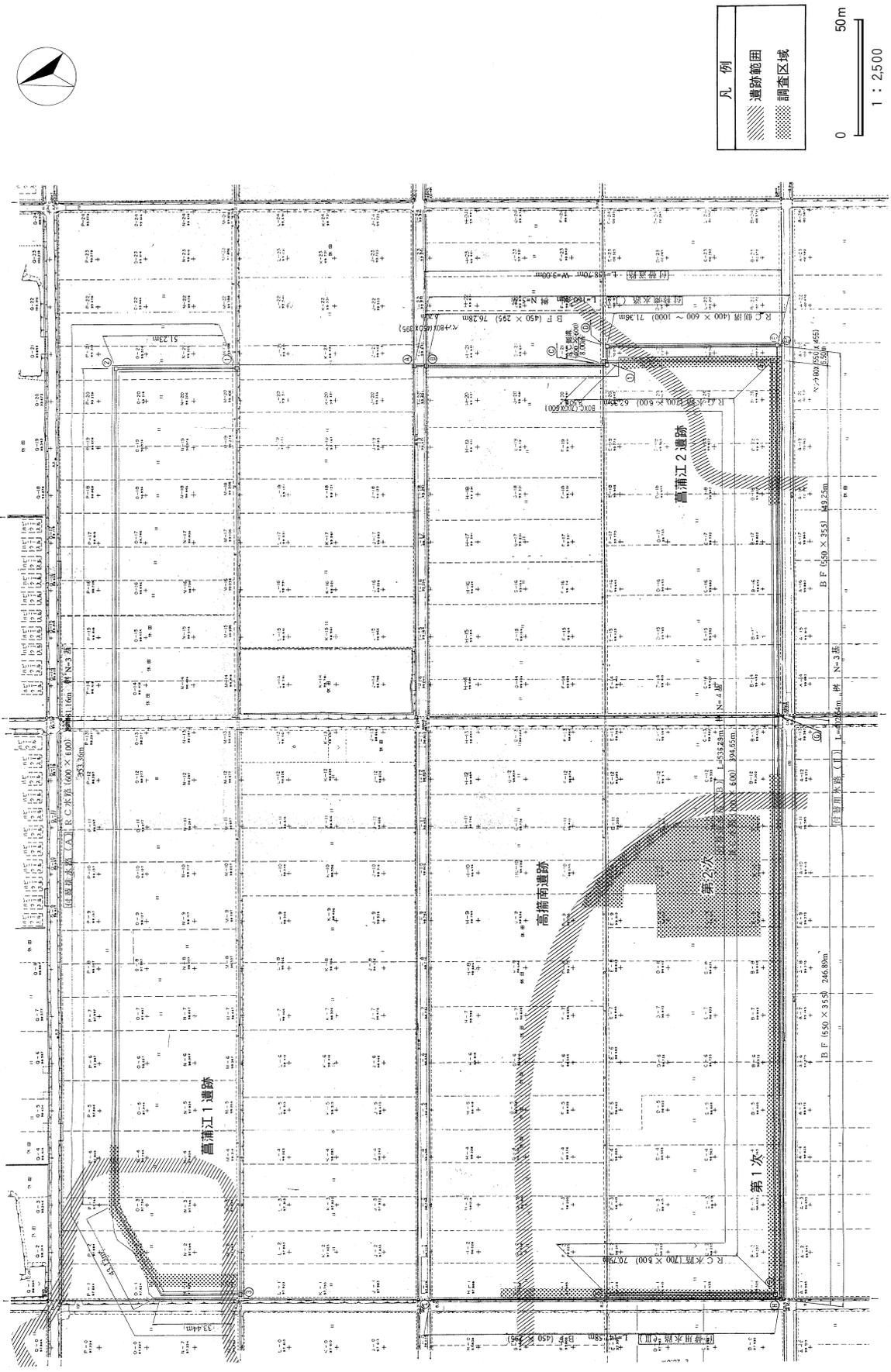
## 2 調査の方法と経過

調査は、平成13年度と平成14年度に行った。平成13年度の発掘調査は、山形県総合交通安全センター（仮称）予定地外周に付け替えを行う農業用水路の掘削範囲と、同じく予定地外周に巡らす擁壁設置部分に係るもので、菖蒲江1遺跡445㎡、菖蒲江2遺跡596㎡、そして高楯南遺跡1,489㎡の計2,530㎡を対象とした。また、平成14年度の発掘調査は、建設予定の本館部分及びロータリー部分に係る、高楯南遺跡3,000㎡を対象とした。

高楯南遺跡については、両年にわたって調査を行ったため、平成13年度を第1次調査、平成14年度を第2次調査とした。

第1次調査は、平成13年5月8日、関係者出席のもと鍬入れ式を執り行い、調査対象地域の南東部に位置する菖蒲江2遺跡から調査を開始した。調査予定地区内に2m×2mの試掘孔を約10m間隔に設定し、人力で遺物包含層まで掘り下げを行い、その結果をもとに耕作土及び無遺物層を重機により除去して遺構確認を行った。重機による表土除去は、遺構確認作業に先行し、順次高楯南遺跡、菖蒲江1遺跡へと移行した。7月6日（金）には、現地において関係者による調査成果の説明会を実施し、同日、調査を終了して機材等を撤収した。

第2次調査は平成14年5月8日に開始した。第1次調査と同様、関係者出席のもと鍬入れ式を執り行い、調査を開始した。調査の方法は第1次調査と同様、試掘孔を設定し、その結果をもとに重機を導入し、その後遺構検出を行った。10月1日（火）には一般市民を対象にした調査説明会を開催し、台風21号の近づきつつある雨天にもかかわらず、約150名の参加を得た。10月10日、遺構写真実測のための空撮を行い、10月11日をもって調査を終了した。



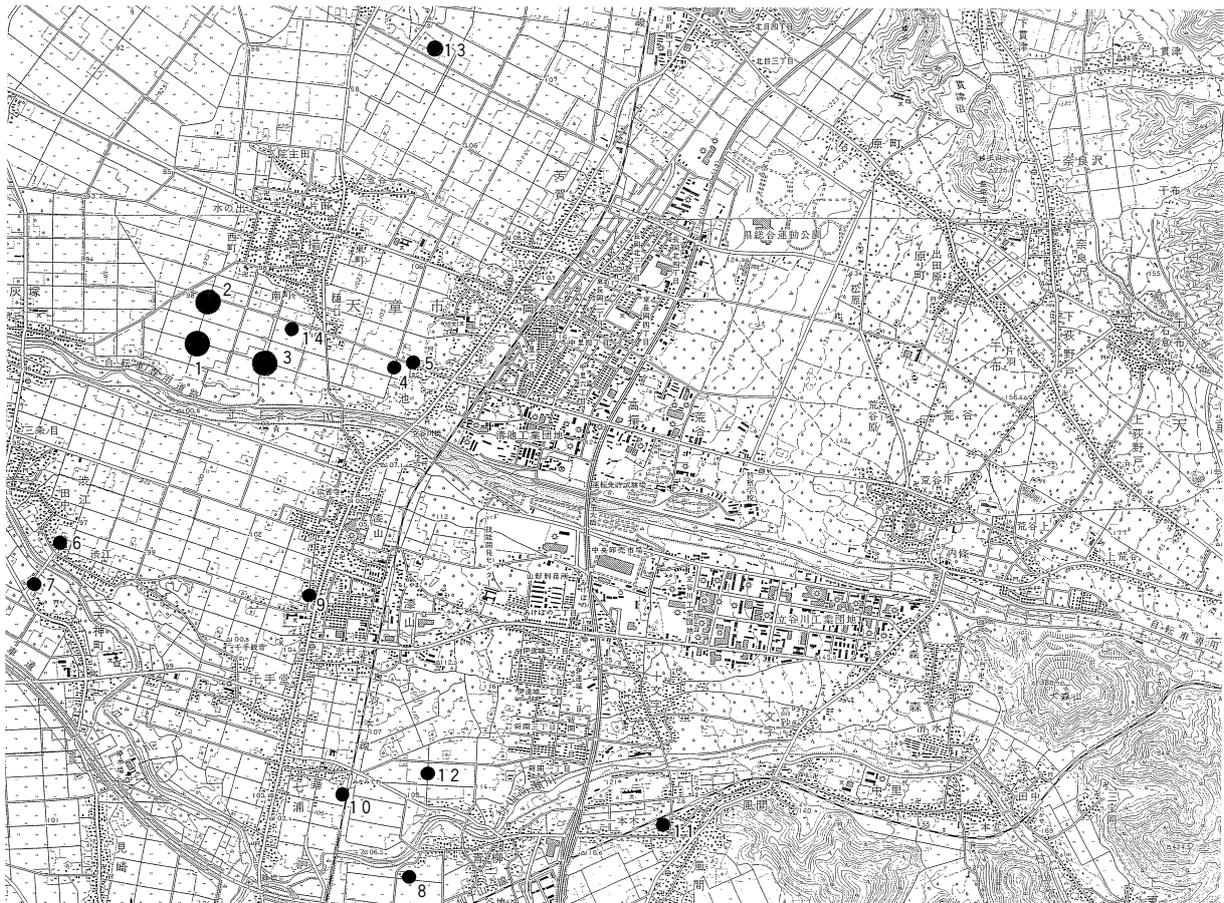
第1図 調査区概要図

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

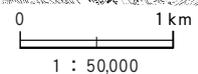
高揃南遺跡と菖蒲江 2 遺跡は天童市大字高揃字菖蒲江に、菖蒲江 1 遺跡は天童市大字高揃の字高田、字菖蒲江に跨って所在する。当地域は、奥羽山脈の面白山（1,264m）付近に源を発して西流し、最上川の支流である須川に注ぐ、長さ20km、流域面積76km<sup>2</sup>の立谷川と、立谷川の南を西流して馬見ヶ崎川に注ぐ村山高瀬川の二河川により形成された半径約8kmの複合扇状地である「立谷川扇状地」の前縁帯に位置している。遺跡付近の標高は東から西に緩く傾斜しており、標高は菖蒲江 2 遺跡で約100m、高揃遺跡で約99m、菖蒲江 1 遺跡で約98mを測る。

立谷川扇状地は、扇頂部の山寺付近で標高約220m、扇端部の旧羽州街道（旧国道13号線）あり、現在は主要地方道山形天童線）沿いで約110mとなっており、その勾配は約15/1,000と急勾配のため、浸食による土砂の運搬量が大きく、古来から氾濫を繰り返してきた。



- |            |            |                    |
|------------|------------|--------------------|
| 1 高揃南遺跡    | 6 洪江遺跡     | 11 間所免遺跡           |
| 2 菖蒲江 1 遺跡 | 7 向河原遺跡    | 12 下柳 A 遺跡         |
| 3 菖蒲江 2 遺跡 | 8 漆山長表遺跡   | 13 塚野目 A 遺跡（古墳・弥生） |
| 4 火矢塚 1 号墳 | 9 衛守塚 2 号墳 | 14 桜江遺跡（縄文後・晩）     |
| 5 火矢塚 2 号墳 | 10 七浦一ノ坪遺跡 |                    |

国土地理院発行 2万5千分の1地形図  
「天童」「寒河江」「山寺」「山形北部」を50%に縮小した



第2図 遺跡位置図（1：50,000）

立谷川の氾濫は江戸時代の記録によると1666（寛文8）年から1851（嘉永4）年までの186年間で17回を数え、最近では昭和25年の豪雨による水害が記憶に新しい。調査でも、高揃南遺跡と菖蒲江1遺跡では遺構検出面のさらに下層に、洪水による河川堆積物と思われる灰色細砂が観察され、菖蒲江2遺跡では洪水の際の鉄砲水が運んだと思われる砂の堆積が見られた。

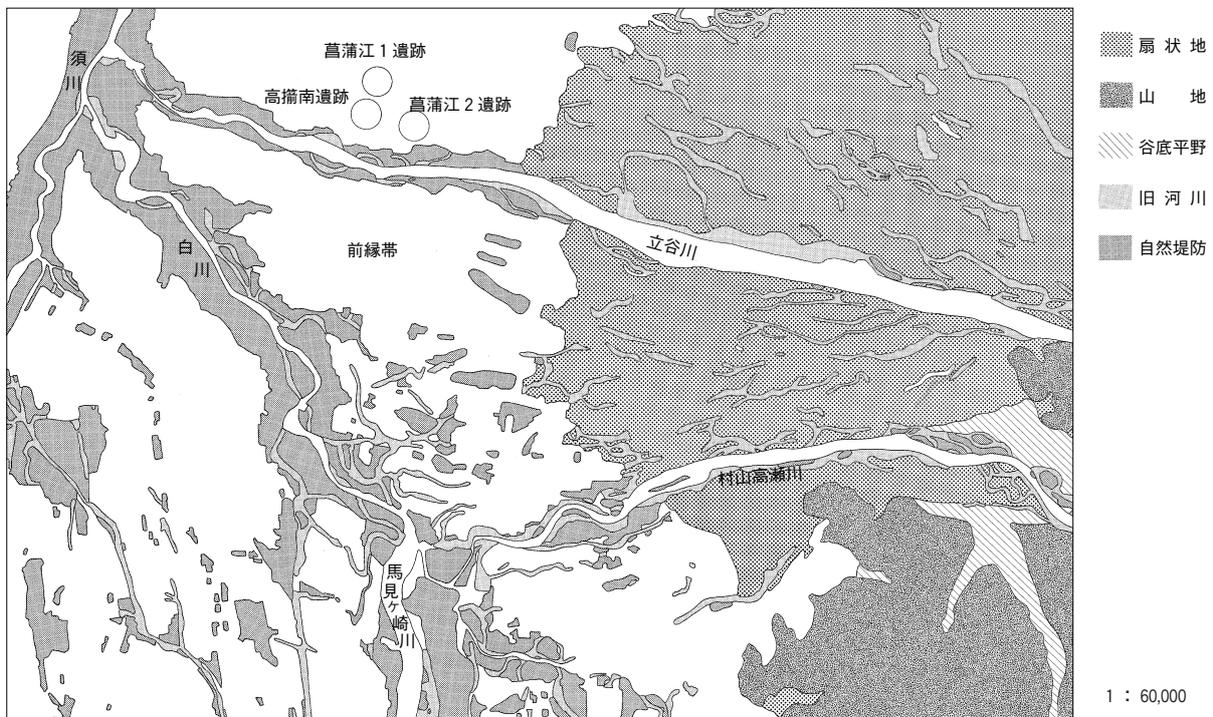
## 2 歴史的環境

立谷川扇状地の扇端部には自然湧水が多く分布しており、中でも清池八幡神社の泉は水量が豊富な井戸で、灌漑用水に使われてきた。

扇状地では河川が伏流するため、自然湧水地が多い扇端部付近に、遺跡が集中して立地することが多いが、縄文後～晩期頃からは、扇端部からその先の前縁帯が集落の占地として捉えられるようになり、特に弥生時代から古墳時代にあつては、水位が高く灌漑の必要のない前縁帯が水稻農耕の適地として認識されるようになってきたものと思われる。

古墳時代に属する遺跡を地図上にプロットしてみると、立谷川扇状地の扇端部から前縁帯にかけて遺跡が多く分布していることがわかる。扇端部付近には火矢塚1・2号墳や衛守塚2号墳などの古墳があり、前縁帯には、塚野目集落、高揃集落、漆山集落、そして七浦集落の周辺に遺跡の分布が見られる。

時期は異なるが、塚野目集落周辺には矢口遺跡、塚野目A遺跡がある。塚野目A遺跡からは弥生後期の「天王山式」と呼ばれる、頸部に刺突文を持つ壺などが出土している。高揃集落周辺には縄文後～晩期に属する砂子田遺跡や高揃東遺跡、礼井戸遺跡等がある。



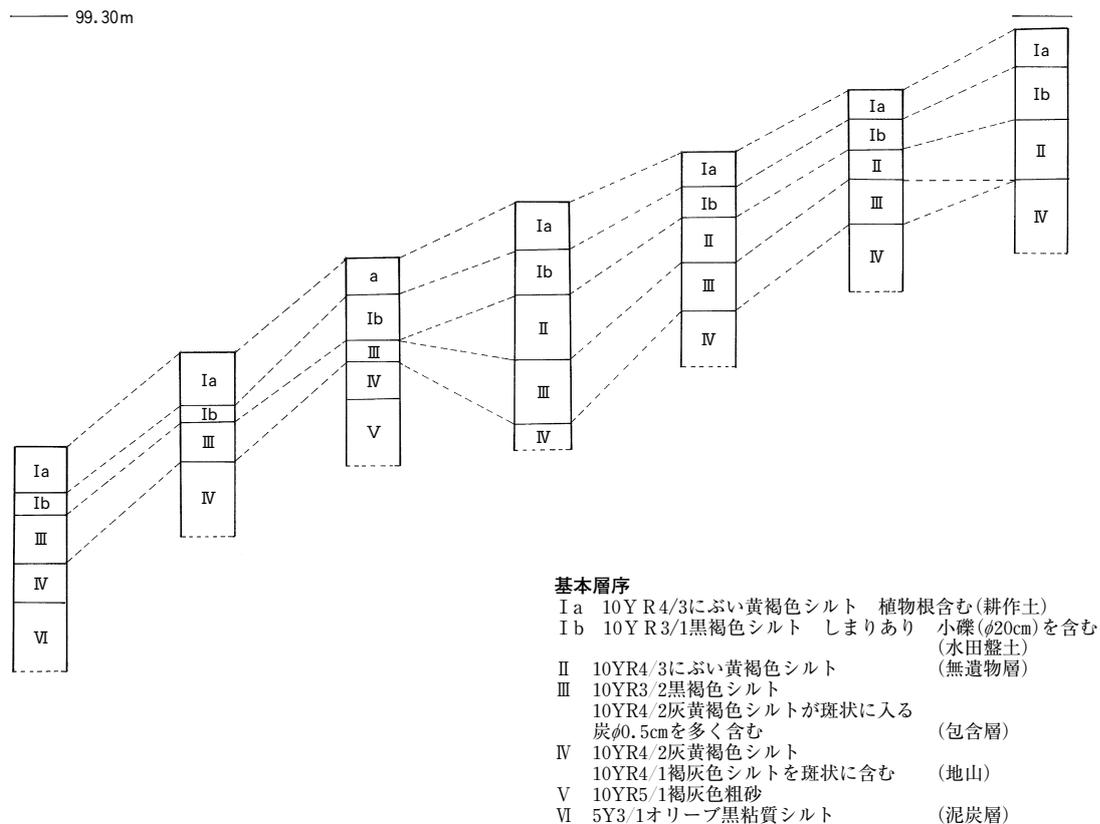
「土地条件図 山形」『土地条件調査報告書（山形地区）』（昭和60年3月、建設省国土地理院）から抜粋

第3図 地形区分図

### 3 基本層序

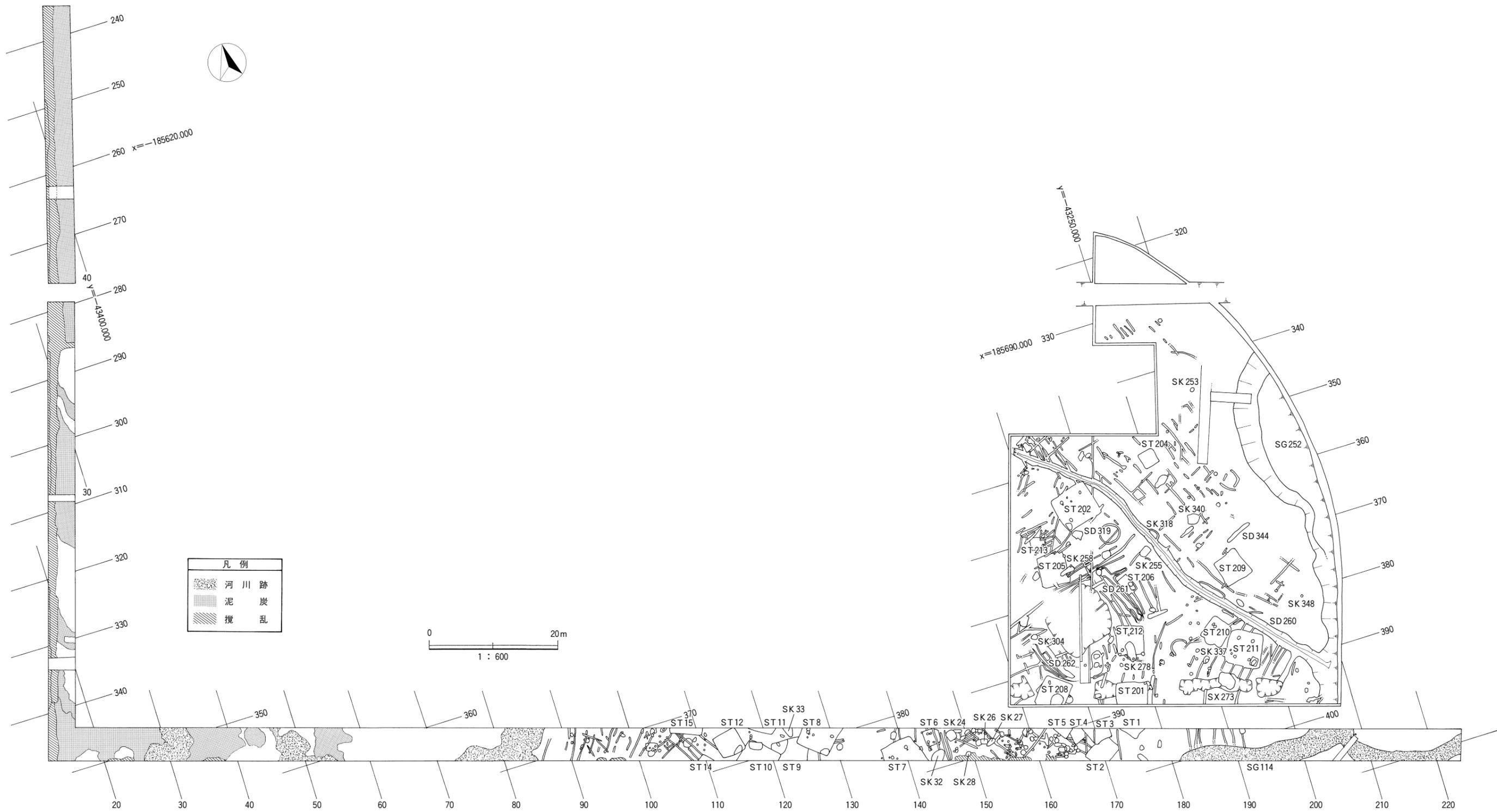
基本層序は、各遺跡で若干の違いを見せるものの、扇状地前縁帯という立地の共通性、しかも近隣の遺跡であることなどから、ほぼ同様の層序で構成されている。高橋南遺跡の第1次調査で観察した、東西約250mにわたる土層断面は、この地域の層序を概観することのできる資料と思われるので、これを当該地域の基本層序として述べる。にぶい黄褐色シルトのI a層は水田の耕作土であり、水田の基盤であるI b層は黒褐色を呈するシルトである。II層は無遺物層であり、にぶい黄褐色を呈するシルトで構成される。III層は黒褐色シルトに灰黄褐色シルトが斑状に入る。炭粒を多く含み、層中に遺物を包含する。IV層は灰黄褐色シルトで褐灰色シルトを斑状に含む。地山である。V層は褐灰色粗砂で、河川の氾濫に由来するものと思われる。VI層はいわゆる泥炭であるが、分布は全面的ではなく、観察し得た西側地区では浅いところに見られる。あるいは東では深いところに分布するのかもしれない。調査に係っては以上の層序を確認し得たが、菖蒲江1遺跡ではさらに下に河川の氾濫に由来すると思われる灰色細砂などが見られる。

一体に扇状地前縁帯では、堆積した泥炭が乾燥し、バクテリアなどによって土壌化するという。このようにして形成された微高地が、古墳時代前期の頃には、集落として使用されていたものようである。



第4図 基本層序





第5図 高橋南遺跡遺構配置図



## Ⅲ 高橋南遺跡

### 1 第1次調査の概要

第1次調査は、山形県総合交通安全センター（仮称）建設予定地の南辺と西辺に、幅5m、長さ約330mの調査区を設定した。このうち、遺構が密集するのは南辺中央東寄りの区域で、その遺構分布域は、調査区外北部と南部に広がることが考えられる。遺構のとぎれた西側は低湿地となり、河川の運んだ堆積物である礫層や砂層、葦・葎などの堆積する泥炭層が地山を形成する。

遺跡は、旧河川の氾濫によって形成された自然堤防上の微高地にあたる、安定した地盤に営まれていたことがうかがえる。

第1次調査で検出された遺構は竪穴住居跡13棟、土坑7基、河川跡2条、畝状遺構などで、時期的には古墳時代前期のものである。

以下に各遺構の概要を述べる。

記述に当たって、遺構の所在位置は北西隅グリッド～南西隅グリッドと表示した。各隅の表示はX軸（西→東）・Y軸（北→南）という意味である。

#### 1. 竪穴住居跡

竪穴住居跡はすべて古墳時代前期のものである。平面形は方形または長方形を呈する。調査区が狭いため、大方が調査区の外に位置し、全容が認められたものは少ない。7棟は焼失家屋である。出土遺物からは、はっきりとした時期差がうかがえず、比較的短期間の住居であったものと考えられる。

##### ST1 竪穴住居跡（第6図）

170・390～175・390グリッドで検出された。住居の半分以上が調査区外に位置する。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西3.4m、南北2.4m、検出面から床面までの深さは約30cmである。主軸方向はN-40°-Wを示す。

覆土は自然堆積である。床面には炭・炭化材が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。柱穴や貯蔵穴などは検出できなかった。

床面出土遺物には、壺（2・4）、甕脚台部（3）がある。このほか、細片のため図化できなかったが鉢がある。S字状の口縁部破片（1）は包含層出土のものであるが、（3）と胎土が極めて似ていることから同一個体の可能性があるものとして扱った。

##### ST2 竪穴住居跡（第7・8図）

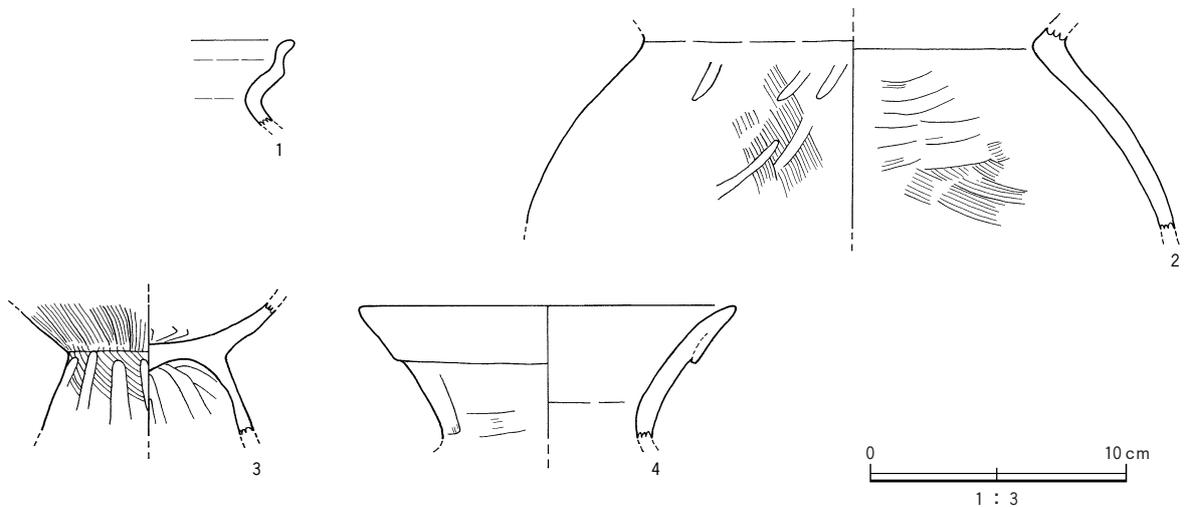
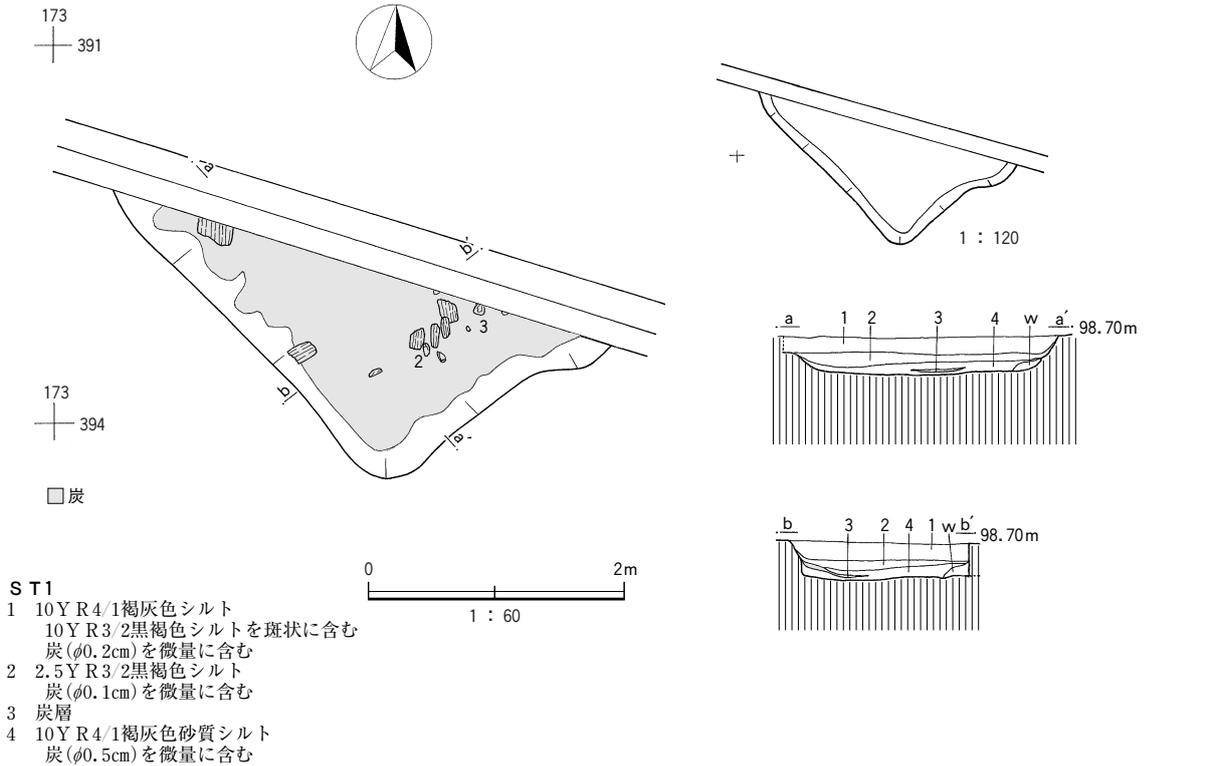
165・395～170・390グリッドで検出された。住居の南隅が調査区外に掛かる。北側にST3竪穴住居跡があり、この住居により北側の一部が切られている。平面形は隅が丸みをもつ長方形を呈する。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西4.7m、南北3.2m、検出面から床面までの深さは約10cmである。主軸方向はN-59°-Eを示す。

覆土は自然堆積である。床面には炭・炭化材が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。床面の中央より東寄りに、焼土に覆われた被熱した面が2ヵ所みられ、地床炉と考えられる。ST2(旧)→ST3(新)が確認された。柱穴や貯蔵穴などは認められなかった。

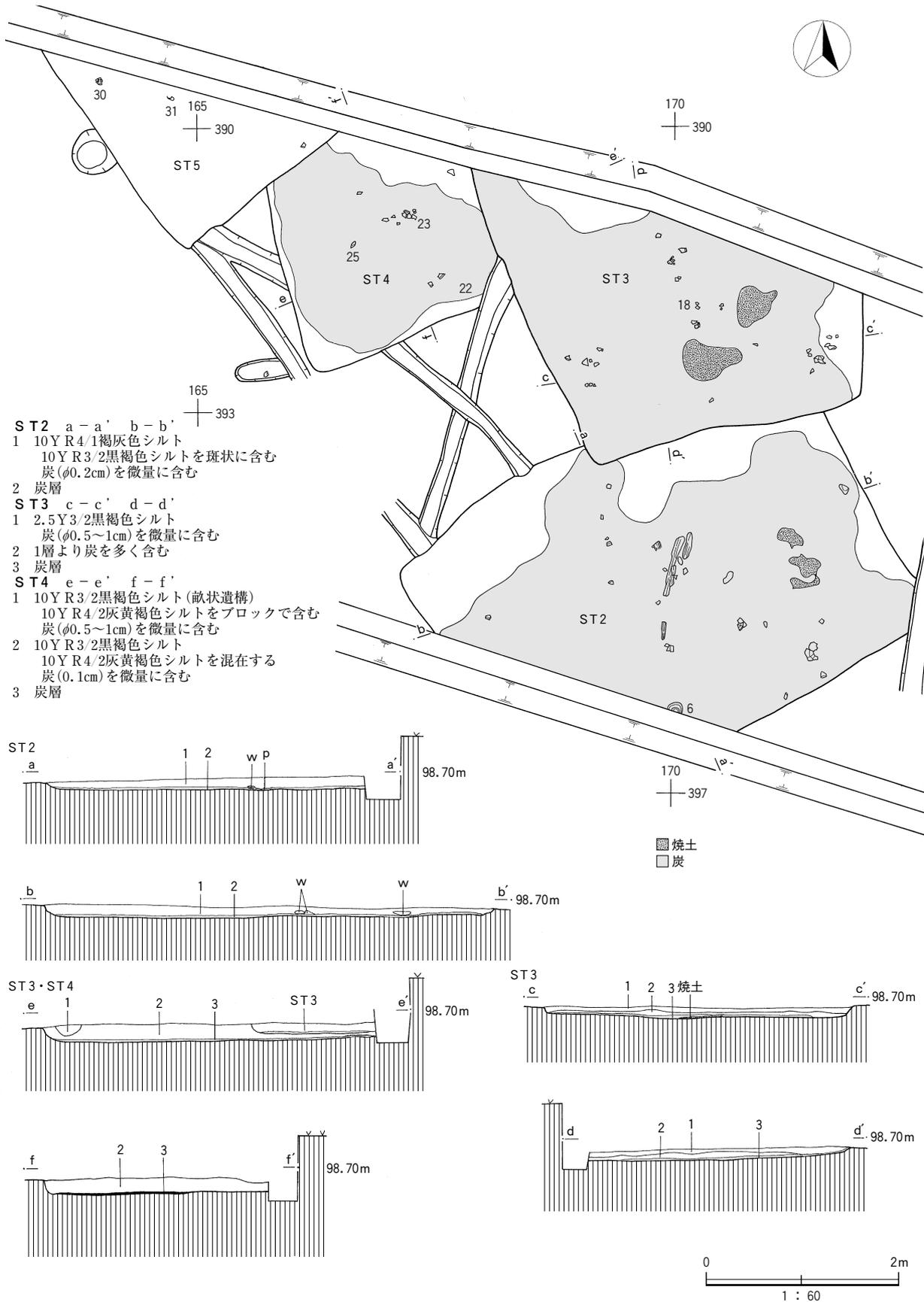
床面出土遺物には壺・甕(6・7)がある。覆土中からの出土遺物は甕(8)、壺(9)蓋(5)がある。

ST3 竪穴住居跡 (第7・8図)

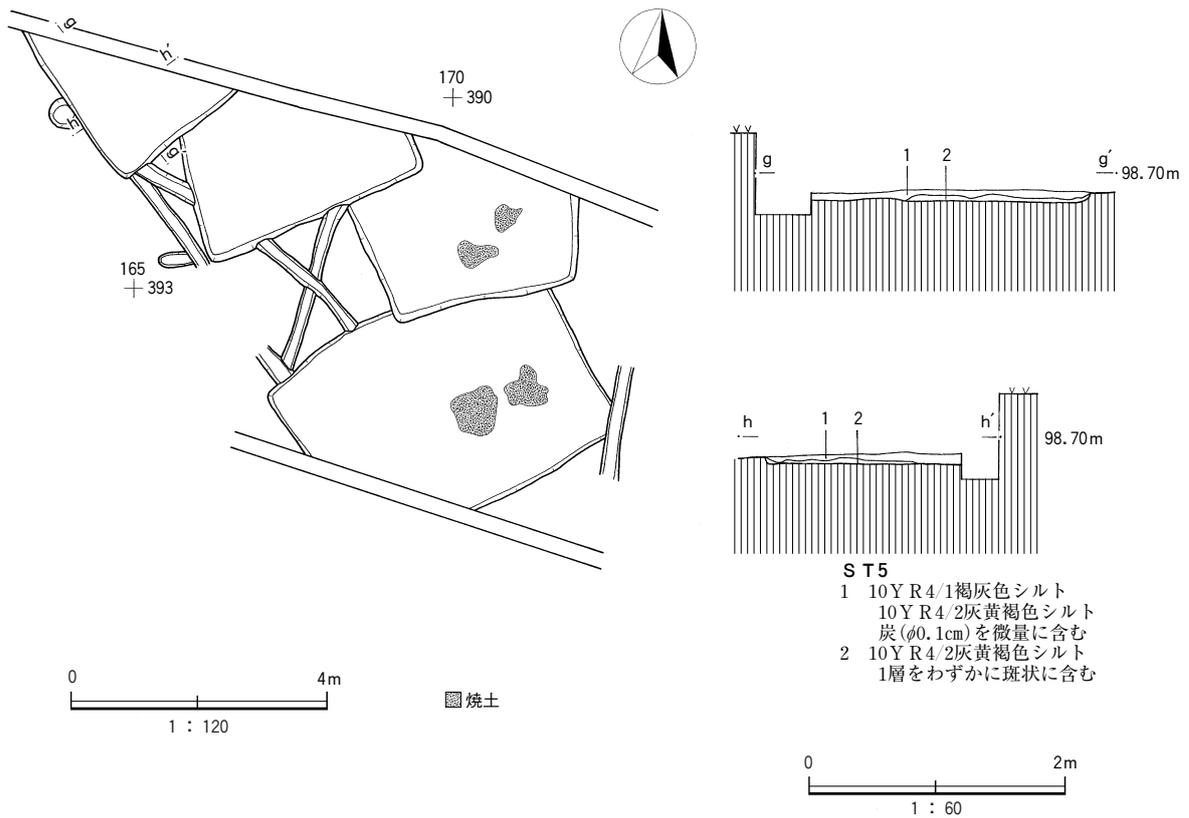
175・390~170・390グリッドで検出された。住居の北隅が調査区外に掛かる。西側にST4



第6図 ST1 竪穴住居跡及び同出土遺物



第7図 ST2~5 竪穴住居跡



第8図 ST 2～5 竪穴住居跡完掘図

竪穴住居跡があり、この住居により西側の一部が切られている。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西2.9m、南北3.6m、検出面から床面までの深さは約13cmである。主軸方向はN-12°-Wを示す。

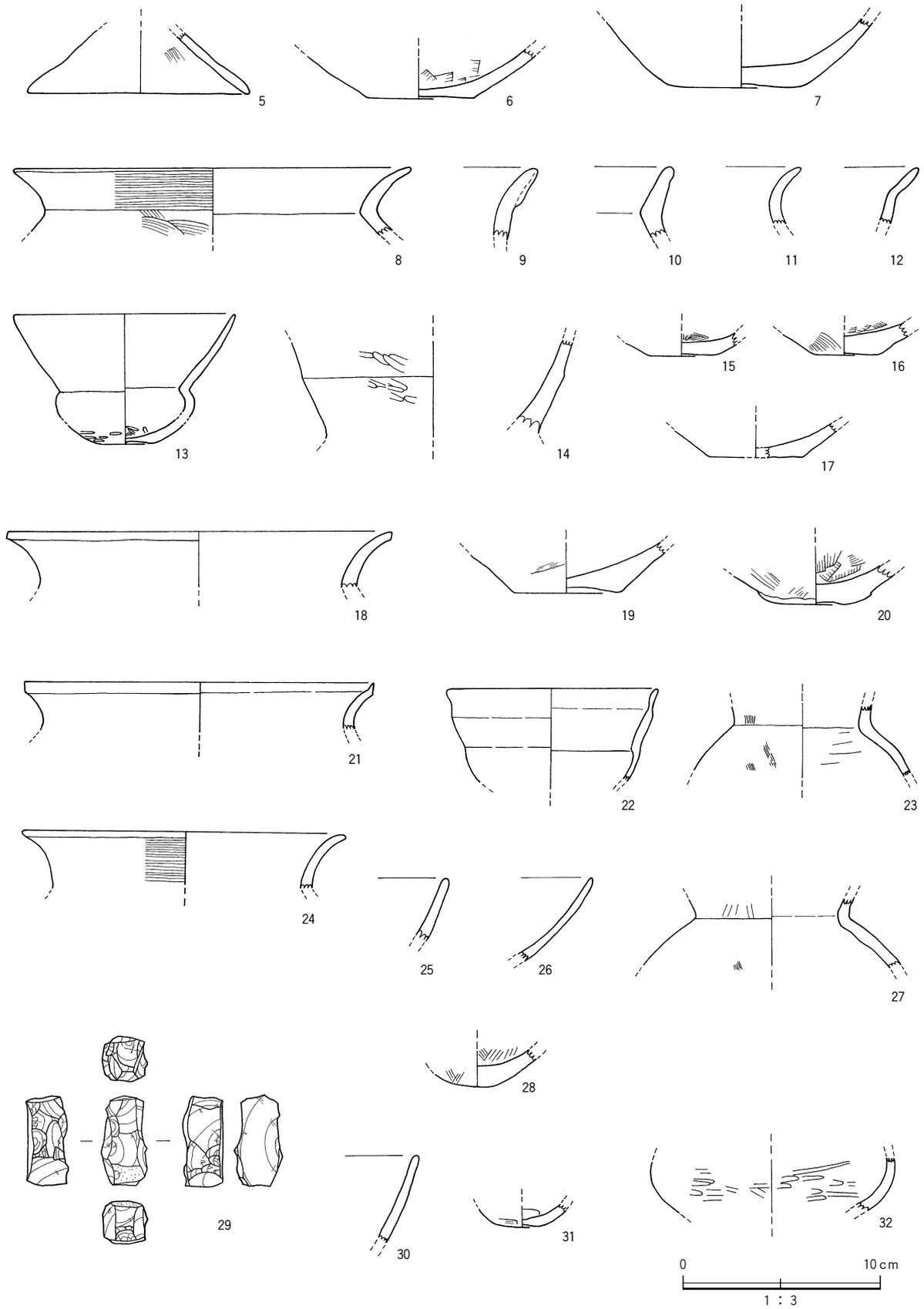
覆土は自然堆積である。床面には炭・炭化材が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。床面の中央より東寄りに焼土と被熱した面が2ヵ所みられ、地床炉と考えられる。ST 2・ST 4 (旧) → ST 5 (新) が確認された。柱穴や貯蔵穴などは検出できなかった。

床面出土遺物には、甕 (18)、鉢 (13) がある。覆土中からの出土遺物には壺 (14) 甕 (10・11・21)、甕・壺 (15～17・19・20)、鉢 (12) がある。

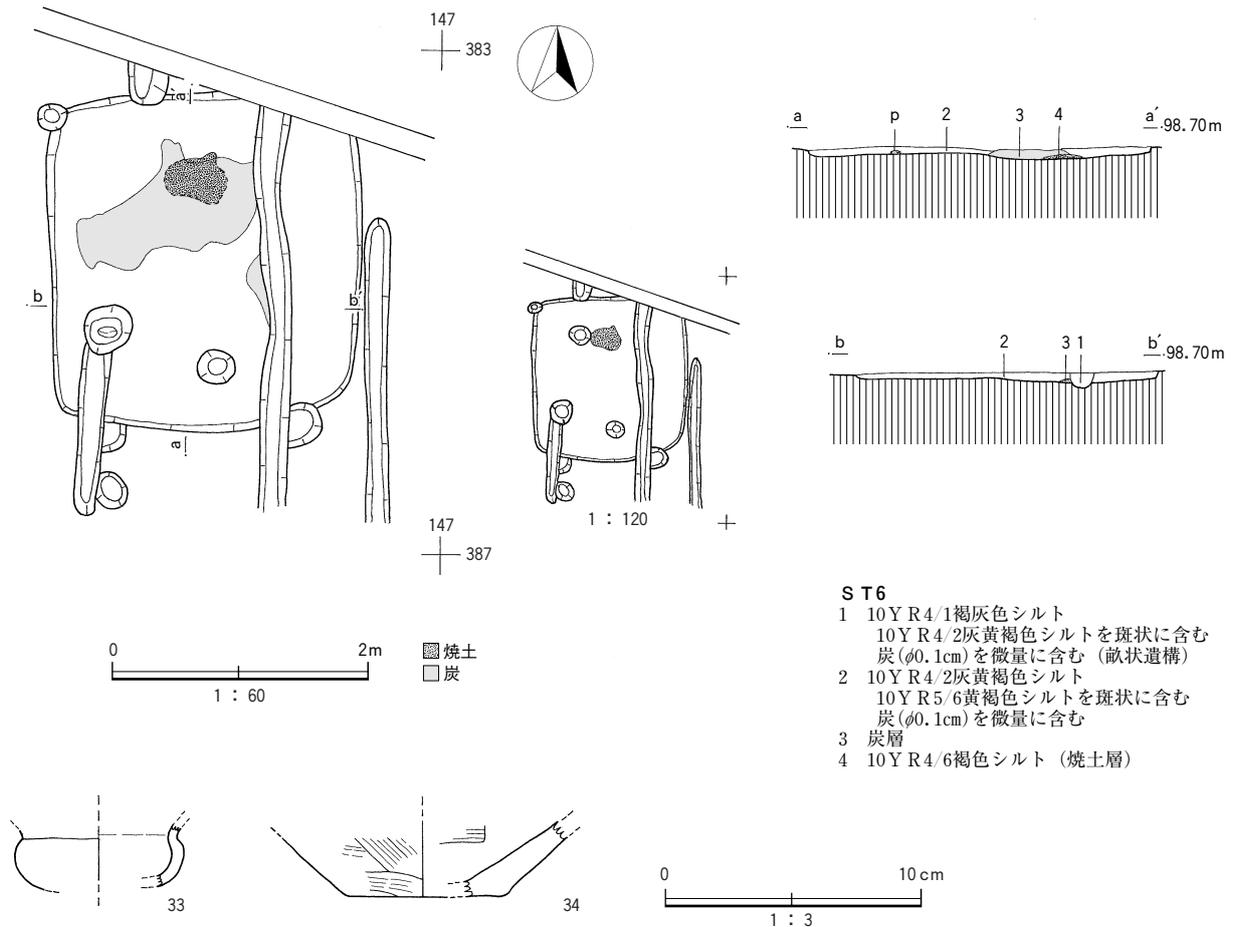
#### ST 4 竪穴住居跡 (第7・8図)

165・385～165・390グリッドで検出された。住居の北隅が調査区外に位置する。西側にST 5 竪穴住居跡があり、この住居により西側の一部が切られている。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西1.8m、南北2.2m、検出面から床面までの深さは約15cmである。主軸方向はN-13°-Wを示す。覆土は自然堆積である。床面には炭が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。ST 4 (旧) → ST 3・ST 5 (新) が確認された。柱穴や貯蔵穴、炉などは検出できなかった。

床面出土遺物には壺 (23) 鉢 (22・25) 高坏 (26) などがある。覆土中からの出土遺物には甕 (24)、甕・壺 (28)、壺 (27)、管玉の未成品がある。



第9図 ST 2～5 竪穴住居跡出土遺物



第10図 S T 6 竪穴住居跡及び同出土遺物

**S T 5 竪穴住居跡 (第7・8図)**

160・385～165・385グリッドで検出された。住居の北隅が調査区外に位置する。東側にS T 4 竪穴住居跡があり、この住居により、東側の一部が切られている。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西2.3m、南北2.9m、検出面から床面までの深さは約10cmである。主軸方向はN-32°-Wを示す。

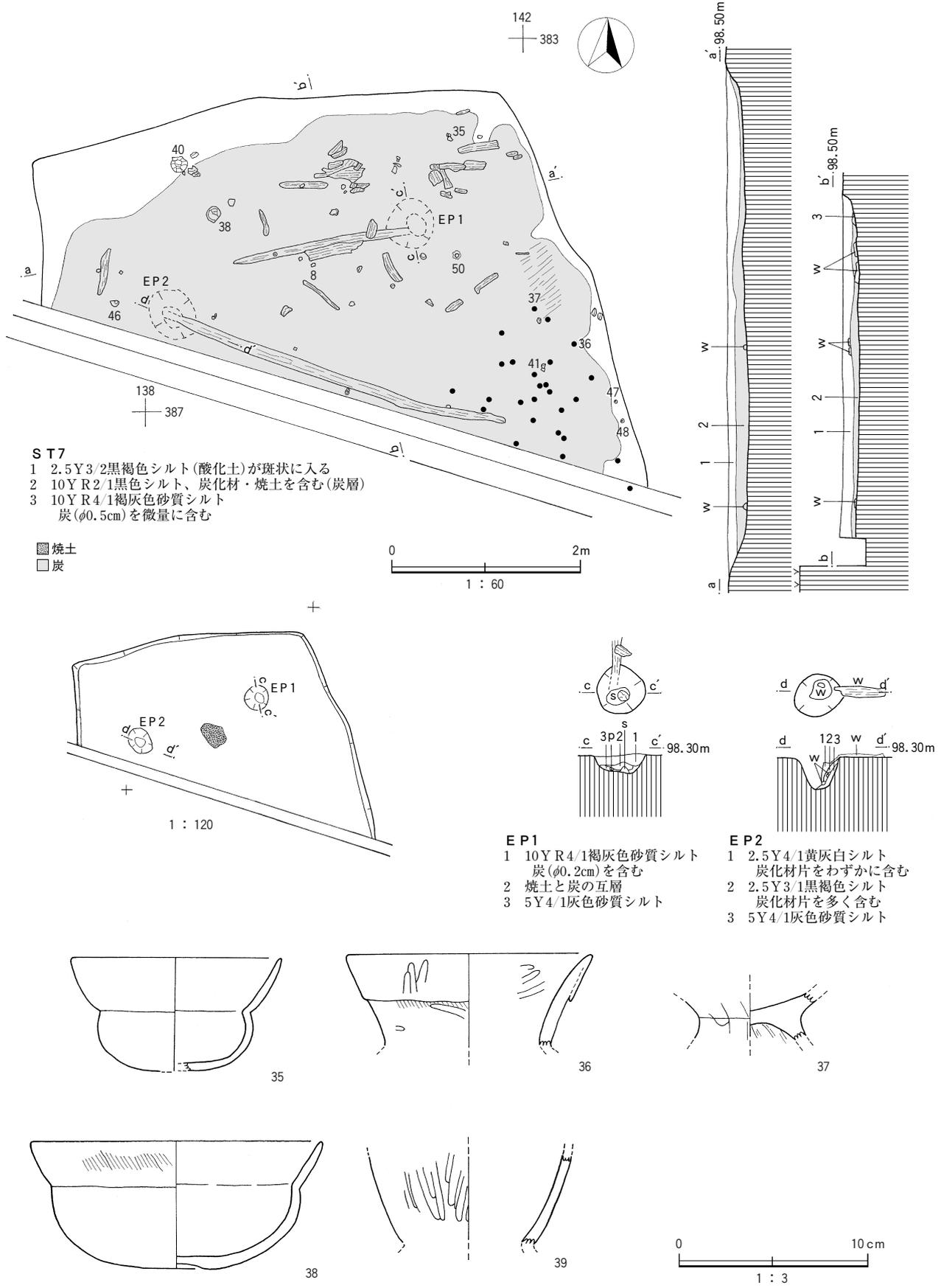
覆土は約10cmであるため、堆積状況は不明である。S T 4 (旧) → S T 5 (新) が確認された。柱穴や貯蔵穴、炉などは検出できなかった。

出土遺物には、壺 (32)、鉢 (31)、高坏 (30) のほか、細片のため図化できなかった甕がある。

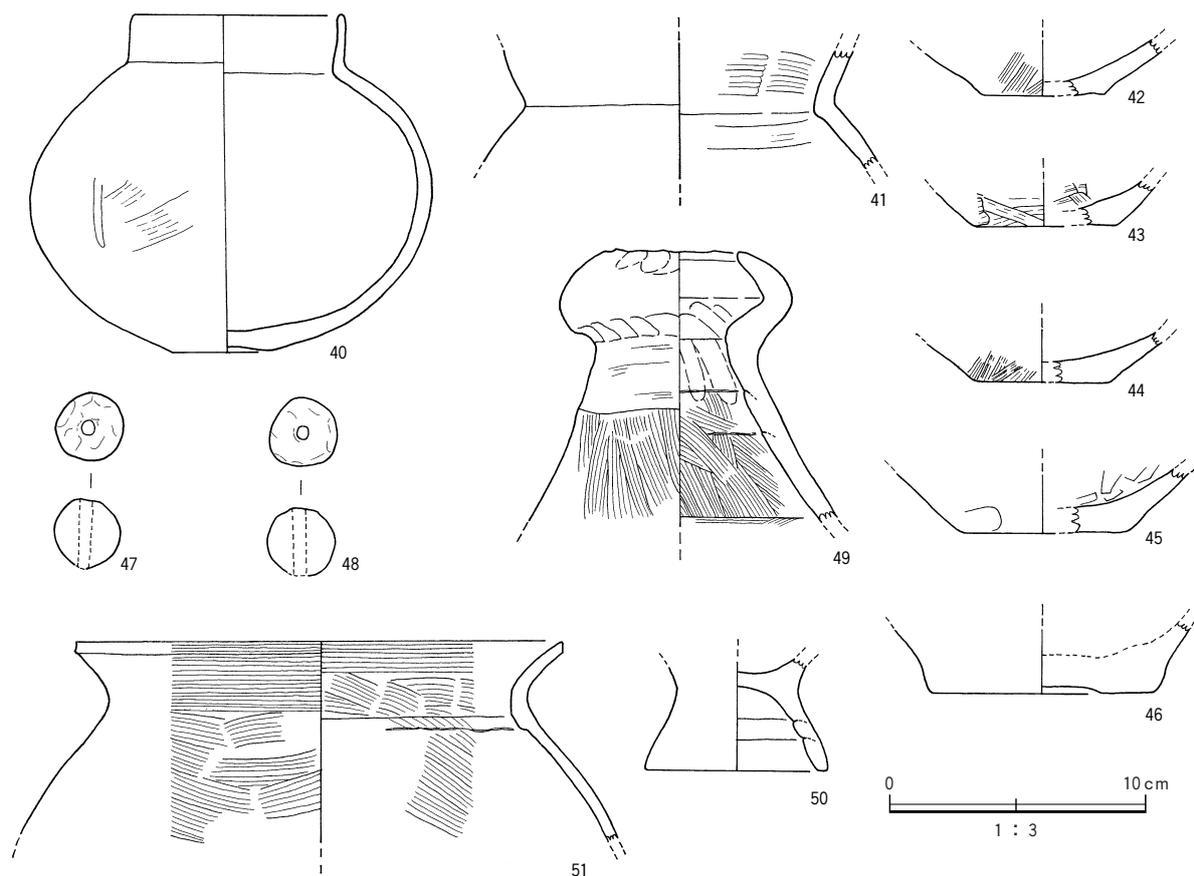
**S T 6 竪穴住居跡 (第10図)**

140・385～145・385グリッドで検出された。住居の北隅が調査区外に係る。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈する。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西2.4m、南北2.6m、検出面から床面までの深さは約10cmである。主軸方向はN-2°-Wを示す。

覆土は約10cm程であるため、堆積状況は不明である。床面の中央より北寄りに炭が覆っている部分があり、炭を取り除くと被熱して硬化した面がみられた。床面一面を覆って遺存する炭とは様相が異なり、炉の使用に伴うものと考えられる。床面には3個のピットが存在するが、



第11図 S T 7 竪穴住居跡及び同出土遺物



第12図 ST 7 竪穴住居跡出土遺物

いずれも支柱穴を構成するものではない。貯蔵穴は認められなかった。

床面出土遺物には、甕 (34)、鉢 (33) がある。

#### ST 7 竪穴住居跡 (第11図)

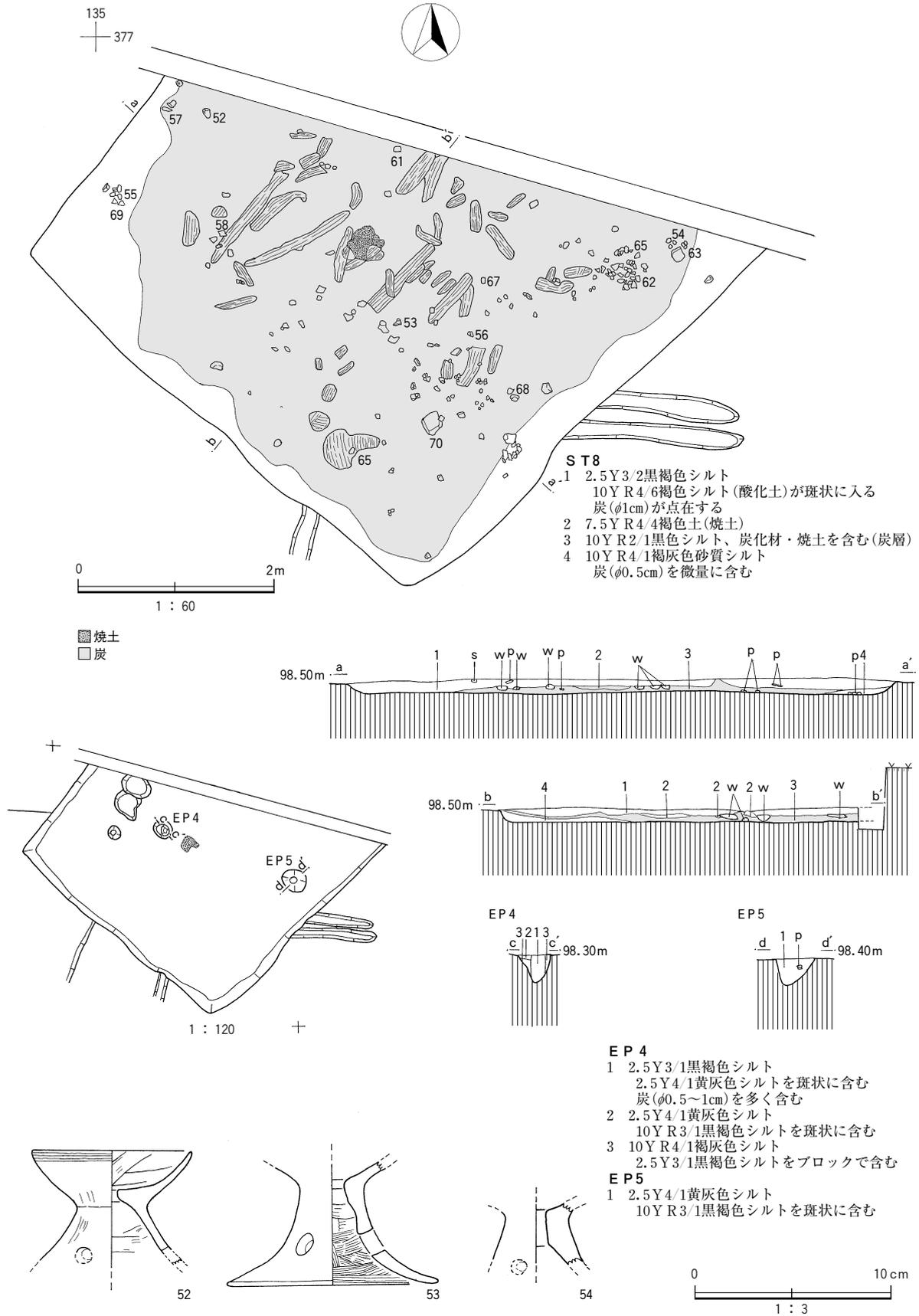
135・380~140・385グリッドで検出された。住居の南半が調査区外に位置する。平面形隅丸方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西5.0m、南北5.1m、検出面から床面までの深さは、約23cmを測る。主軸方向はN-12°-Wを示す。覆土は自然堆積である。床面には炭・炭化材が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。

床面の中央より北寄りに焼土と被熱した面が1カ所みられ、地床炉と考えられる。柱は2本検出され支柱と考えられる。それらは、炭化した柱材の基部が柱穴内に遺存したまま、上部が横倒しの状態で床面から検出され、焼け落ちた様相を呈している。柱材は丸太材を使用している。東壁際床面には、住居中心部に向かい放射状に葦状の炭化物が検出されており、屋根材の可能性が考えられる。貯蔵穴は認められなかった。

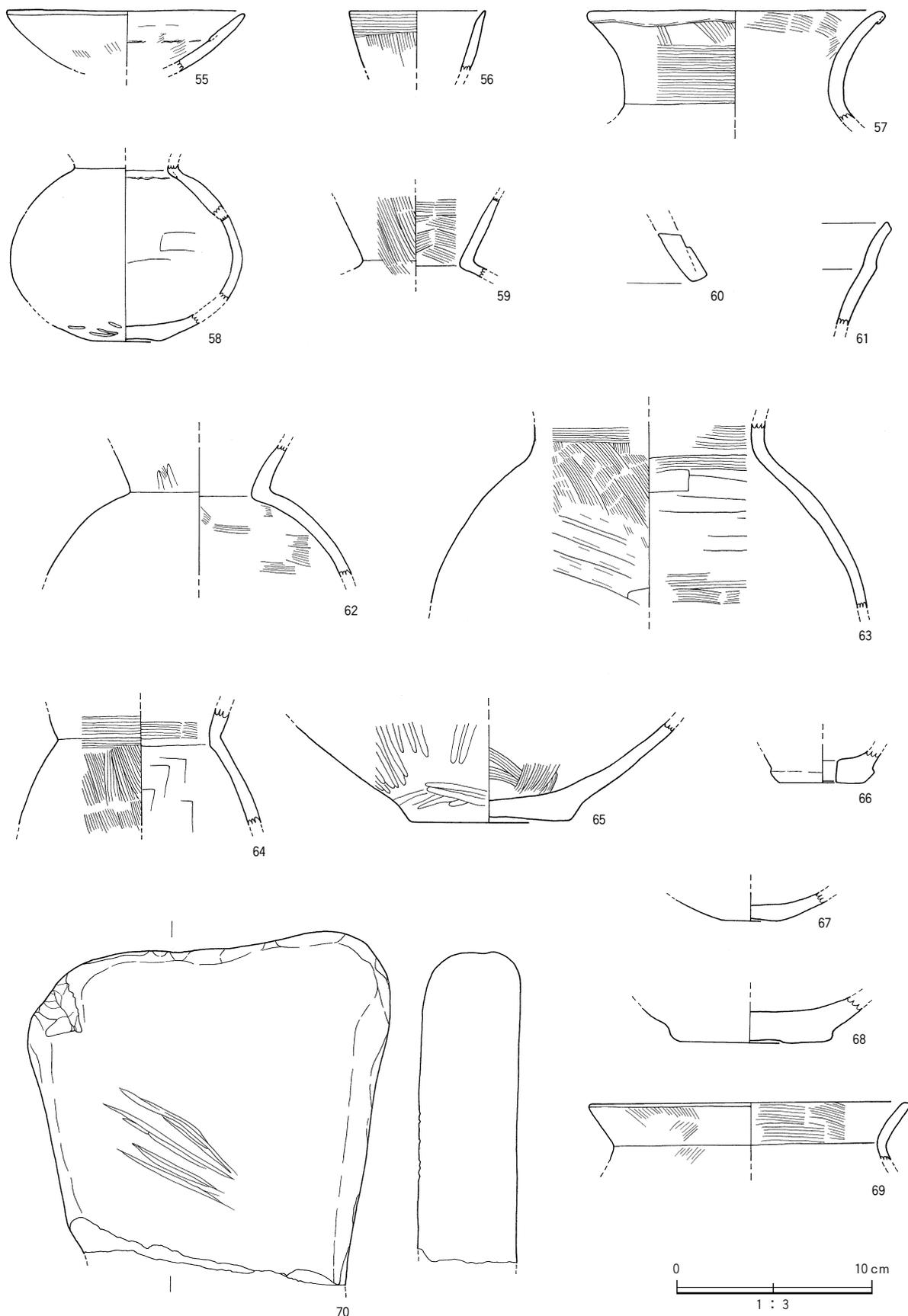
床面出土遺物には、甕 (51)、壺 (36・37・39・40・41)、甕・壺 (42・46)、鉢 (35・38)、台付き鉢 (50)、異形器台 (49)、土玉 (47・48) などがある。2個の土玉は並んで出土している。覆土中からの出土遺物には甕・壺 (43・44・45) がある。

#### ST 8 竪穴住居跡 (第13図)

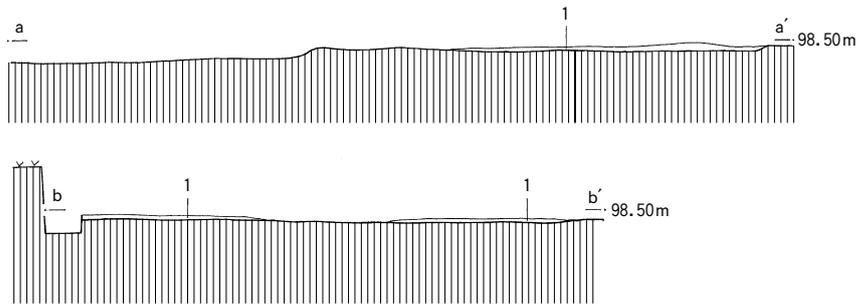
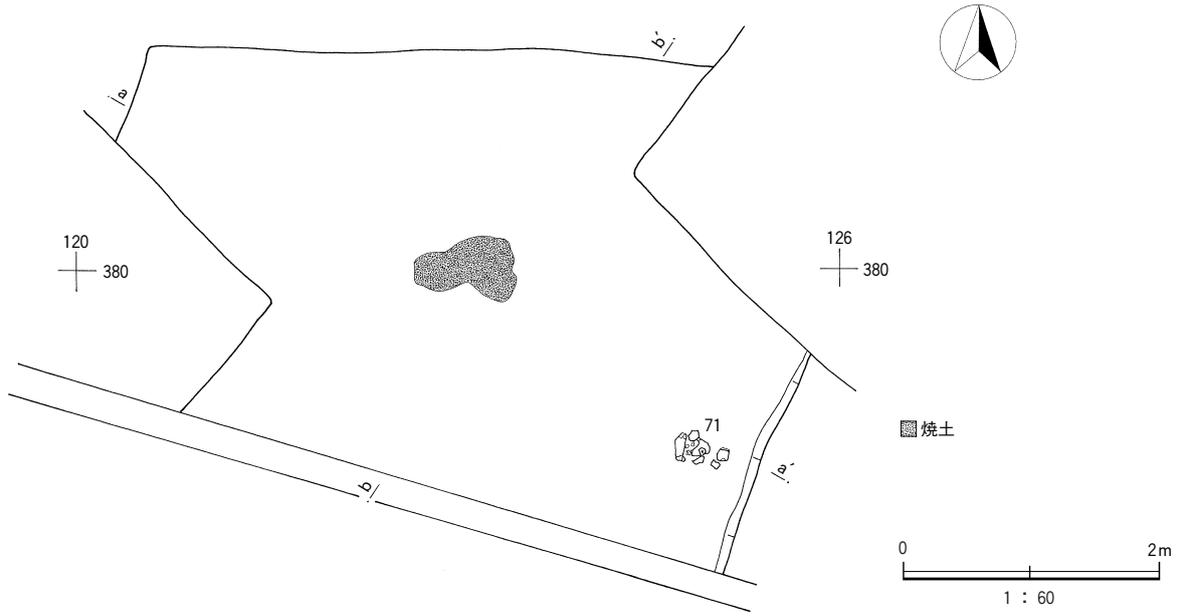
125・375~125・380グリッドで検出された。住居の北半が調査区外に位置する。平面形は隅



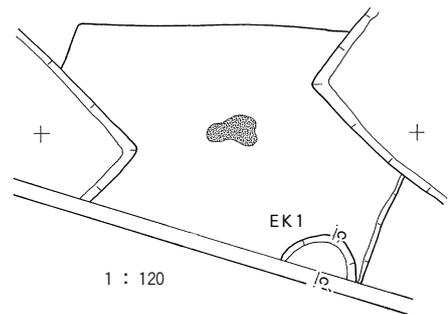
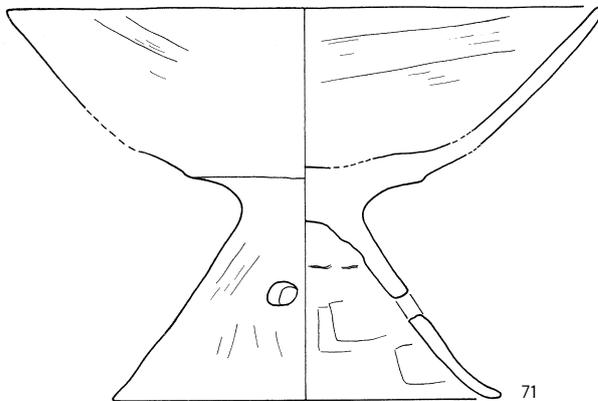
第13図 ST8 竪穴住居跡及び同出土遺物



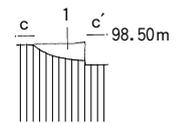
第14図 ST 8 竪穴住居跡出土遺物



**ST9**  
 1 10Y R4/1 褐灰色シルト  
 10Y R5/2 灰黄褐色砂質シルトを斑状に含む  
 炭(φ0.5cm)をわずかに含む



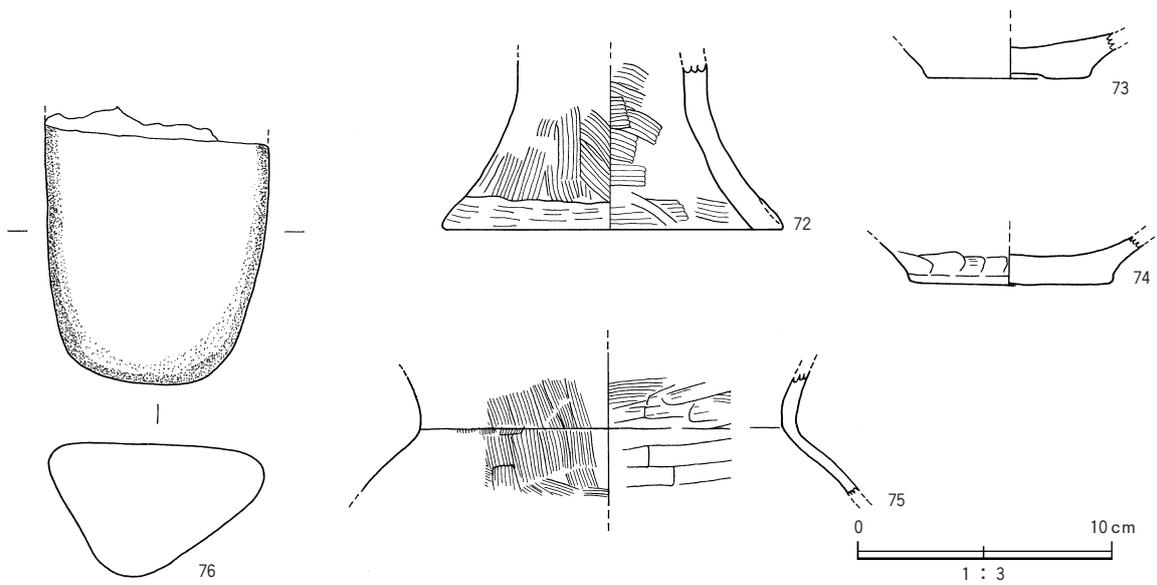
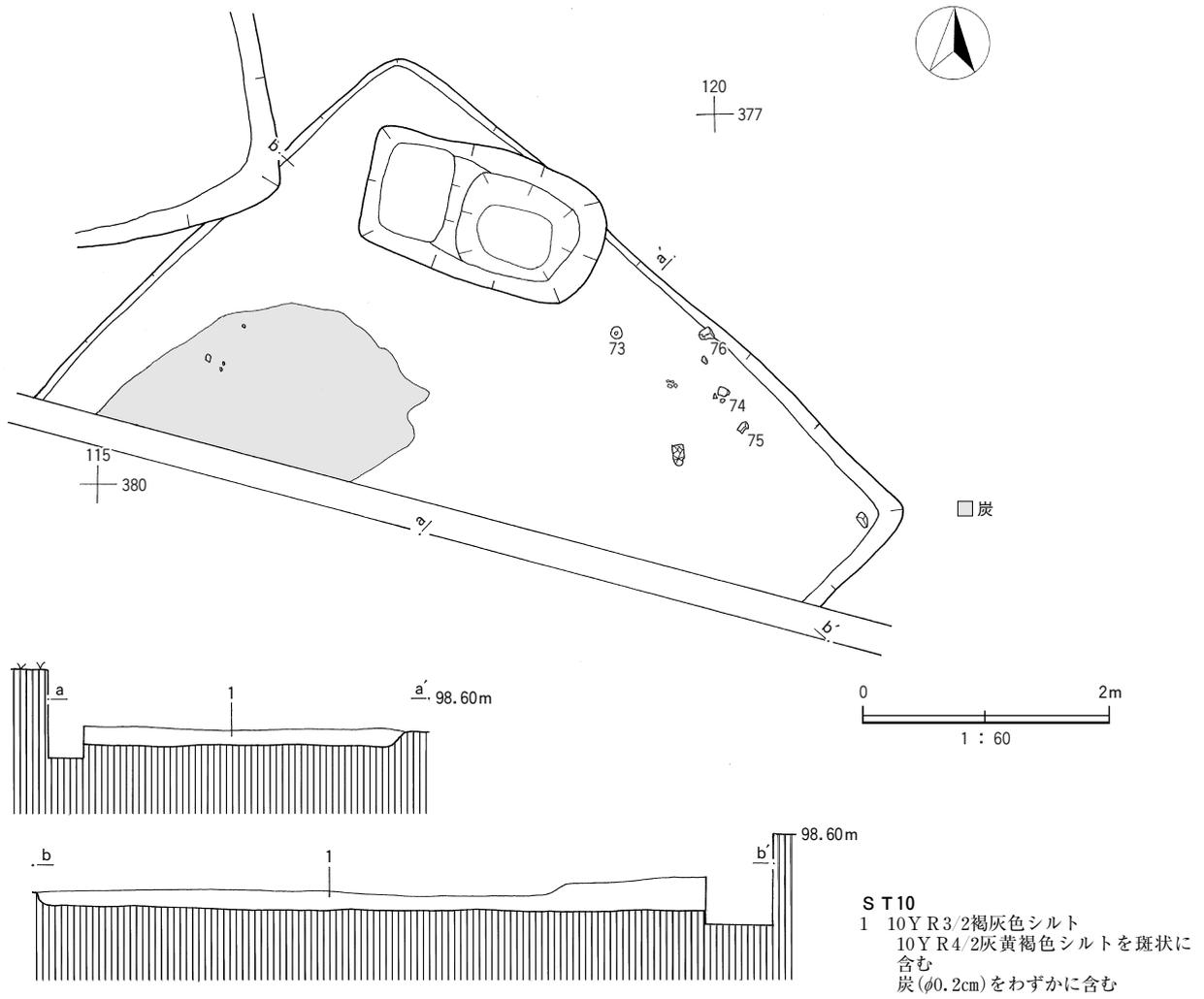
1 : 120



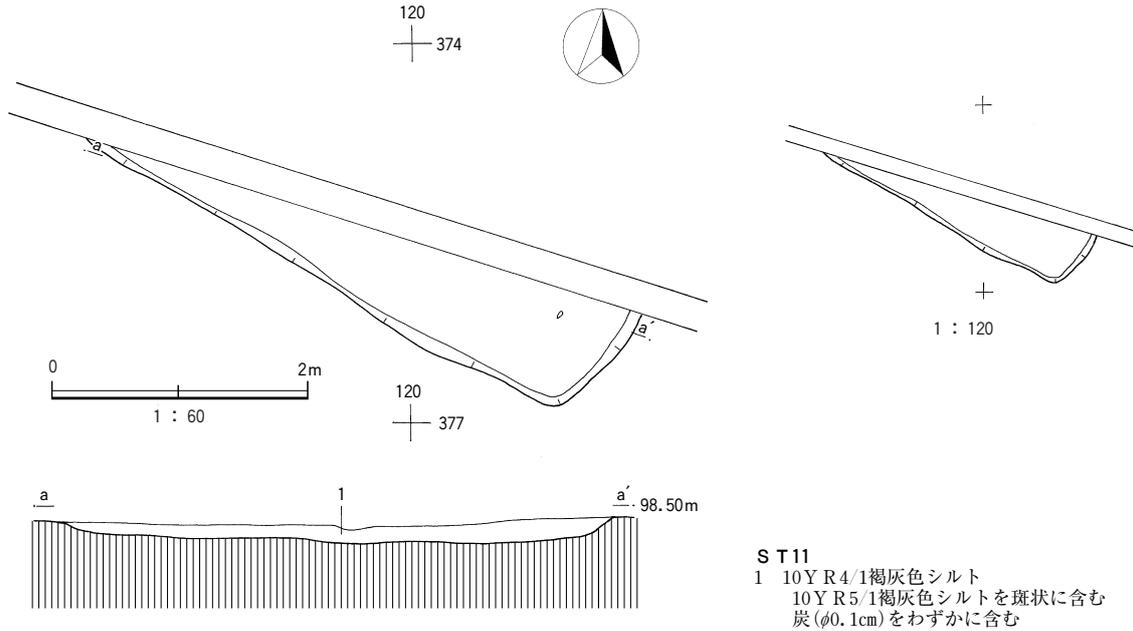
**ST9・EK1**  
 1 10Y R4/1 褐灰色シルト  
 10Y R5/2 灰黄褐色砂質シルトを混在する  
 炭(φ0.2cm)をわずかに含む



第15図 ST9 竪穴住居跡及び同出土遺物



第16図 ST10竪穴住居跡及び同出土遺物



第17図 ST11 竪穴住居跡

丸方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西5.4m、南北5.1m、検出面から床面までの深さは約16cmである。主軸方向はN-42°-Eを示す。

覆土は自然堆積である。床面には炭・焼土・炭化材が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。床面の中央に焼土と被熱した面が1ヶ所みられ、地床炉と考えられる。床面には数個のピットが認められる。

床面出土遺物には、甕(68・69)、壺(58・57・61・62・63・64・65・67)、鉢(56)、器台(52・53・54)、高坏(55)のほか、管玉製作で研磨に使用された砥石(70)が床面から出土している。本遺構は北半が調査区外に位置するため、他の管玉製作に関連する遺物や遺構の有無は明らかでない。覆土中からの出土遺物には壺(59)、異形器台脚部(60)、有孔鉢(66)がある。

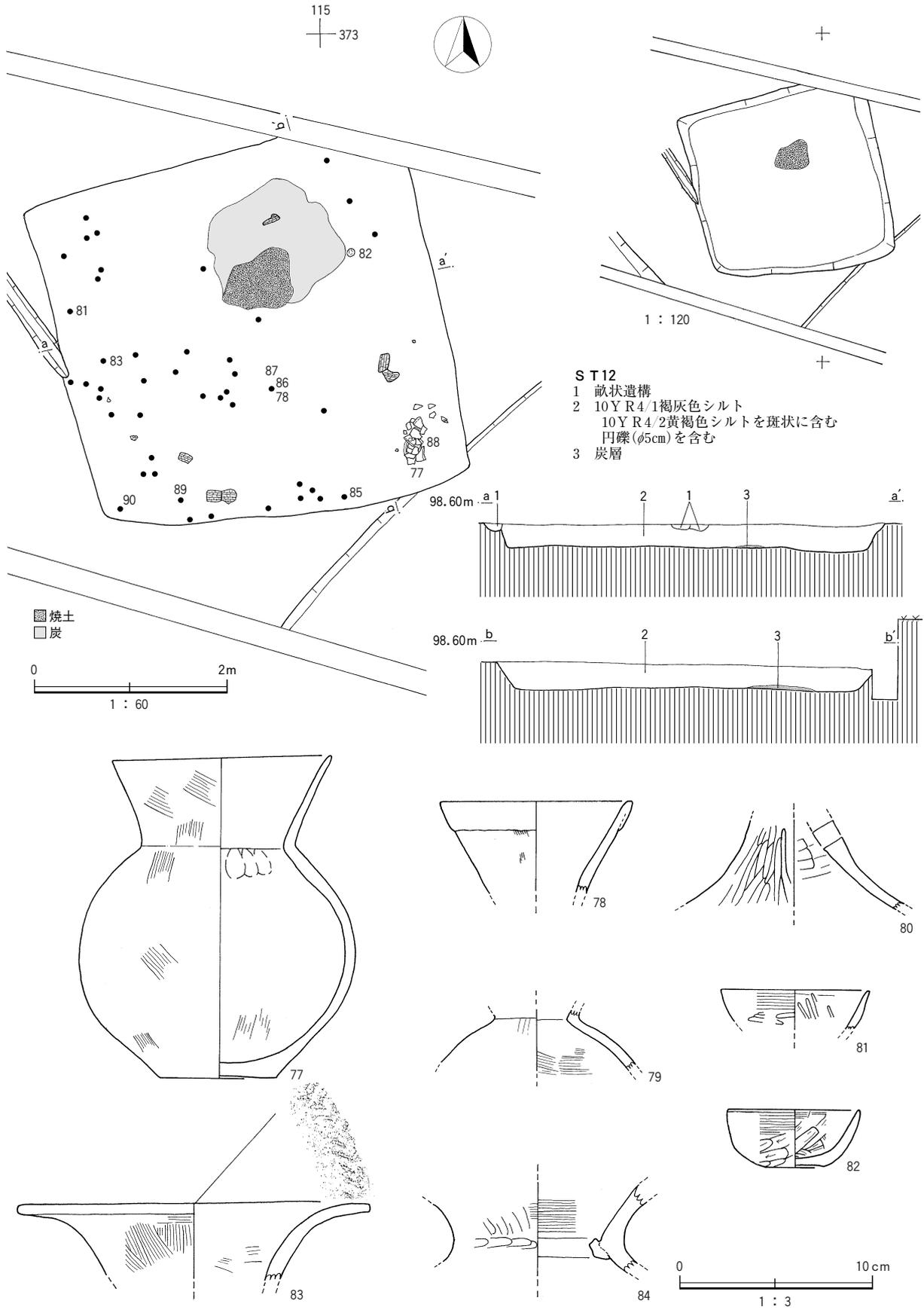
#### ST9 竪穴住居跡 (第15図)

120・375~120・380グリッドで検出された。住居の南隅が調査区外に位置する。ST8 竪穴住居跡によって北東隅を、ST10 竪穴住居跡によって北東隅を切られる。壁の立ち上がりは西側の壁の一部分を残すだけで、ほとんど床面での検出である。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈する。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西3.3m、南北3.1m、検出面からの深さは西側残存部で約3cmである。主軸方向はN-13°-Eを示す。床面の中央に被熱して硬化した面がみられ、地床炉と考えられる。

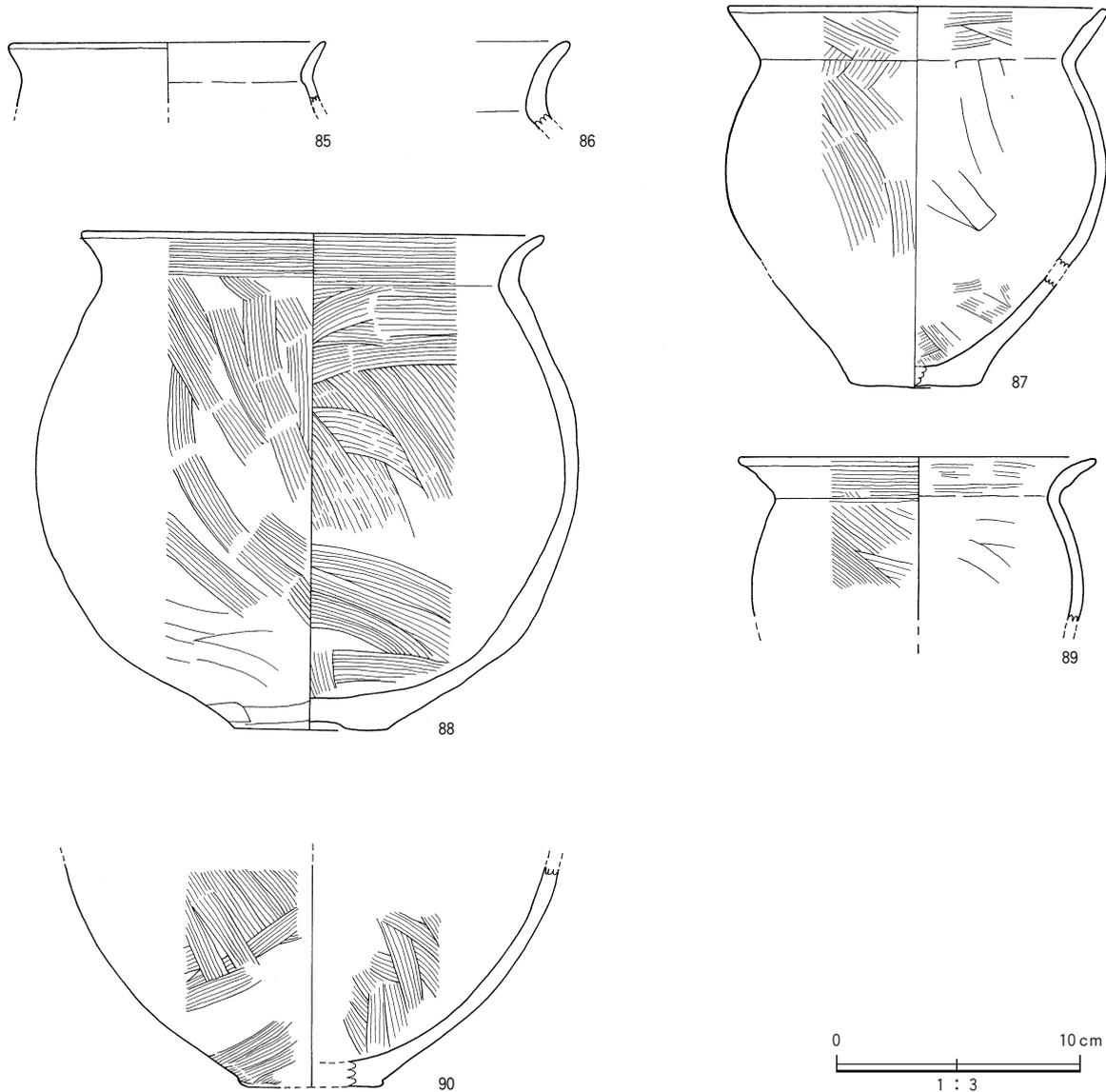
EK1は貯蔵穴と考えられるが遺物の出土は認められなかった。柱穴は認められない。床面出土遺物には高坏がある。

#### ST10 竪穴住居跡 (第16図)

115・375~120・380グリッドで検出された。住居の南半が調査区外に位置する。東側にあるST9 竪穴住居を切り、西側のST12 竪穴住居跡によって西側の一部を切られる。SK31土坑



第18図 ST12竪穴住居跡及び同出土遺物



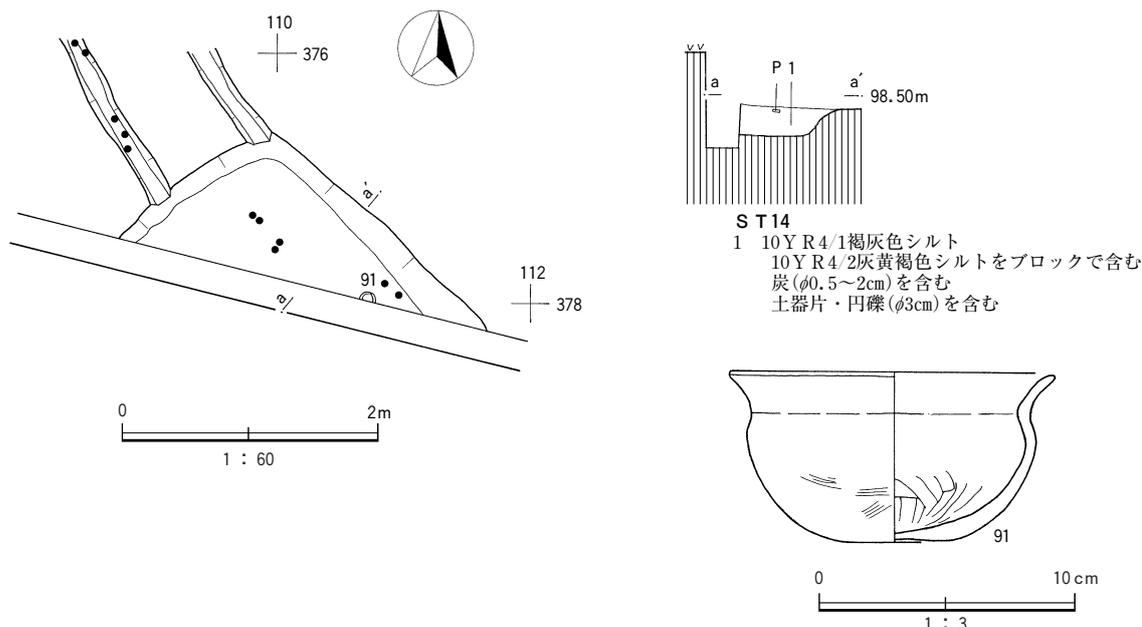
第19図 S T12竪穴住居跡出土遺物

と重複しているが、S T10竪穴住居跡が床面での検出であり、覆土が失われているために、相互の新旧関係は確認できなかった。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈する。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西5.6m、南北1.4mである。主軸方向はN-47°-Eを示す。床面の中央より西寄りに炭が覆っている範囲がみられた。炉跡は調査範囲からは検出できなかった。柱穴や貯蔵穴などは認められなかった。

出土遺物には甕(75)、甕・壺(73・74)、異形器台(72)、砥石(76)がある。

#### S T11竪穴住居跡(第17図)

115・370~120・375グリッドで検出された。住居の床面のみの検出である。ほとんどの部分が調査区外に位置する。平面形は方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は東西4.3m、南北1.1m、検出面からの深さは約18cmである。主軸方向はN-47°-Eを示す。覆土は1層である。炉・柱穴・貯蔵穴は調査した範囲では認められなかった。



第20図 S T 14 竪穴住居跡及び同出土遺物

出土遺物には甕・壺・鉢があるが、いずれも細片のため図化はできなかった。

#### S T 12 竪穴住居跡 (第18図)

110・375~115・375グリッドで検出された。東側にあるS T 10竪穴住居跡を切る。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈する。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西3.9m、南北3.6m、検出面から床面までの深さは約30cmである。主軸方向はN-14°-Wを示す。

基本層序のV層の粗砂層まで掘り込み、床面としている。壁の立ち上がりは外傾し、床面は平坦である。覆土は自然堆積である。床面には炭・炭化材が遺存していることから、焼失家屋と考えられる。他の焼失家屋に較べ床面を覆い尽くすような炭の遺存は認められない。床面の中央より北寄りに、焼土と被熱した面が1ヵ所みられ、地床炉と考えられる。柱穴は認められなかった。

出土遺物には甕(86・87・88・89・90)、壺(77・78・79・83・84)、鉢(81・82・85)、器台(80)がある。77・78が出土した南東隅部分は浅い凹みとなっており、貯蔵穴の可能性が考えられる。

#### S T 14 竪穴住居跡 (第20図)

105・375~110・375グリッドで検出された。住居の北隅部分のみの検出であり、ほとんどの部分が調査区外に位置する。平面形は隅が丸みをもつ方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は、東西2.3m、南北1.5m、検出面からの床面までの深さは約25cmである。主軸方向はN-44°-Wを示す。覆土は自然堆積である。炉・柱穴・貯蔵穴は認められない。

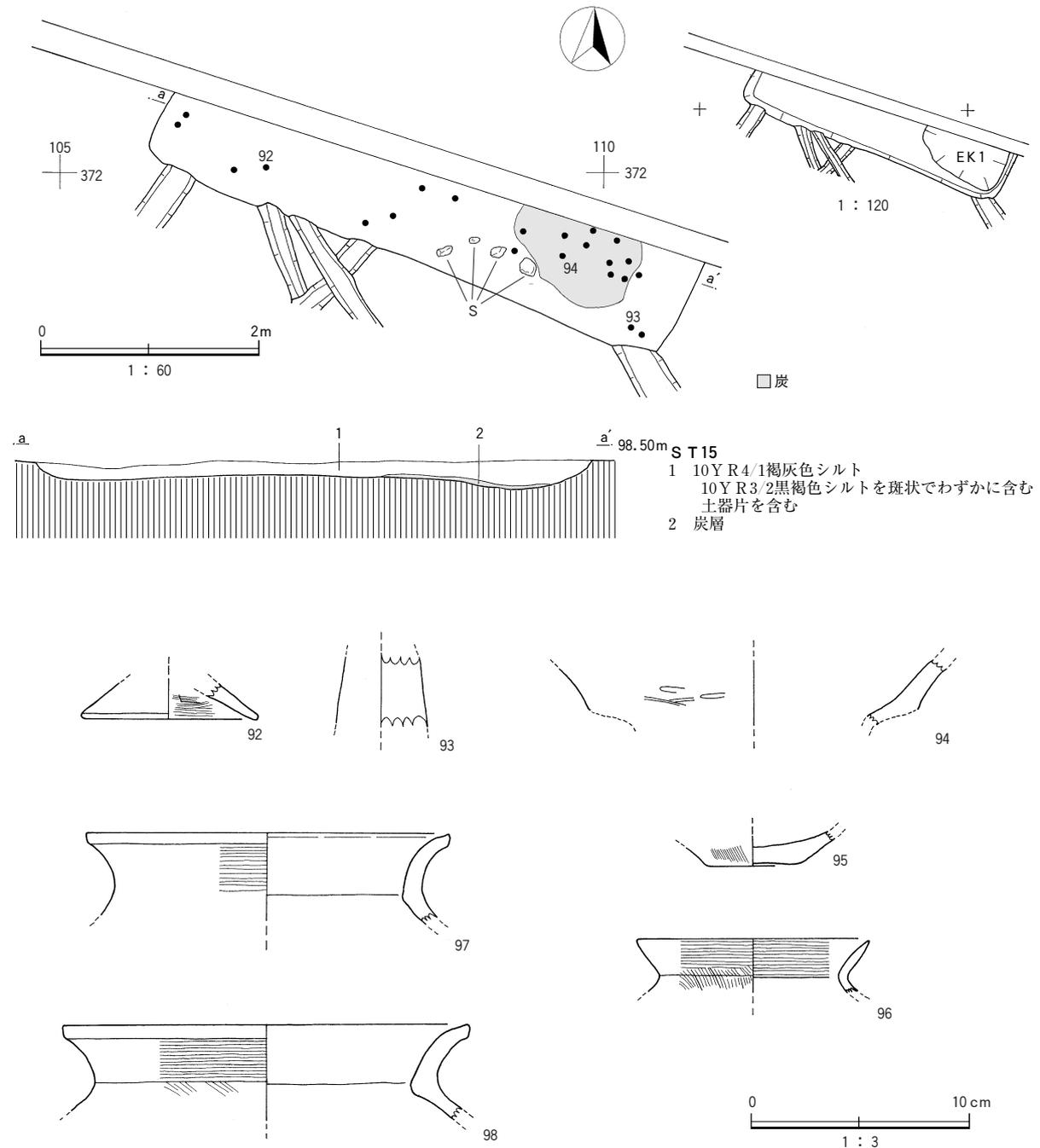
床面出土遺物には鉢(91)がある。他に甕・壺・高坏があるが、いずれも細片のため図化はできなかった。

#### S T 15 竪穴住居跡 (第21図)

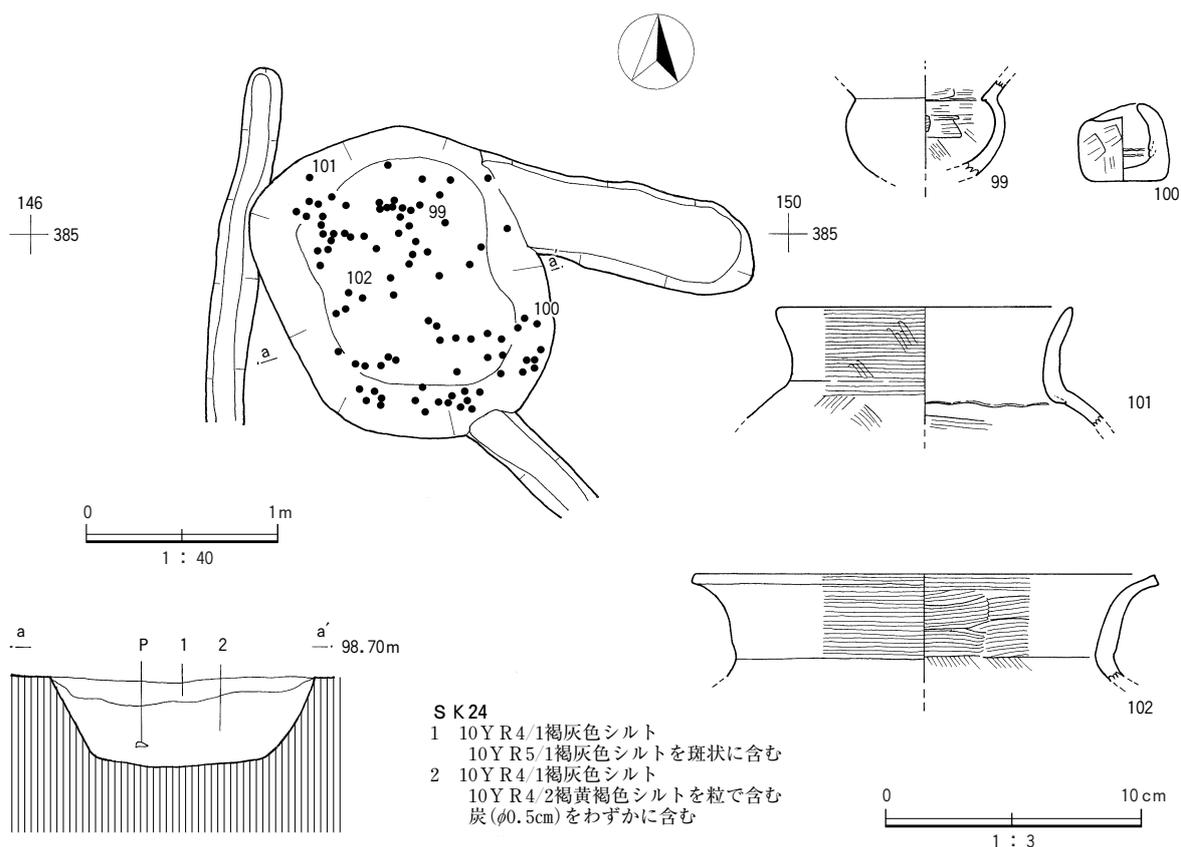
100・360~110・370グリッドで検出された。住居の北部分のほとんどが調査区外となる。平

面形は隅が丸みをもつ方形を呈すると考えられる。確認できた竪穴住居跡の規模は東西5.1m、南北1.0m、検出面から床面までの深さは約25cmである。主軸方向はN-28°-Wを示す。覆土は自然堆積である。EK 1は貯蔵穴と考えられ、底面は炭に覆われていたが、遺物の出土はみられない。炉・柱穴は認められなかった。

出土遺物には甕(96・97・98)、壺(94)、甕・壺(95)、高坏(92・93)などがある。他に甕・壺・高坏があるが、いずれも細片のため図化はできなかった。



第21図 ST 15竪穴住居跡及び同出土遺物



第22図 SK24土坑及び同出土遺物

## 2. 土 坑

### SK24土坑 (第22図)

146・384～148・385グリッドで検出された。平面形態は不整形で、長軸178cm、短軸158cm、検出面からの深さは45cmを測る。断面形態は壁が直立気味に立ち上がる箱形を呈する。一部分攪乱に壊されている。主軸はN-60°-Eを示す。覆土中に土器の細片が多く含まれる。図化できた遺物は甕(102)、壺(101)、鉢(99)、小型土器(100)である。

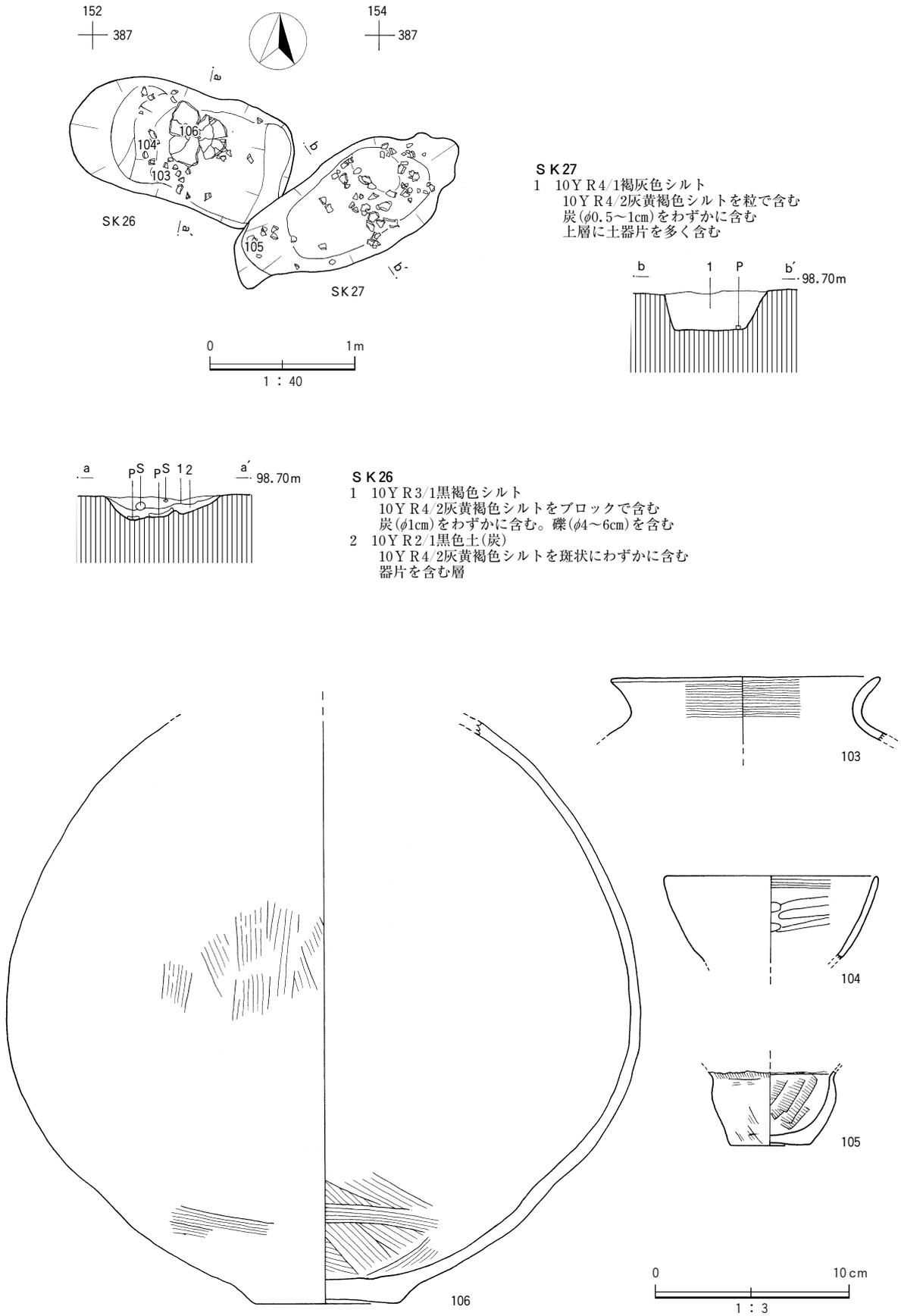
### SK26土坑 (第23図)

151・387～152・388グリッドで検出された。SK27に切られている。主軸はN-65°-Wを示す。平面形態は楕円形で、長軸155cm、短軸83cm、検出面からの深さは14cmを測る。断面形態は皿形で西壁にテラス面をもち東側の一段低くなった底面に土器が遺存している。南北の壁は急に立ち上がる。覆土は2層で、第1層は灰黄褐色シルト(地山土)をブロックで含む黒褐色シルトで、わずかに炭化物を含む。第2層は地山土の混入は少なく、底面には不燃炭化物が堆積する。

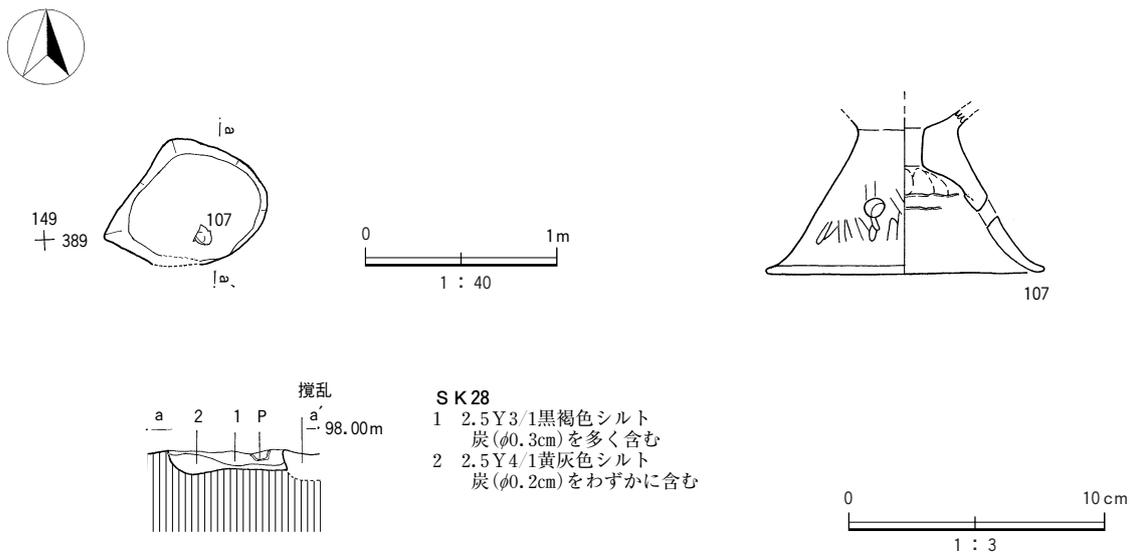
遺物は底面から甕(103)、壺(104)が出土している。壺(106)は土圧でつぶれたような状態で出土している。

### SK27土坑 (第23図)

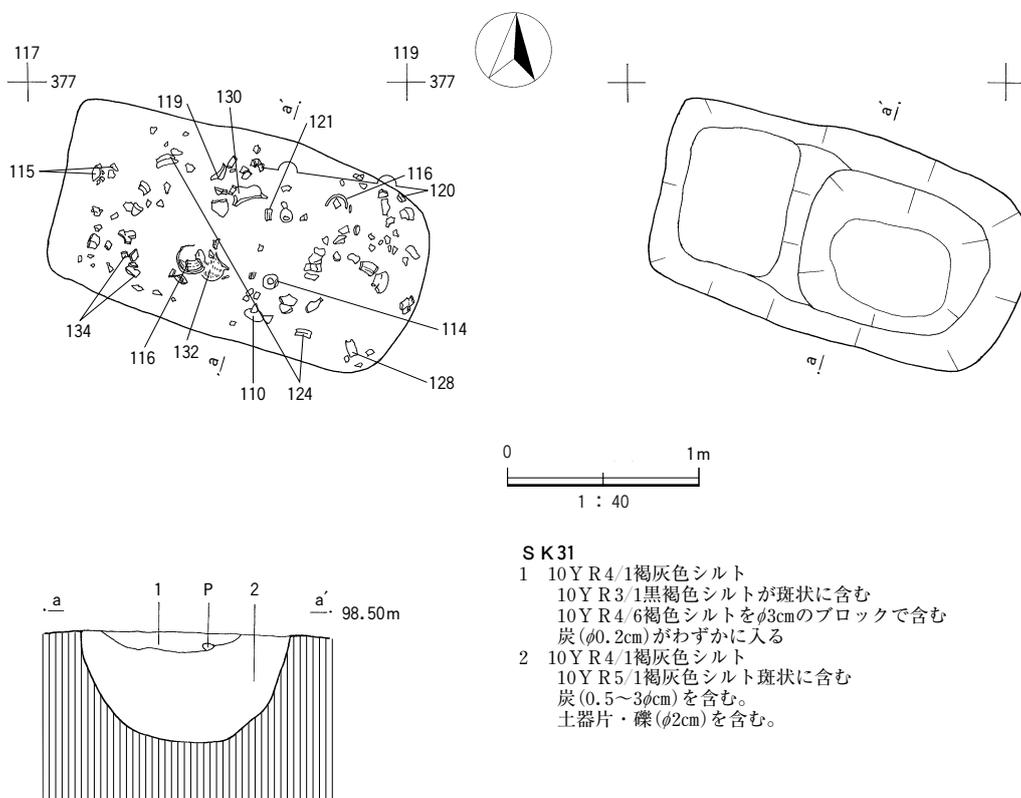
153・388～154・388グリッドで検出された。平面形態は不整形楕円形で、長軸180cm、短軸75cm、検出面からの深さ27cmを測る。断面形態は深い皿形で、東・西壁は急に、南・北壁は緩や



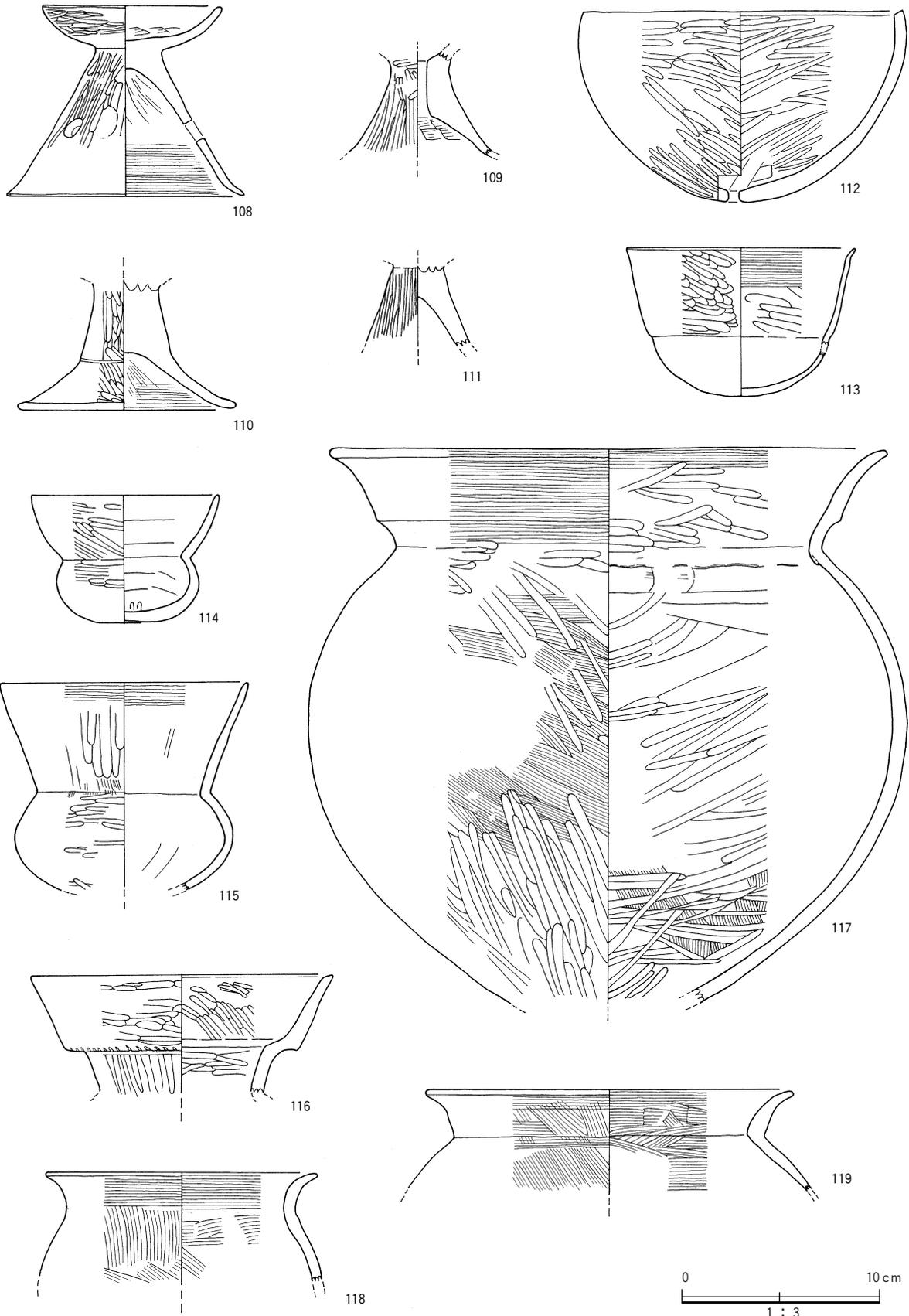
第23図 SK26・27土坑及び同出土遺物



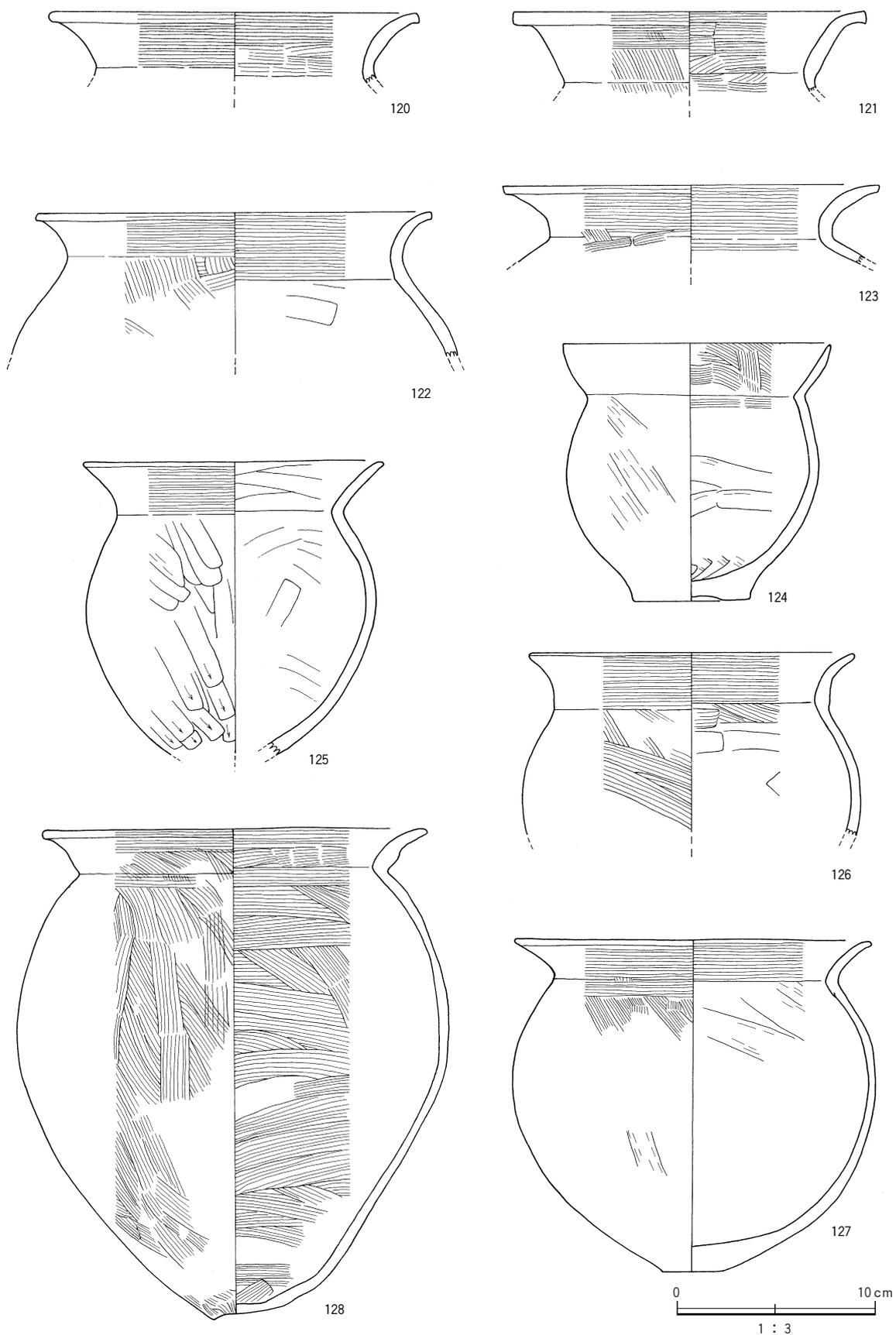
第24図 SK28土坑及び同出土遺物



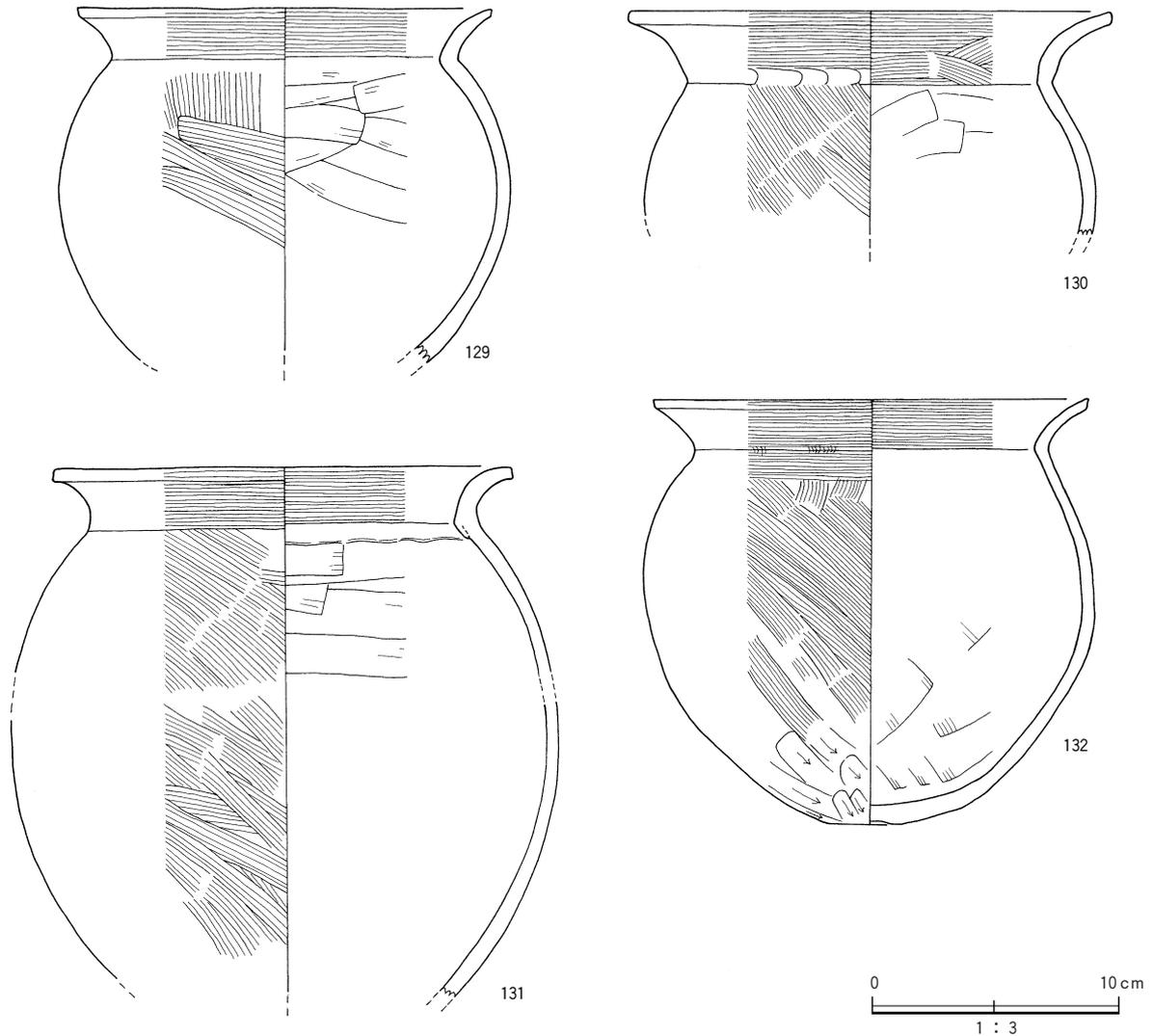
第25図 SK31土坑



第26図 SK31土坑出土遺物(1)



第27図 SK31土坑出土遺物(2)



第28図 S K 31土坑出土遺物 (3)

かに立ち上がる。主軸はN-65°-Eを示す。覆土は褐灰色シルトの単一層で、炭化物をわずかに含む。S K 26と切り合っており、本土坑が新しい。

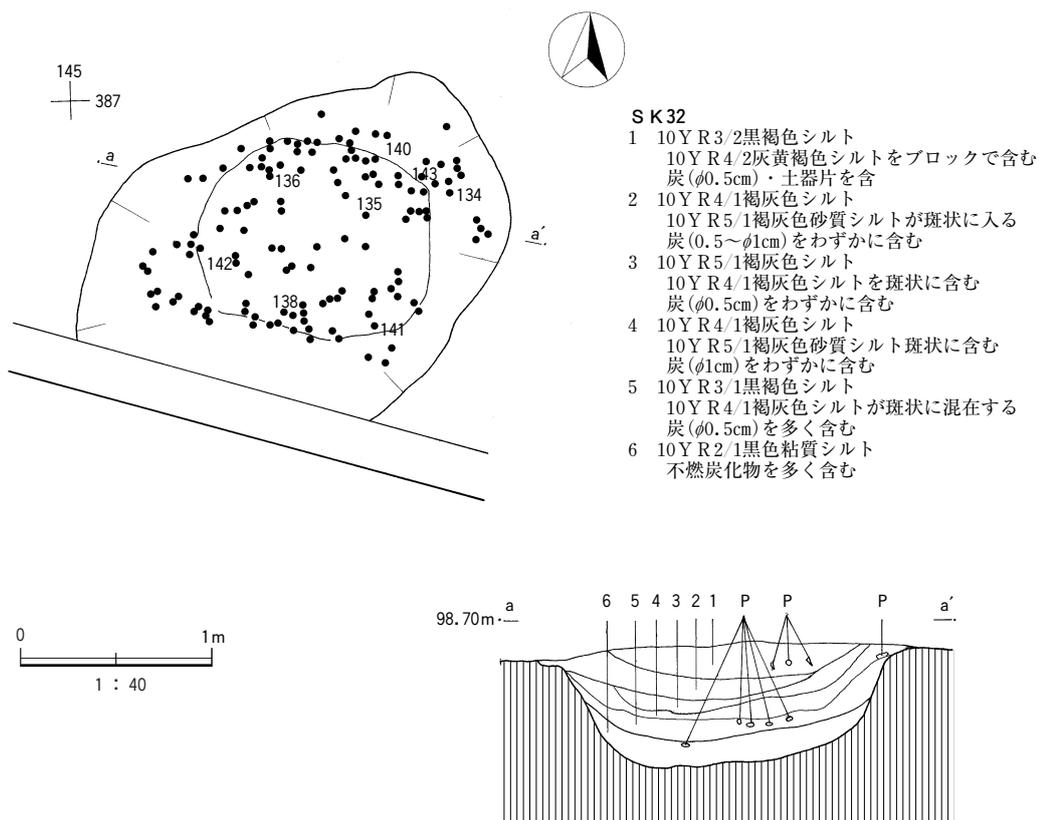
出土遺物は覆土上層に多くの土師器片が集中して出土している。下層には遺物は伴わない。図化できたものには鉢(105)がある。

**S K 28土坑 (第24図)**

149・388~150・389グリッドで検出された。平面形態は不整円形と推定される。攪乱で一部を壊されている。長軸90cm、短軸68cm、検出面からの深さ12cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈する。主軸はN-75°-Eを示す。覆土は2層で、第1層は黒褐色シルト、第2層は黄灰色シルトでわずかに炭化物を含む。遺物は器台(107)が出土している。

**S K 31土坑 (第25図)**

117・377~119・378グリッドで検出された。平面形態は隅円方形で、長軸198cm、短軸110cm、検出面からの深さ60cmを測る。断面形態は壁が直立に立ち上がり、西側には一段のテラス面をもつ。主軸はN-87°-Eを示す。



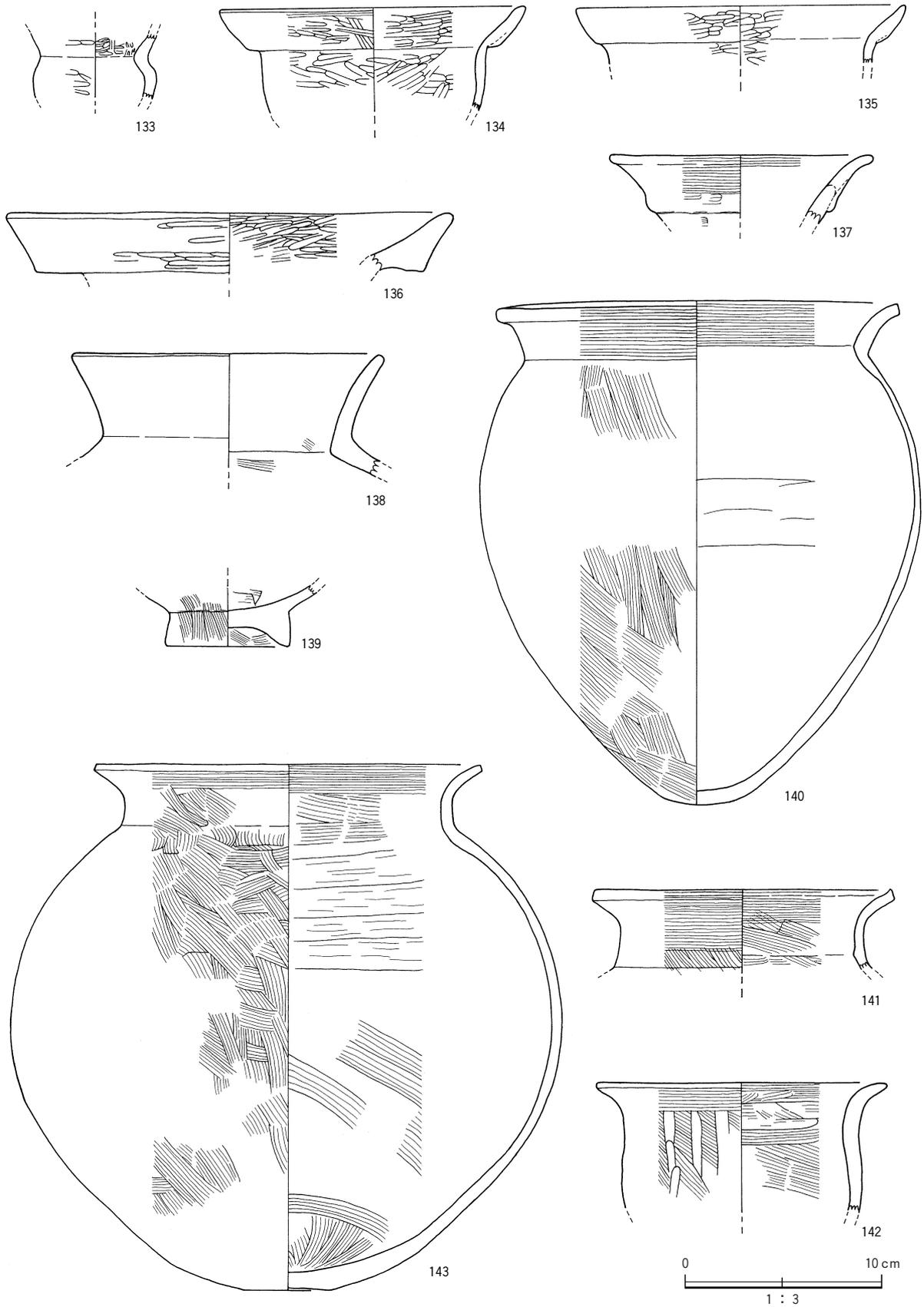
第29図 S K 32土坑

覆土中には多くの土器が重なり合っていたために、2層以下の分層の図化はしていない。第1層は褐灰色シルトと黒褐色シルトの混合土で、わずかに炭化物を含み、第2層は褐灰色シルトに炭化物を多く含む。完形土器や半完形品が重なり合い、一括して投棄された様相を呈している。S T 7 竪穴住居跡出土の鉢(38)の破片が、当土坑の破片と接合していることから、少なくともS T 7のゴミ捨て穴として使われていたことが考えられる。

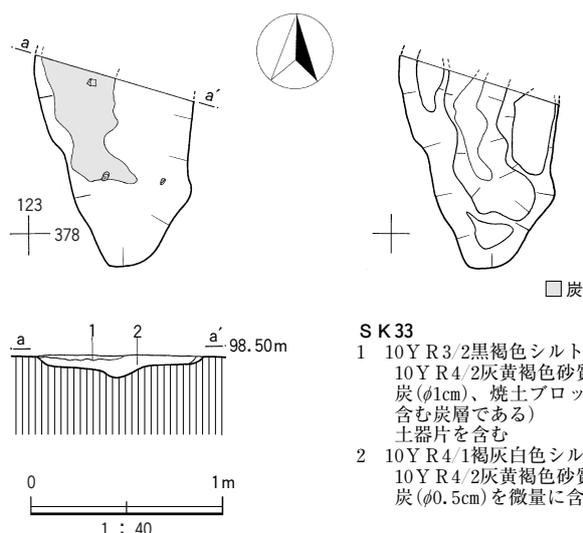
当土坑はS T 10と切り合っているが、S T 10が床面のみの検出であり覆土が失われていたために、相互の断面観察による新旧関係は確認できなかった。出土遺物は、甕(117~132)、壺(115~116)、鉢(112~114)、高坏(110)、器台(108・109・111)などが出土している。

**S K 32土坑 (第29図)**

145・387~147・387グリッドで検出された。遺構は調査区外に延びる。平面形態は不整楕円形で、長軸175cm、短軸185cm、検出面からの深さ64cmを測る。断面形態は、壁が急に立ち上がる椀形を呈する。主軸はN-38°-Eを示す。覆土は6層で、第1層から第5層までは黒褐色シルトと褐灰色シルトの互層で、炭化物を含む。第6層は黒色シルトで不燃炭化物を多く含む。全体に緩慢な自然堆積状況を示し、下層にいくにつれてシルト質が細かくなり粘性を帯びている。各層に均一に多数の土器片が含まれていることから、一定期間の使用がうかがえる。遺物は甕(140~143)、壺(136~138)、鉢(133~135・139)が出土している。



第30図 S K 32土坑出土遺物



- 炭
- S K 33**
- 1 10Y R3/2黒褐色シルト  
10Y R4/2灰黄褐色砂質シルトをブロックで含む炭(φ1cm)、焼土ブロックを多く含む(炭、焼土を含む炭層である)土器片を含む
  - 2 10Y R4/1褐灰白色シルト  
10Y R4/2灰黄褐色砂質シルトを斑状に含む炭(φ0.5cm)を微量に含む。土器片を含む

### S K 33土坑 (第31図)

123・377～123・778グリッドで検出された。遺構は調査区外に延びる。平面形態は楕円形と推定され、長軸175cm、短軸117cm、検出面からの深さ18cmを測る。底面は中心部が溝状に深い。壁際は平坦となり緩く立ち上がる。主軸はN-12°-Eを示す。

覆土は2層で、上層は焼土ブロックを多く含む炭層、下層は灰黄褐色シルト

第31図 S K 33土坑

(地山土)を多く含む褐灰色シルトで、炭化物をわずかに含んでいる。

出土遺物は、土師器細片数点が底面より出土しているが、図化にはいたらなかった。

## 3. 河川跡

### S G 114河川跡 (第32図)

調査区の東部に東西方向に走る河川跡が認められた。検出された河川の幅は3.0～3.5mを測り、東から西へ流れていたと推察される。2つの流路が重なっているようにも思われるが、局所的な調査のため、詳細は把握できなかった。

最終覆土の土壌は、植物遺体を含む黒色土や粗砂が自然堆積の状況を呈している。河川跡の北岸を畝状遺構が切っていることから集落が営まれていた時期には、河川は埋没していたと考えられ、その機能はすでに失われていたことが考えられる。

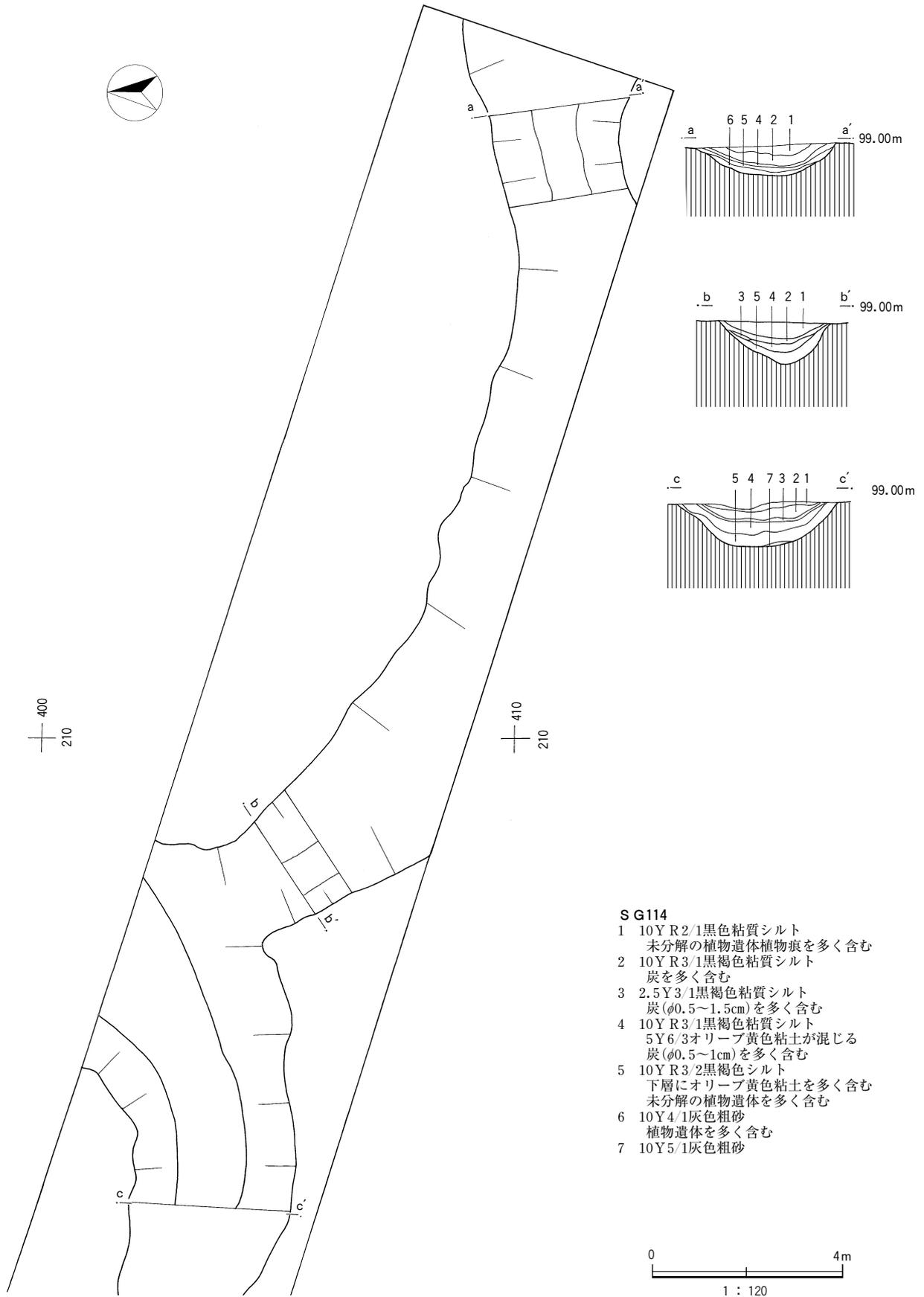
出土遺物には、甕(152～156)、壺(149～151)、鉢(147～148)、高坏(145～146)、器台(144)などが見られる。

## 4. 畝状遺構 (第35図)

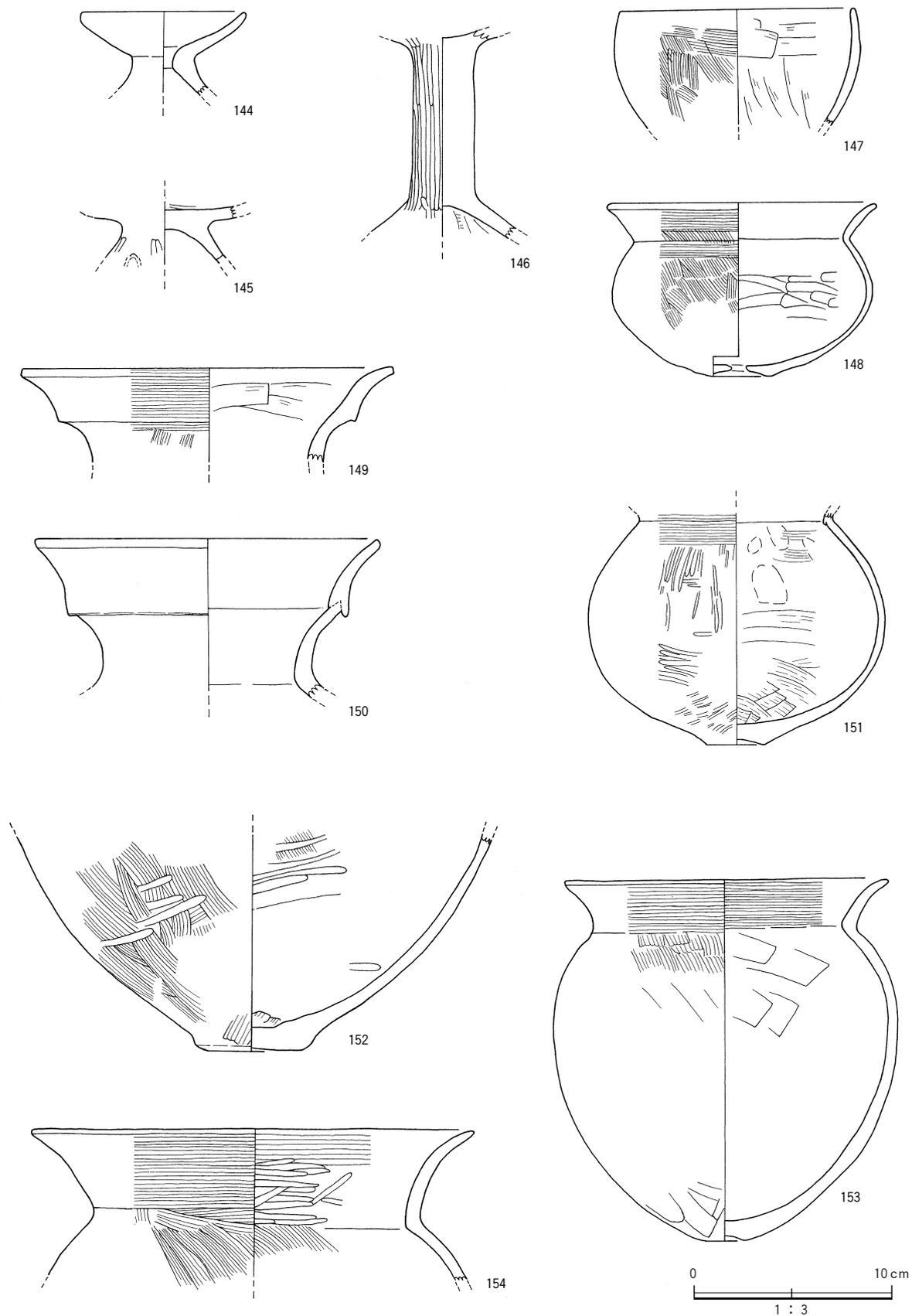
検出面には、遺構のほかに耕作に関係すると考えられる溝状の攪乱がある。重複する全ての遺構を切っている。いずれも畝立溝と考えられる平行する浅い溝で、調査区ほぼ全面にわたって確認された。溝の間隔は1m～1.5m、溝幅は大多数が0.2～0.3m程度である。検出面からの深さは0.1m～0.2mと一定しない。

溝の軸方向の偏差は幾時期かの時期差を示し、住居の建て替えとともに、畑地の占地が移動したことが考えられる。溝底面には鋤もしくは鋤と考えられる耕作痕跡が認められる。

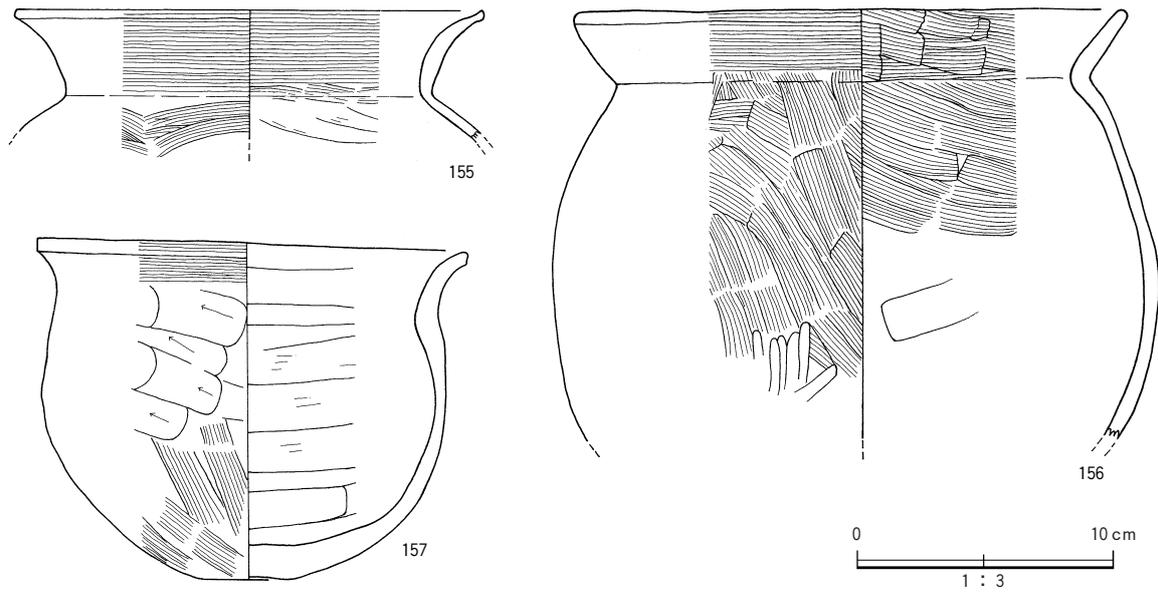
出土遺物は古式土師器が数点出土しているが、細片となっているものが多く、出土状況にもまとまりがないことから、耕起に伴って巻き上げられたものと考えられる。



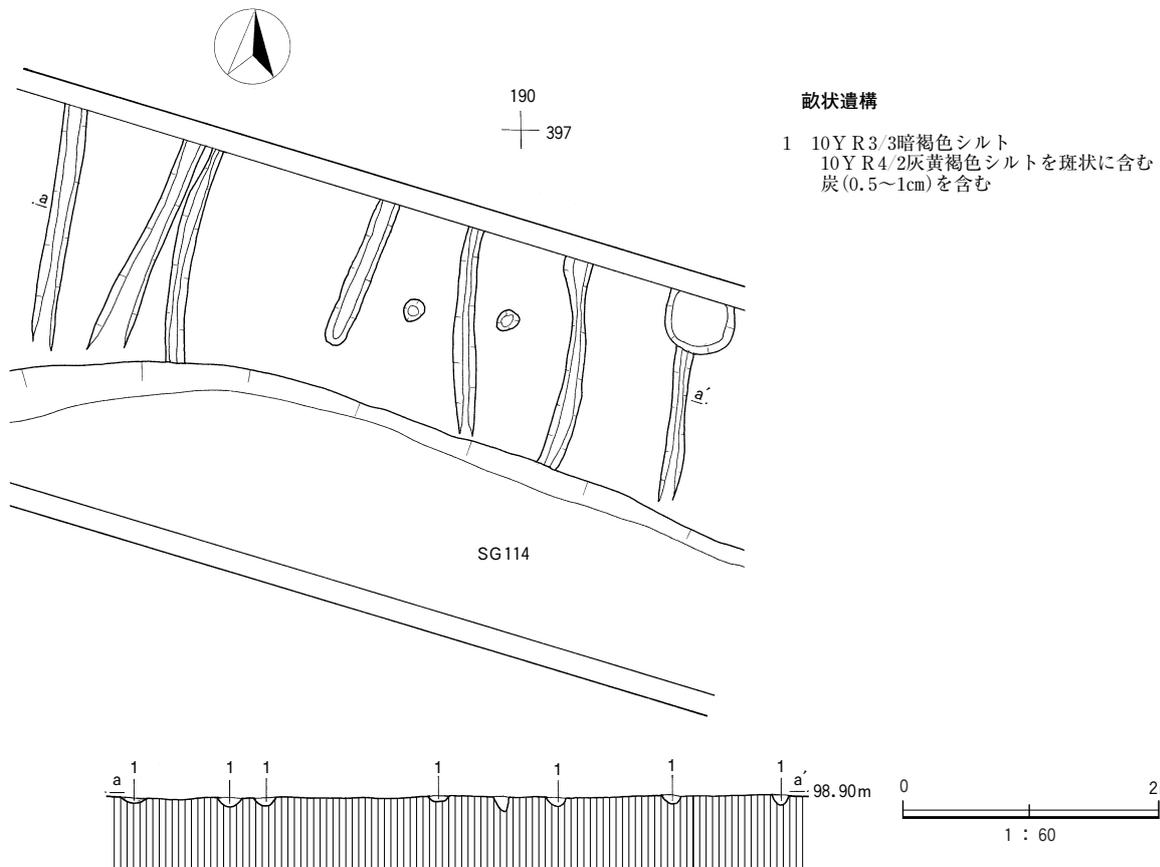
第32図 SG114河川跡



第33図 SG114河川跡出土遺物(1)



第34図 SG114河川跡出土遺物（2）



第35図 畝状遺構

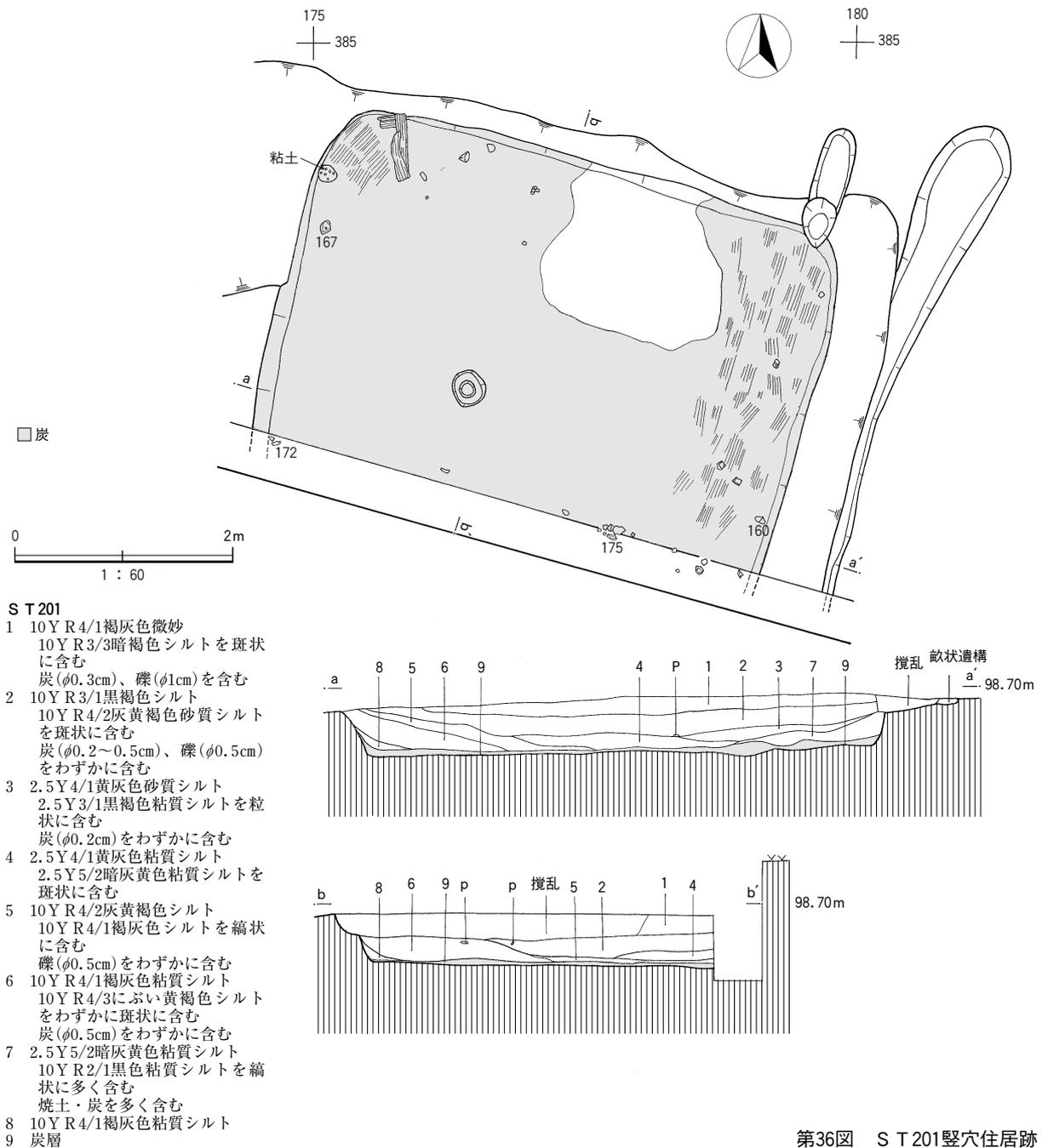
## 2 第2次調査の概要

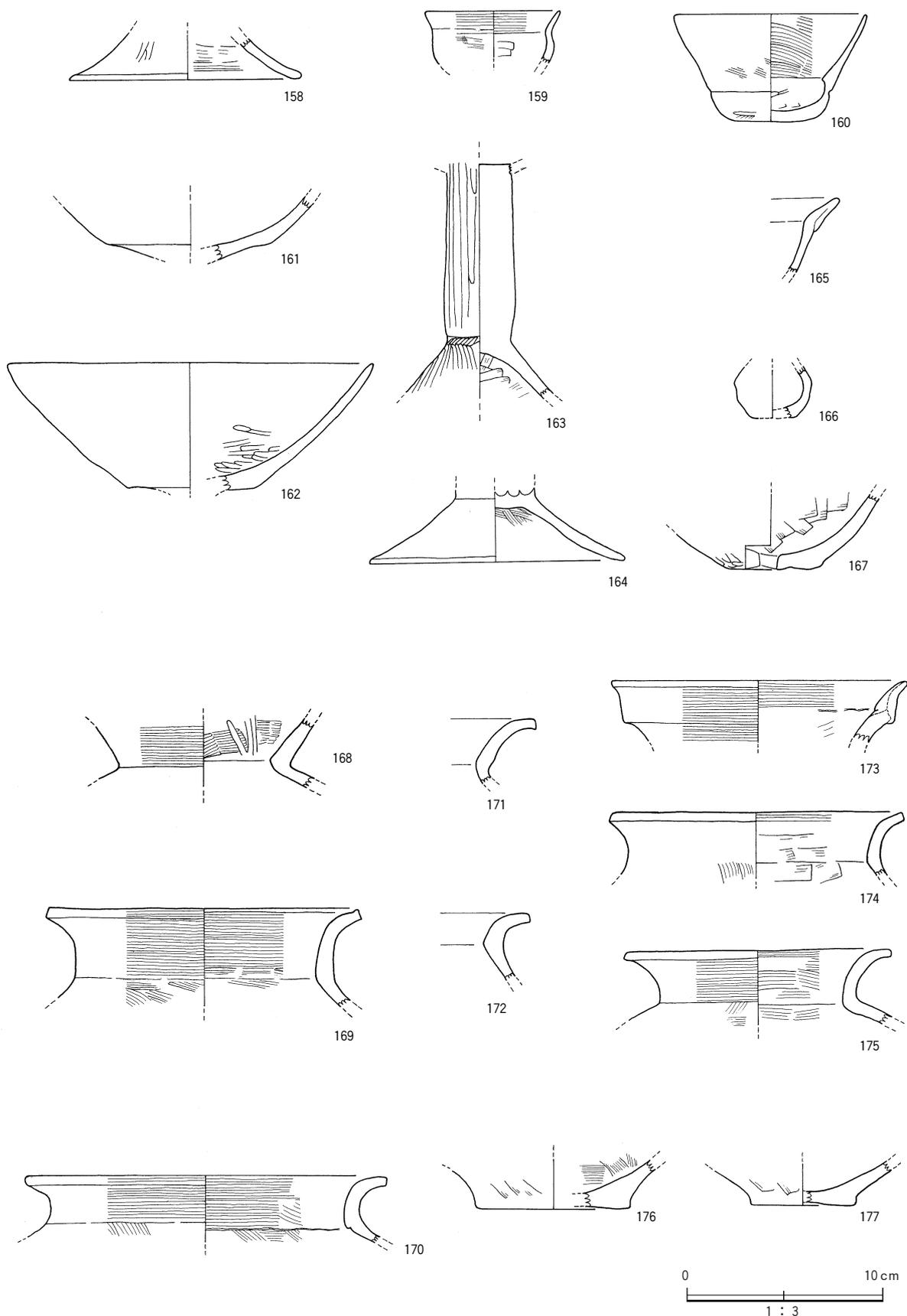
調査で10棟の竪穴住居跡、9基の土坑、5条の溝跡の他、性格不明遺構や河川跡などを検出した。以下にその概要を述べる。

### 1. 竪穴住居跡

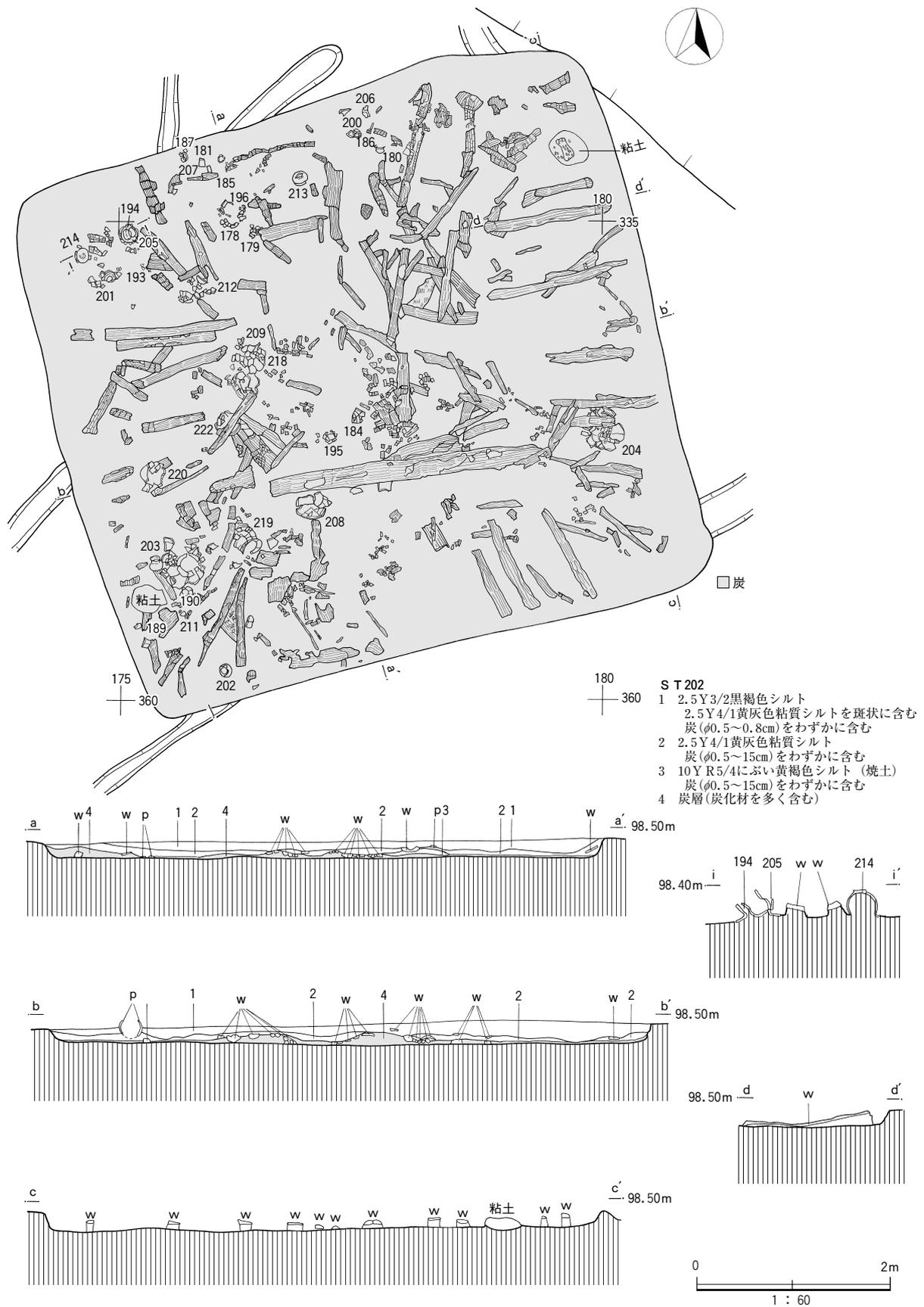
#### S T 201竪穴住居跡 (第36図)

174・385～180・390区に所在する。上部が耕作土の土取りにより攪乱を受けていたが、攪乱



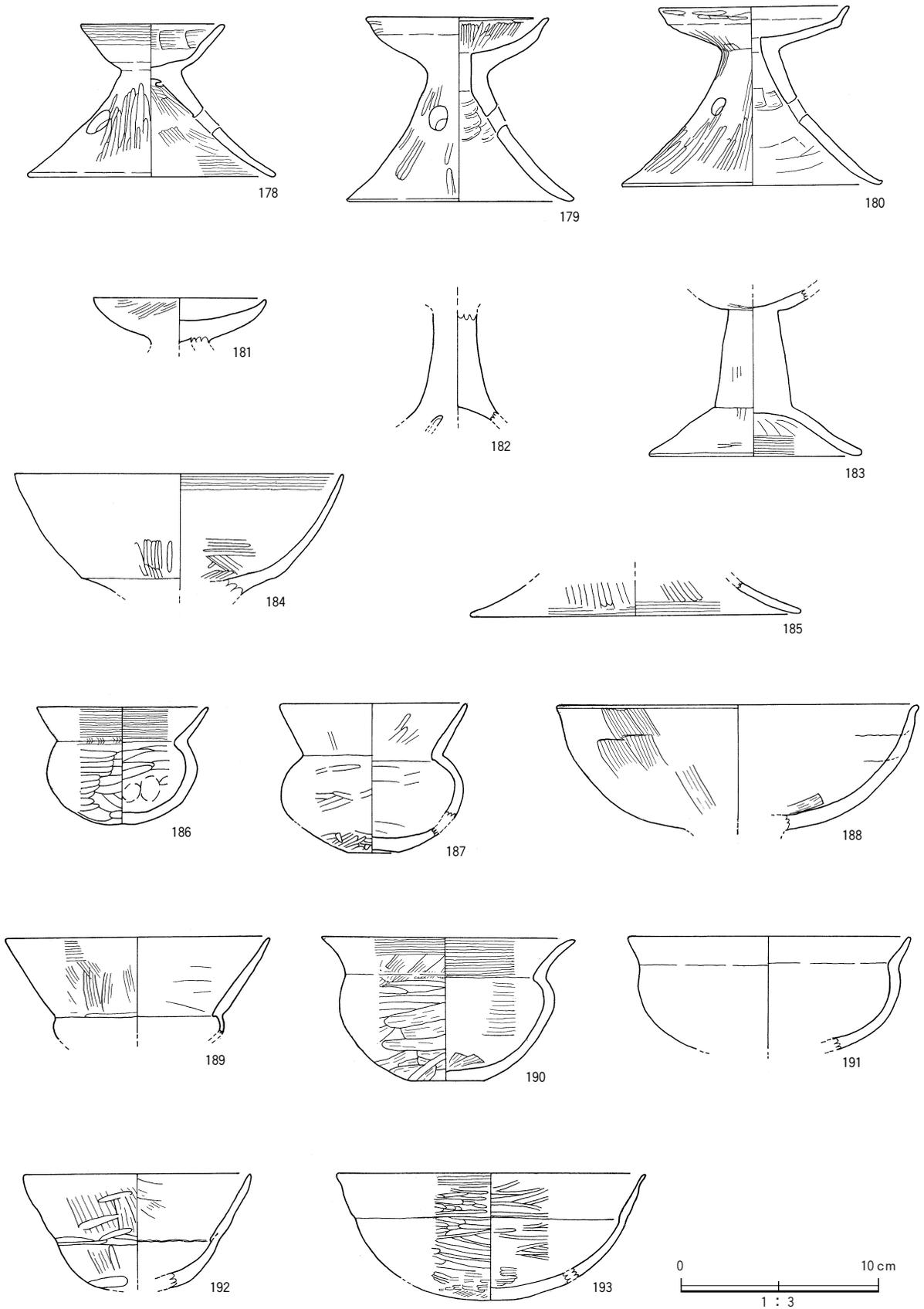


第37図 S T 201 竪穴住居跡出土遺物

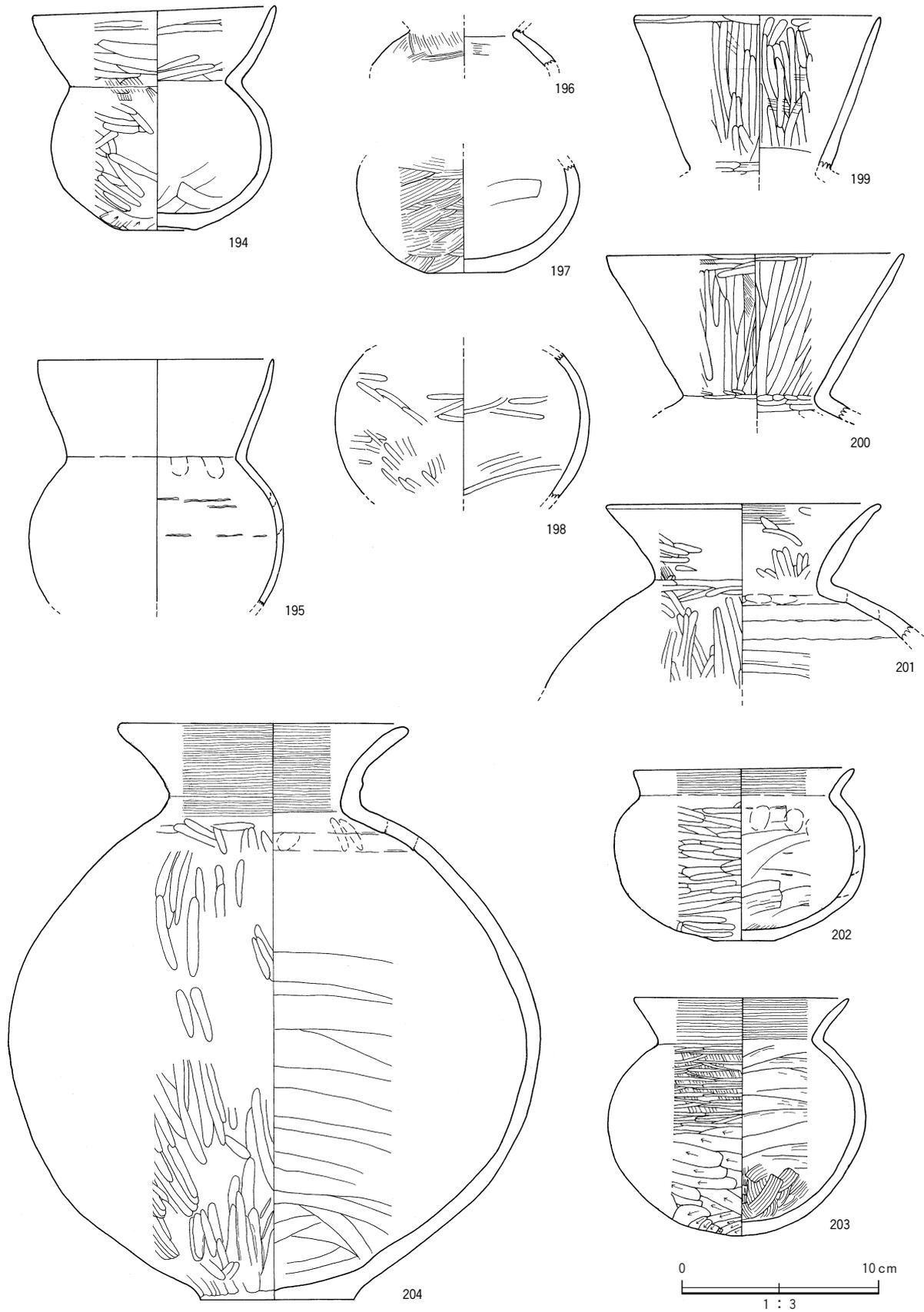


第38図 S T 202 竪穴住居跡 (1)

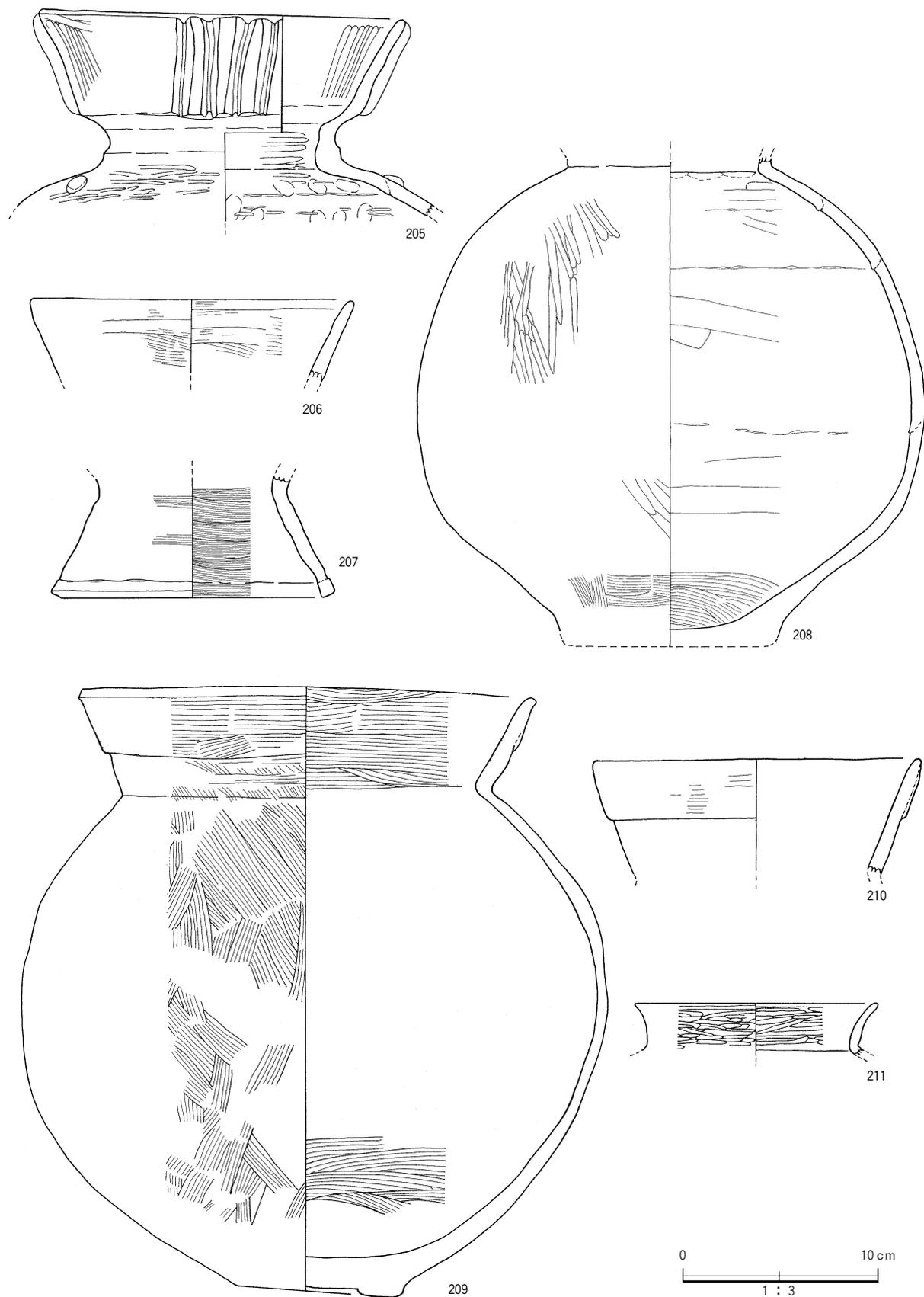




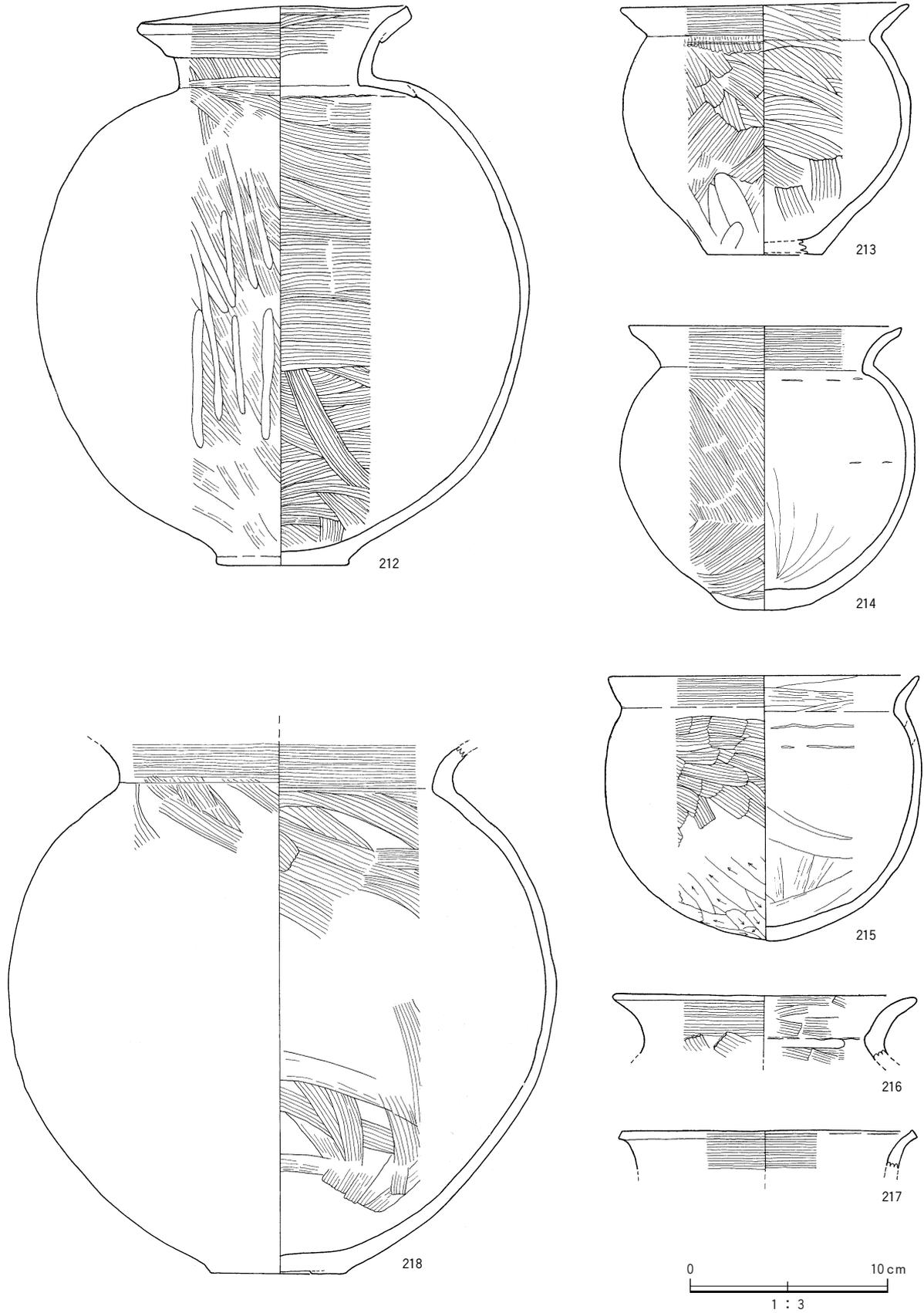
第40図 S T 202竪穴住居跡出土遺物 (1)



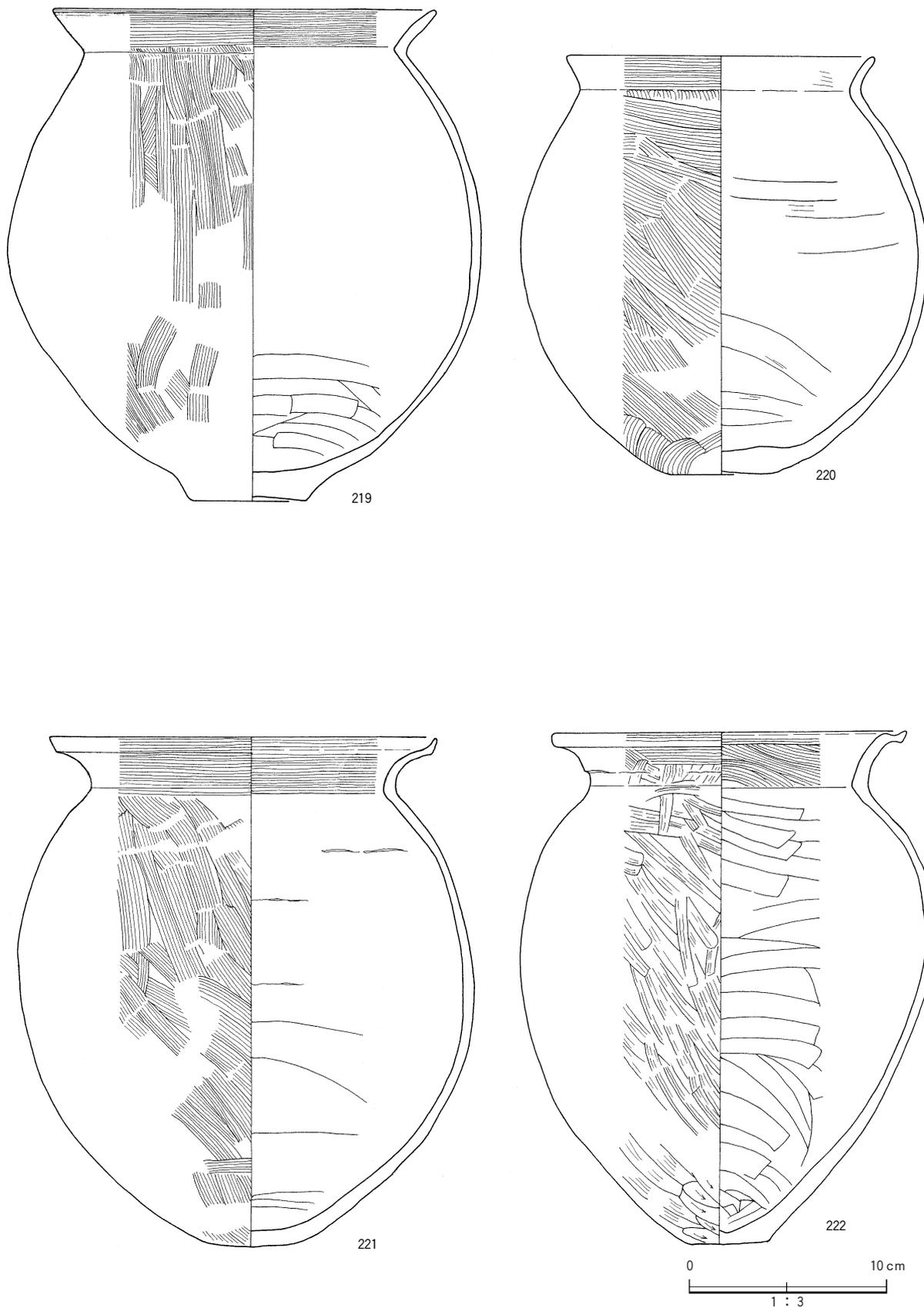
第41図 S T 202 竪穴住居跡出土遺物 (2)



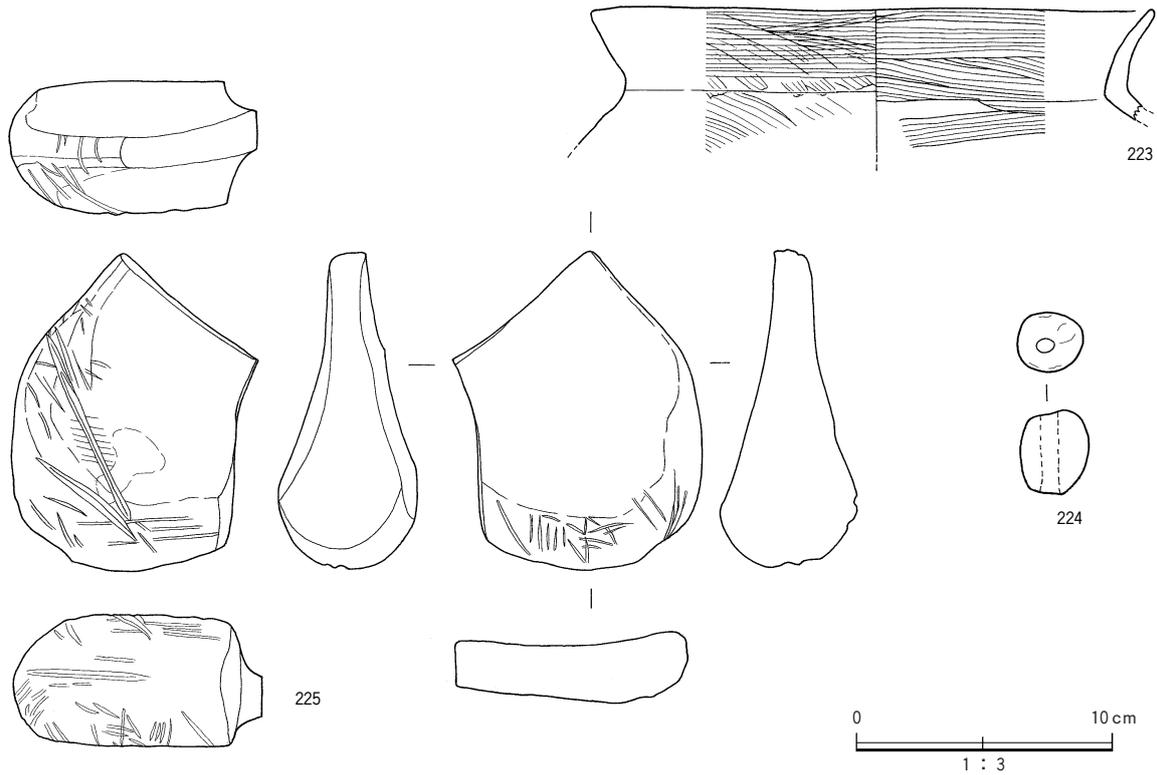
第42図 S T 202竪穴住居跡出土遺物 (3)



第43図 S T 202竪穴住居跡出土遺物 (4)



第44図 S T 202豎穴住居跡出土遺物 (5)



第45図 S T 202竪穴住居跡出土遺物（6）

土を除去すると下から竪穴住居跡のプランが現れてきたものである。平面形は隅丸の方形を呈し、南部が調査区外のため中途までの検出であるが、北辺長から考えて、隠れているのは1m前後ではないかと思われる。規模は南北長が不明であるが検出長で約4m、東西軸は約5mを測る。未調査部分も合わせて8坪前後と推定される。主軸方向は $N-16^{\circ}30' - E$ を示す。

覆土は床面の炭化物層を含めて9層である。第1層は攪乱された土である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、検出面からの深さは約45cmを測る。周溝、柱穴は見られない。床面には広範囲に炭が分布し、焼失家屋と考えられる。

出土遺物は、器台、高坏、壺、甕などの他、小型土器（166）や有孔鉢（167）などがある。

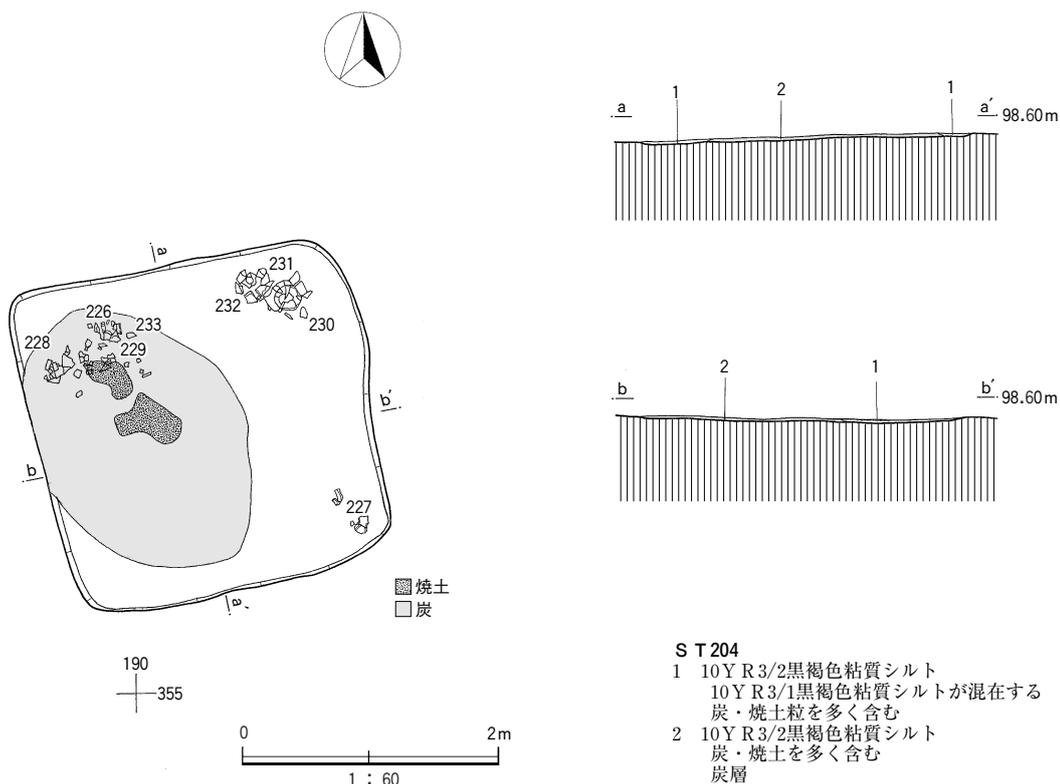
#### S T 202竪穴住居跡（第38, 39図）

174・353～181・360区に所在する。S D 260溝跡の埋没後に構築されたものである。平面形はあまり歪みのない隅丸方形を呈する。規模は南北軸が5.75m、東西軸は6.2mを測る。検出し得た中で最も大きな竪穴住居跡で、約11坪と群を抜いている。主軸方向は $N-13^{\circ}30' - W$ を示す。覆土は炭層を含めて3層である。

炭が床全面を覆っており、梁や垂木といった建築部材の炭化した部分が遺っていた。梁は、遺存長で2.9m、幅約20cmを測る。両端近くの2ヵ所にほぞ孔が認められる。垂木は放射状に遺存し、小屋組の落下によって割れた甕などが散乱している。

これら炭化部材の樹種同定を行ったところ、梁材はカバノキ科ハンノキ属、垂木材はモクセイ科トネリコ属であるとの結果を得た（付編参照）。

床面北東隅部と南西隅部に一塊の粘土が遺存していたが、用途は不明である。壁は比較的急



第46図 S T 204竪穴住居跡

傾斜で立ち上がり、検出面からの深さは約25cmを測る。垂木の遺存状況から推察するに、住居の掘り込み面は、遺構検出面から5～10cmほど上であったのではないかと考えられる。四隅に柱穴をもち、これらを半截したところ、いずれの柱穴にも直径20cmほどの柱のアタリが認められた。

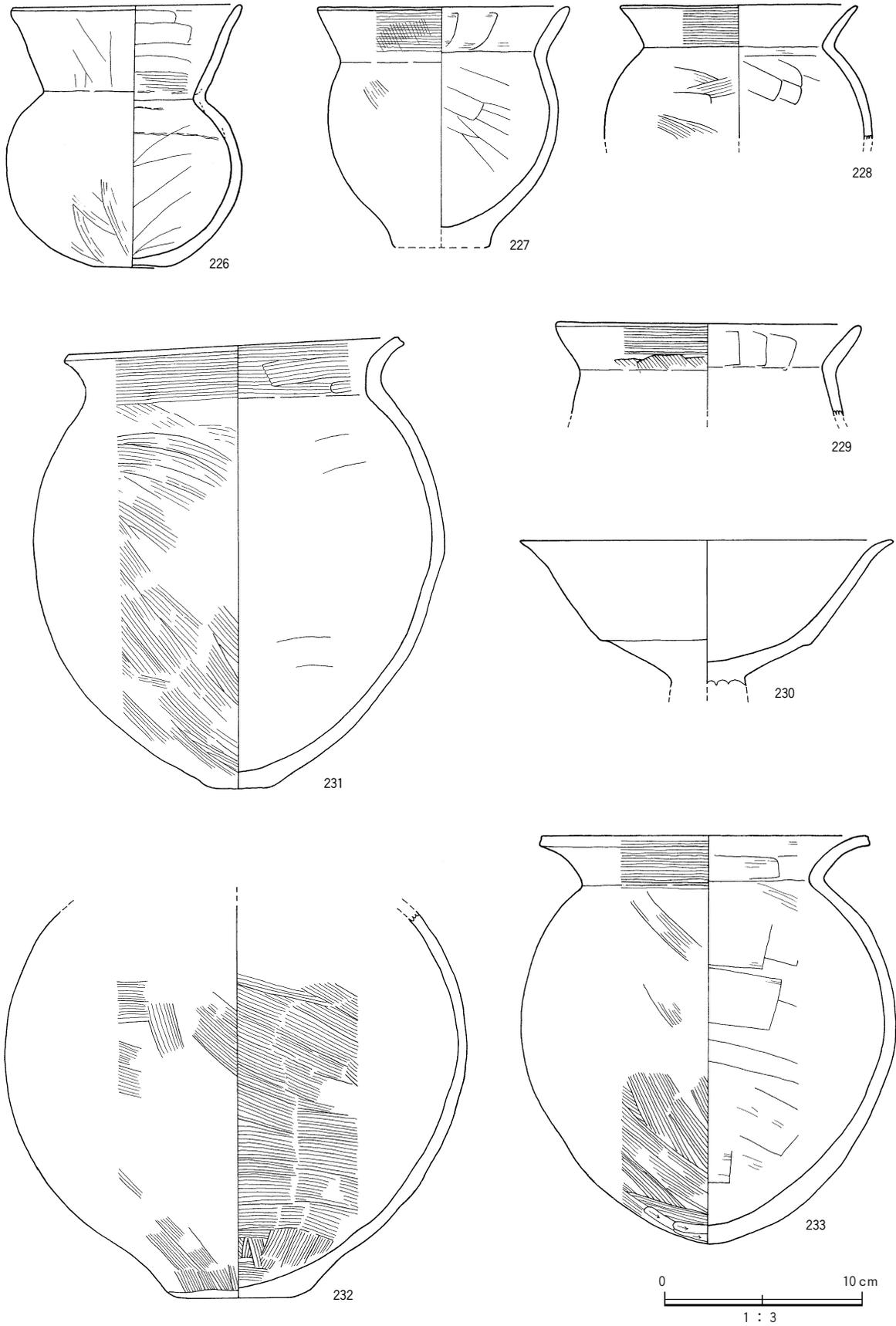
南西隅に貯蔵穴をもつ。壁面に密着する南北に長い卵形の平面形を持ち、深さは約15cmほどの丸底を呈する。長軸約160cm、短軸約120cmを測る。数点の土器の破片のほか、蓋と思われる炭化した板状の木質が認められた。

出土遺物は多く、1軒の家の生活状況がほぼ把握可能な状況である。口縁部に棒状浮文をもつ壺(205)を肩部の辺りで丁寧に割って整形し、器台として用いていた様子も見られた。その中には壺(174)が入れ子になって据えられていた。南辺ほぼ中央部は、遺物の遺存があまり見られないことから、出入口であったのではないかと考えられる。またこの部分から土玉が出土しており、壁の立ち上がり際に在ったことから、たまたまそこに遺されたと考えるより、住人の何らかの精神的働きを想定しても良いのではないかと考えられる。

#### S T 204竪穴住居跡 (第46図)

189・351～192・354区に位置する。平面形はほとんど歪みのない隅丸方形であるが、北東部がやや膨らみをもつ。規模は南北軸が2.5m、東西軸は2.6mを測る。検出し得た竪穴住居跡でも小さな部類に入り、約2坪である。主軸方向はN-12°30'-Wを示す。

覆土は2層である。壁は緩く立ち上がり、非常に浅い住居で、検出面からの深さは3cmほど



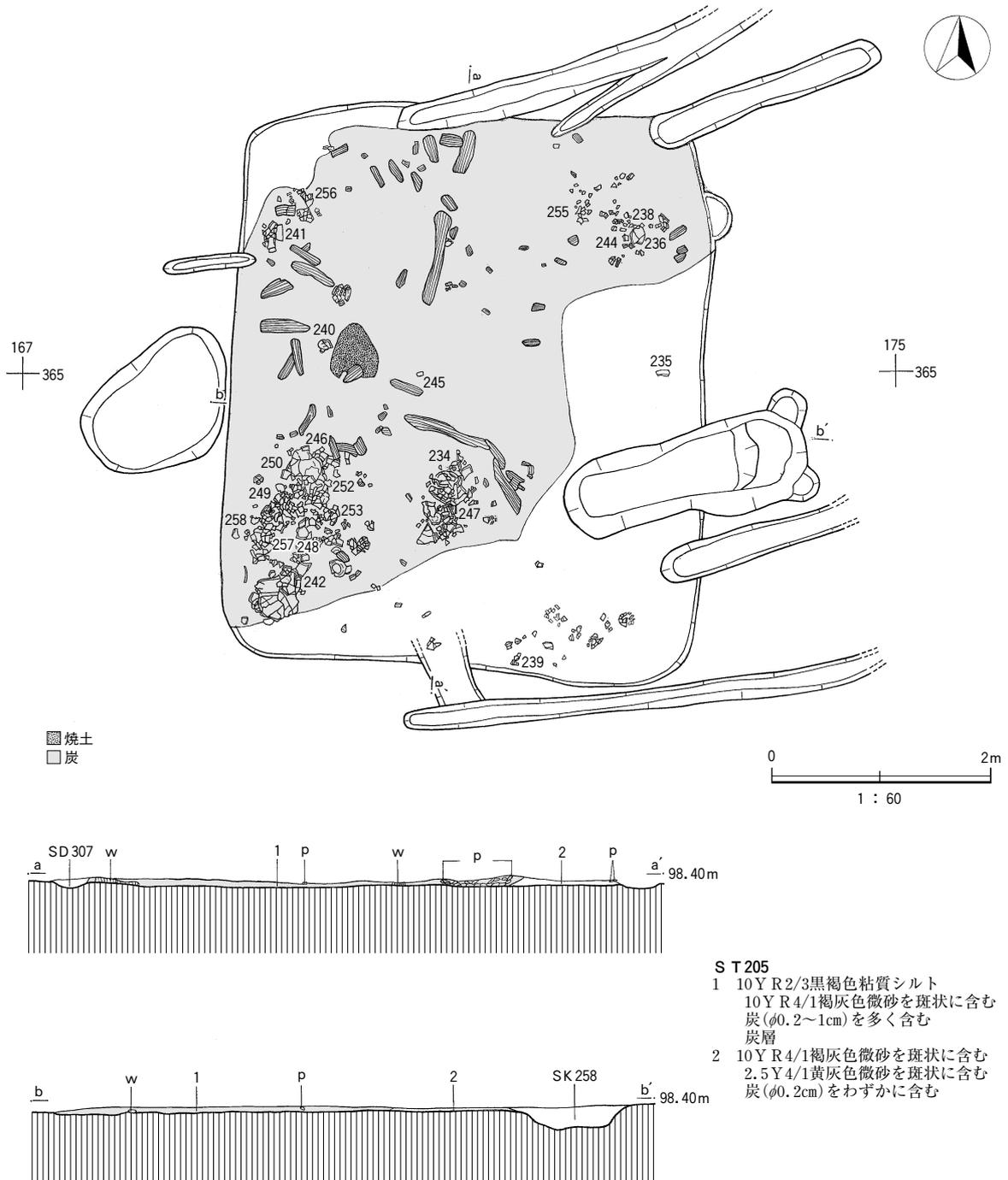
第47図 S T 204 竪穴住居跡出土遺物

である。床面西半部に炭が分布し、焼失家屋と考えられる。炭を除去したところ、床面に地床  
 炉と思われる被熱痕跡が認められた。周溝、柱穴は認められない。

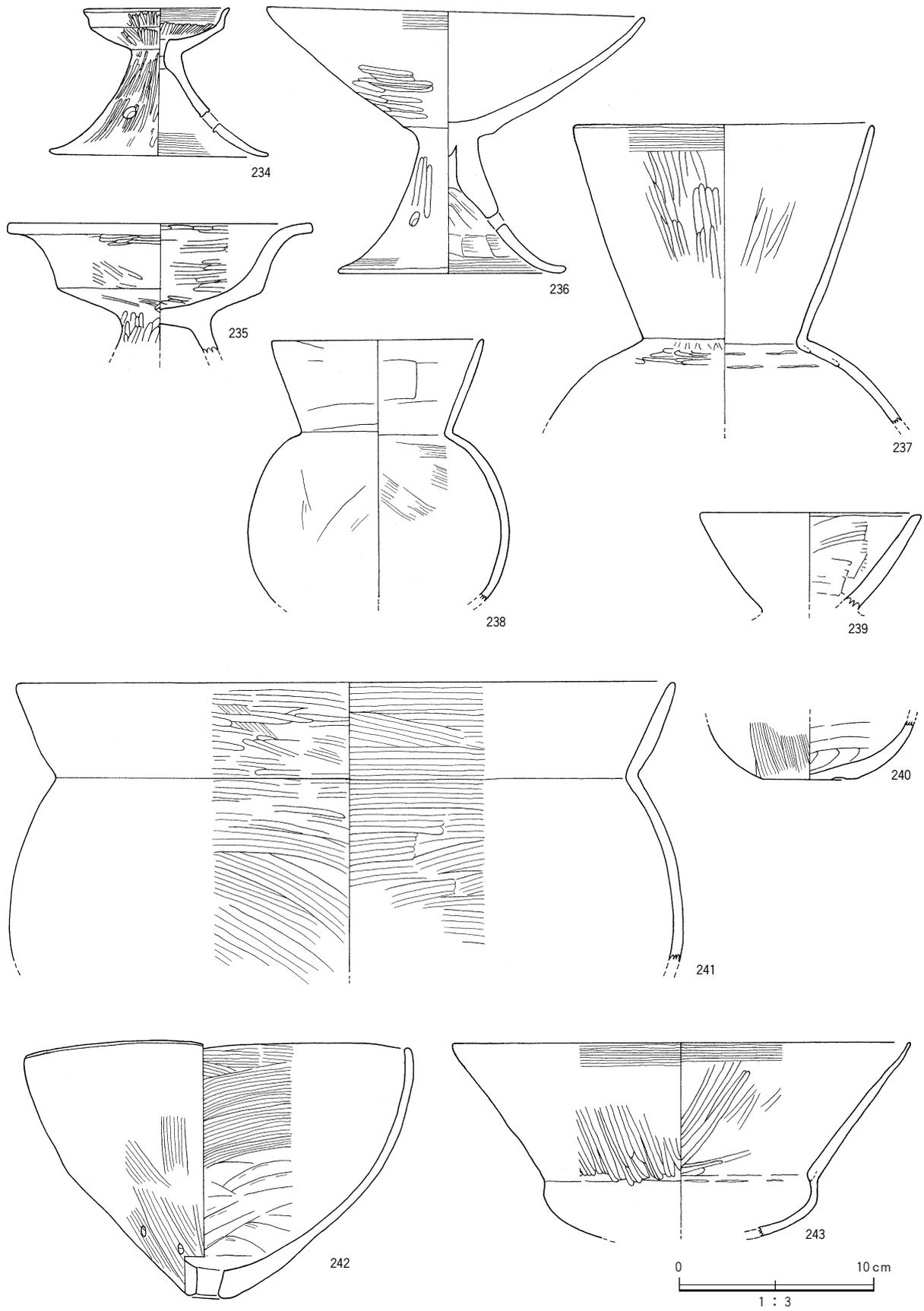
出土遺物は有稜高坏、頸部の締まりが緩い直口壺、甕などである。

**S T 205 竪穴住居跡 (第48図)**

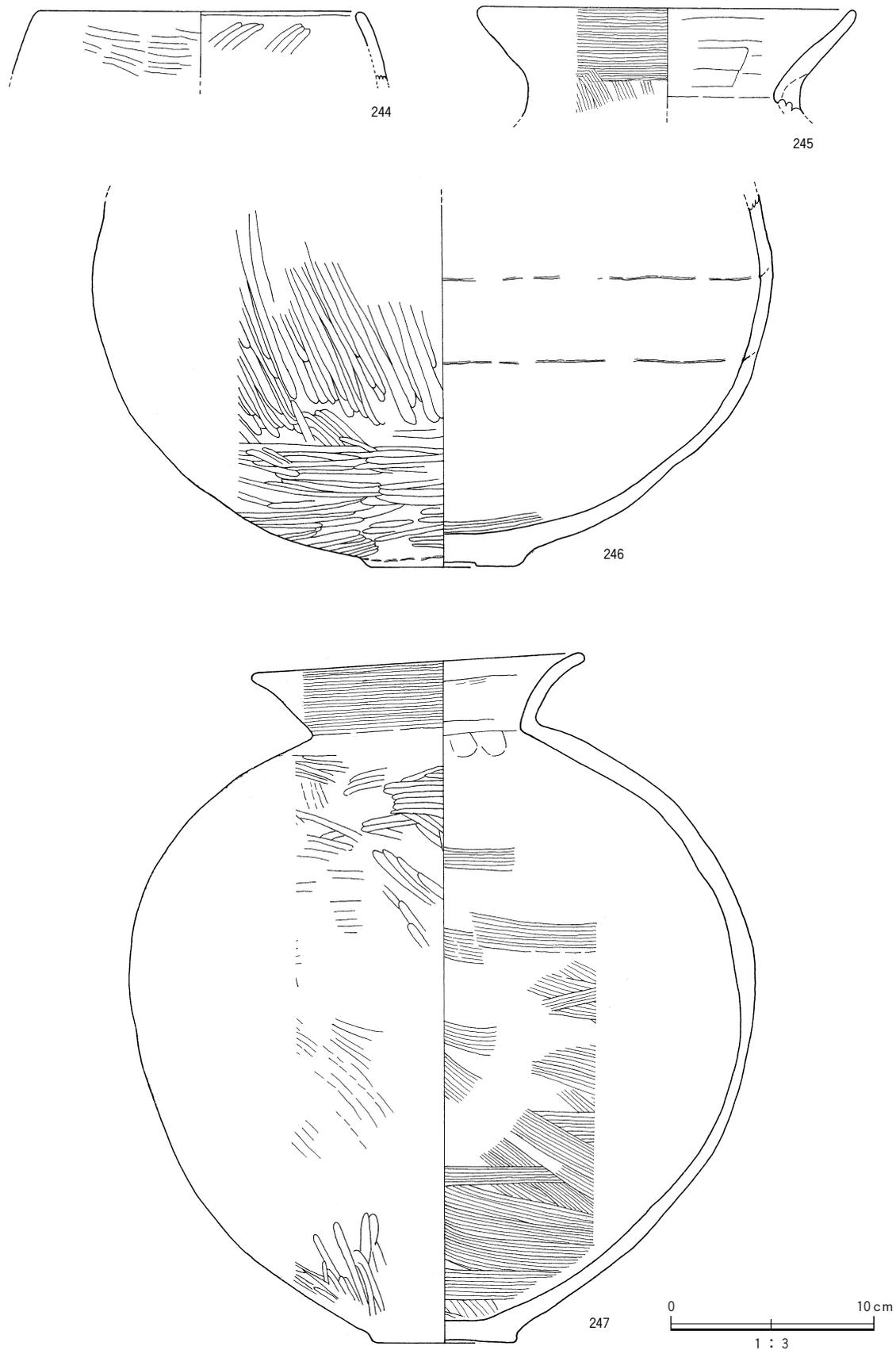
169・362～173・368区に位置する。平面形は南北に長い隅丸方形であるが、北東部で僅かに  
 摘み出されたような形状を呈する。規模は南北軸が5.15m、東西軸は4.4mを測る。検出し得  
 た住居の中では標準的な大きさと、約7坪ある。主軸方向はN-3°30'-Eを示す。



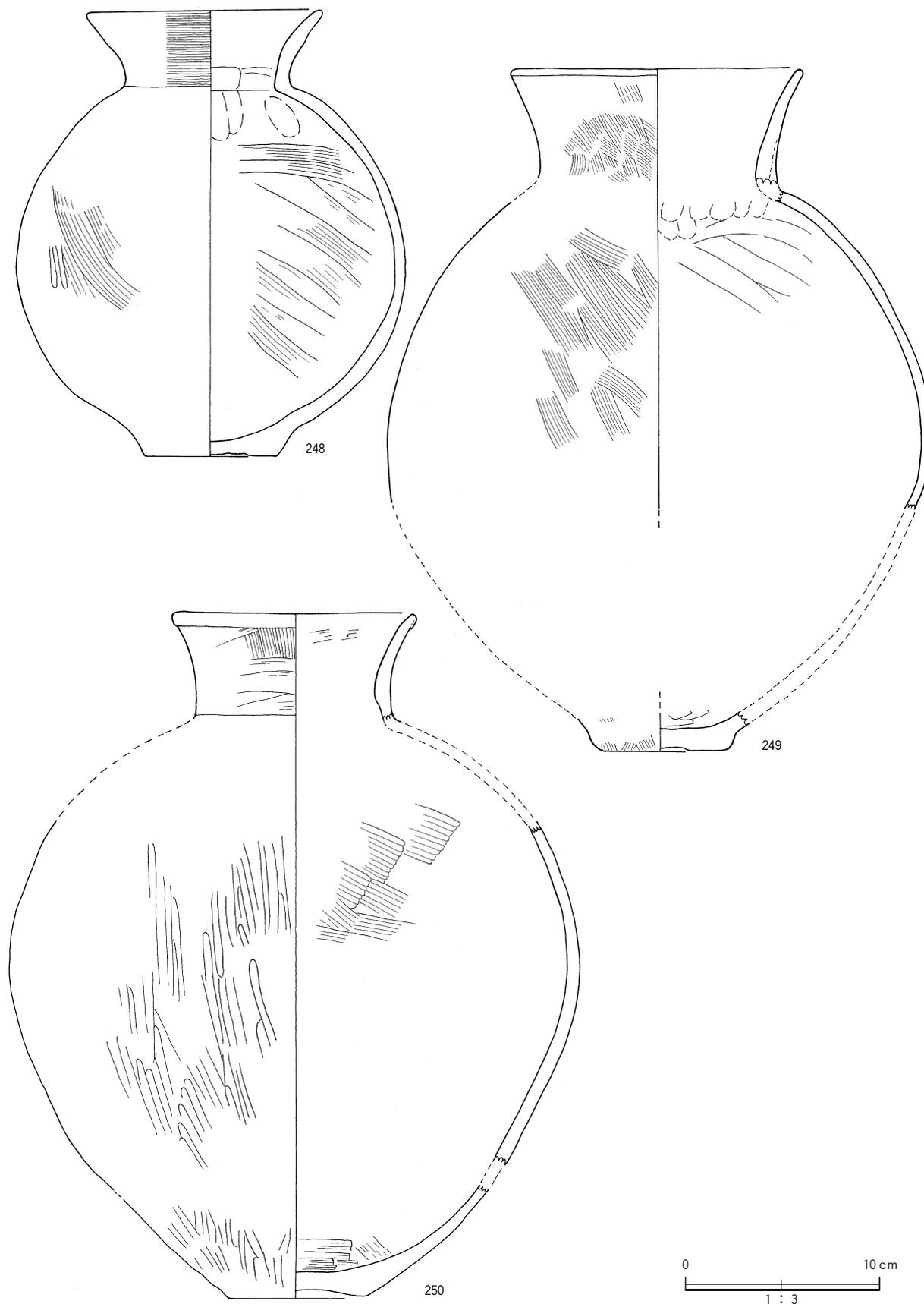
第48図 S T 205 竪穴住居跡



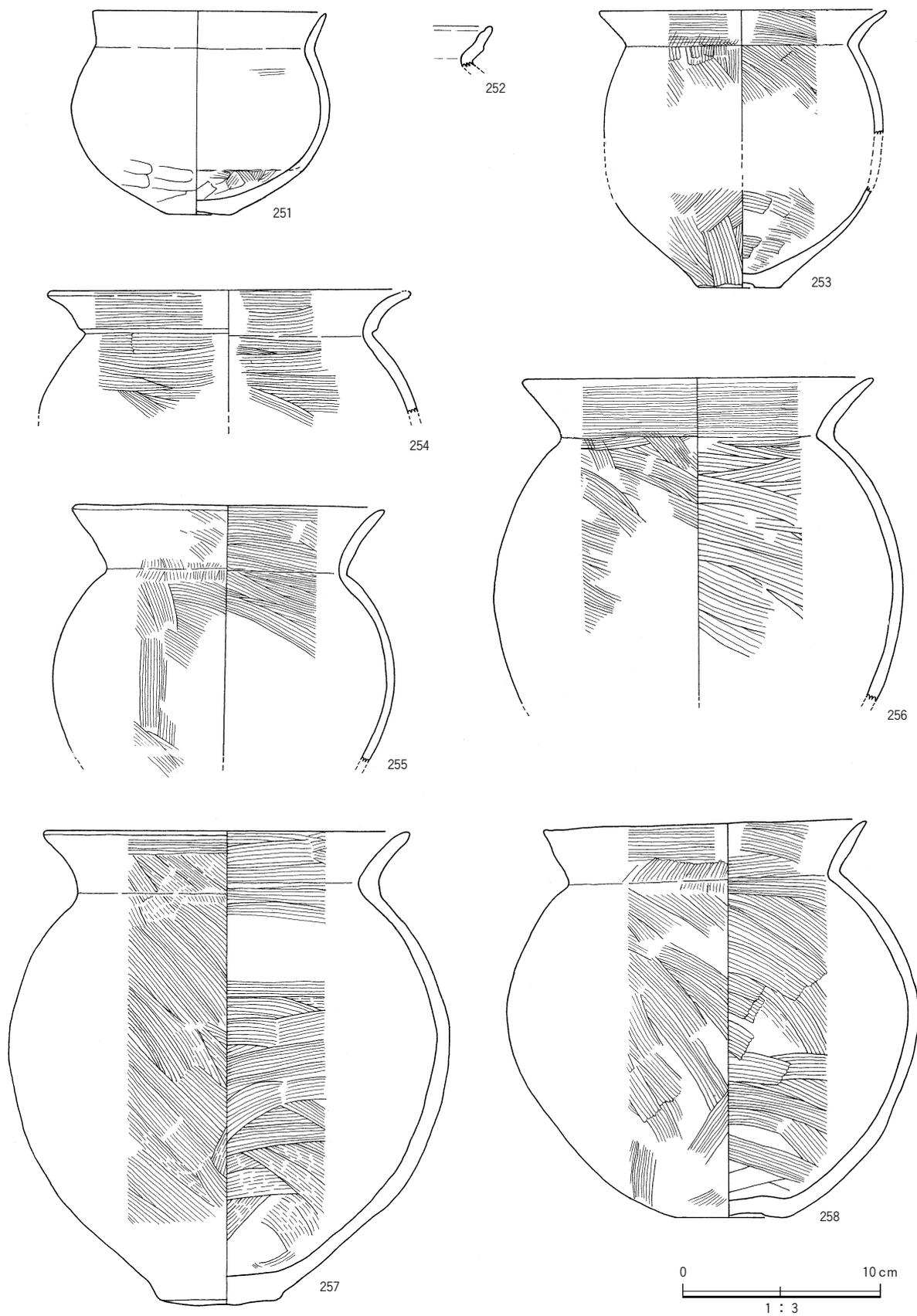
第49図 S T 205竪穴住居跡出土遺物 (1)



第50図 S T 205 豎穴住居跡出土遺物 (2)



第51図 S T 205竪穴住居跡出土遺物 (3)

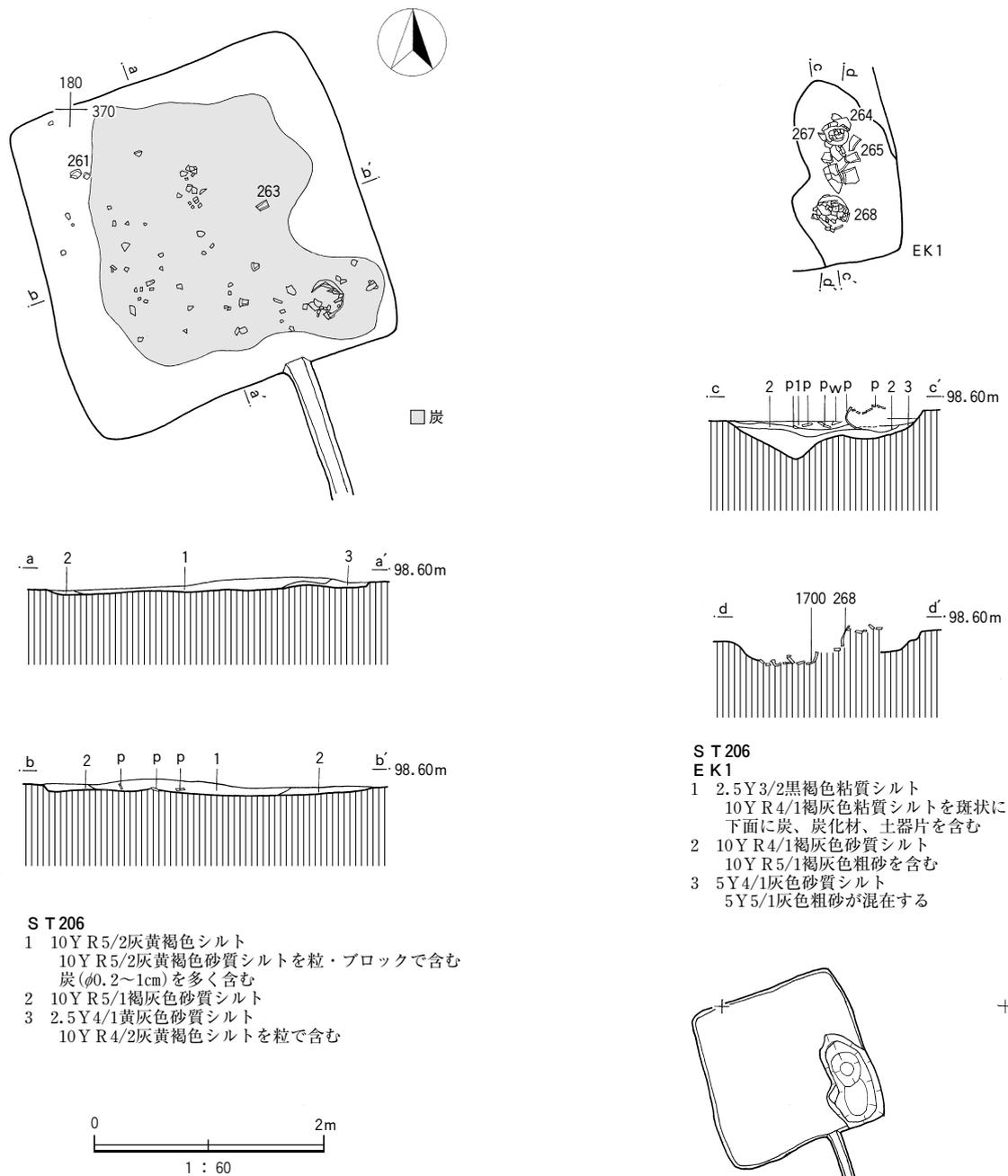


第52図 S T 205竪穴住居跡出土遺物 (4)

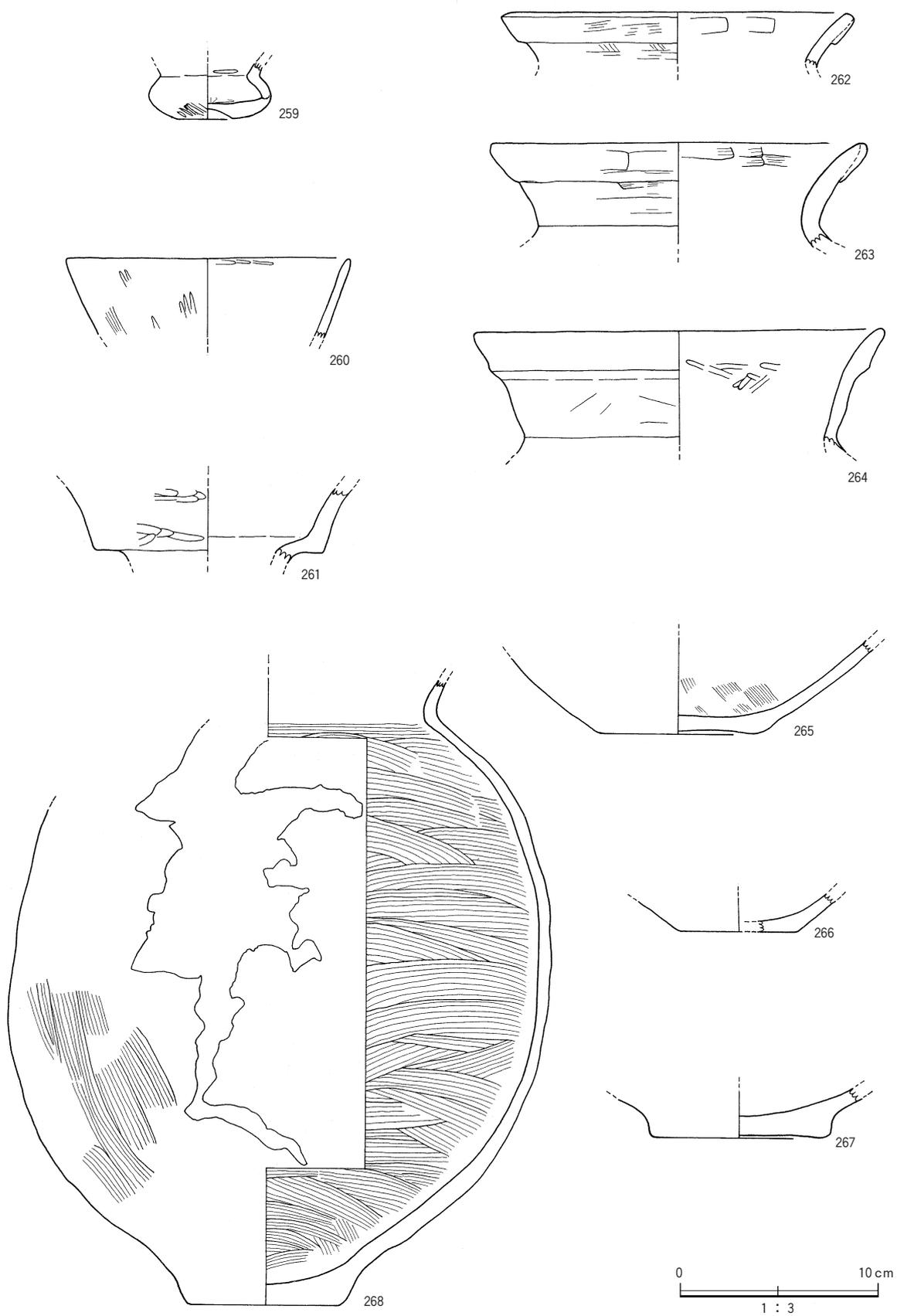
覆土は2層である。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは約5cmを測る。対角線の北西部にかけて炭と炭化材が遺存し、焼失家屋と考えられる。床面中央北西寄りに地床炉と思われる被熱痕跡が認められる。周溝、柱穴は認められない。出土遺物は割合豊富で、器台、高坏、鉢、有孔鉢、壺、甕等が認められる。

**S T 206 竪穴住居跡 (第53図)**

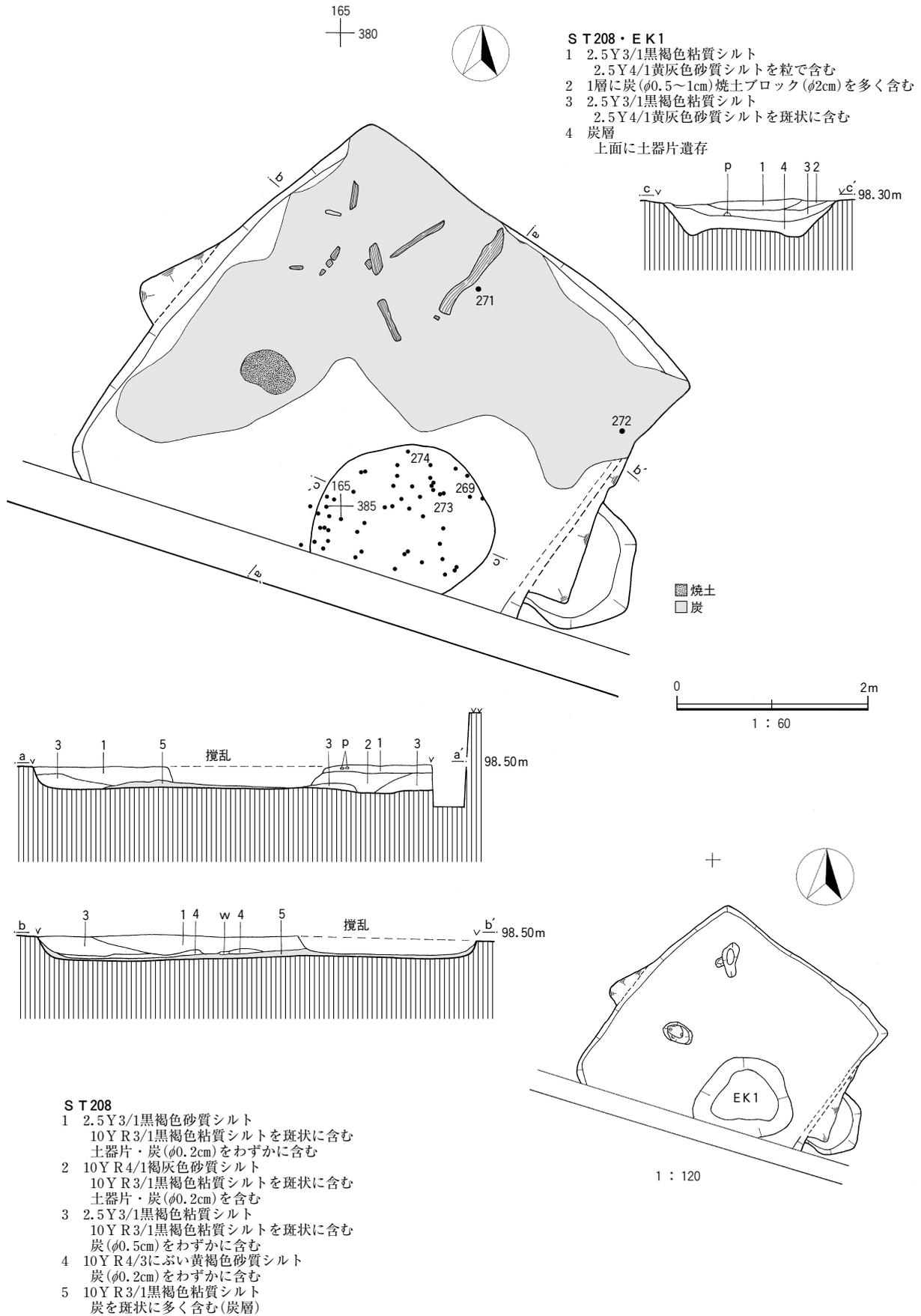
170・370~183・373区に位置する。S D 261溝跡の埋没後に構築されたものである。平面形はあまり歪みのない方形であるが、南西隅部を僅かに摘み出したような形状を呈する。規模は



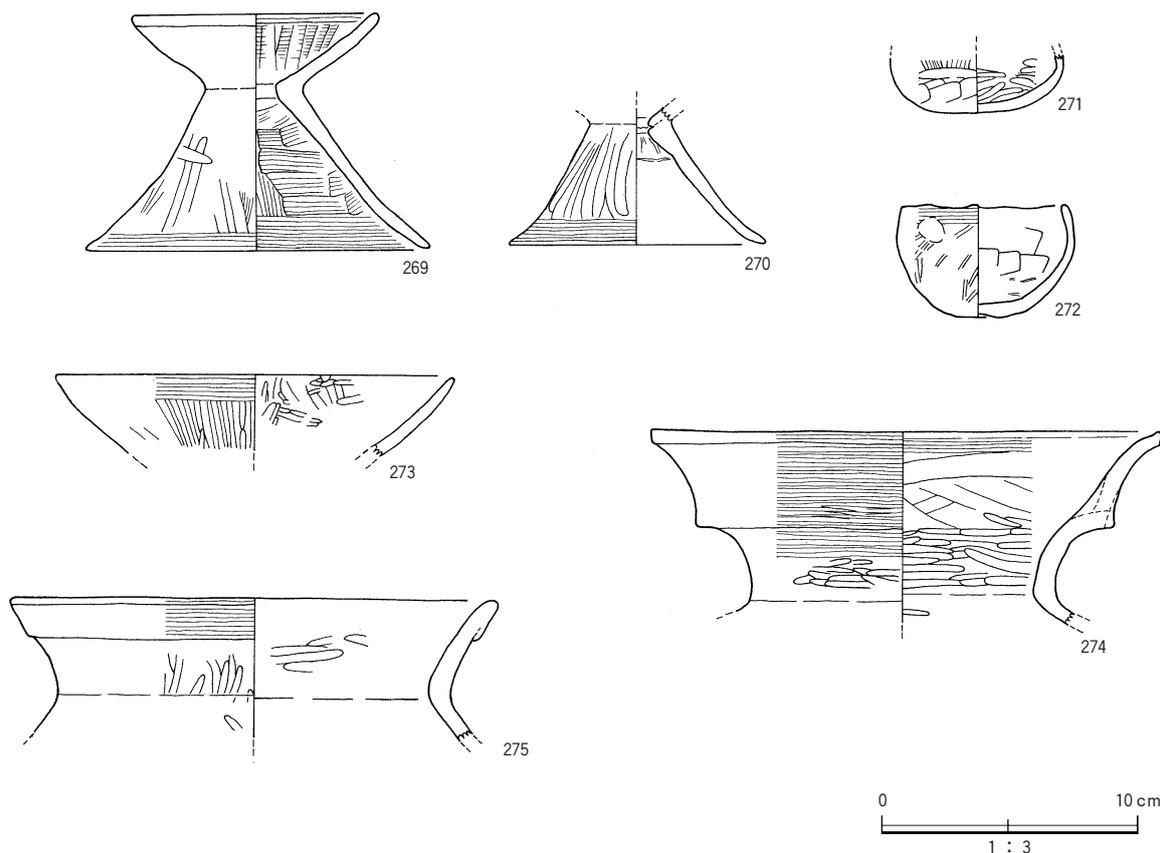
第53図 S T 206 竪穴住居跡



第54図 S T 206 竪穴住居跡出土遺物



第55図 S T 208 竪穴住居跡



第56図 S T 208竪穴住居跡出土遺物

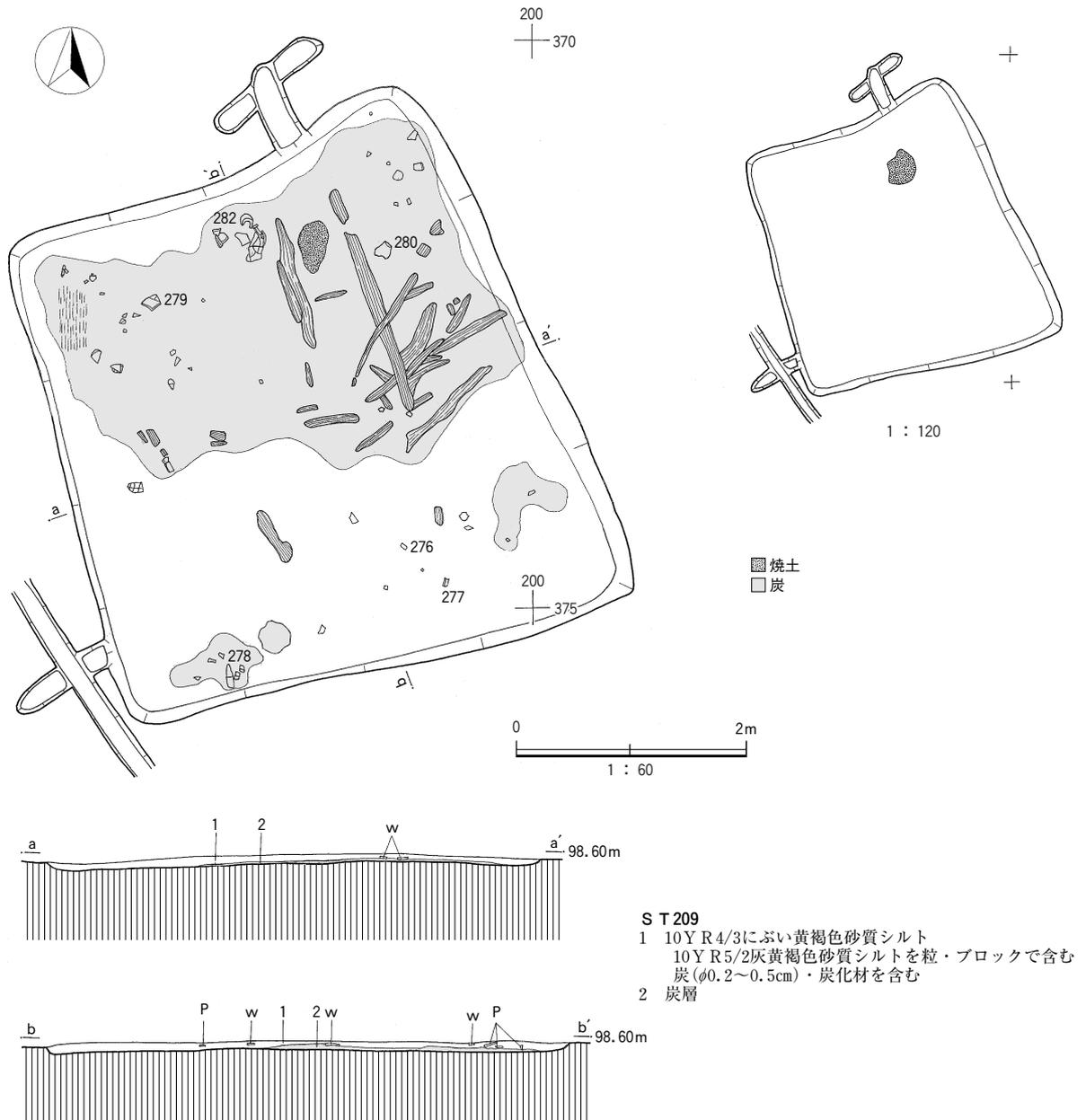
南北軸が2.85m、東西軸は2.75mを測る。規模の小さいグループに属し、約2.5坪である。主軸方向はN-12° 30' -Wを示す。覆土は3層である。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは約5cmを測る。床面中央部に炭と土器片が分布し、焼失家屋と考えられる。

南東隅部に貯蔵穴をもつ。長軸1.6m、短軸1mほどの不正形を呈し、底部は北側に二段に深くなっている。貯蔵穴内には甕などの土器が遺存していたが、その内の1個体は、体部が床面から突出した状態で検出されており、貯蔵穴には、蓋はなかったものと考えられる。その突出した甕(268)は、土圧によって変形し、接合しても割れ目は残ったままだった。

出土遺物は小形丸底土器や壺、甕などがある。

#### S T 208竪穴住居跡 (第55図)

162・381~169・386区に位置する。S T 201と同様土取りのために攪乱を受けていたが、攪乱土を除去すると竪穴住居跡のプランが現れた。南辺部が調査区の外に位置しているが、南西隅が検出できたので規模が判明した。平面形は、遺存部から南辺がやや開く台形状を呈する方形と考えられる。規模は南北軸が4.8m、東西軸は4.5mを測る。標準的な大きさで、約6.5坪ある。主軸方向はN-39° -Eで、覆土は5層である。壁は角度をもって立ち上がり、検出面からの深さは約25cmを測る。北半部に炭と炭化した部材が遺存し、焼失家屋と考えられる。中央西寄りに地床炉と考えられる被熱痕跡が認められる。被熱痕跡には棒状の物体を差し込んだと思われるような孔が2つ開いており、通常の炉とは異なる機能を持っていたのではないかと

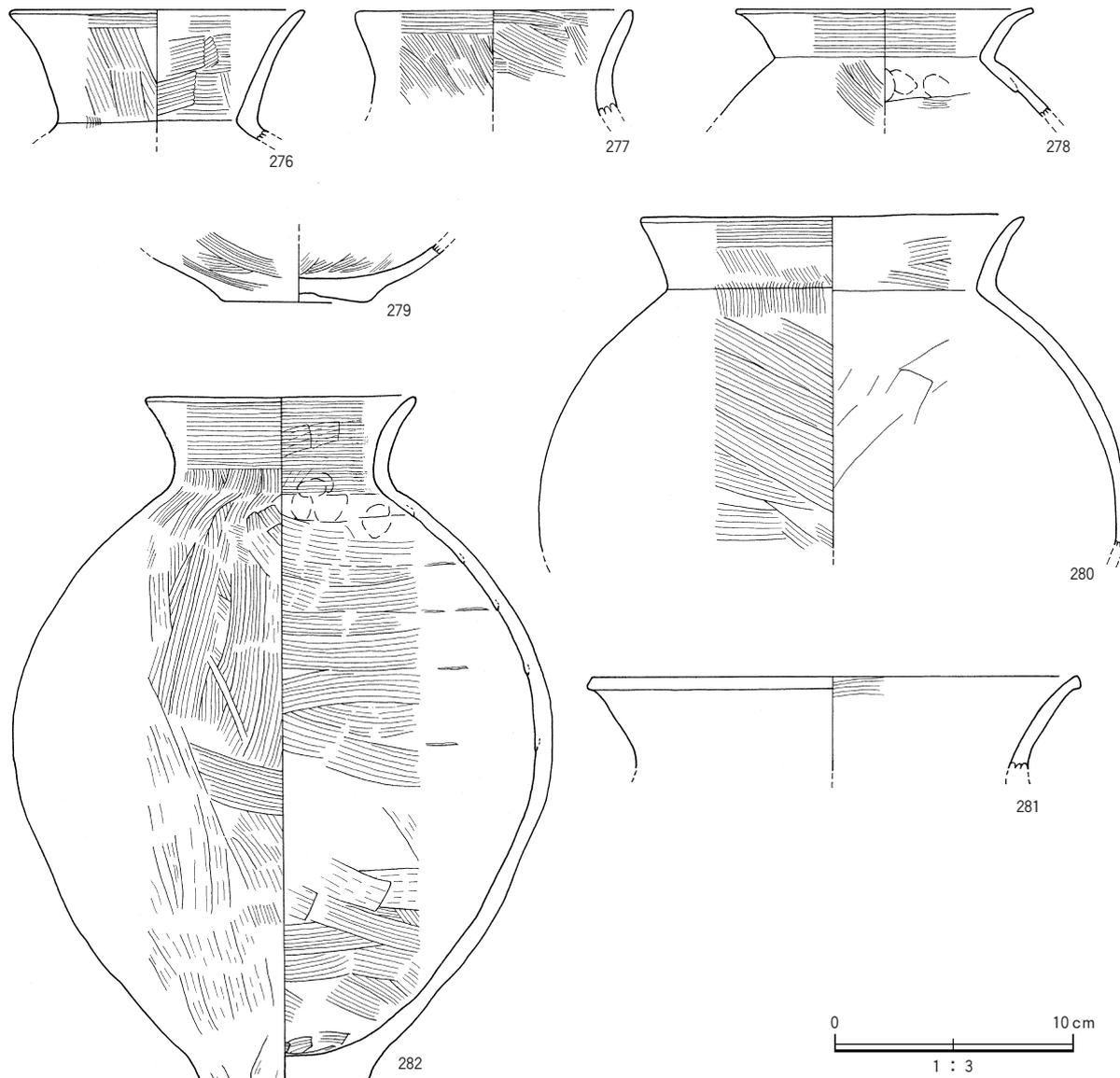


第57図 S T 209 竪穴住居跡

考えられる。南東隅部に直径 2 m 弱の屋内土坑が認められた。覆土は黒褐色の粘質シルトで、土器片が含まれる。前述の通常とは異なる炉や屋内土坑などを考え合わせると、あるいは工房のような施設を考えても良いのではないだろうか。出土遺物は器台や高坏、壺、小型土器などである。

**S T 209 竪穴住居跡 (第57図)**

195・370~201・376区に位置する。平面形は南辺がやや開く台形状を呈し、北東隅部が少し摘み出されたような形状を呈する。規模は南北軸が4.55m、東西軸は4.4mを測る。平均的な大ききで約 6 坪ある。主軸方向はN-18° 20' -Wを示す。覆土は 2 層である。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは10cmを測る。南西隅部を除き、炭や炭化部材が遺存し、焼失家屋



第58図 ST 209 竪穴住居跡出土遺物

と考えられる。床面には、北東隅部寄りに地床炉と考えられる被熱痕跡が認められる。出土遺物は壺、甕などである。

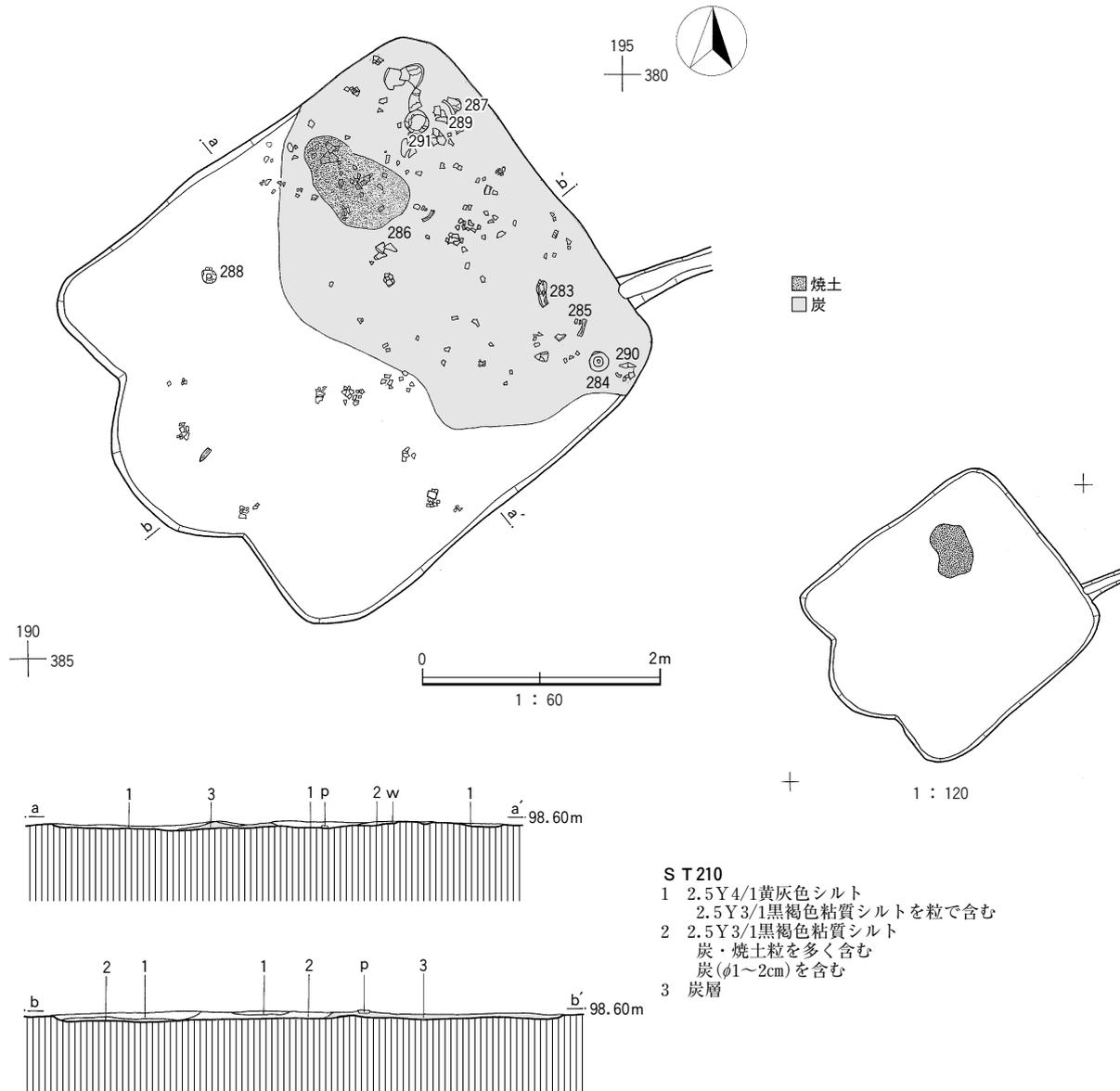
**ST 210 竪穴住居跡 (第59図)**

190・380～195・385区に位置する。平面形は隅丸方形であるが、西辺中央部が丸く張り出している。規模は南北軸が3.7m、東西軸は3.9mを測る。小さなグループに属し約4.5坪ある。主軸方向はN-36°30'-Wを示す。覆土は2層である。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは5cmを測る。周溝、柱穴は認められない。

床面東半部を炭が覆い、土器片が遺存する。焼失家屋と考えられる。床面北辺近くに地床炉と思われる被熱痕跡が認められる。出土遺物は鉢、壺などである。

**ST 211 竪穴住居跡 (第61, 62図)**

193・383～200・390区に位置する。プラン確認時は全面を灰黄褐色シルトで覆われており、

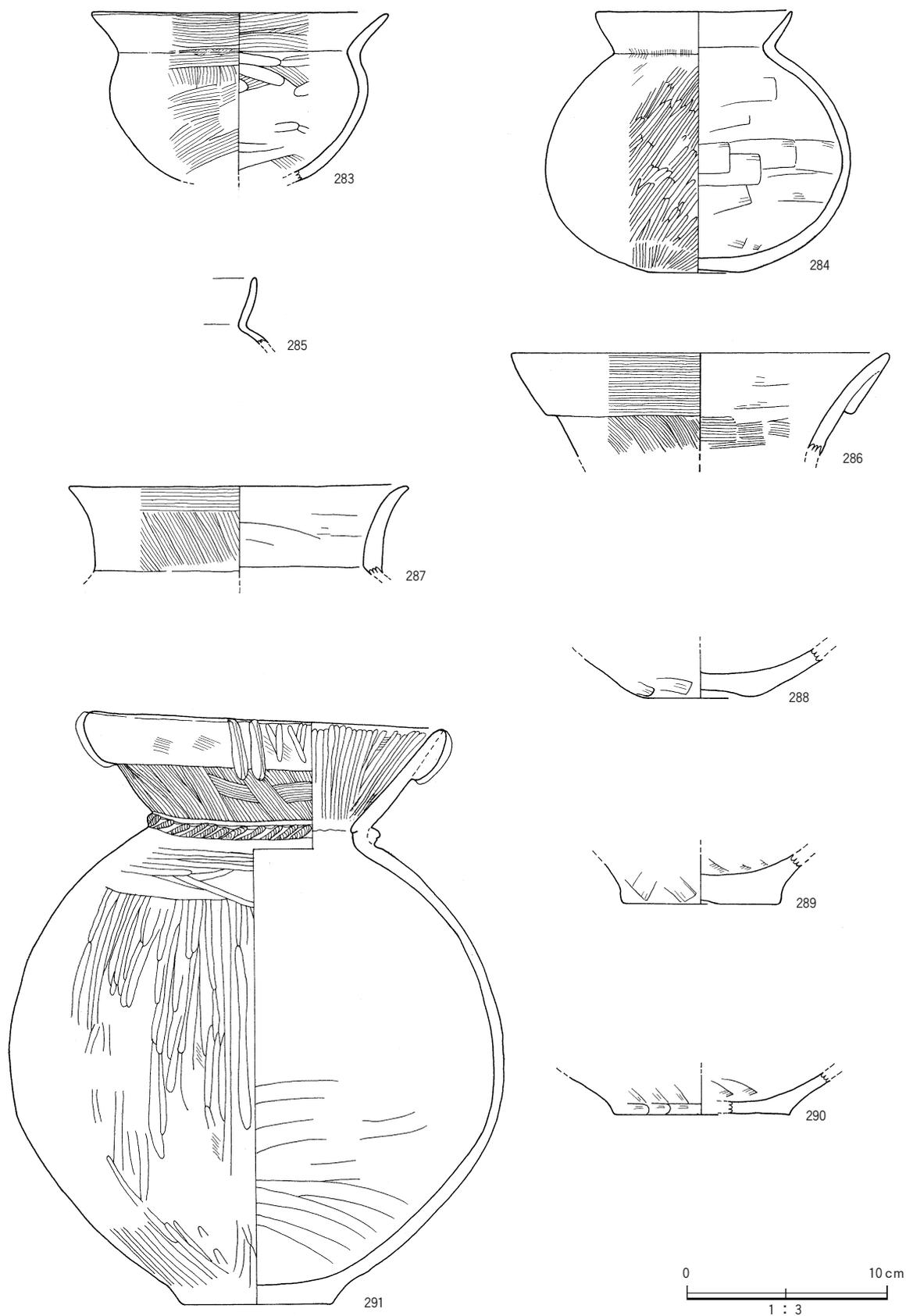


第59図 S T 210 竪穴住居跡

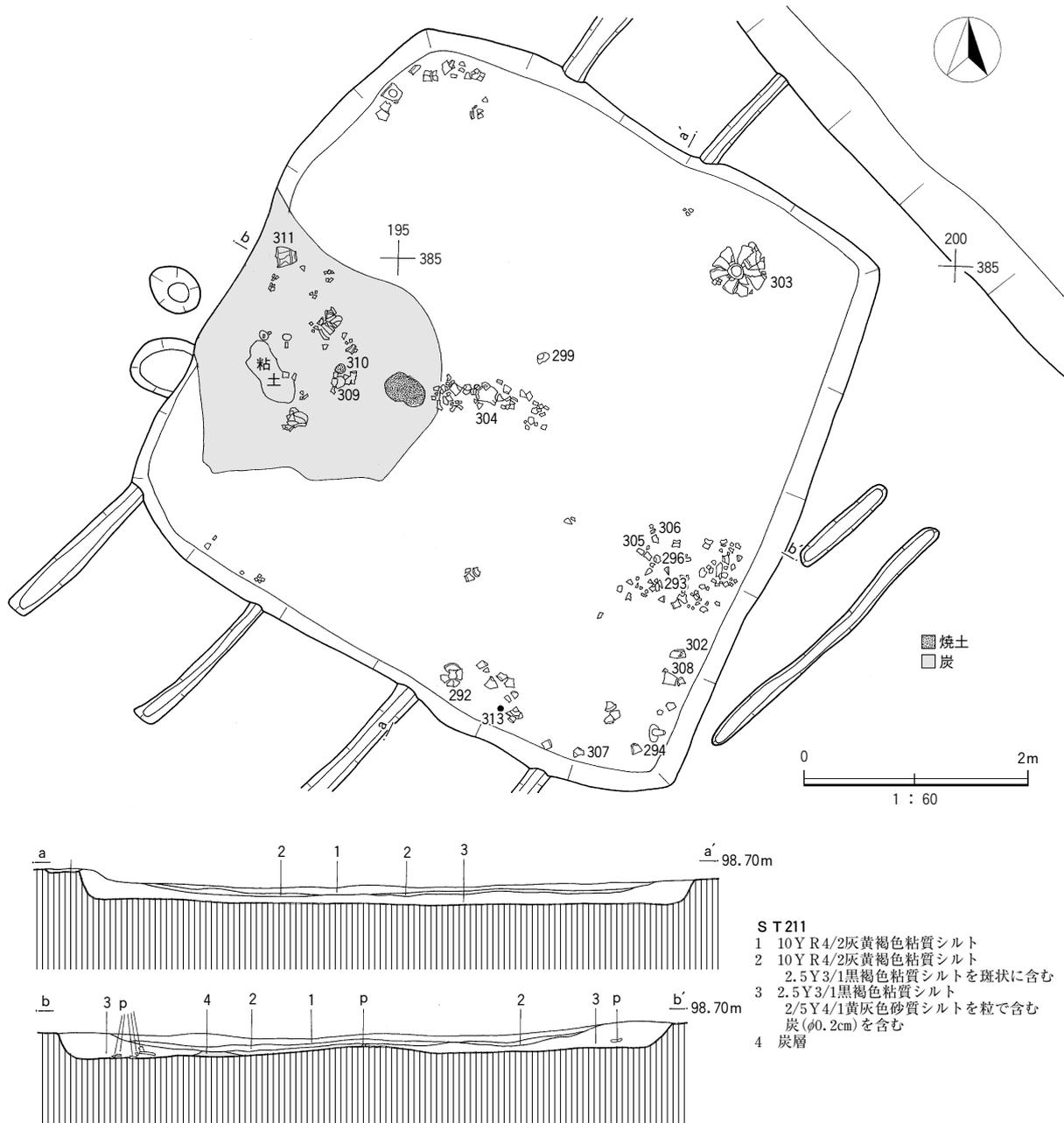
それを取り除いて住居跡を検出した。平面形は南辺がやや開く台形状を呈する。規模は南北軸が5.5m、東西軸は5.35mを測る。S T 202に次いで大きい竪穴住居跡で、約9坪ある。主軸方向はN-26°30'-Eを示す。覆土は炭層を含めて3層である。

西辺中央部の床面に炭が遺存している。床面中央やや西寄りに地床炉と思われる被熱痕跡が認められる。壁はやや開き気味に立ち上がり、検出面からの深さは最も深いところで25cmを測る。壁面から1mほど内側に4本の支柱穴が認められた。直径は約55cm、深さは25~35cmで、堀方の底に柱のアタリが認められた。

南東隅に南北1.3m、東西1.1mほどの方形の貯蔵穴があり、上層に蓋と思われる炭化した板材が認められた。出土遺物は各隅部や地床炉の周囲に遺っていた。装飾器台をはじめ、高坏、鉢、壺、甕などのほか、管玉の原材料と考えられる荒割りされた波璃質流紋岩が出土している。



第60図 S T 210 竪穴住居跡出土遺物

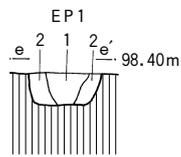
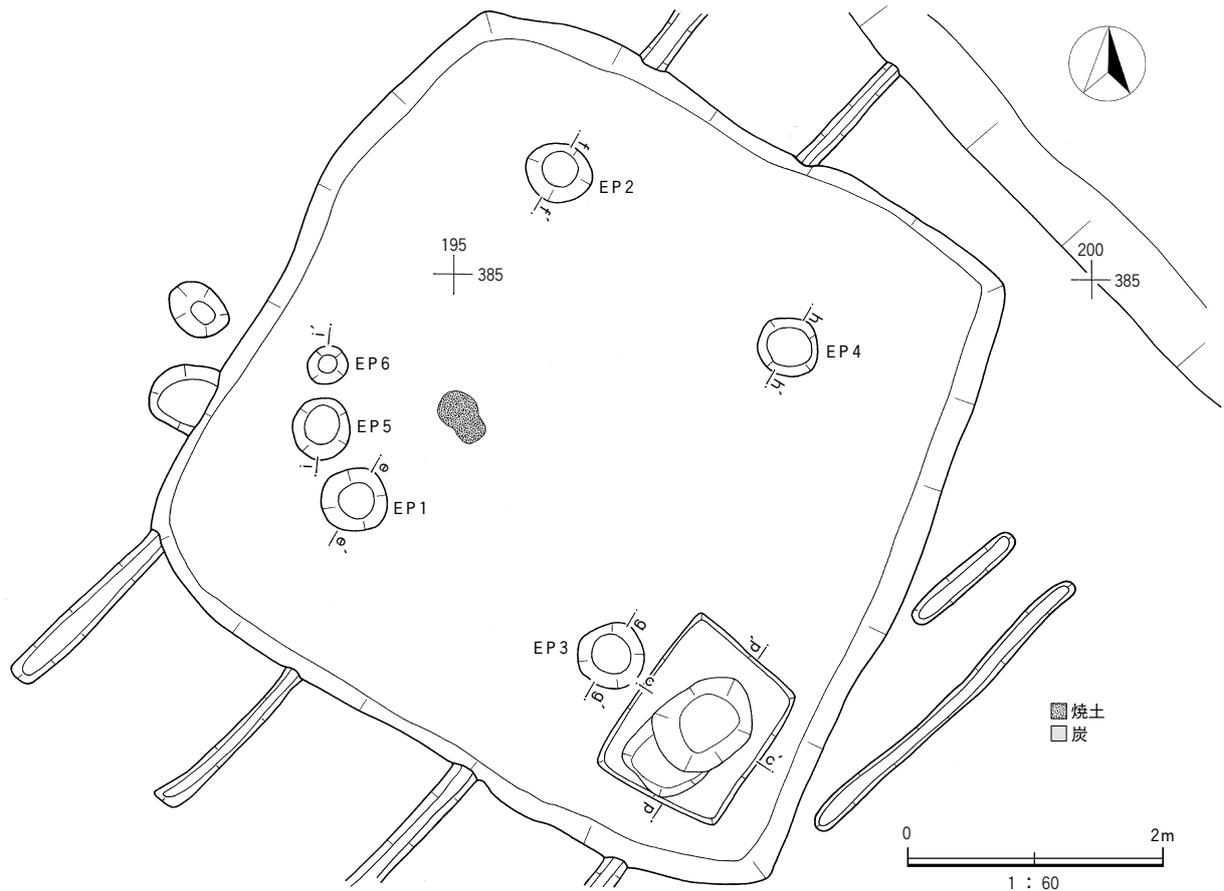


第61図 ST 211 竪穴住居跡 (1)

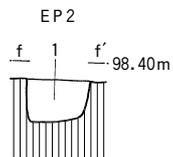
**ST 212 竪穴住居跡 (第67図)**

177・377～182・382区に位置する。平面形はほぼ歪みのない方形を呈する。南西隅と南東隅に、壁面からはみ出して設けられた柱穴が付属する。規模は南北軸が4.5m、東西軸は4.2mを測る。平均的な大きさで、約5.5坪ある。主軸方向はN-14° 30' - Eを示す。

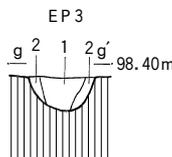
覆土は1層である。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは10cm内外である。主柱穴は認められない。床面に炭が遺り、焼失家屋と考えられる。中央北側と北東隅部に被熱痕跡が認められる。このうち、中央北壁寄りの被熱痕跡は、通常的地床炉ではなく、棒状の物体を差し込んだような孔が認められ、南に張り出した柱穴と合わせて、前述ST 208のような工房的な機能を持った施設と考えられる。



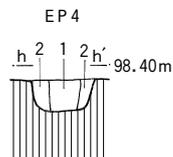
- EP1**
- 1 2.5Y3/1黒褐色砂質シルト  
2.5Y4/1黄灰色微砂  
炭(φ0.1cm)をわずかに含む
  - 2 2.5Y4/1黄灰色シルト  
2.5Y5/1黄灰色微砂をブロックで含む



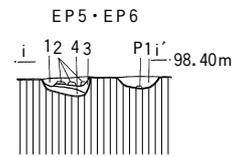
- EP2**
- 1 7.5Y3/1オリーブ黒砂質シルト  
炭(φ0.1cm)をわずかに含む



- EP3**
- 1 2.5Y3/1黒褐色砂質シルト  
炭(φ0.2cm)をわずかに含む
  - 2 2.5Y3/1黒褐色砂質シルト  
2.5Y4/1黄灰色砂質シルトを斑状に含む

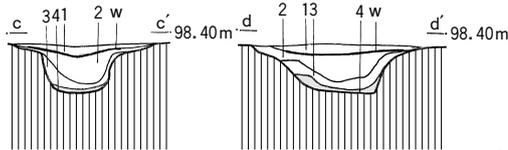


- EP4**
- 1 2.5Y3/1黒褐色砂質シルト  
炭(φ0.1cm)を含む
  - 2 2.5Y3/1黒褐色砂質シルト  
2.5Y4/1黄灰色砂質シルトを粒で含む

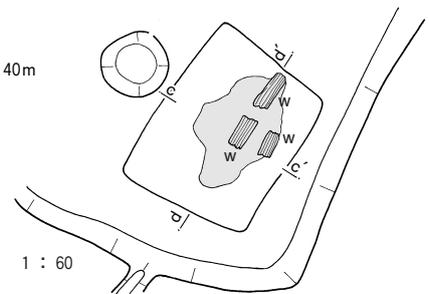


- EP5**
- 1 5Y3/1オリーブ黒砂質シルト  
7.5Y4/1灰色砂質シルトを粒で含む
  - 2 炭
  - 3 7.5Y6/1灰色粘土
  - 4 7.5Y3/1オリーブ黒砂質シルト

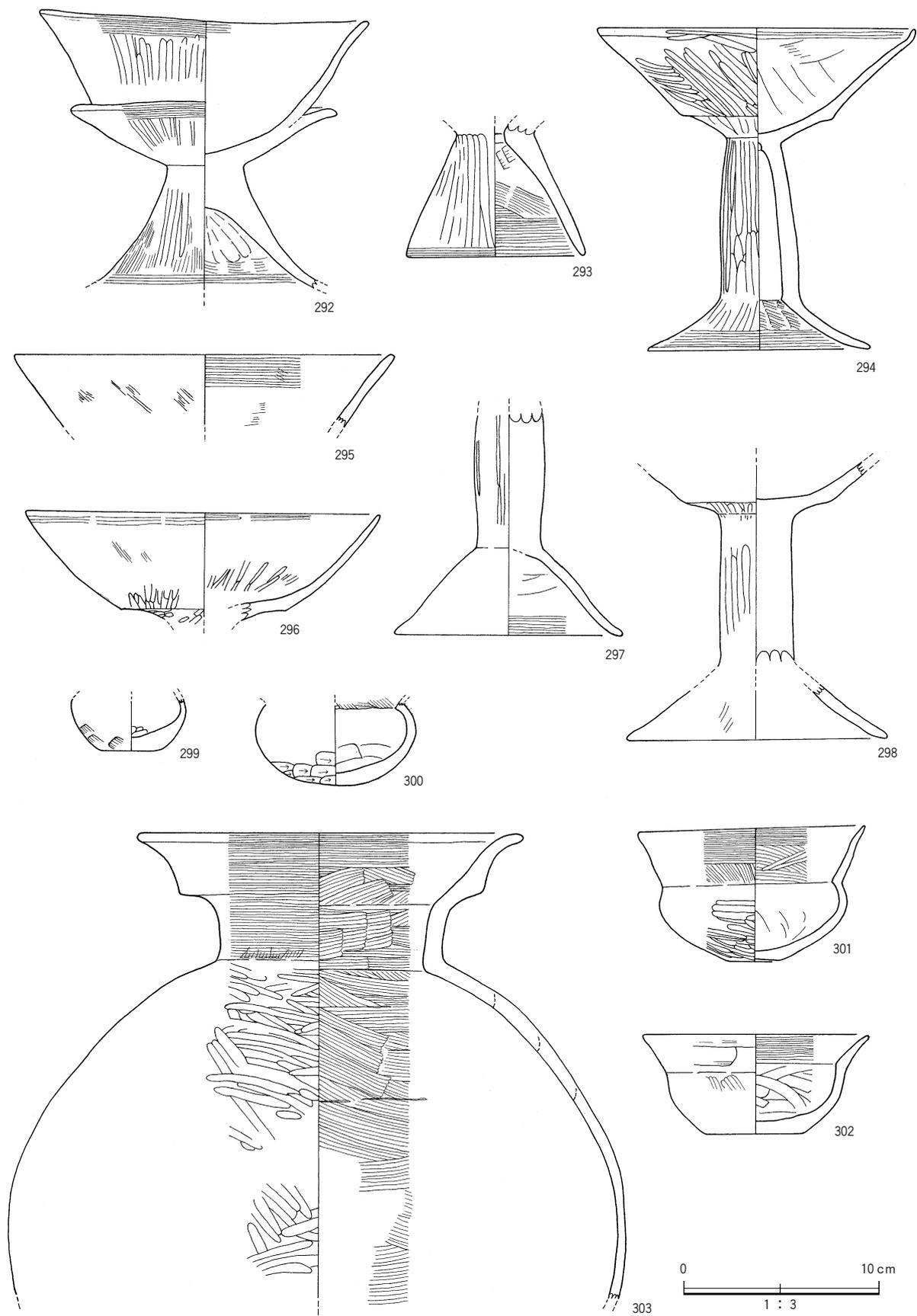
- EP6**
- 1 7.5Y3/1オリーブ黒砂質シルト  
炭(φ0.5~1cm)を含む土器片を含む



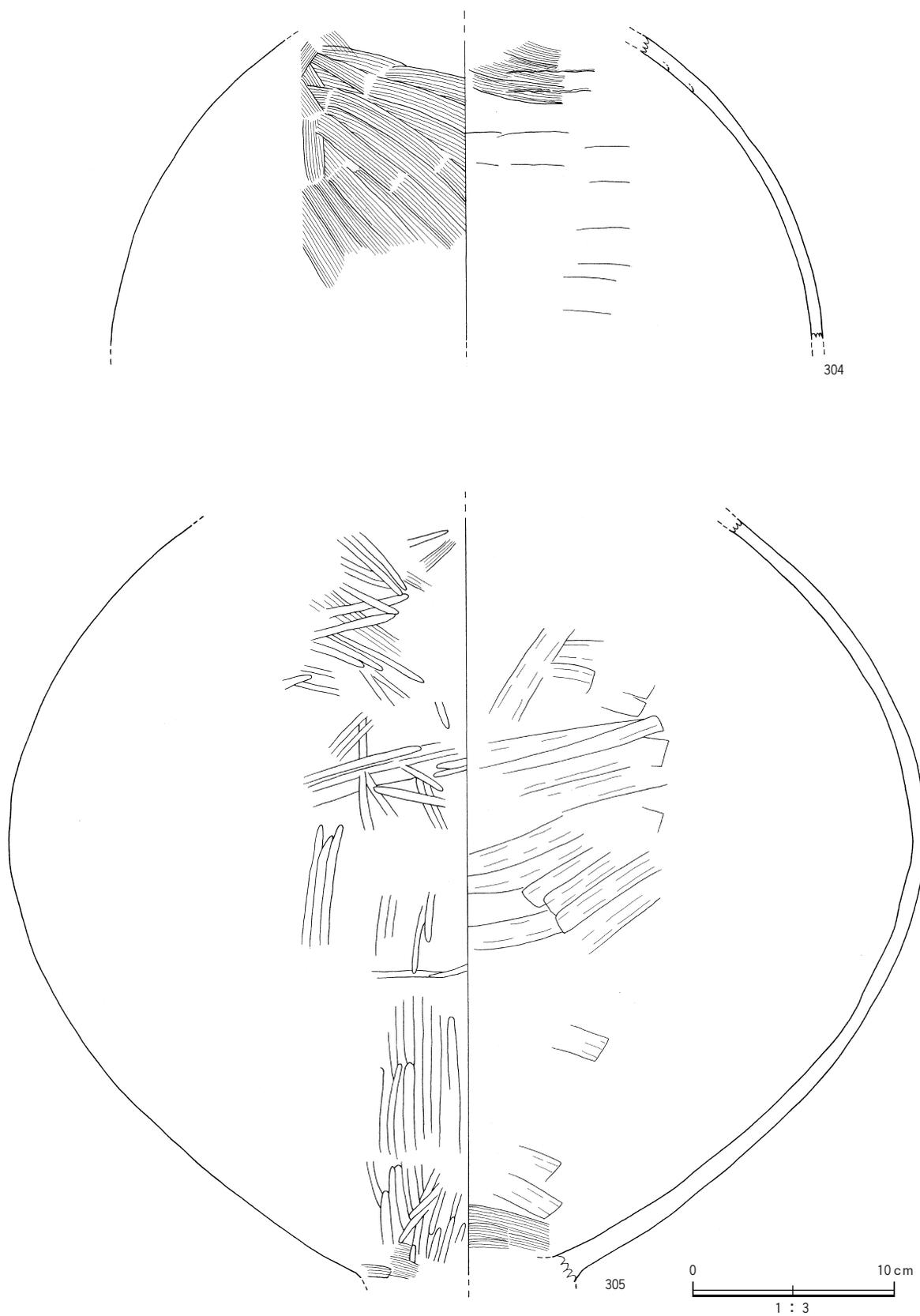
- EK1**
- 1 5Y3/1オリーブ黒砂質シルト  
2.5Y3/1黒褐色シルトを斑状に含む  
炭(φ0.3~0.5cm)を含む
  - 2 2.5Y4/1黄灰色シルト  
2.5Y4/1黄灰色粘質シルトを粒で含む  
炭(φ0.2cm)を含む
  - 3 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト  
5Y4/1灰色細砂をブロックで多く含む
  - 4 5Y3/1オリーブ黒粘質シルト  
(炭を多く含む)



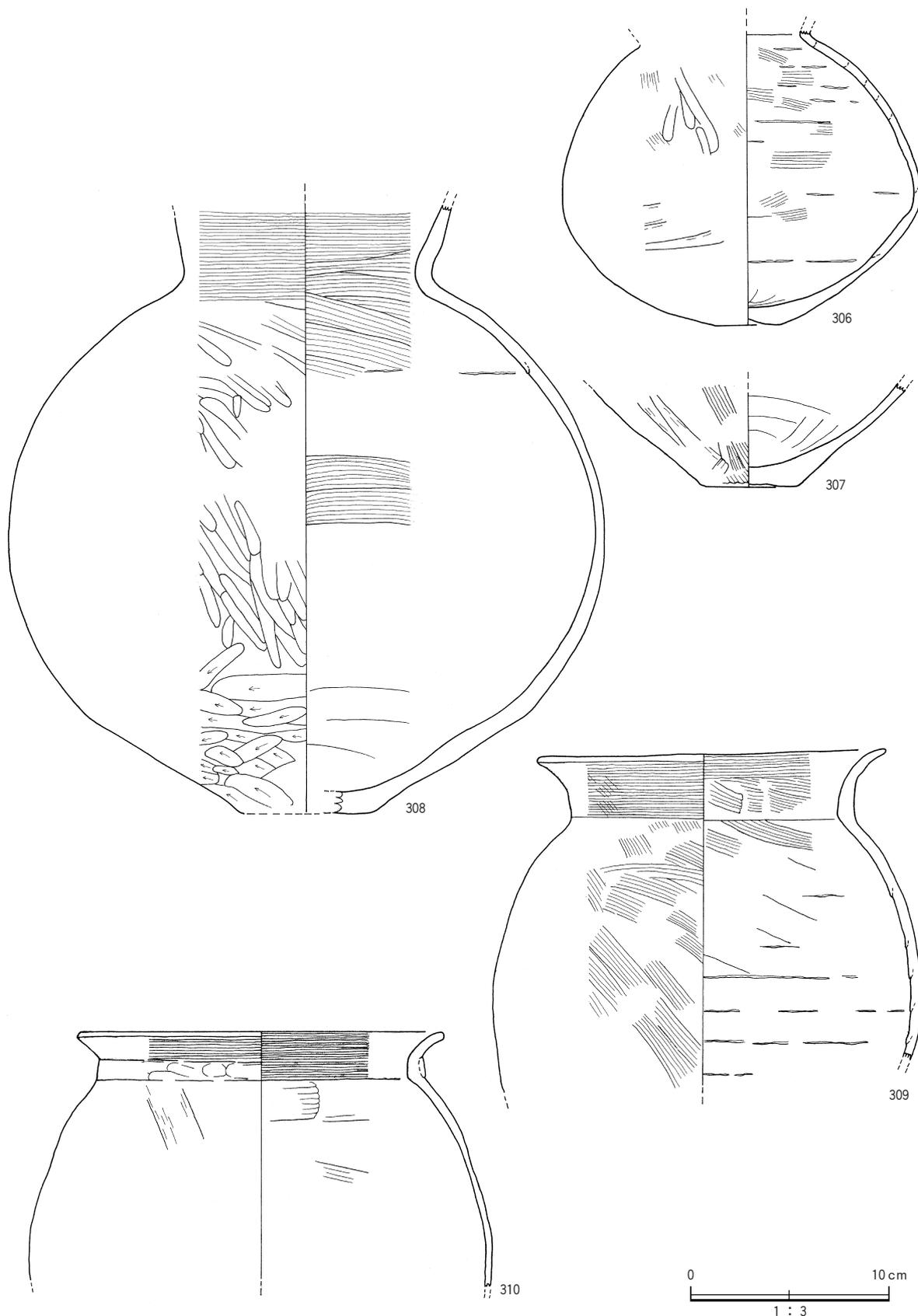
第62図 S T 211 竪穴住居跡 (2)



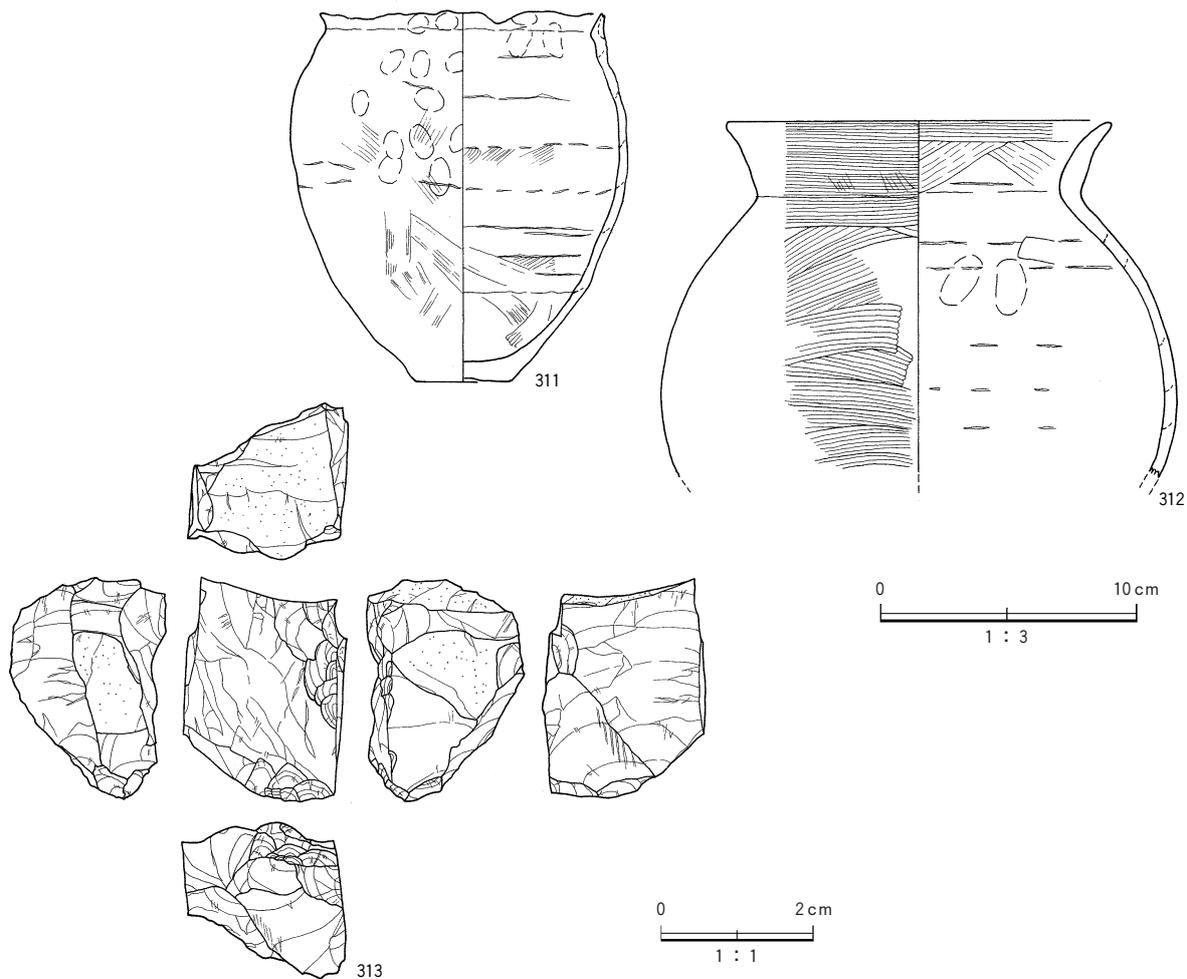
第63図 S T 211 竪穴住居跡出土遺物 (1)



第64図 S T 211 竪穴住居跡出土遺物 (2)



第65図 S T 211 竪穴住居跡出土遺物 (3)



第66図 S T 211 竪穴住居跡出土遺物 (4)

出土遺物は器台や壺、甕のほか、管玉と土製の紡錘車が出土している。

**S T 213 竪穴住居跡 (第70図)**

179・359～181・362区に位置する。平面形は北西隅が摘み出されたような方形を呈する。規模は南北軸が1.9m、東西軸は2.3mを測る。この度の調査範囲では最も小さなもので、1.5坪ほどである。主軸方向はN-6°-Eを示す。覆土は浅い1層である。

プラン検出時にグライ化した遺構面を削ったため、覆土の中央部が僅かに盛り上がった状態になってしまった。立ち上がりは失われており、床面は遺構検出面とほぼ同じレベルである。

柱穴は認められない。床面中央部に炭が遺り、焼失家屋と考えられる。床面中央やや北寄りに被熱痕跡が認められ、地床炉と考えられる。

**2. 土 坑**

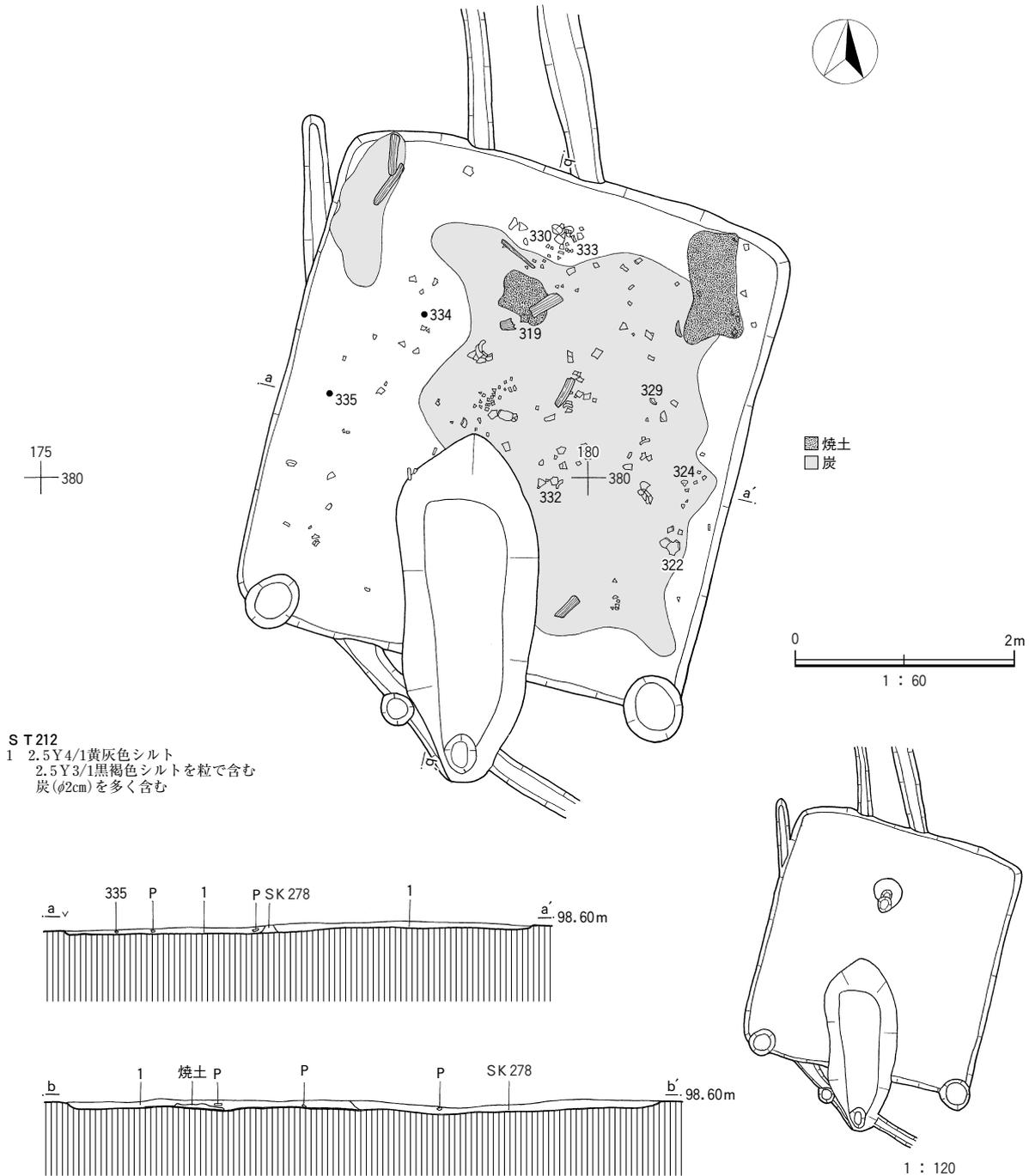
**S K 253 土坑 (第71図)**

200・344～201・345区に所在する。平面形は円形を呈する。長軸1.1m、短軸1mを測る。底部は丸く、壁面との境界が明瞭でない。遺構検出面からの深さは約35cmで、覆土は1層であ

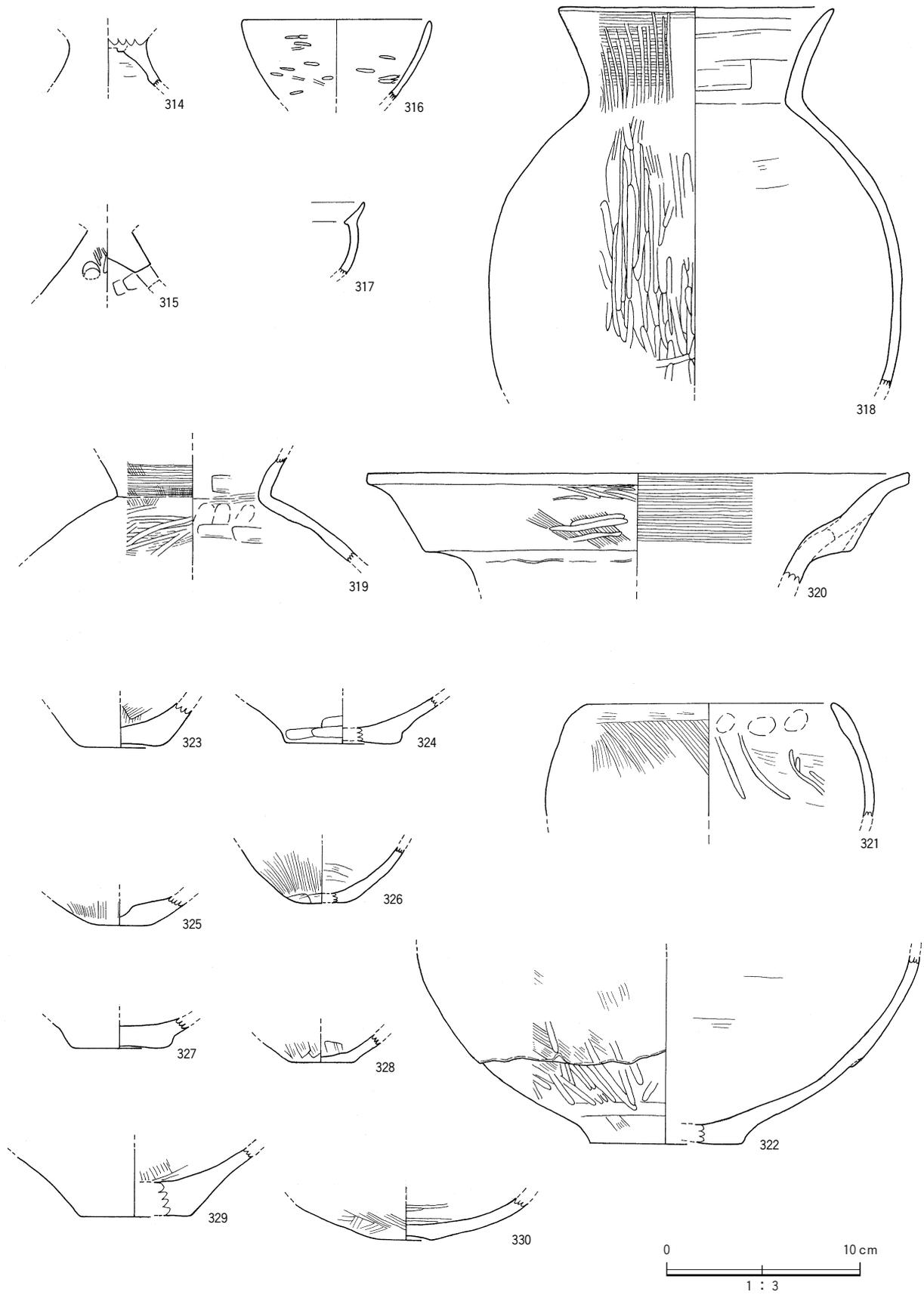
る。覆土中から直口壺の体部（336）が出土している。

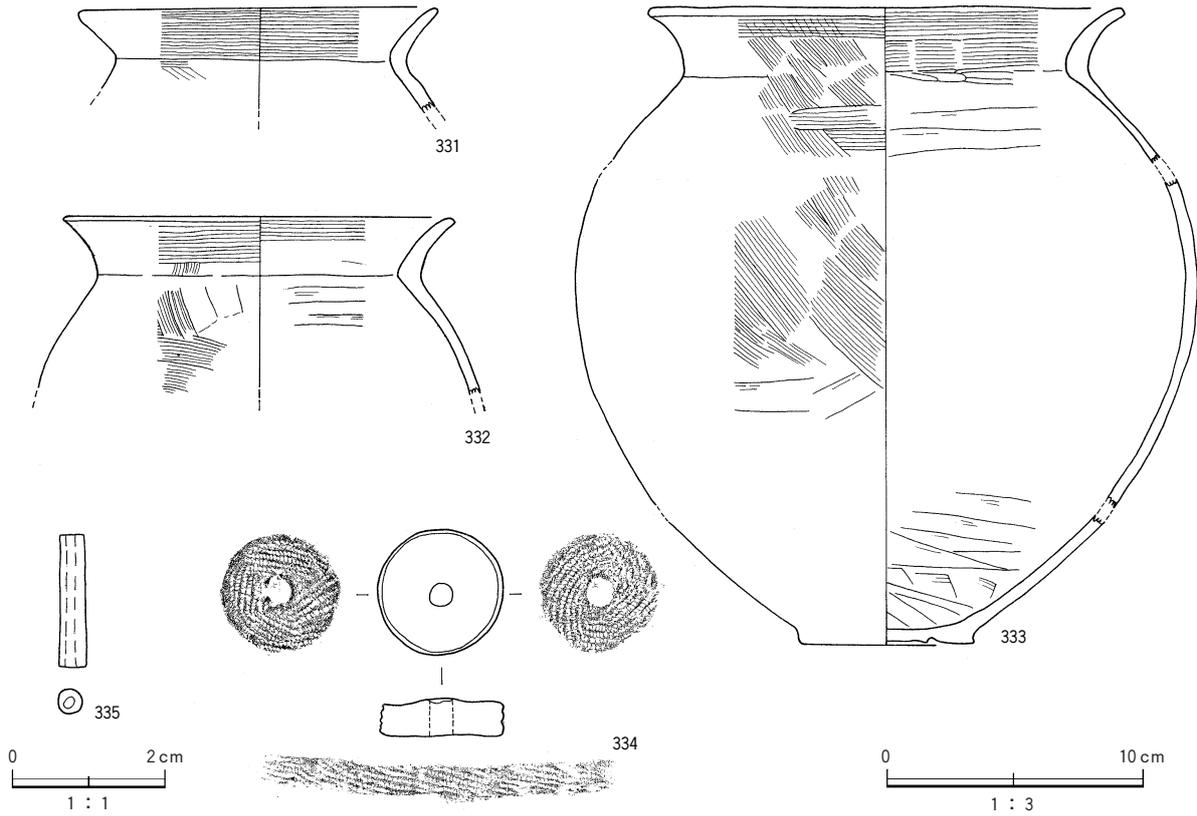
**S K 255土坑（第71図）**

185・366～187・368区に所在する。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長軸約2m、短軸1.3mを測る。底面は浅い皿状を呈し、遺構検出面からの深さは約10cmを測る。覆土は4層で、最下層の炭層には土器片が含まれる。

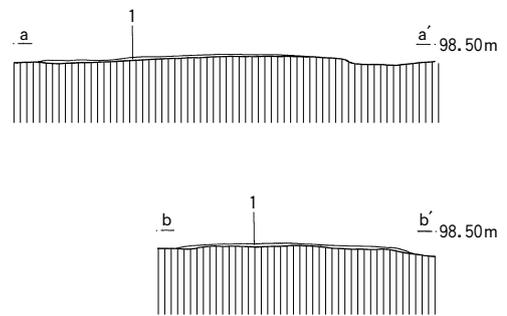
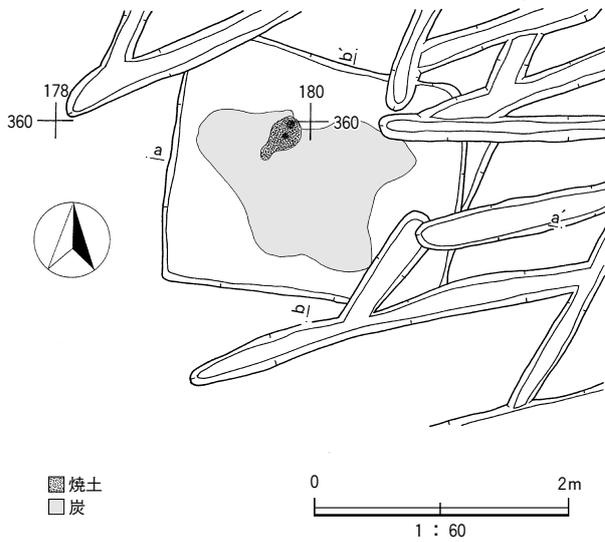


第67図 S T 212竪穴住居跡





第69図 S T 212 竪穴住居跡出土遺物 (2)

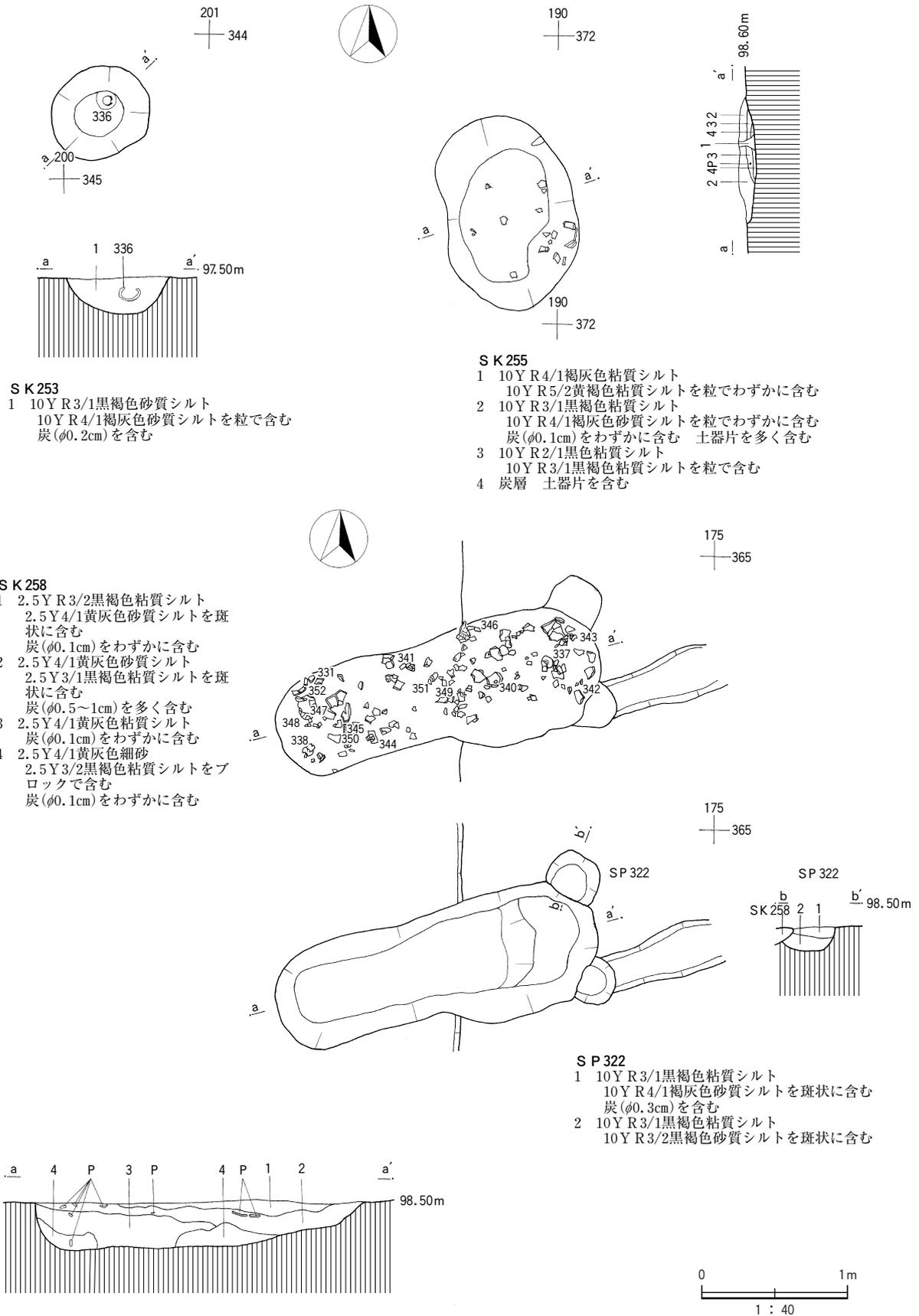


S T 213  
 1 10Y R 4/1 褐灰白色粘質シルト  
 10Y R 5/2 灰黄褐色砂質シルトを斑状に含む  
 炭(φ0.5cm)を含む

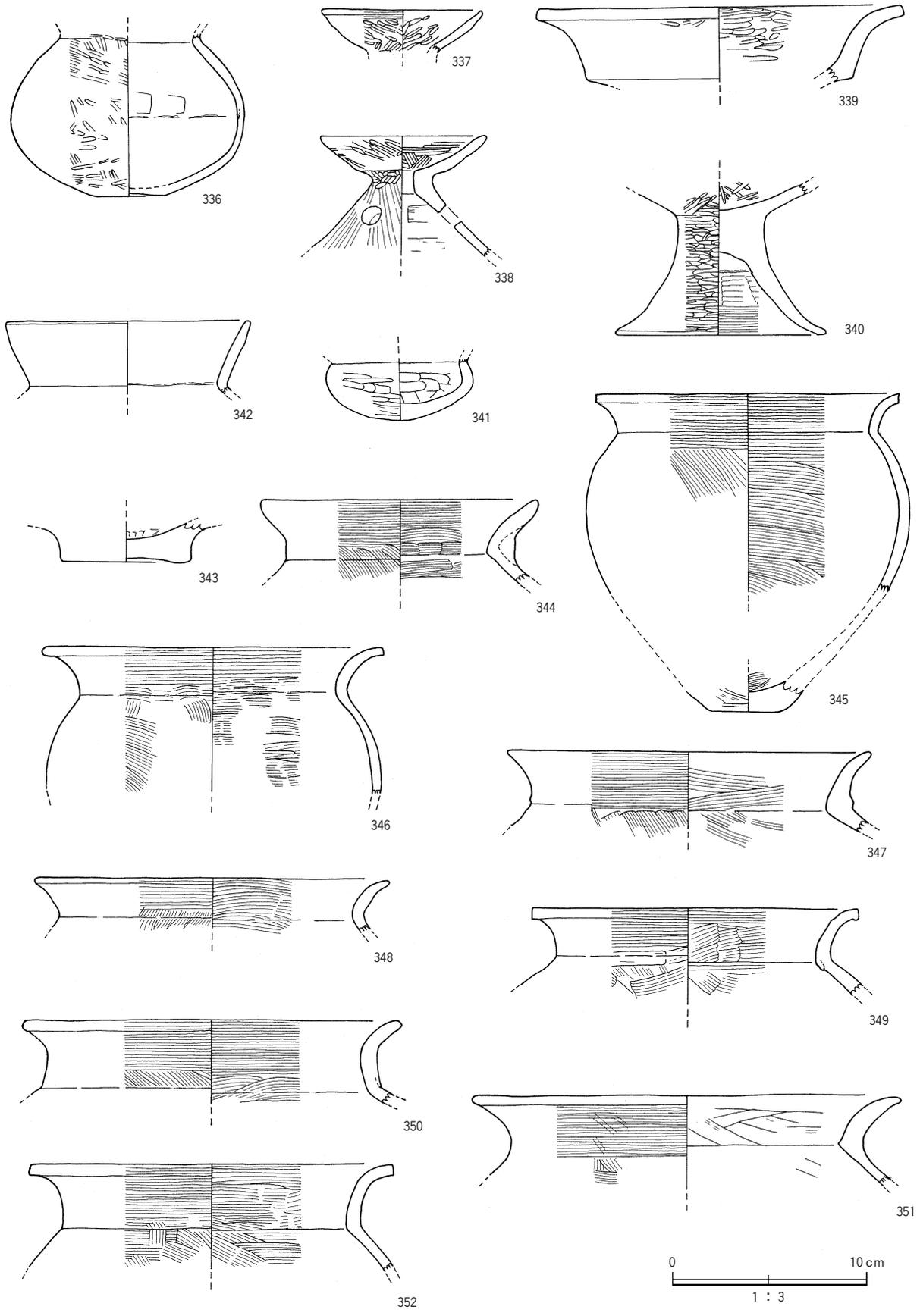
第70図 S T 213 竪穴住居跡

S K 258 土坑 (第71図)

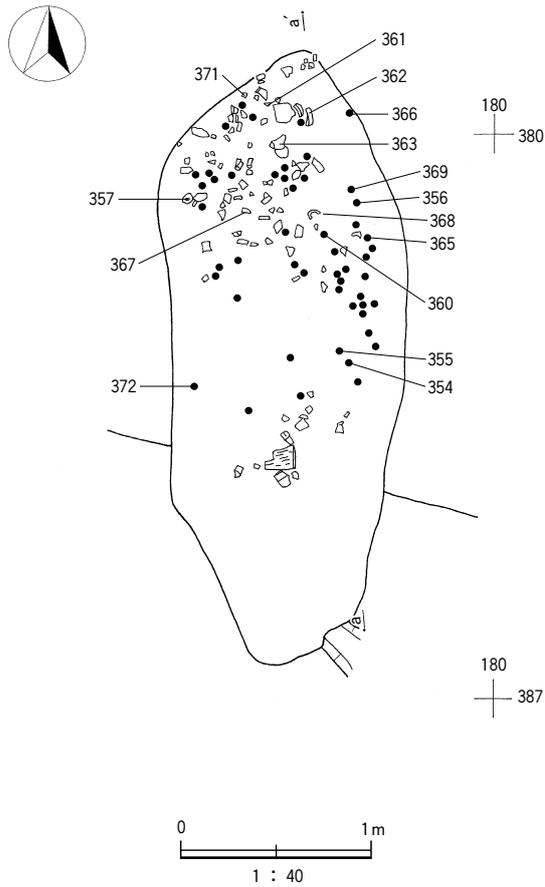
172・365～175・367区に所在する。S T 205 竪穴住居跡の埋没後に構築されたものである。東側でS P 322などのピットを切っている。平面形は、ほぼ東西に長い長円形を呈する。長軸3.4m、短軸1～1.3mを測る。底面は東寄りで段を形成し、西に深くなる。底面形状は緩い丸底を呈する。遺構検出面からの深さは浅いところで約20cm、深いところで約50cmを測る。覆土



第71図 S K 253・255・258土坑

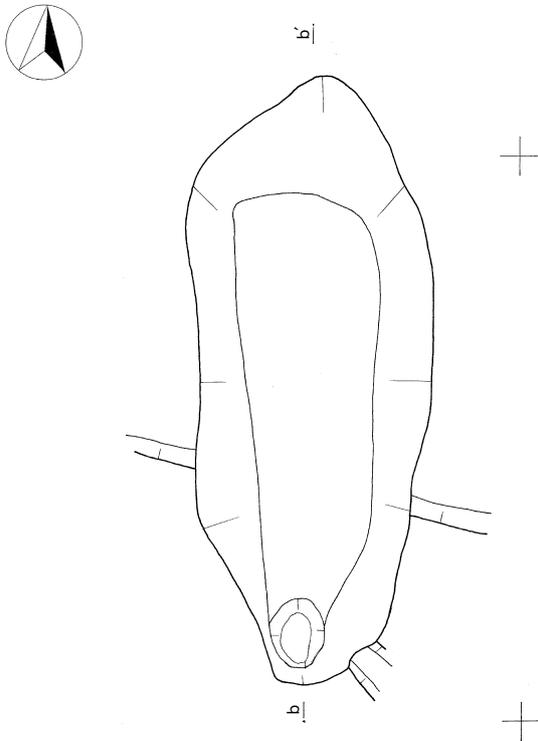


第72図 S K 253・258土坑出土遺物

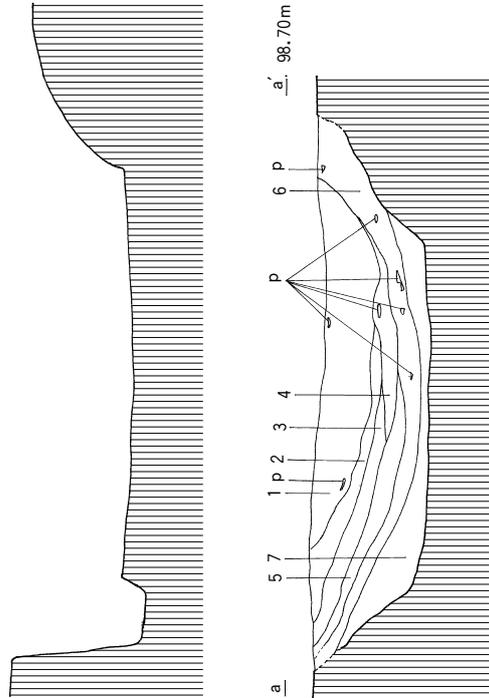


S K278

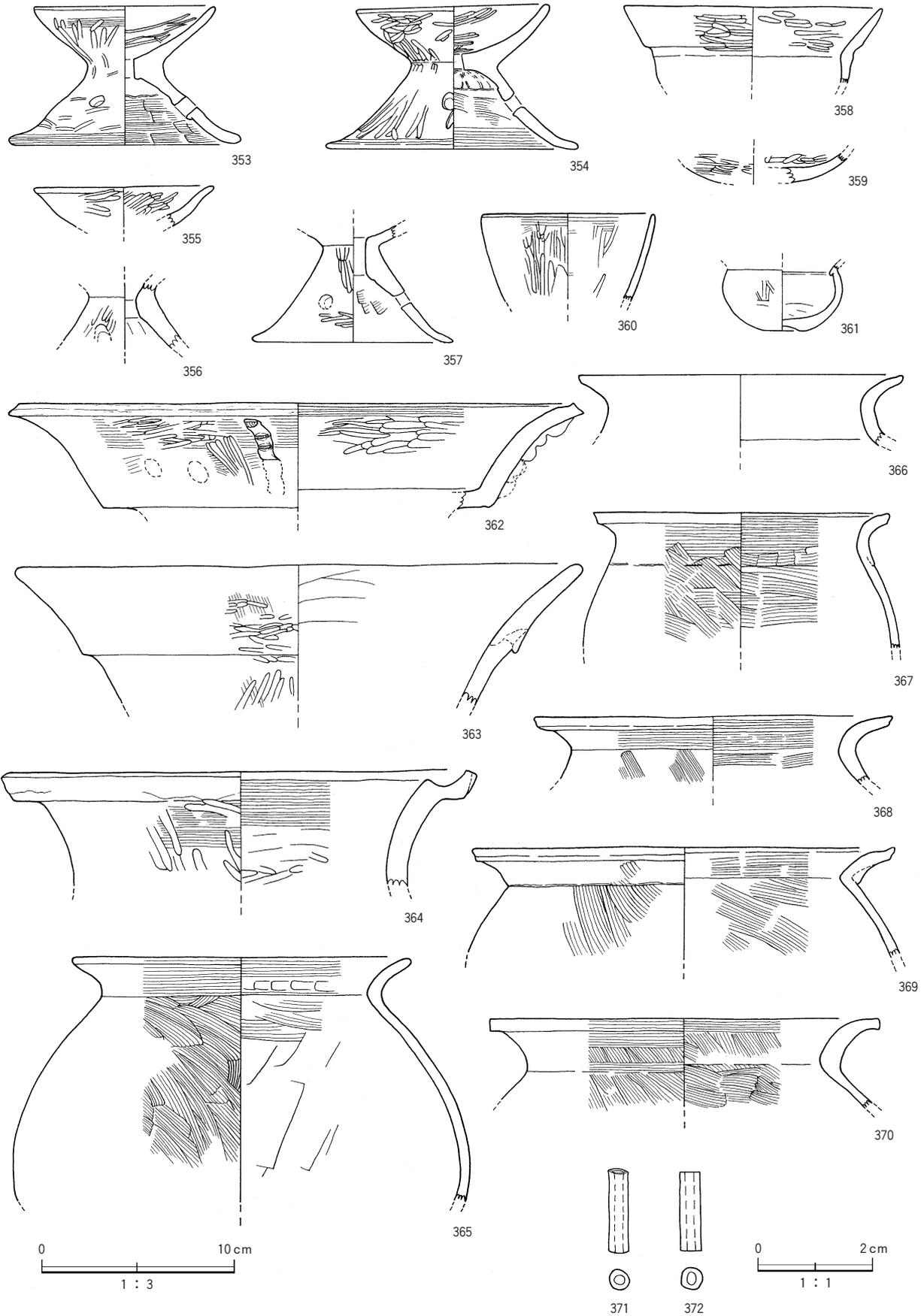
- 1 2.5Y3/1黒褐色砂質シルト  
2.5Y4/1黄灰色砂質シルトを粒で含む  
炭(φ0.3~0.8cm)を多く含む
- 2 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト  
炭(φ0.1cm)をわずかに含む
- 3 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト  
2.5Y4/1黄灰色砂質シルトを斑状に含む  
炭(φ0.2~0.5cm)を多く含む
- 4 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト  
2.5Y3/2黒褐色粘質シルトを粒で含む  
2.5Y5/1黄灰色粘土ブロック(φ1cm)を  
わずかに含む  
炭(φ0.5~1cm)を多く含む
- 5 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト  
2.5Y4/1黒褐色砂質シルトを斑状に含む  
炭(φ0.5cm)をわずかに含む
- 6 7.5Y3/1オリーブ黒粘質シルト  
5Y3/2オリーブ黒砂質シルトを斑状に含む  
炭(φ0.5~1cm)を含む
- 7 7.5Y2/1黒色粘質シルト  
7.5Y4/1灰白色砂質シルトが混在する  
炭(φ0.3cm)をわずかに含む



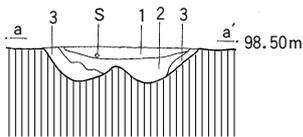
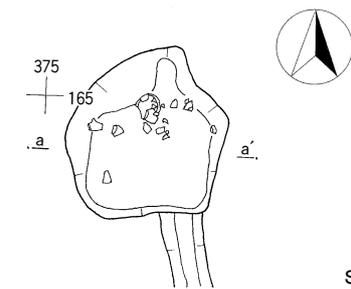
b.i 98.70m



第73図 S K278土坑

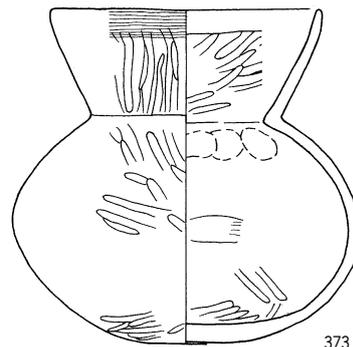


第74図 S K 278土坑出土遺物



**SK 304**

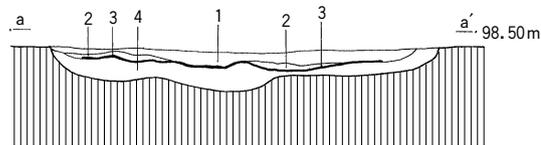
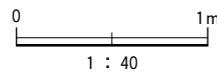
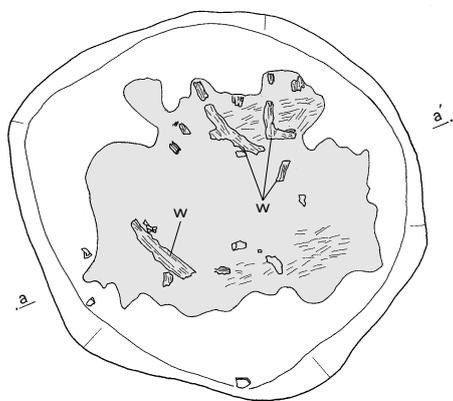
- 1 10Y R 3/2黒褐色粘質シルト  
10Y R 4/2灰黄褐色砂質シルト  
炭(φ0.2~0.8cm)をわずかに含む
- 2 10Y R 3/2黒褐色粘質シルト  
10Y R 4/2灰黄褐色砂質シルト  
炭(φ0.2~0.8cm)をわずかに含む。土器片を含む
- 3 10Y R 3/2黒褐色粘質シルト  
10Y R 4/2灰黄褐色砂質シルトを斑状に含む  
炭(φ0.2cm)をわずかに含む



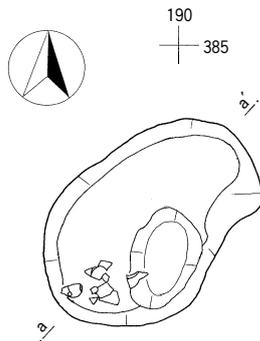
**SK 318**

- 1 2.5 Y 4/1黄灰色粘質シルト  
2.5 Y 5/2暗灰黄色砂質シルトを斑状に含む  
炭(φ0.2~0.5cm)をわずかに含む
- 2 2.5 Y 5/2暗灰黄色粘質シルト  
炭(φ0.2~0.5cm)を多く含む
- 3 炭層(ワラ状炭化物や炭化材)
- 4 2.5 Y 4/1黄灰色粘質シルト  
2.5 Y 5/1黄灰色砂質シルトを斑状に含む  
炭(φ0.2cm)をわずかに含む

185  
365



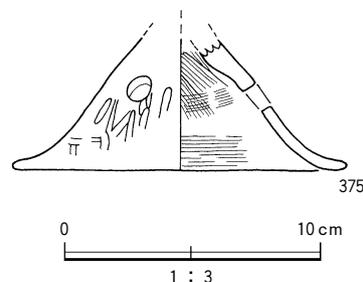
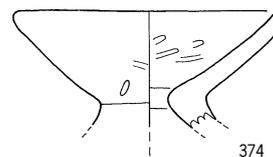
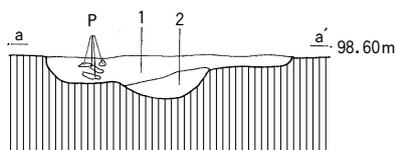
■炭



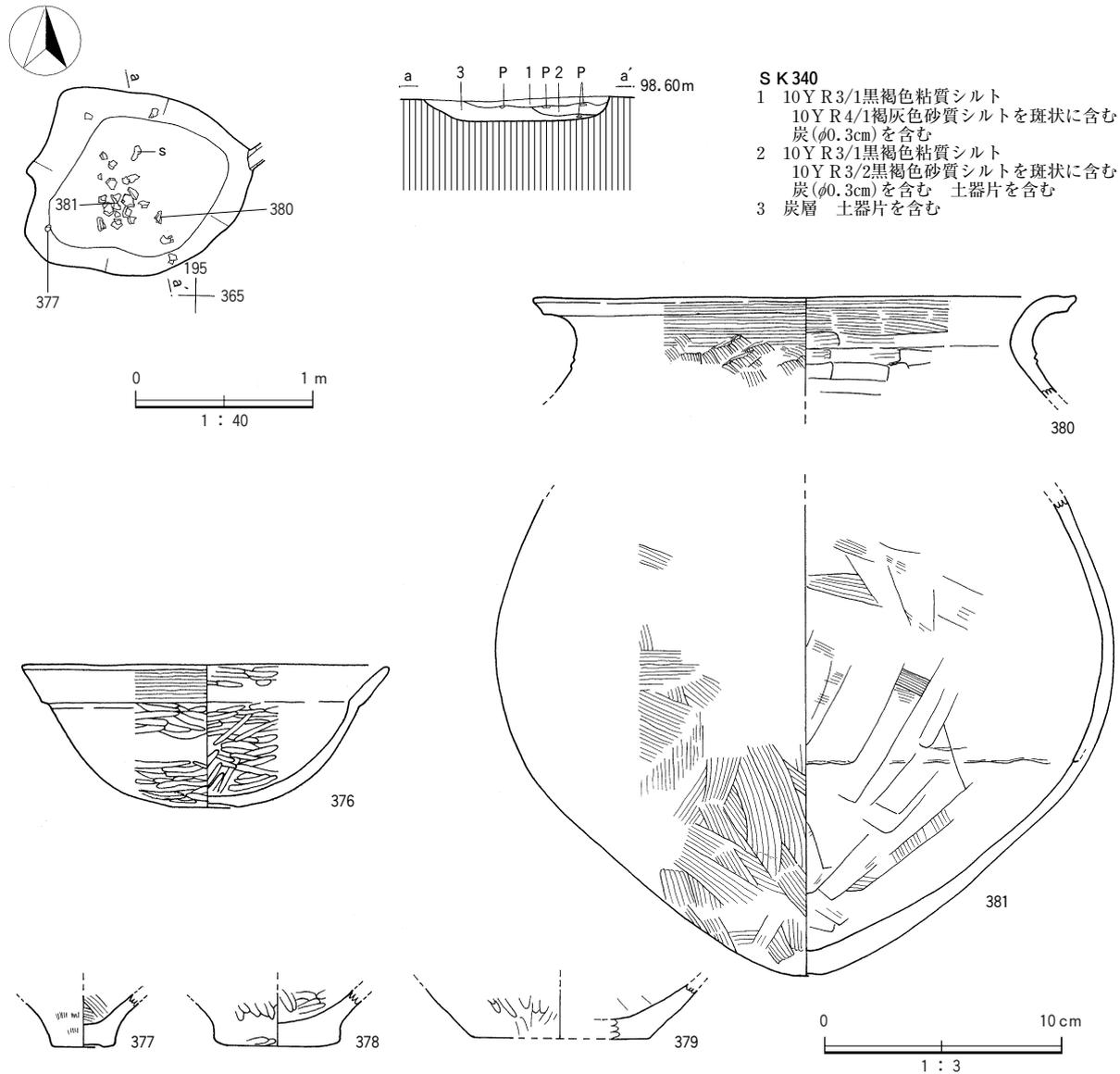
190  
387

**SK 337**

- 1 10Y R 4/1褐灰色砂質シルト  
10Y R 3/1黒褐色粘質シルトを斑状に含む
- 2 10Y R 4/1黒褐色粘質シルト  
10Y R 4/1褐灰色砂質シルトを斑状に含む  
炭(φ1cm)を含む



第75図 SK 304・318・337土坑及び同出土遺物



第76図 S K 340土坑及び同出土遺物

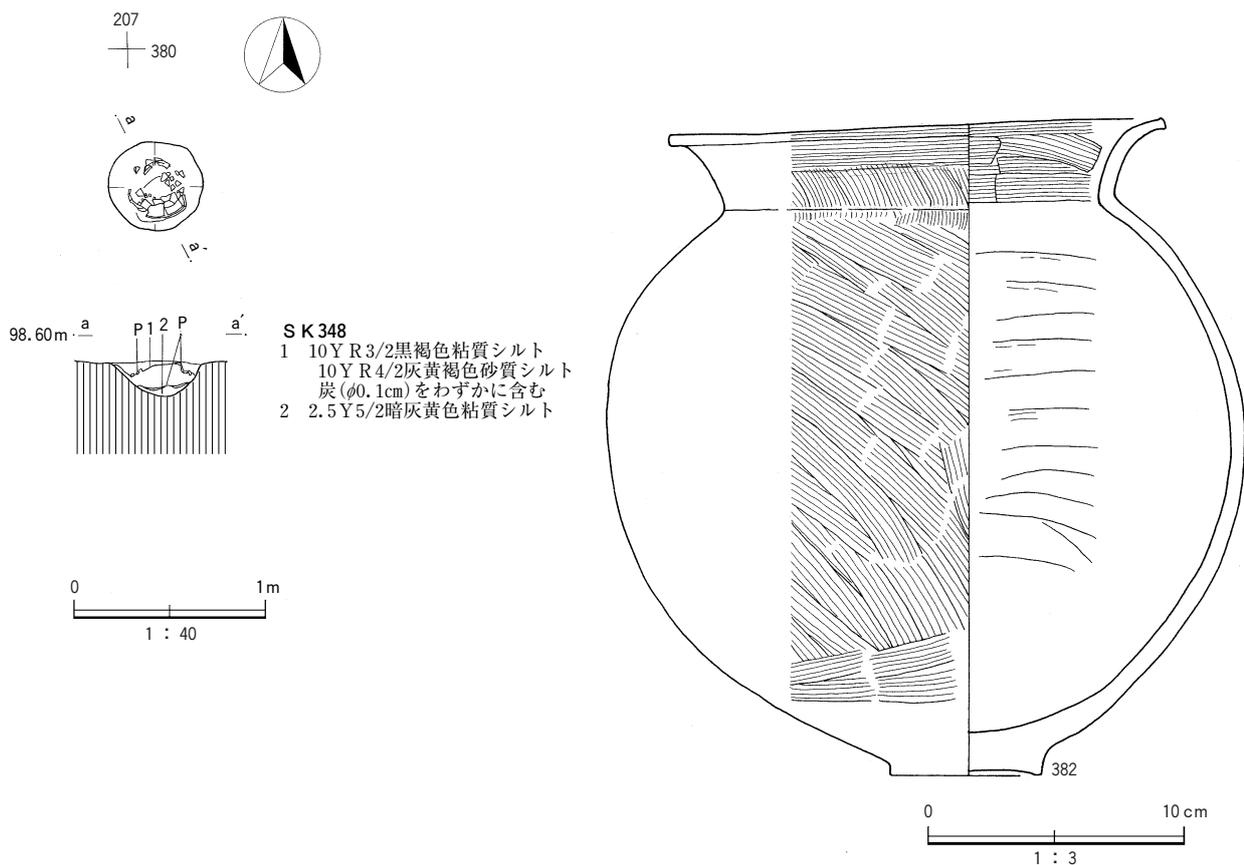
は4層で、覆土中に土器片を多く含む。出土遺物は器台、高坏、鉢、壺、甕などがある。

**S K 278土坑 (第73図)**

178・379~180・383区に所在する。S T 212竪穴住居跡の埋没後に構築されたものである。平面形は南北に長い楕円状を呈する。長軸4.9m、短軸1.8mを測る。底面は平坦であるが、南端の壁面に接して、南北55cm、東西44cmのピットがある。このピットの機能は不明である。遺構検出面からの深さは約80cmを測る。覆土は7層で、覆土中に土器片を多く含む。出土遺物は器台、鉢、壺甕などのほか、管玉が2点出土している。

**S K 304土坑 (第75図)**

164・374~166・375区に所在する。平面形は円形と方形を融合させたような不整形を呈し、僅かに南北が長い。長軸1.3m、短軸1.2mを測る。底面は凹凸があり、丸底を2つ連ねたような形状を呈する。遺構検出面からの深さは約30cmを測る。覆土は3層で、覆土中から壺(373)



第77図 S K 348土坑及び同出土遺物

が出土している。

**S K 318土坑** (第75図)

186・363～189・366区に所在する。S D 260溝跡の埋没後に構築されたものである。平面形は幾分南北に長い円形を呈する。長軸3.3m、短軸3.1mを測る。底面は平坦であるが幾分起伏が認められる。遺構検出面からの深さは最深部で約30cmを測る。覆土は炭化物層を含めて4層である。中央部に炭層があり、炭化部材やワラ状炭化物が遺っていた。

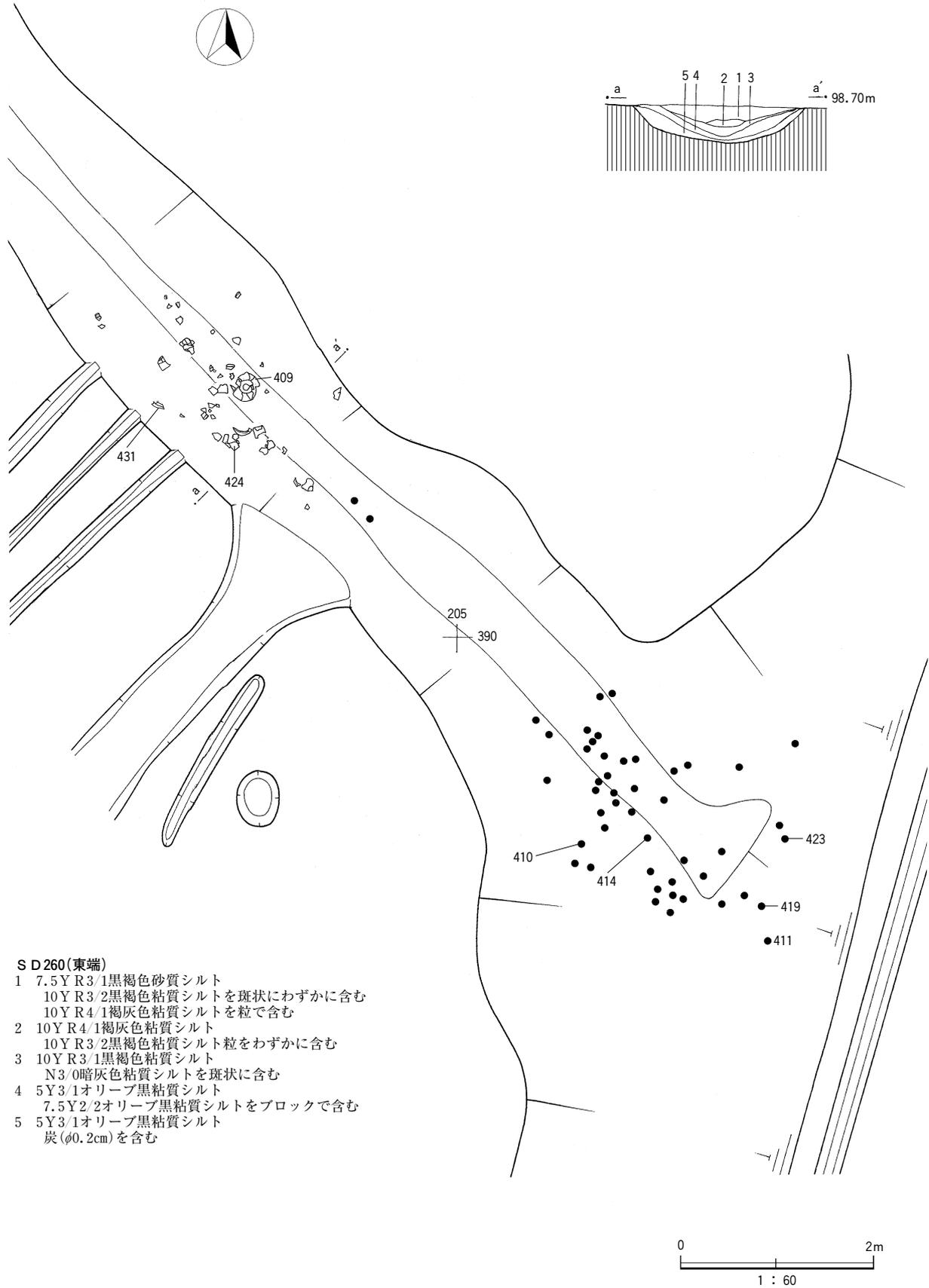
出土遺物は破片のみで、図化し得たものはない。

**S K 337土坑** (第75図)

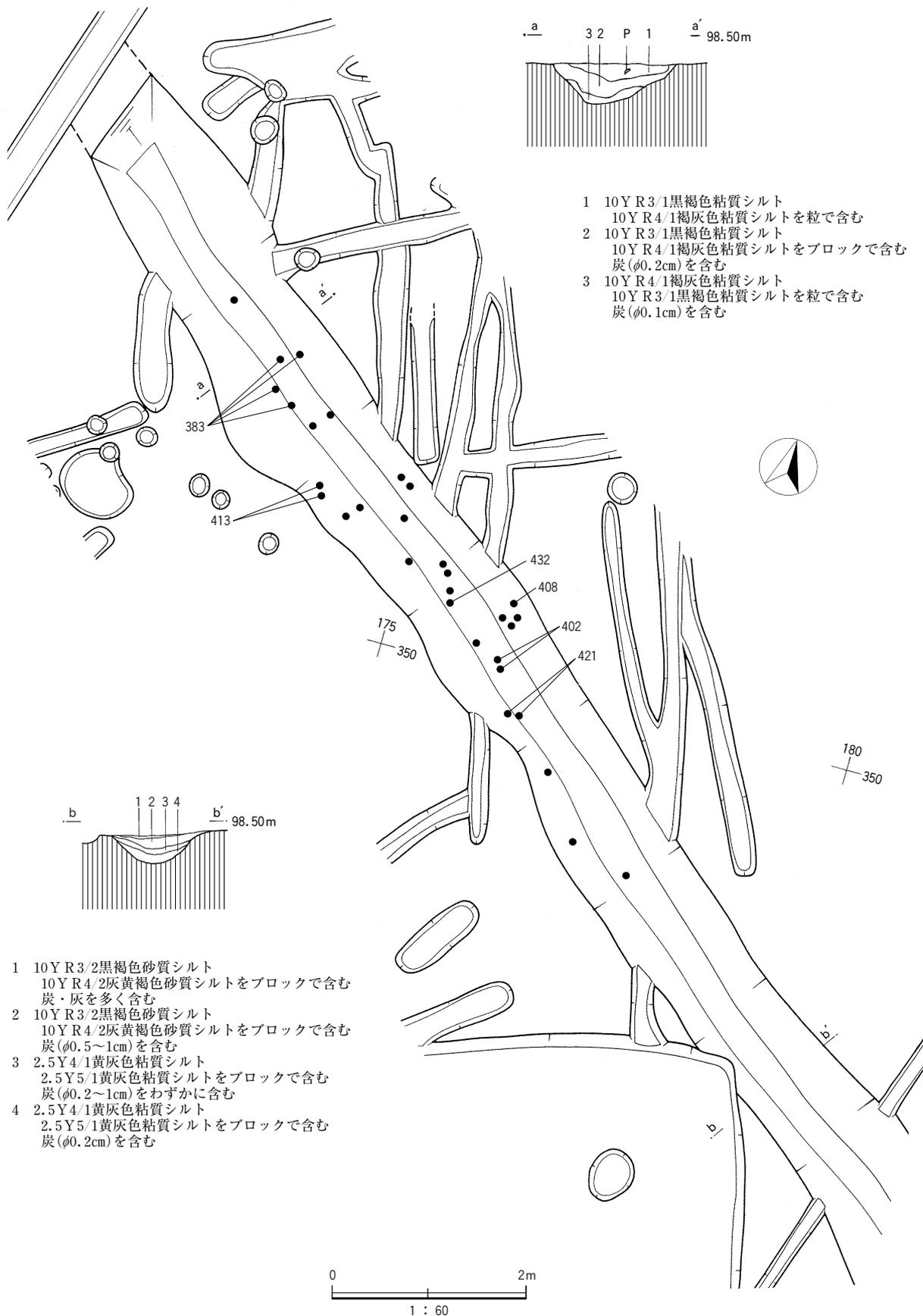
189・385～190・387区に所在する。平面形は北東から南西方向に長い楕円形を呈する。長軸2m、短軸1.3mを測る。底面は南西に深くほぼ平坦であるが、南側壁に接して長軸80cm、短軸50cmほどの窪みが認められる。遺構検出面からの深さは約20cmを測るが、窪みの底部までの深さは35cmほどある。覆土は2層で、覆土中から器台が出土している。

**S K 340土坑** (第76図)

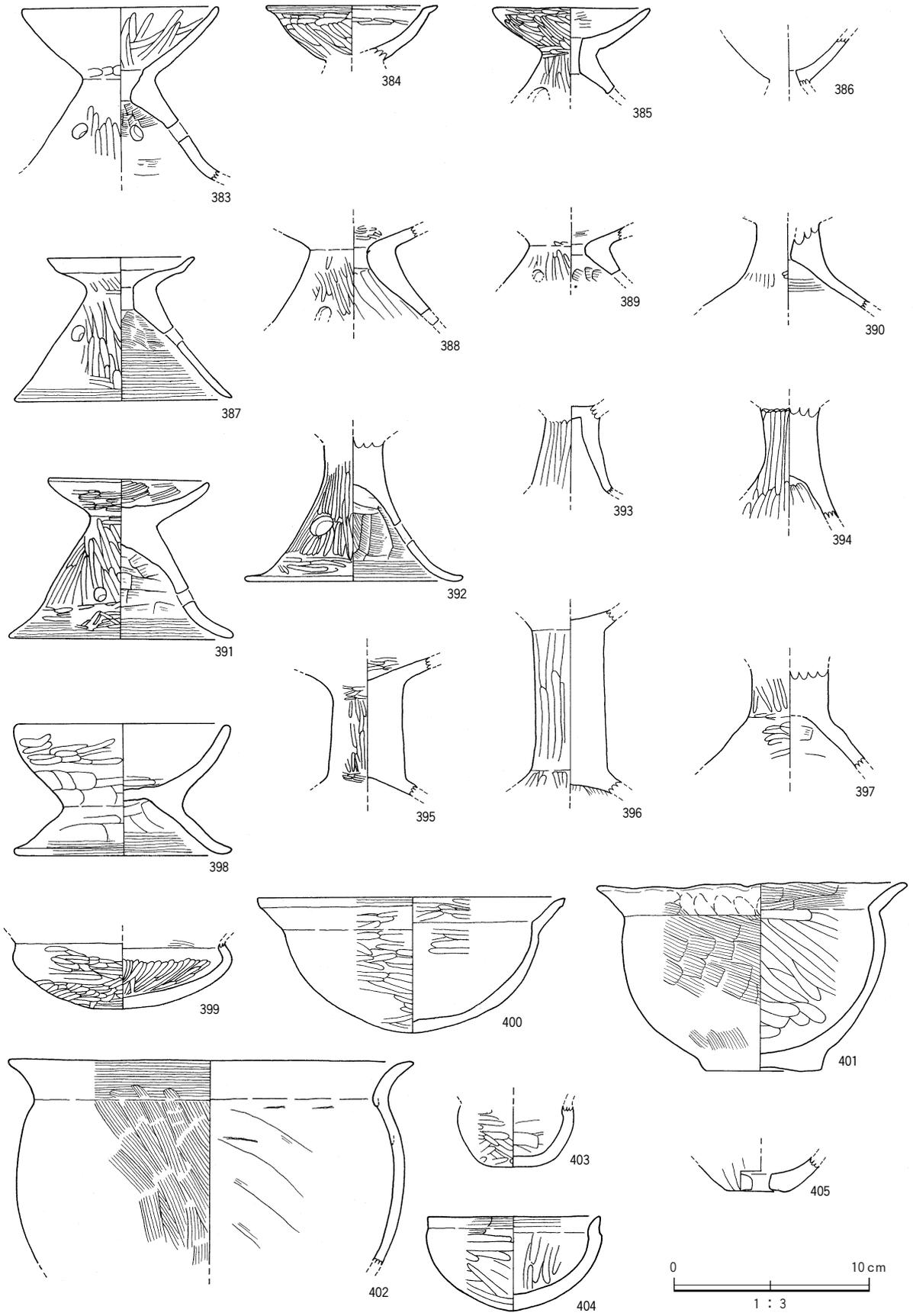
193・363～196・365区に所在する。平面形は、方形と円形を融合させたような不整形を呈する。東西軸、南北軸がともに1.7mを測る。底面は平坦で緩く立ち上がる。遺構検出面からの深さは約20cmを測る。覆土は3層で、覆土中に土器片を含む。出土遺物は鉢、甕、壺の底部などがある。



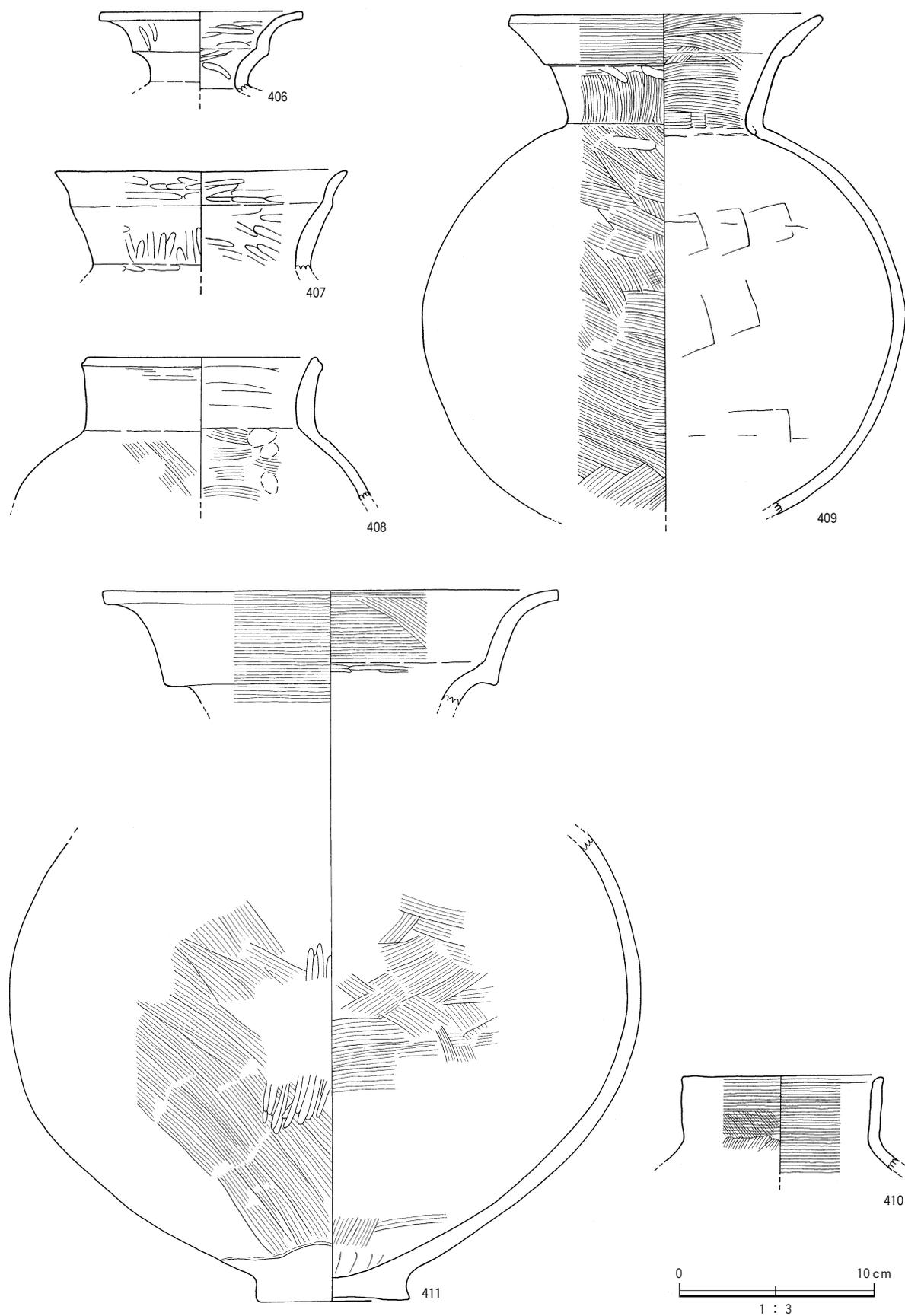
第78図 S D 260溝跡 (南東部)



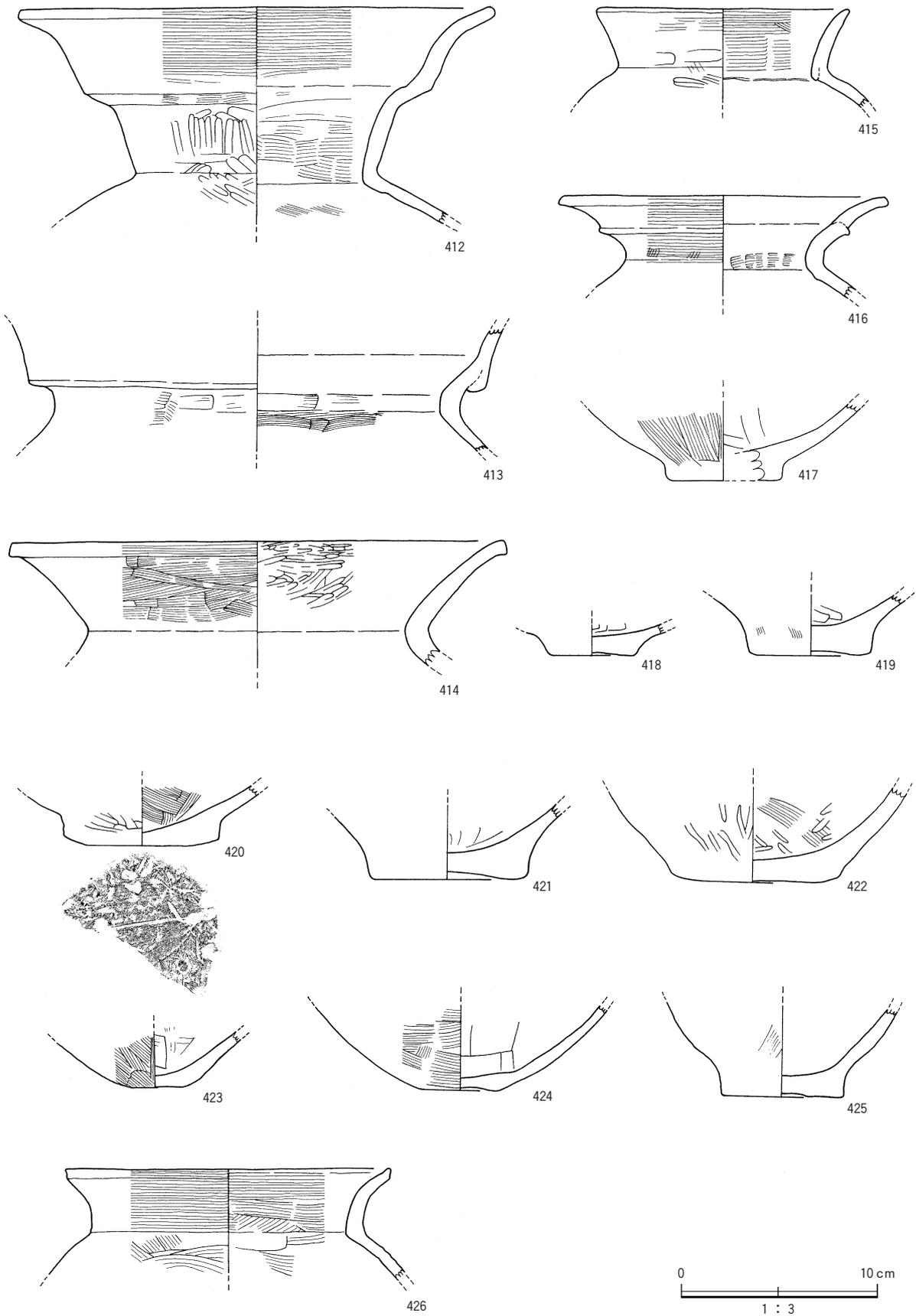
第79図 S D 260溝跡 (北西部)



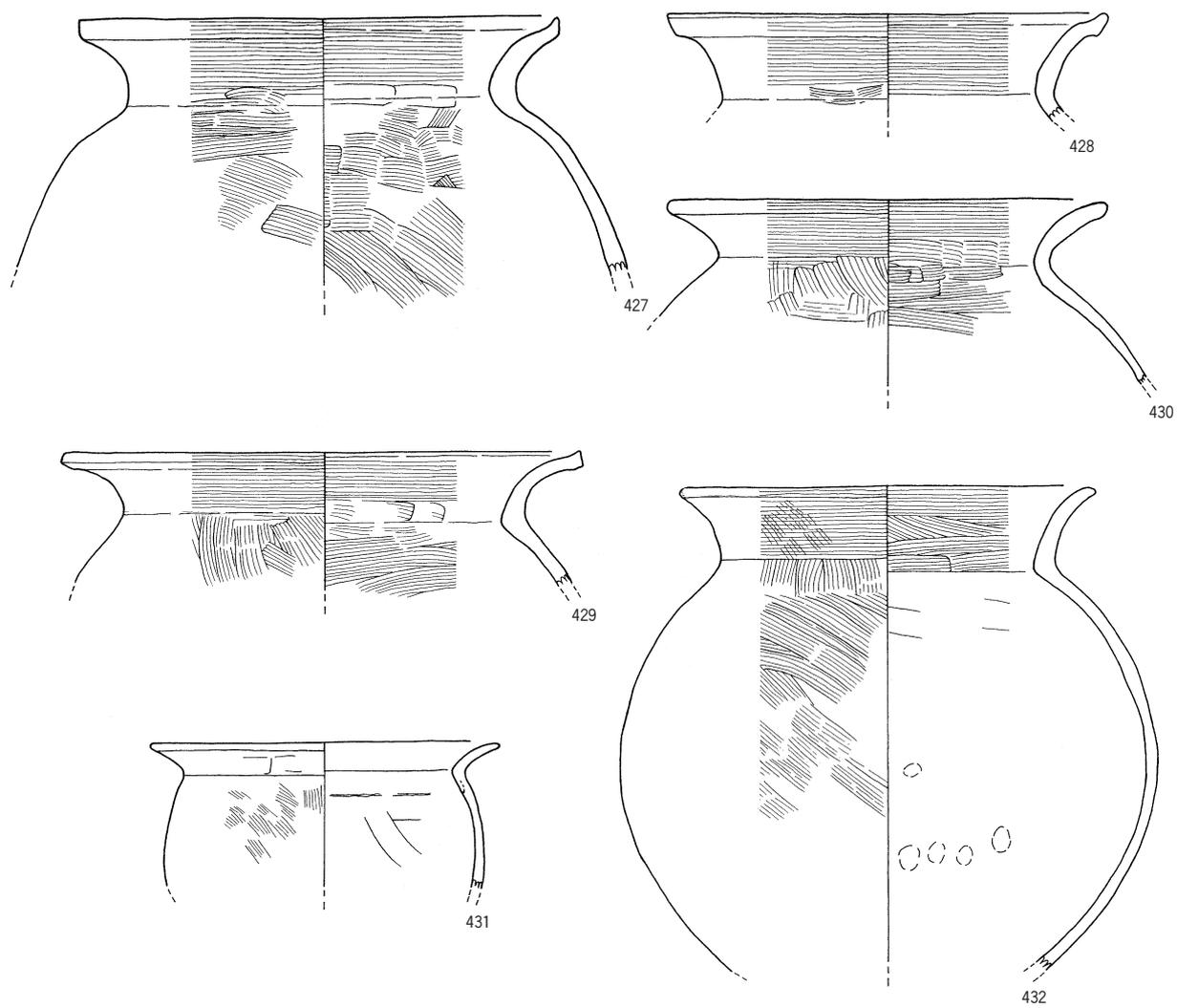
第80図 S D 260清跡出土遺物 (1)



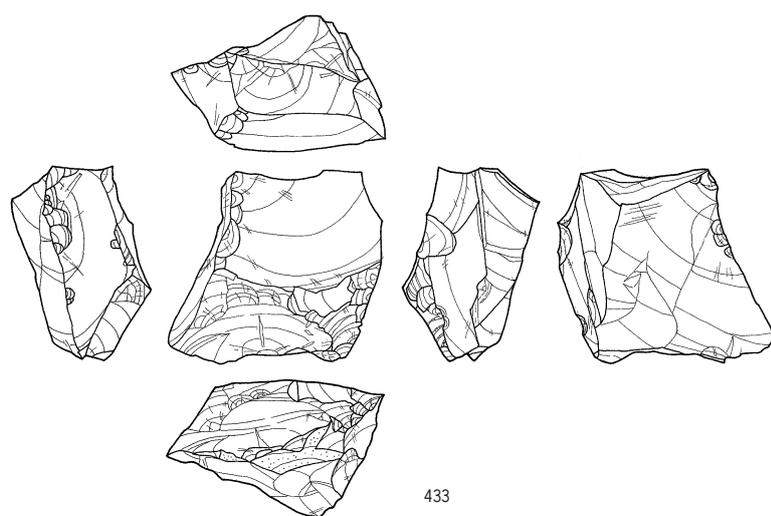
第81図 S D260清跡出土遺物(2)



第82図 S D260清跡出土遺物 (3)



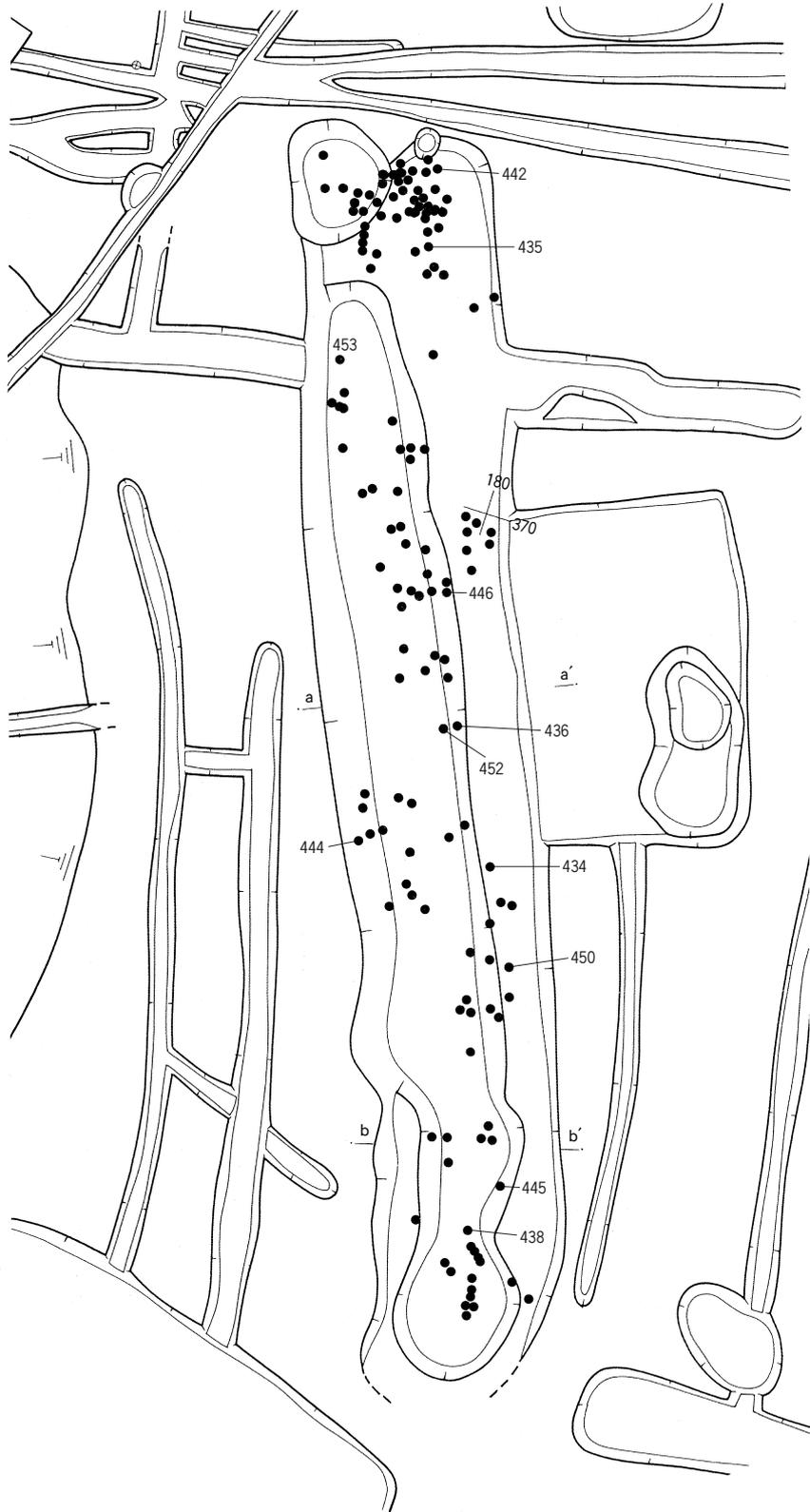
0 10 cm  
1 : 3



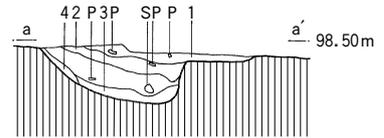
433

0 2 cm  
1 : 1

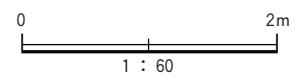
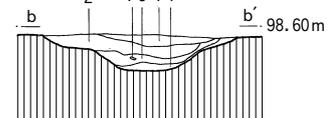
第83図 S D260溝跡出土遺物(4)



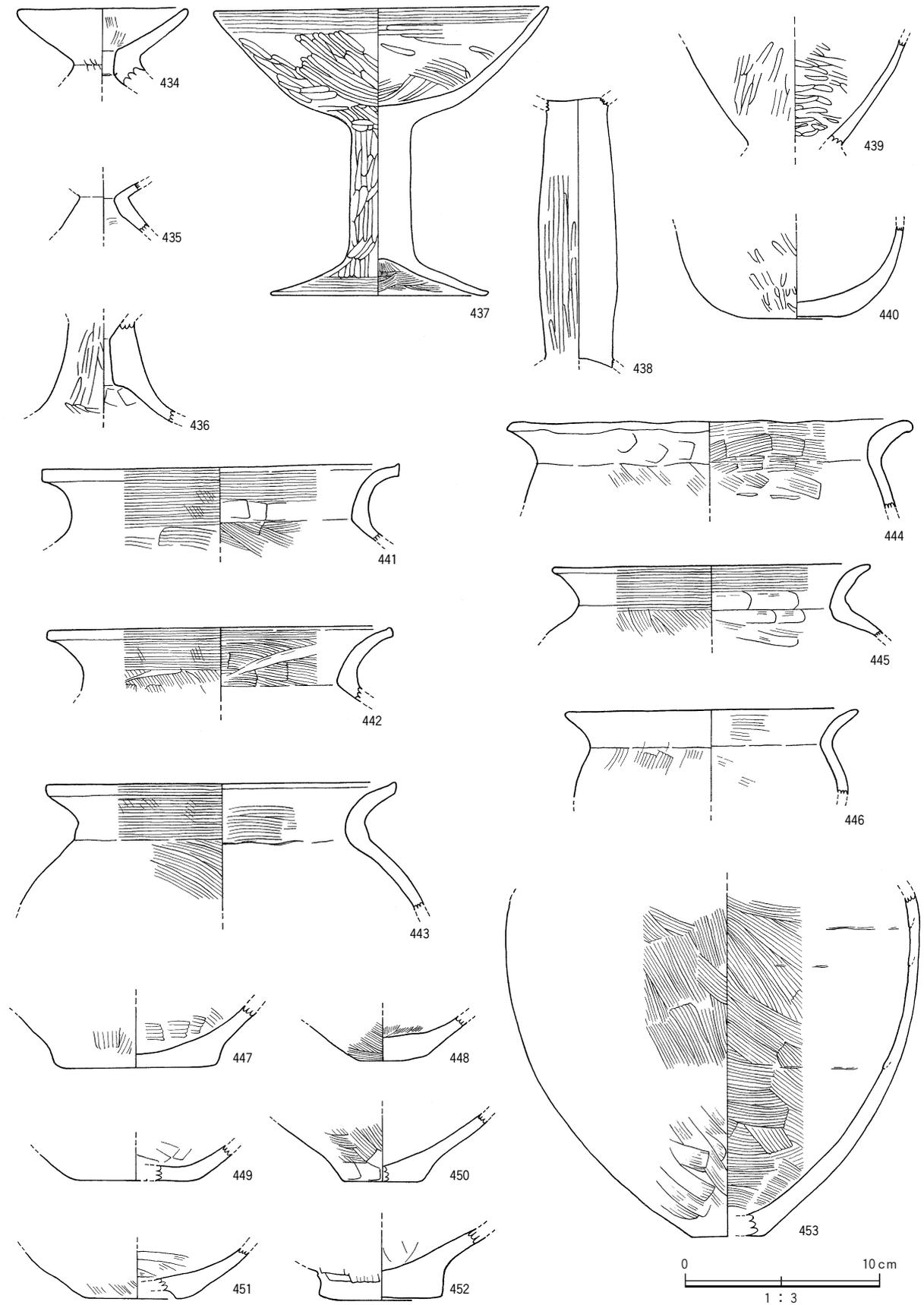
- 1 10Y R3/1黒褐色粘質シルト  
10Y R3/1黒褐色砂質シルトを  
斑状に含む  
炭(φ1cm)を多く含む
- 2 5Y3/1オリーブ黒粘質シルト  
5Y4/1灰色微砂を斑状に含む  
炭(φ0.2~0.5cm)を斑状に含む
- 3 10Y3/2オリーブ黒粘質シルト  
2.5Y4/1黄灰色粘質シルトを斑  
状に含む
- 4 5Y3/1オリーブ黒粘質シルト  
5G Y3/1暗オリーブ灰砂質シル  
トをすじ状に含む  
水を含んでやわらかい



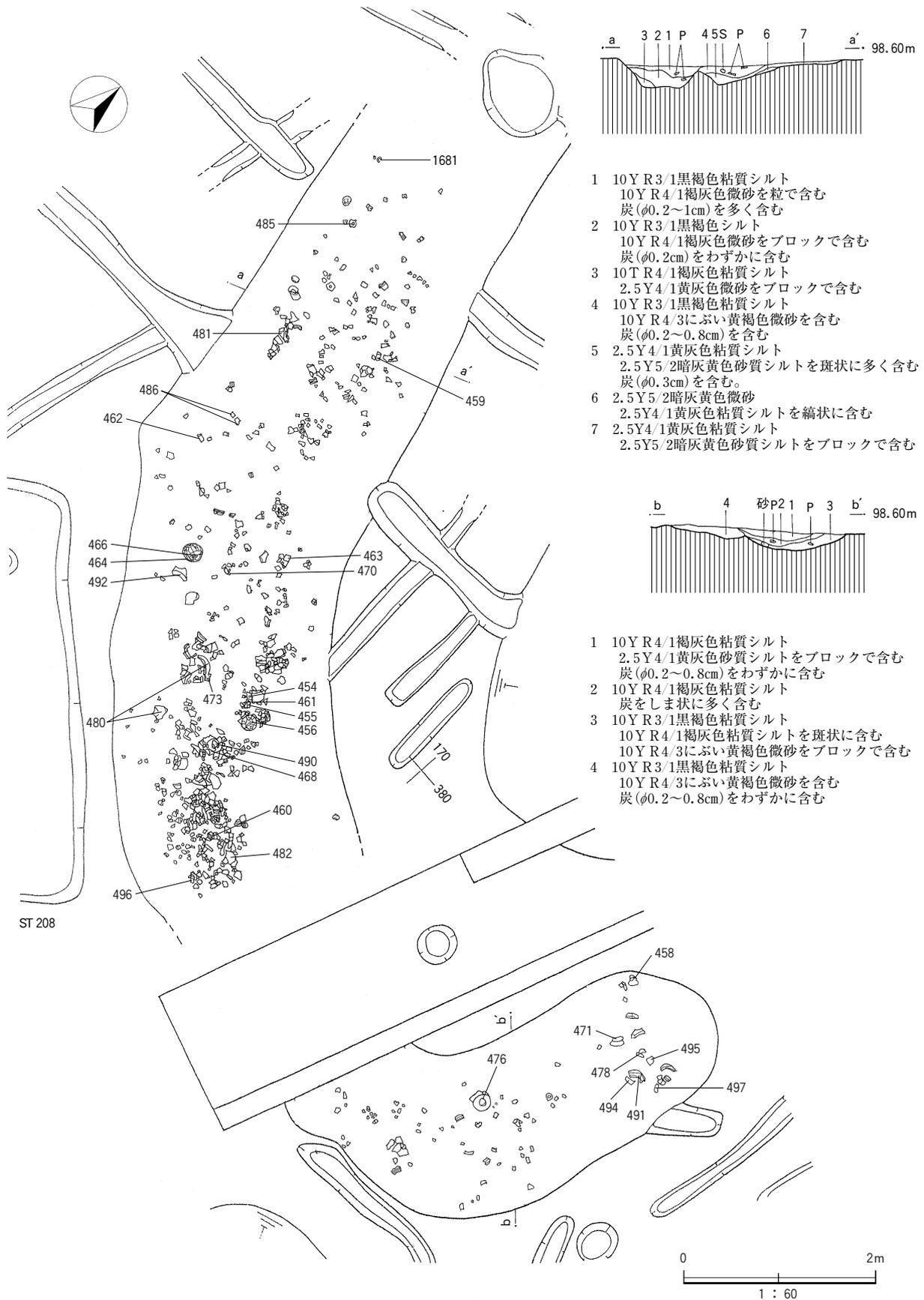
- 1 10Y R3/1黒褐色粘質シルト  
10Y R3/1黒褐色砂質シルトを  
斑状に含む  
炭(φ1cm)を多く含む
- 2 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト  
10Y R4/1褐灰色砂質シルトを  
斑状に含む  
炭(φ0.1cm)を含む
- 3 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト  
10Y R4/1褐灰色砂質シルトを  
斑状に含む  
炭(φ0.1cm)を含む
- 4 10Y R4/1褐灰色粘質シルト  
2.5Y3/1黒褐色粘質シルトを斑  
状に含む  
炭(φ0.1cm)を含む



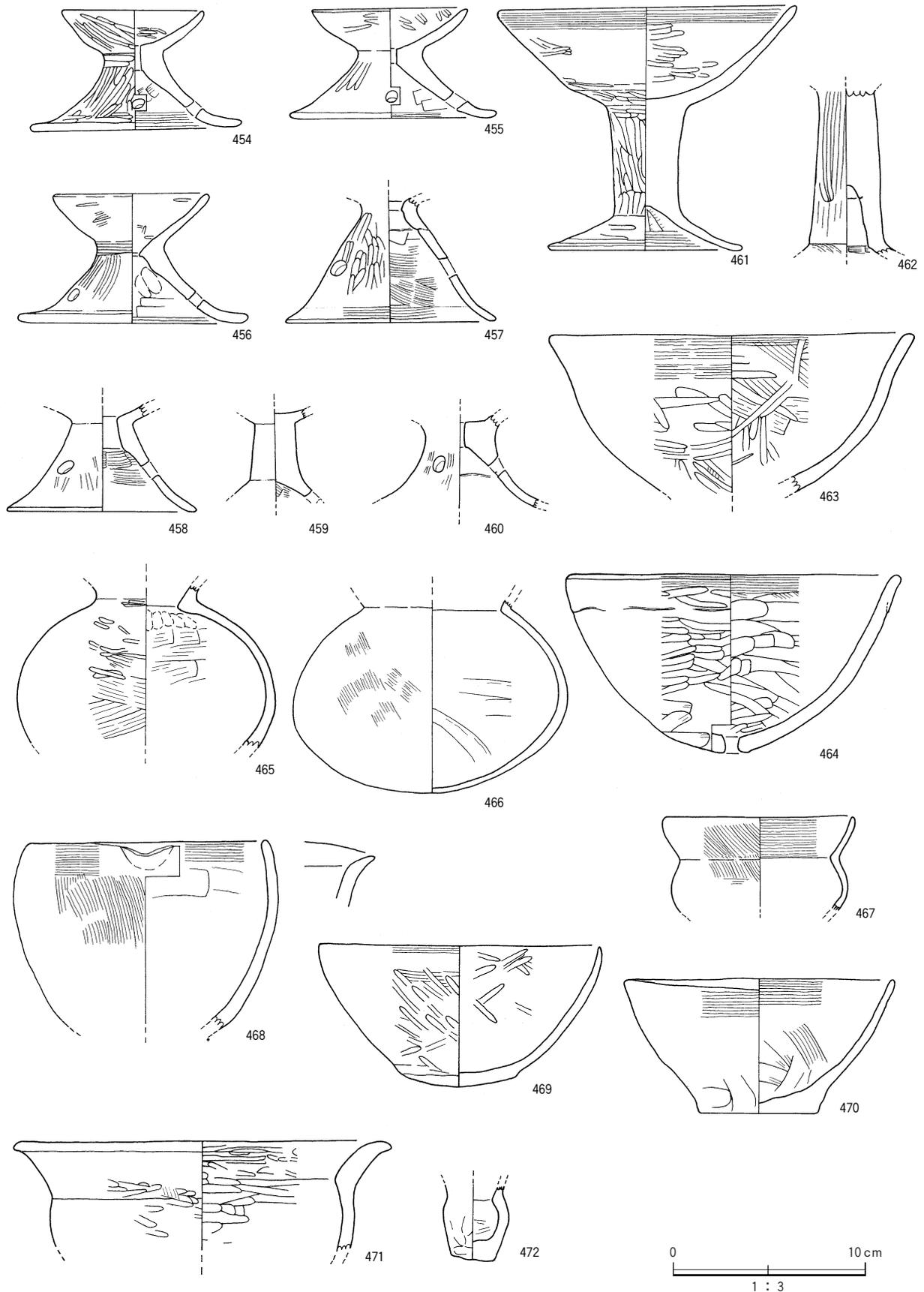
第84図 S D 261溝跡



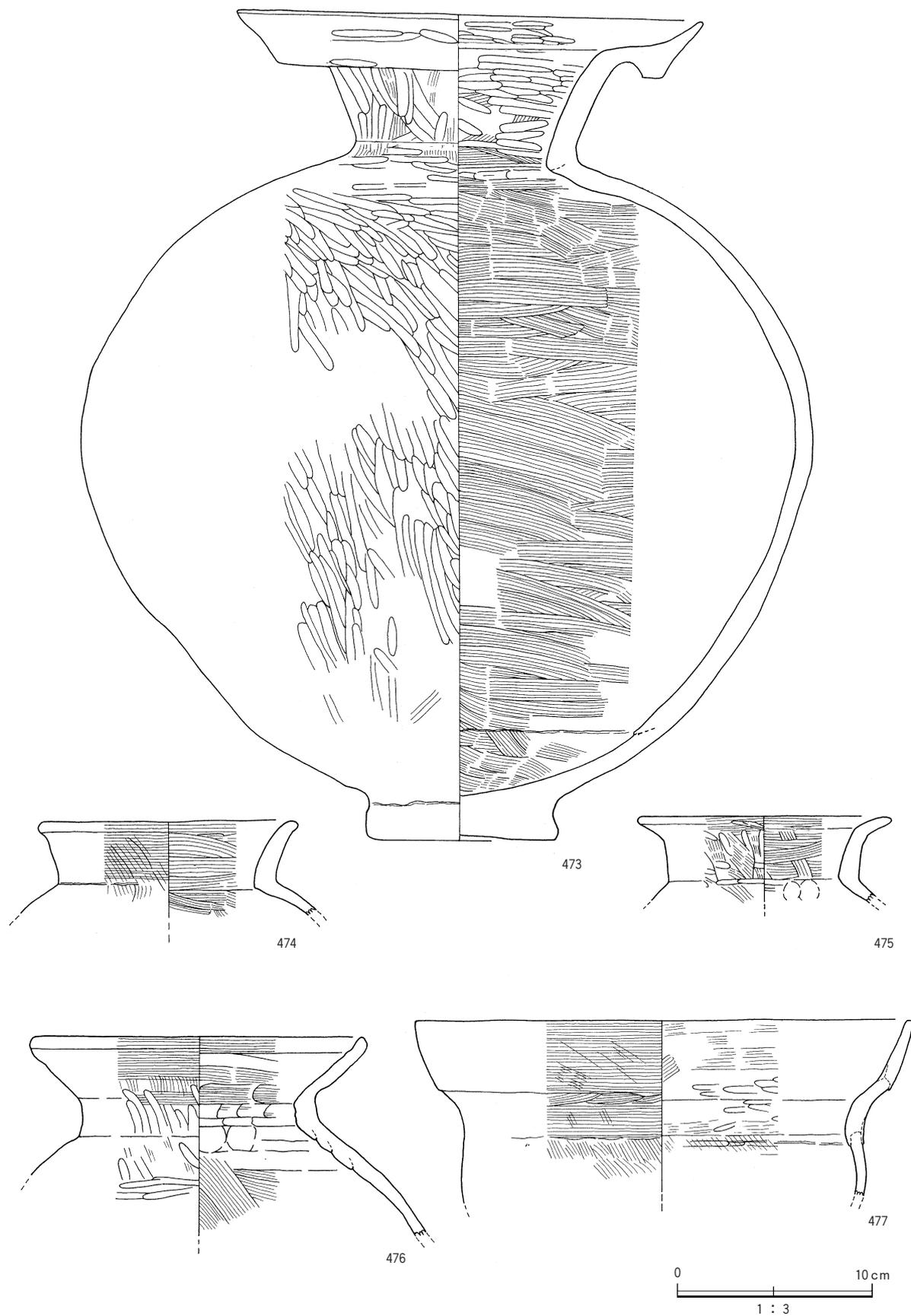
第85図 S D 261 溝跡出土遺物



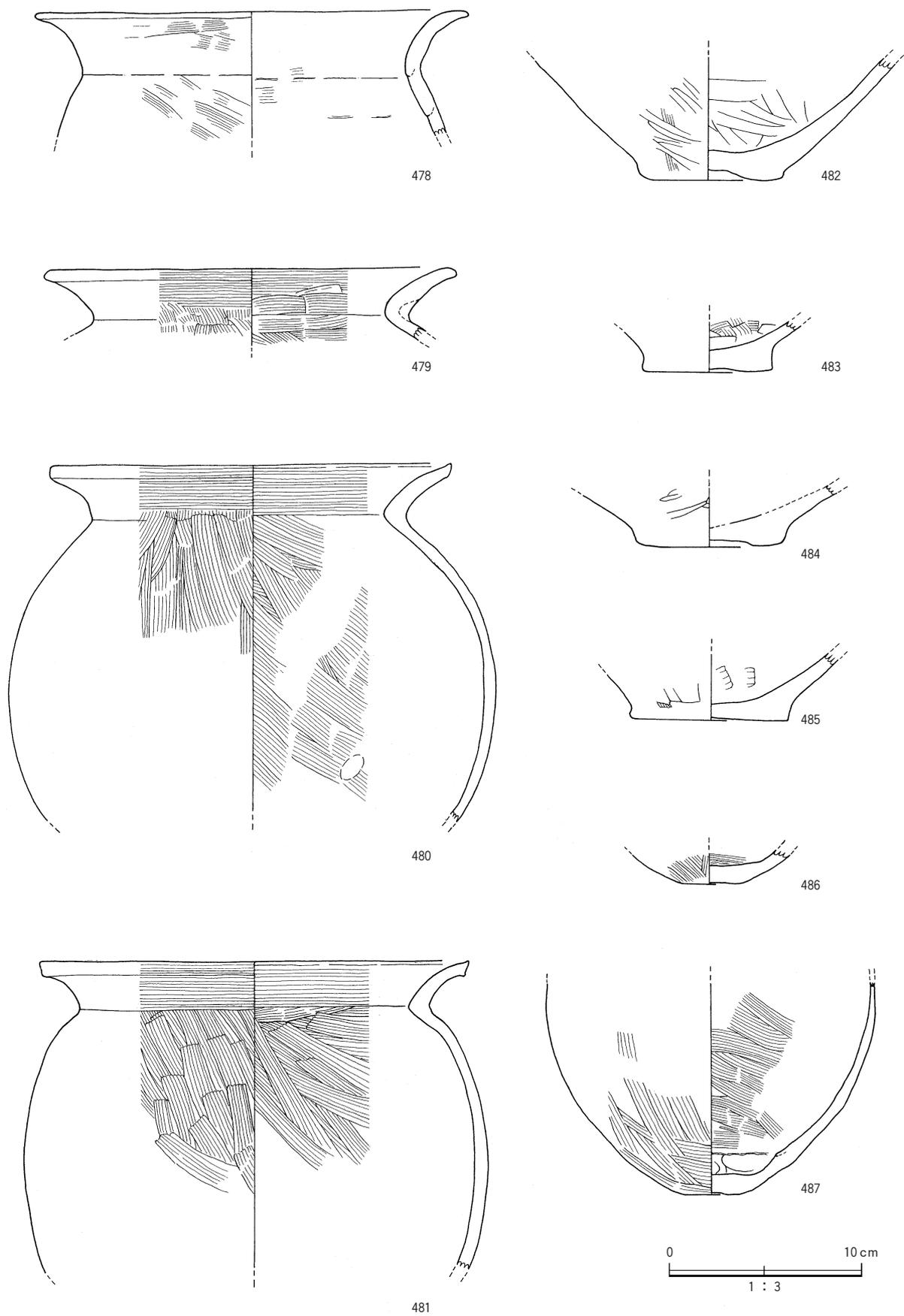
第86図 S D 262清跡



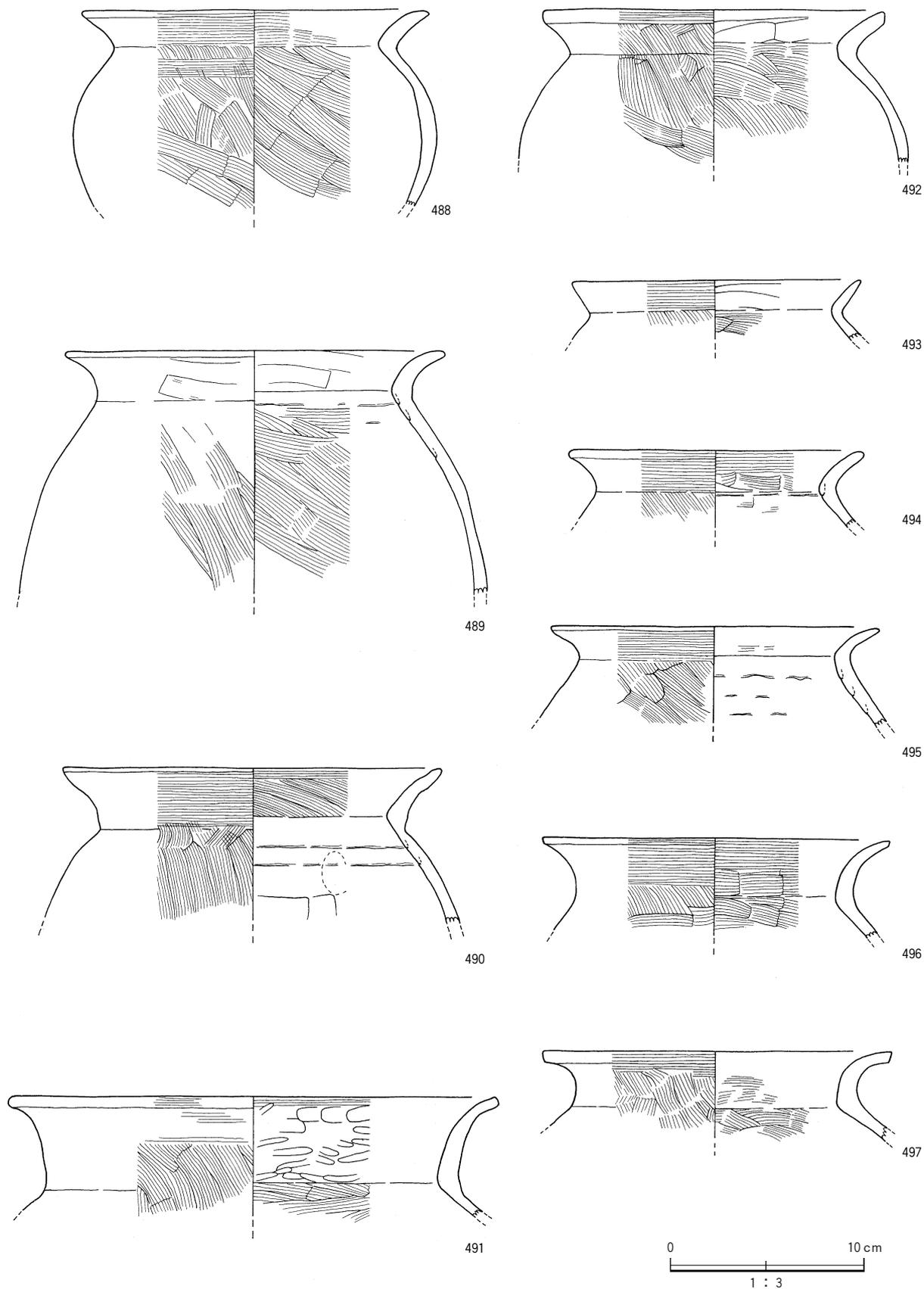
第87図 S D262清跡出土遺物(1)



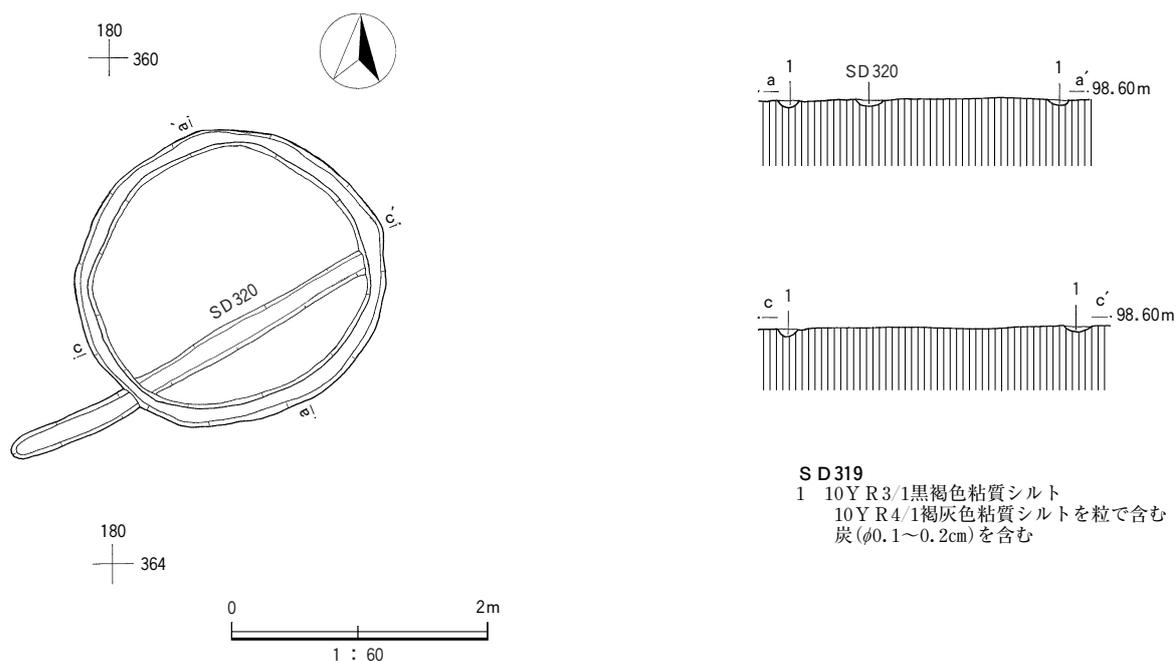
第88図 S D262清跡出土遺物(2)



第89図 S D262清跡出土遺物 (3)



第90図 S D262清跡出土遺物(4)



第91図 S D 319溝跡

**S K 348土坑** (第77図)

207・380～208・381区に所在する。平面形は直径70cmほどの円形を呈する。底面形状は丸底を呈する。遺構検出面からの深さは約30cmを測る。土坑内からは、横倒しになったまま土圧で潰れた甕(382)が出土している。覆土は2層で、甕の上の覆土が1層、甕の下の覆土が2層である。

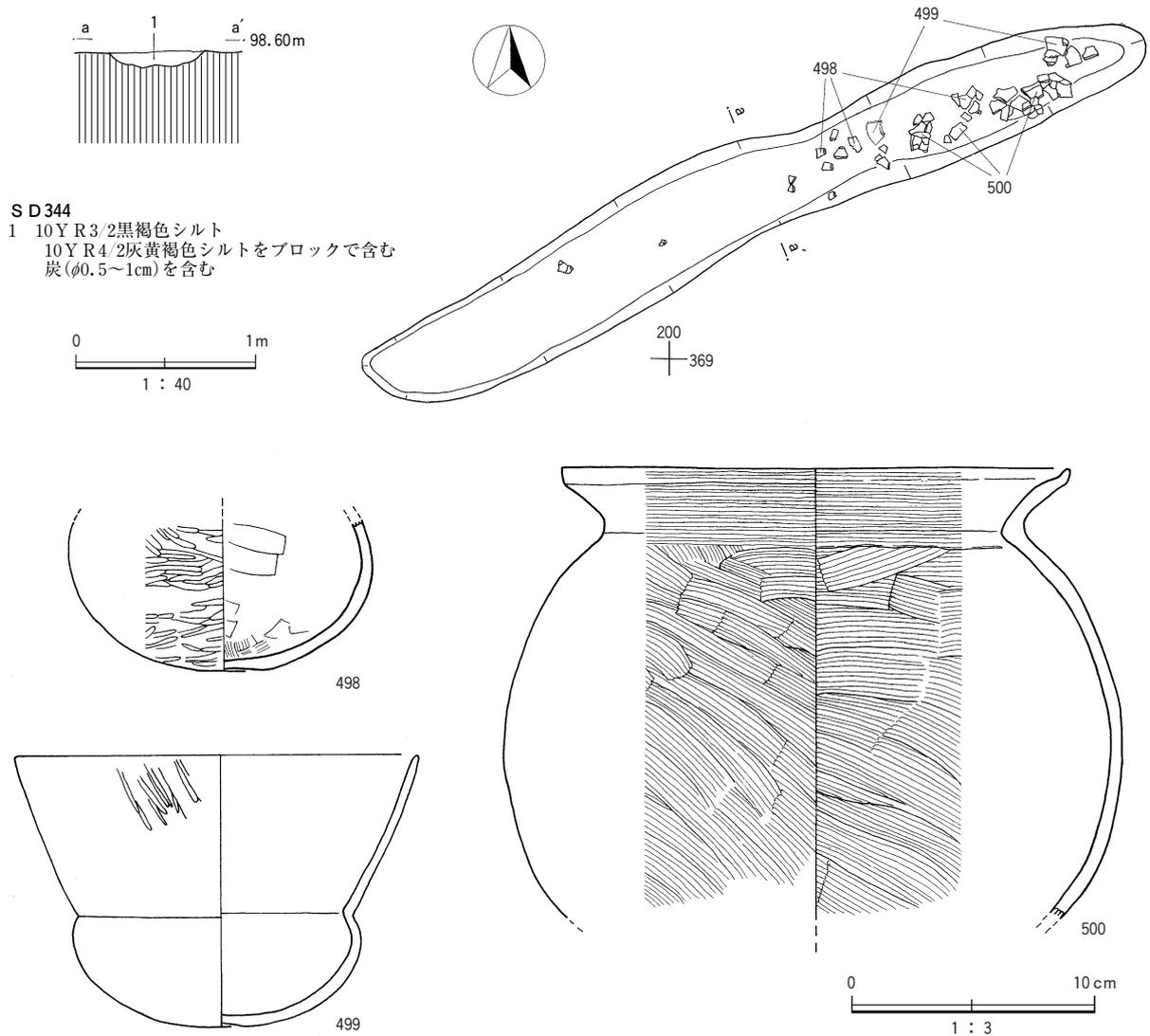
**3. 溝 跡**

**S D 260溝跡** (第78, 79図)

調査区の北西隅、170・345区から調査区の南東、209・393区にかけて緩く蛇行しながらのびる溝跡である。南東部で河川跡に取り付いている。この河川は、S G 252河川跡とは時期の異なる、第1次調査で検出されたS G 114河川跡と思われる。河川跡との接合部分の上端は、浸食を受けたのか扇状に開いている。幅は、北東部では約1mであるが、河川との接続部近くになると2mほどに広がる。深さは約40cmで丸底状の断面形を呈する。底面の勾配差がほとんどなく、流路方向は特定できないが、調査区全体の標高が東に高く西に低いという環境を考え合わせると、河川から水を取り入れた施設との可能性も考えられる。この推定に立てば、調査区の北西方向に水田域の存在が推定されるのではなかろうか。この溝跡の埋没後、S T 202竪穴住居跡が構築されている。出土遺物は、器台、高坏、鉢、壺、甕等の土器類の他、管玉の材料となる荒割りされた玻璃質流紋岩なども見られる。なお、第78図と第79図の「・」印は遺物の出土地点を示している。

**S D 261溝跡** (第84図)

調査区南西隅近くに、直径9mほどの不整形を呈する沼沢と思われる湿地跡が所在するが、



S D 344  
 1 10Y R 3 / 2 黒褐色シルト  
 10Y R 4 / 2 灰黄褐色シルトをブロックで含む  
 炭 (φ0.5~1cm) を含む

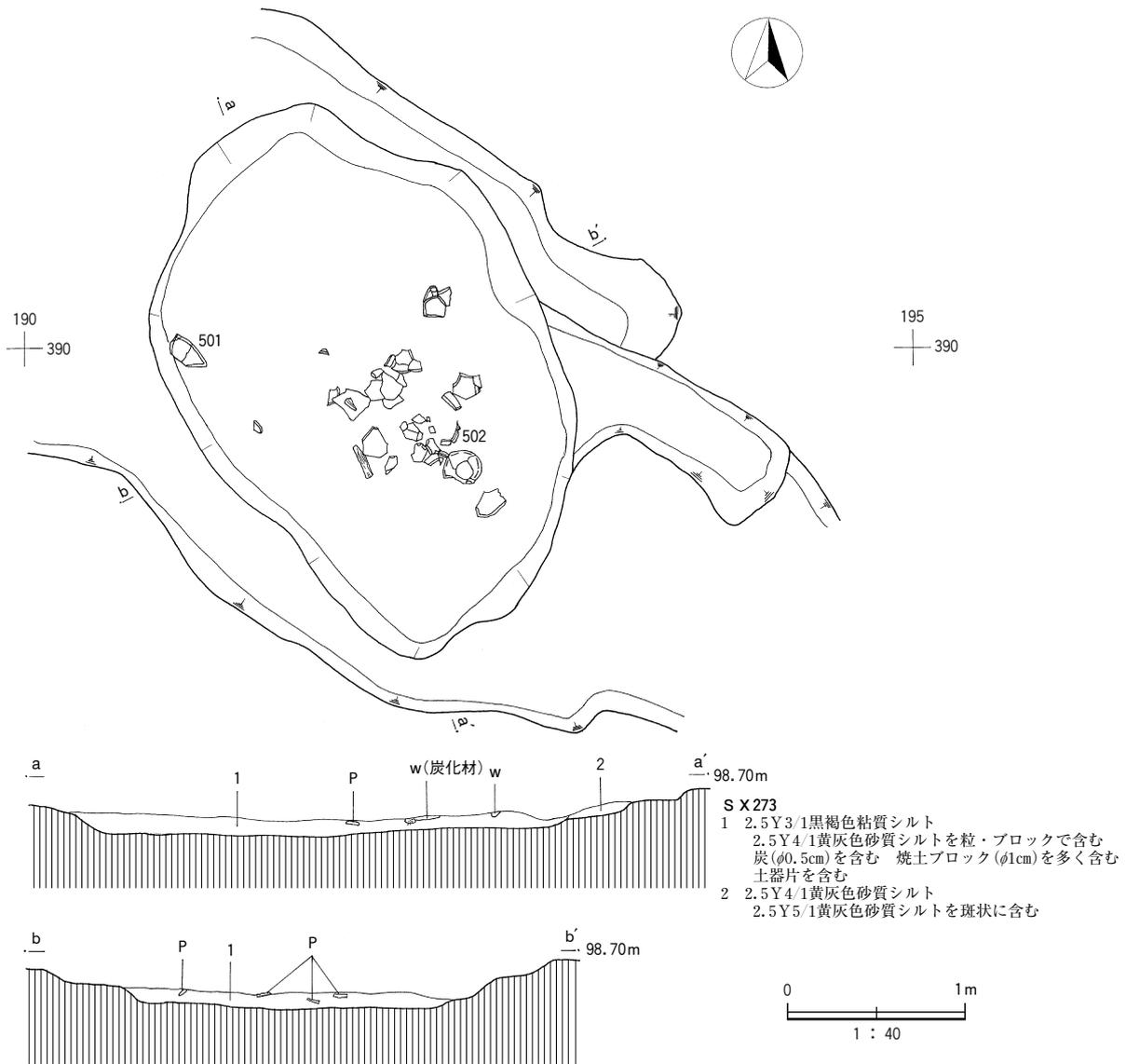
第92図 S D 344溝跡及び同出土遺物

S D 261溝跡と後述する S D 262溝跡は、この湿地を取り巻くように配置されている。

S D 261溝跡は、湿地と 2~3 m の間隔を取り、177・367~183・378区に所在する溝跡である。概ね直線的に延びるが、南端で湿地に沿うように西側に緩く曲がる。深さ10cm、幅1.7m、長さ11mと浅い溝跡であるが、中にもう一つの溝を持ち、底面は2段になっている。これが当初からの形状なのか、あるいは時期差を有するのかは調査時点では確認できなかったが、西側の立ち上がりを共有するように2つの溝が位置していることから、時期差があったとしても、この溝が機能している時間内でのことと考えられる。子溝は幅1.2m、長さ9.3m、親溝底面からの深さ30cmを測る。なお、この溝跡の埋没後に S T 206 堅穴住居跡が構築されている。出土遺物は、器台、高坏、壺、甕などがある。

**S D 262溝跡 (第86図)**

先述の S D 261と湿地を挟んで対をなすように所在する。S D 261溝跡と同様湿地の端から約 2 m の間隔を取り、西側を取り巻くように所在する。この溝跡も S D 261と同様、深さ10cmと全体に浅いが、底面に土坑のような窪みを有し、底面形状が複雑な溝跡である。北端部で畝状



第93図 S X 273性格不明遺構

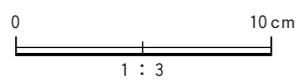
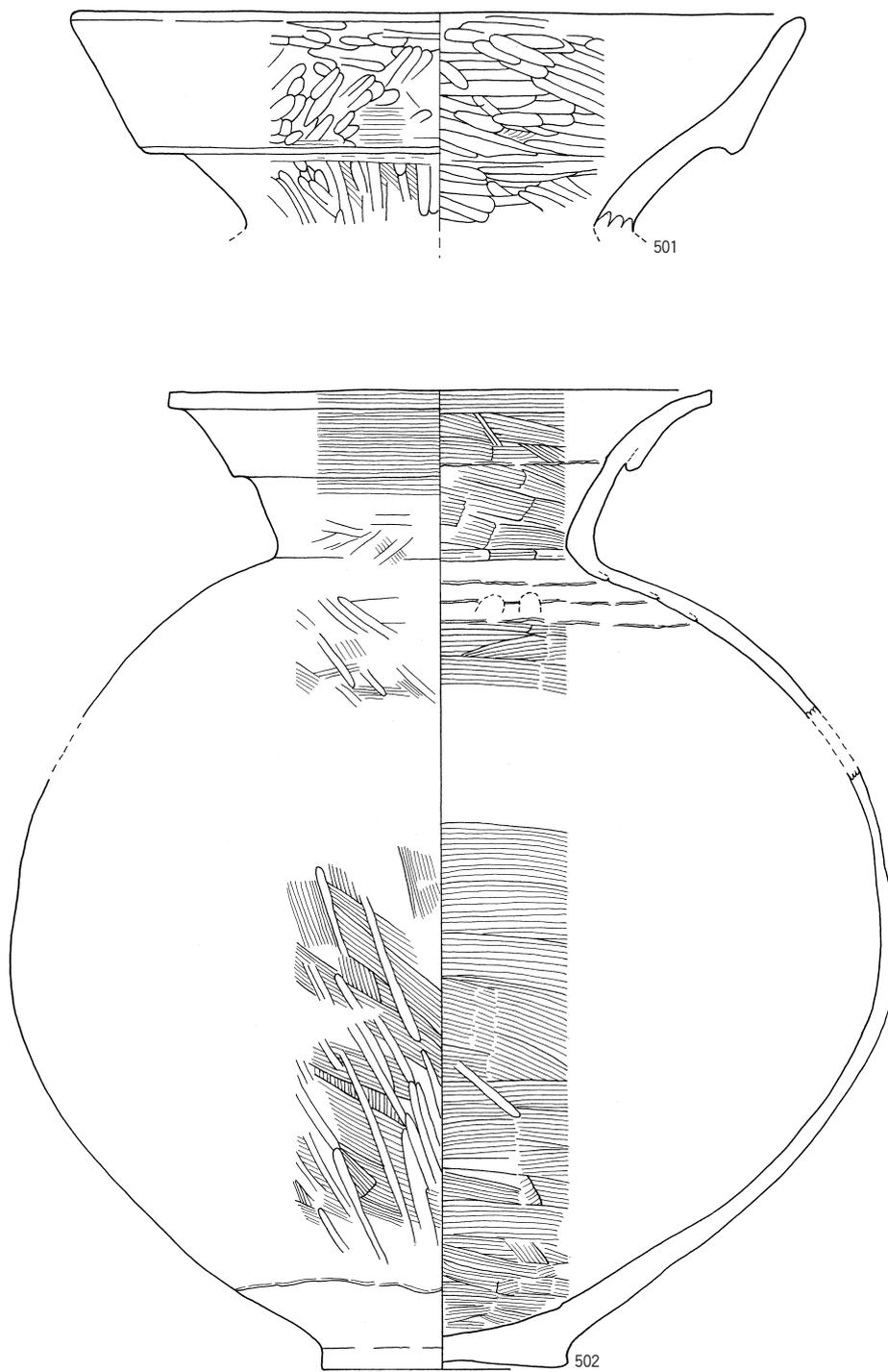
遺構が重複しているため、溝の始点が不明である。溝の東側に、当該溝が埋没した後に設けられた子溝がある。重複かとも思われたが、平面形に不自然さはなく、S D 262溝跡が認識されている時期、即ち埋没直後に再度設けられたものと考えられる。幅0.8~1.1m、長さ約14m、深さは約20cmを測り、窪みは親溝の底面から5~15cmを測る。

**S D 319溝跡** (第91図)

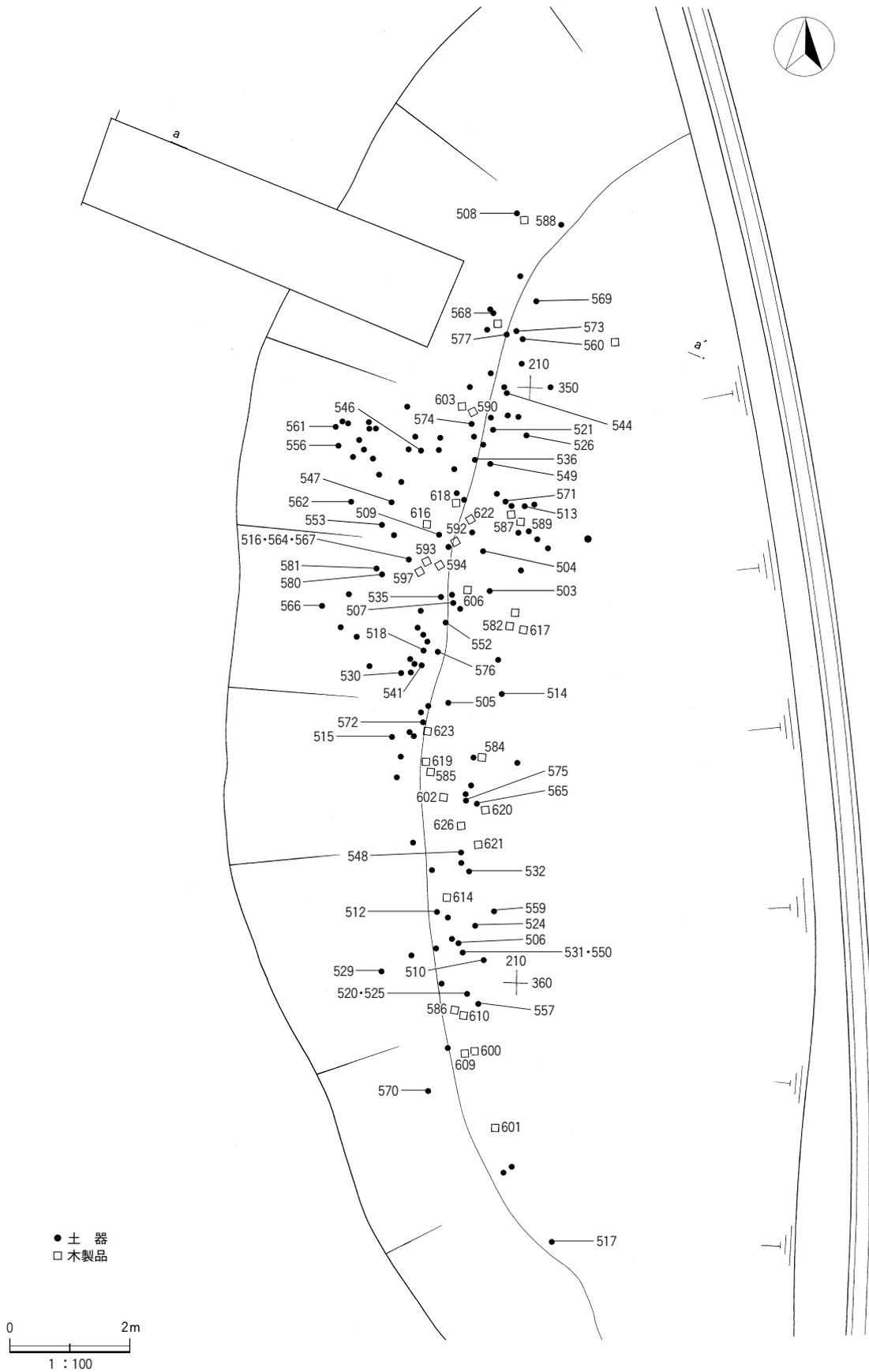
179・360~183・364区に所在する。浅い円形に巡る溝である。溝の幅は15~25cm、深さは遺構確認面から約7cmを測る。規模は内径で約2m、外径で約2.5mを測る。稲ワラで覆いを巡らした簡易な倉庫との見方もあるが、性格は不明である。

**S D 344溝跡** (第92図)

198・367~203・369区に所在する。S D 252河川跡の川岸に向かう緩斜面に位置し、川の方に向いている。長さ約7m、幅80~90cm、断面形は浅く平坦な丸底を呈し、深さは約15cmを測



第94図 S X 273性格不明遺構出土遺物



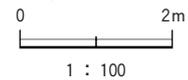
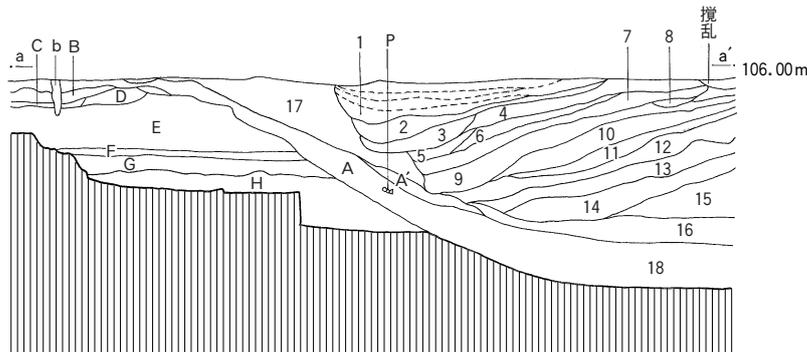
第95図 SG252河川跡 (1)

S G252

- A 10Y R4/1褐灰色土(基本層序Ⅲ層)
- B 10Y R4/1褐灰色土に炭粒を含む
- C 10Y R3/2暗褐色砂質土
- D 2.5Y R4/1黄灰色砂質シルト
- E 5B3/1暗青灰色粘質シルト
- F N1.5/0黒色粘質土(泥炭)
- G 7.5G Y4/1暗緑灰色シルト
- b 2.5Y 4/1黄灰色土(稲杭の痕か)

- 1 10Y R4/1褐灰色土  
灰黄褐色土が縞状に入ること  
で4層に分かれるが、雨水による  
攪乱と堆積を繰り返した同一層  
と考えられる
- 2 砂層
- 3 砂層
- 4 粗砂に小礫(φ0.3~0.7cm)が混在
- 5 砂層
- 6 粗砂に小礫(φ0.3~1cm)が混在
- 7 砂層
- 8 粗砂層(φ0.7cm未満)(部分的溜まり)

- 9 砂層  
底部に小礫(φ0.5~1cm)が堆積
- 10 砂層
- 11 砂層
- 12 粗砂に小礫(φ0.5~1cm)が混在
- 13 砂礫層(礫:φ0.5~1cm)
- 14 砂層
- 15 砂層
- 16 粗砂に小礫(φ0.5cm)が混在
- 17 5Y 4/1灰色シルト  
5Y 6/1灰色シルトが粒状に混在
- 18 10Y R4/1褐灰色土  
(遺物包含層・A層)



第96図 S G252河川跡(2)

る。溝の東側に若干遺物が遺存し、鉢、壺、甕などが出土している。

#### 4. 性格不明遺構

##### S X273性格不明遺構(第93図)

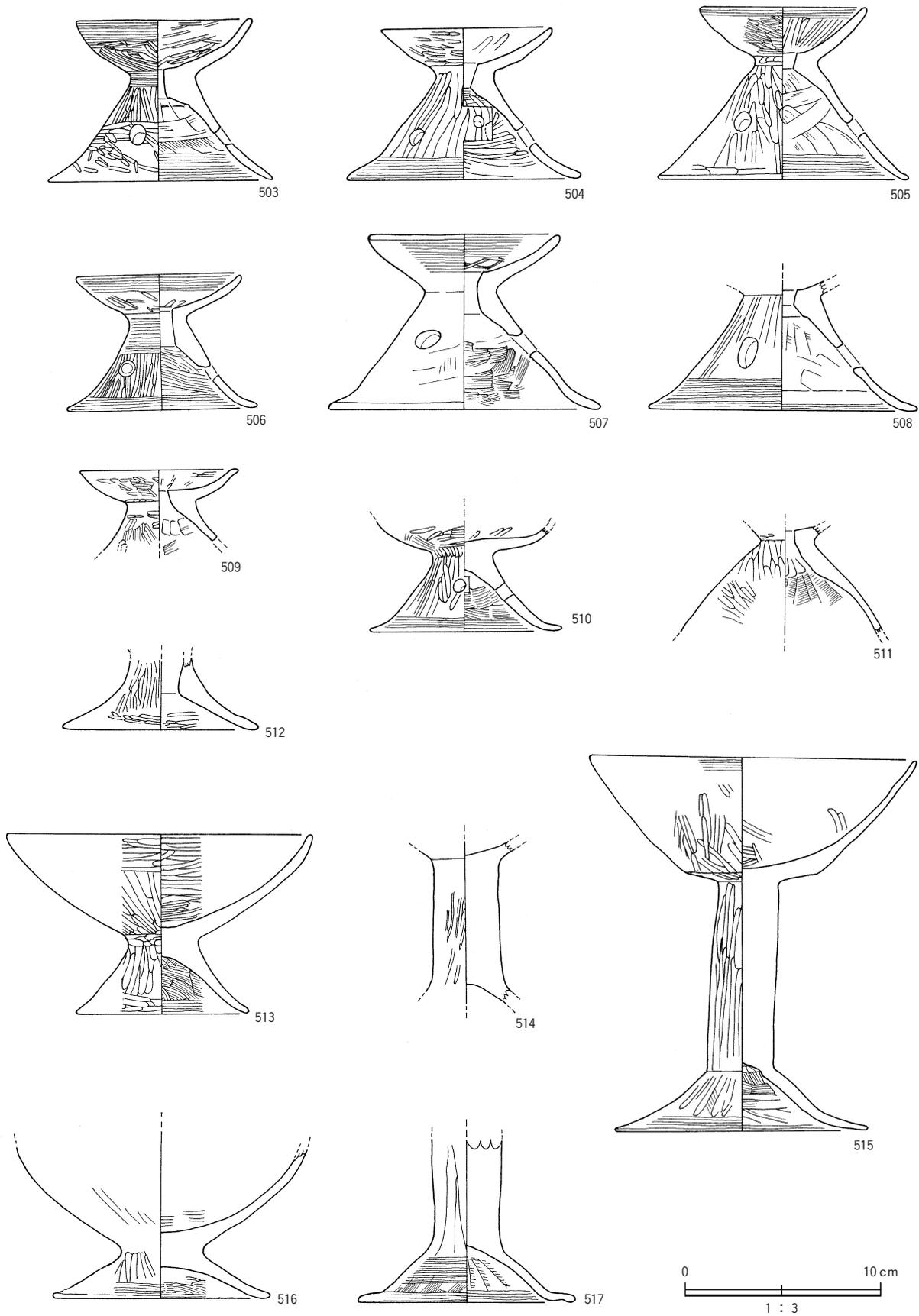
190・388~193・392区に所在する。土取りによって攪乱された土を取り除いて検出したものである。長軸4.9m、短軸3.2mの不整形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。炭や焼土を含み、用途、性格ともに不明である。出土遺物には大形の甕がある。

#### 5. 河川跡

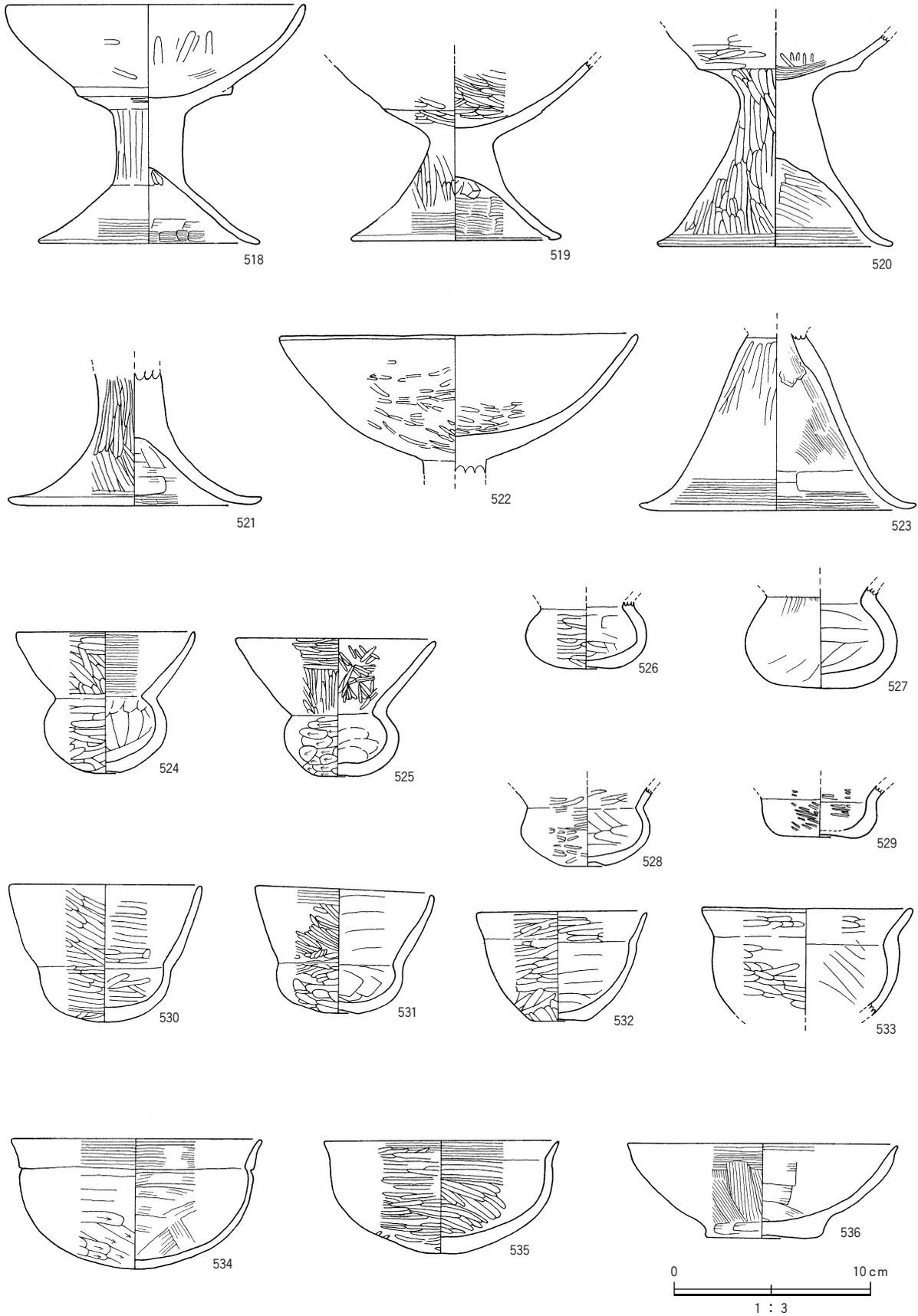
##### S G252河川跡(第95,96図)

調査区東端に位置する。当初一つのものと考えられていたが、S G252河川跡は西に膨らんだ部分のみで、260・370区辺りから南側については、時期の異なる別の河川と考えるに至った。南側の河川については、第1次調査で検出したS G114と同一のものと推量される。

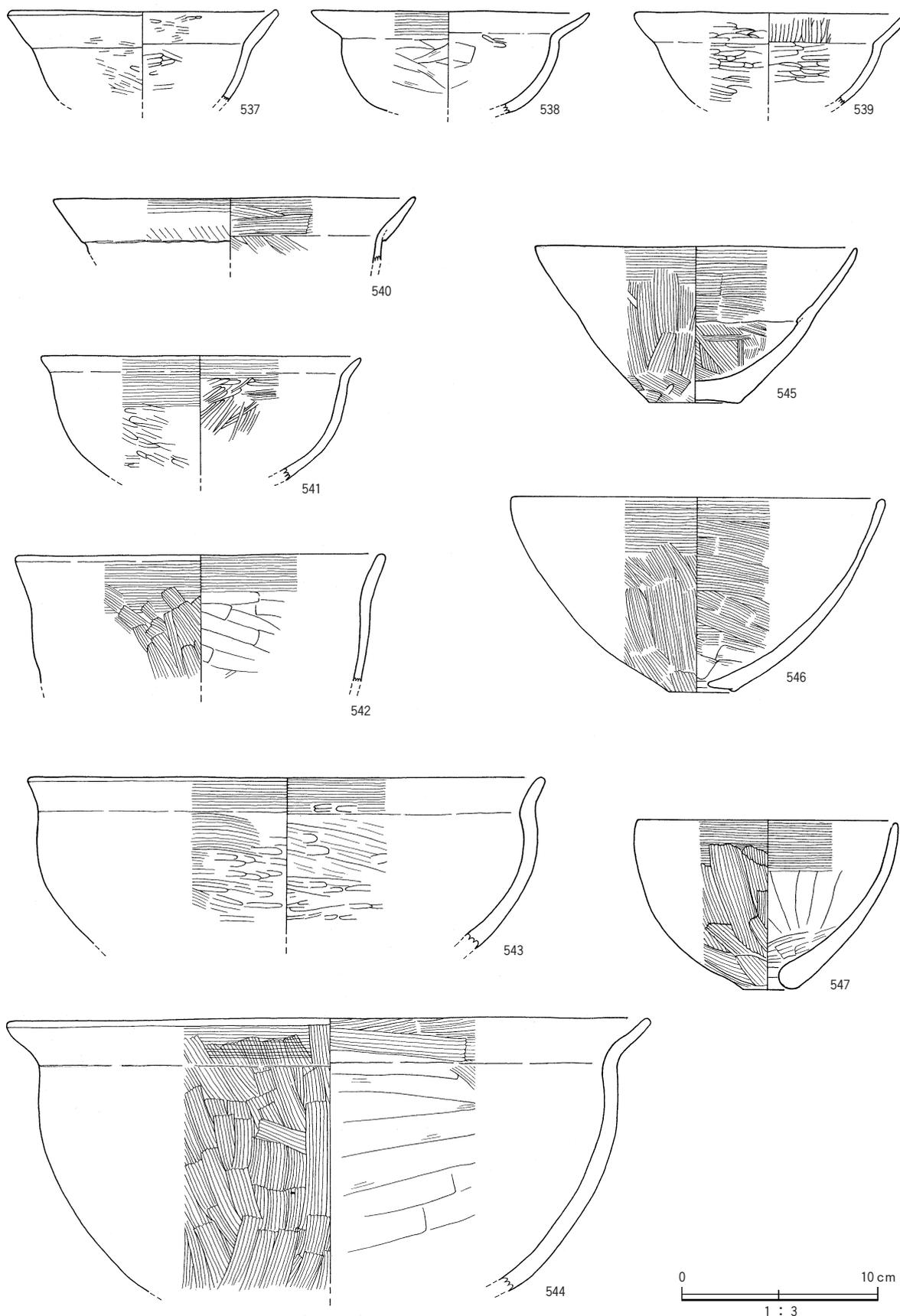
S G252河川跡は、西に膨らみ、淵を形成している。対岸は調査区外となり、川幅は確認していない。川底と考えられる砂利層まで約2.7mの深さを持つ。川底は、僅かだが南から北に低くなっており、この部分では北流していたものと考えられる。淵を形成している部分の川底には流木などが溜まっており、川の斜面から川底にかけては、投棄された土器片や木製品が出土している。出土土器の中で1点だけ、完形で猶且つ正位で遺存するという特異な出土状況を



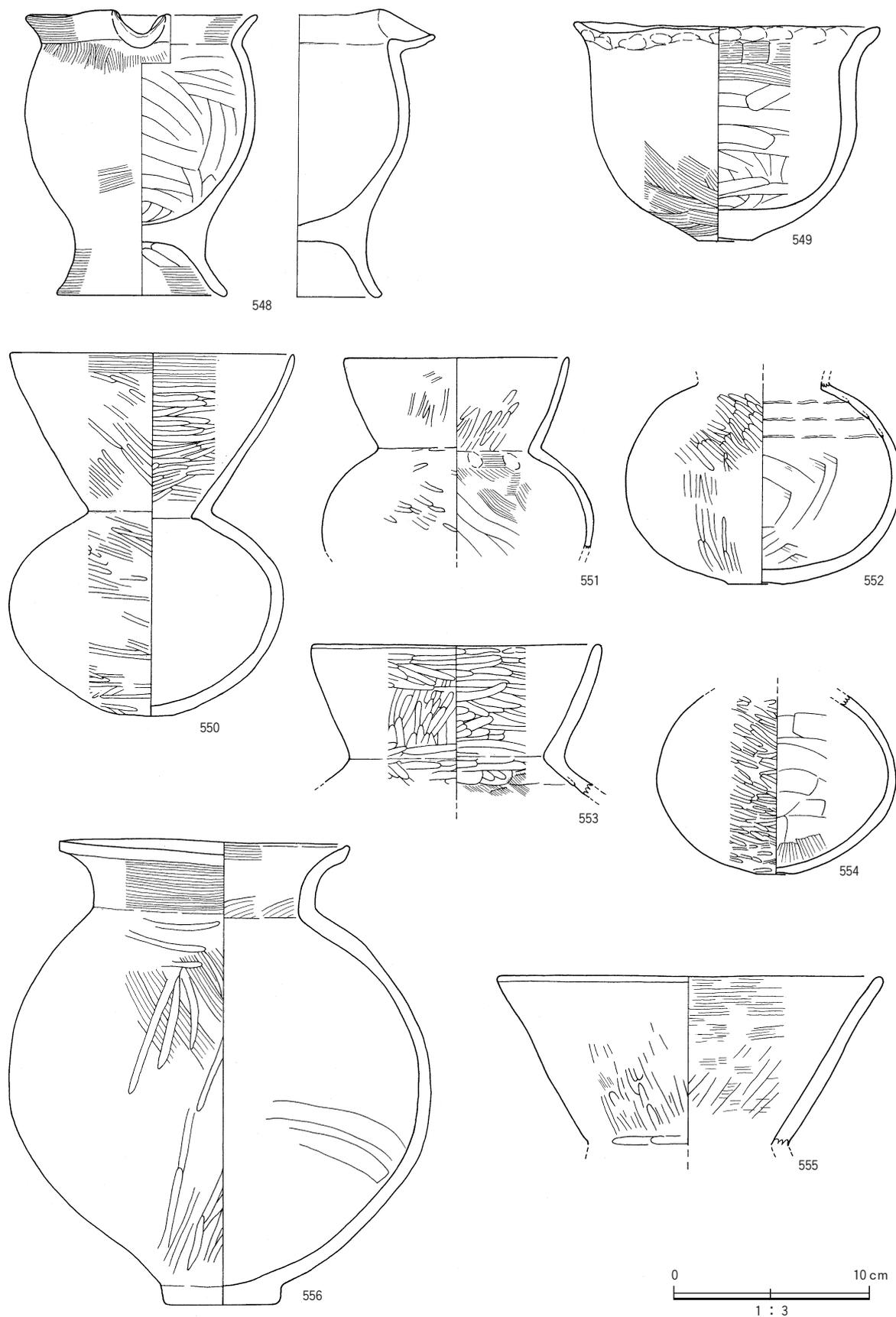
第97図 S G252川跡出土遺物(1)



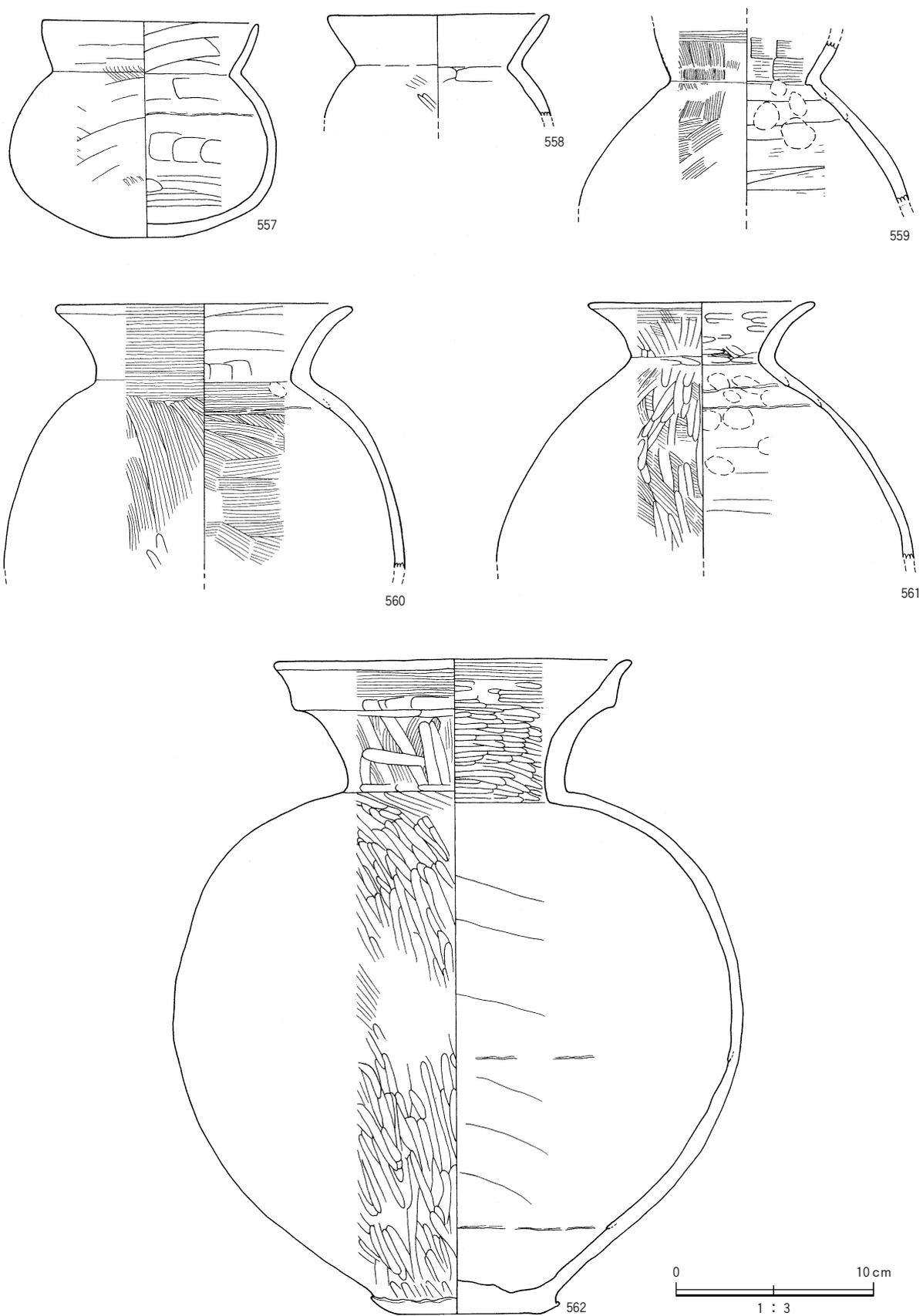
第98図 S G 252川跡出土遺物 (2)



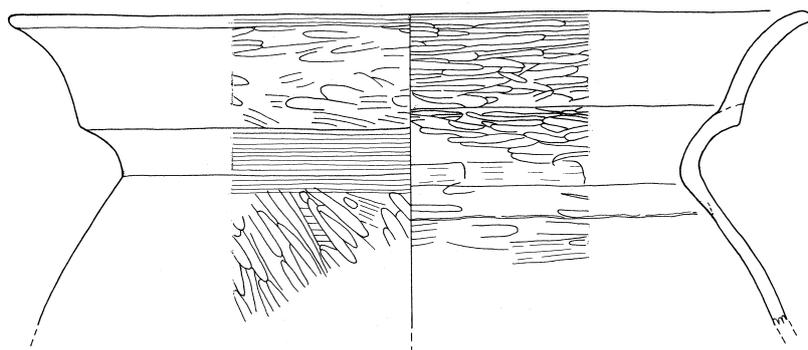
第99図 S G252川跡出土遺物 (3)



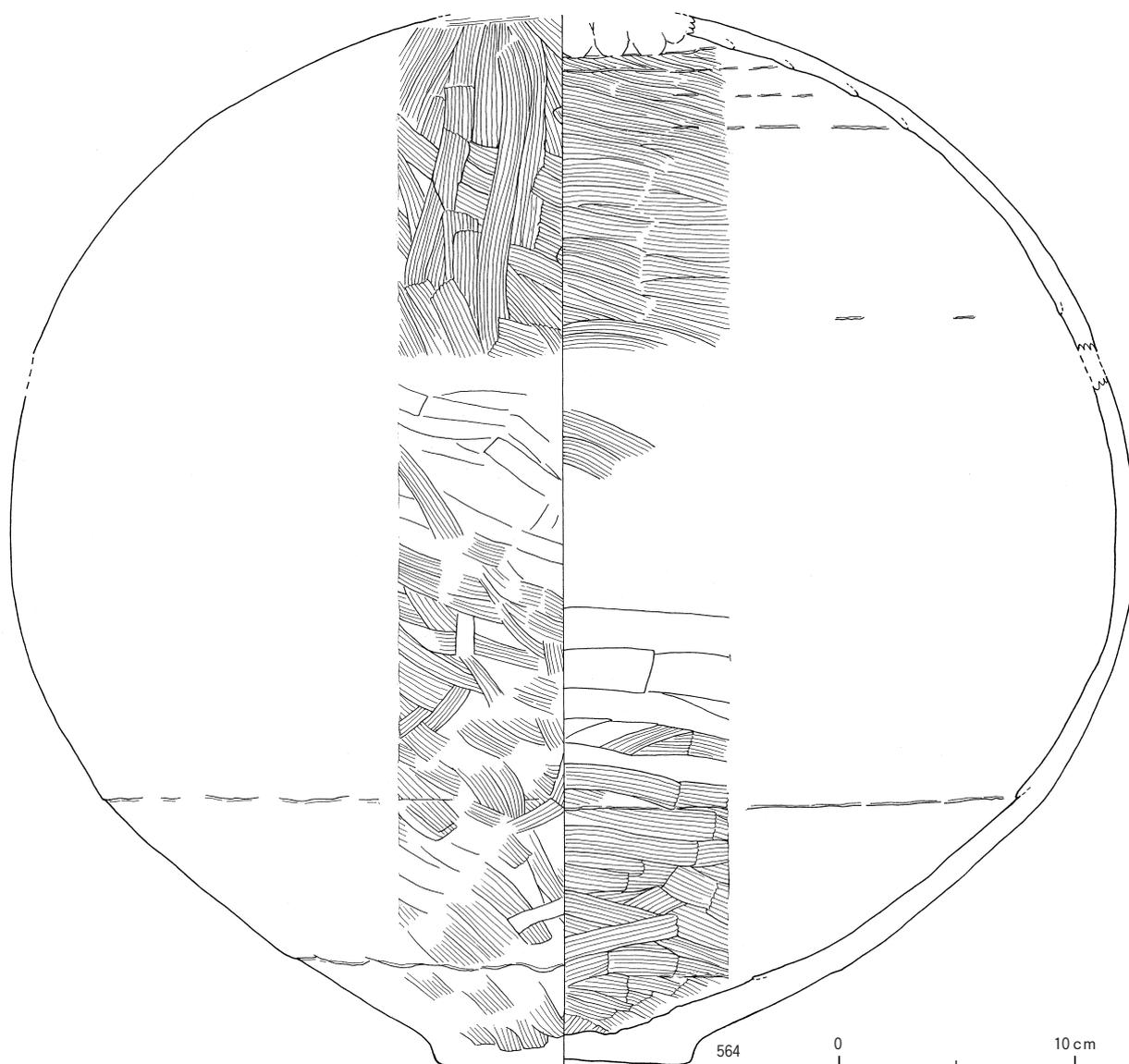
第100図 S G252川跡出土遺物(4)



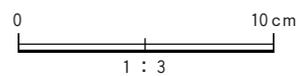
第101図 S G252川跡出土遺物 (5)



563



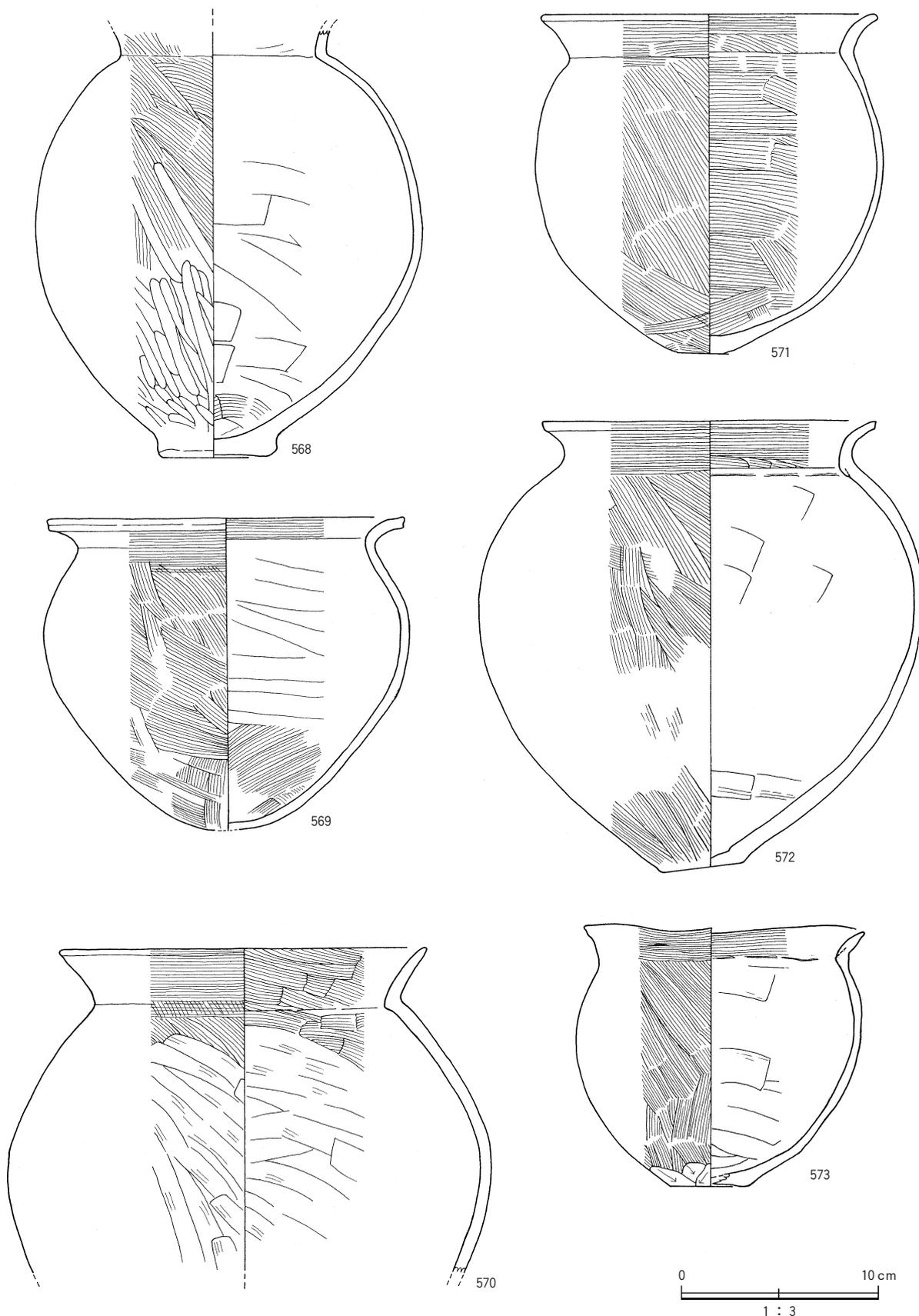
564



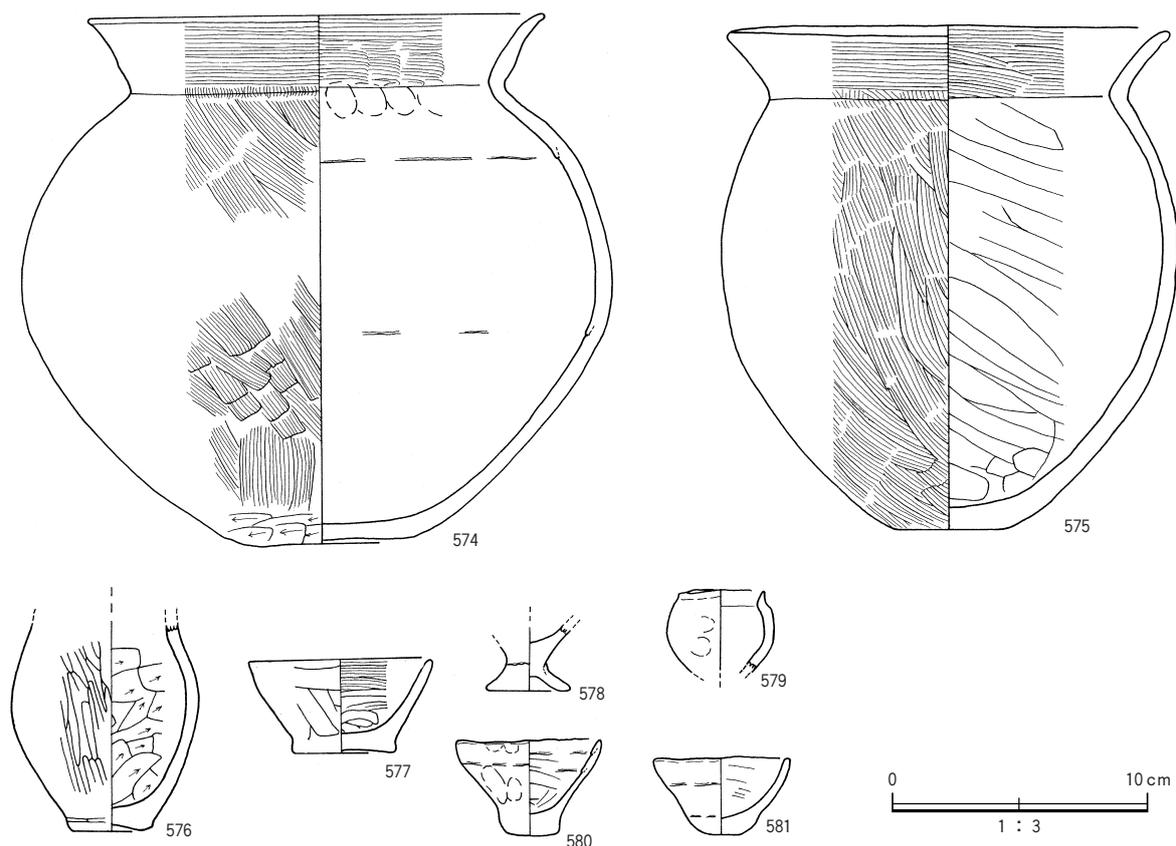
第102図 S G252川跡出土遺物 (6)



第103図 S G252川跡出土遺物(7)



第104図 S G252川跡出土遺物 (8)



第105図 S G252川跡出土遺物（9）

示す甕形土器の中には、土とともに植物遺体が遺存しており、同定の結果、クルミ、クワ、ウリ、イネなどが検出された（付編「植物遺体の同定調査」参照）。

出土遺物には、器台、高坏、鉢、壺、甕などの土師器、小型土器、木製品、植物遺体などがある。出土した木製品については、第4節に別途まとめている。また植物遺体については、付編を参照されたい。

土層断面からは、川が埋没した後、洪水による鉄砲水が、数度にわたって埋積土を抉り、砂を充填していった状況が観察できた。

## 6. 遺構外の遺物

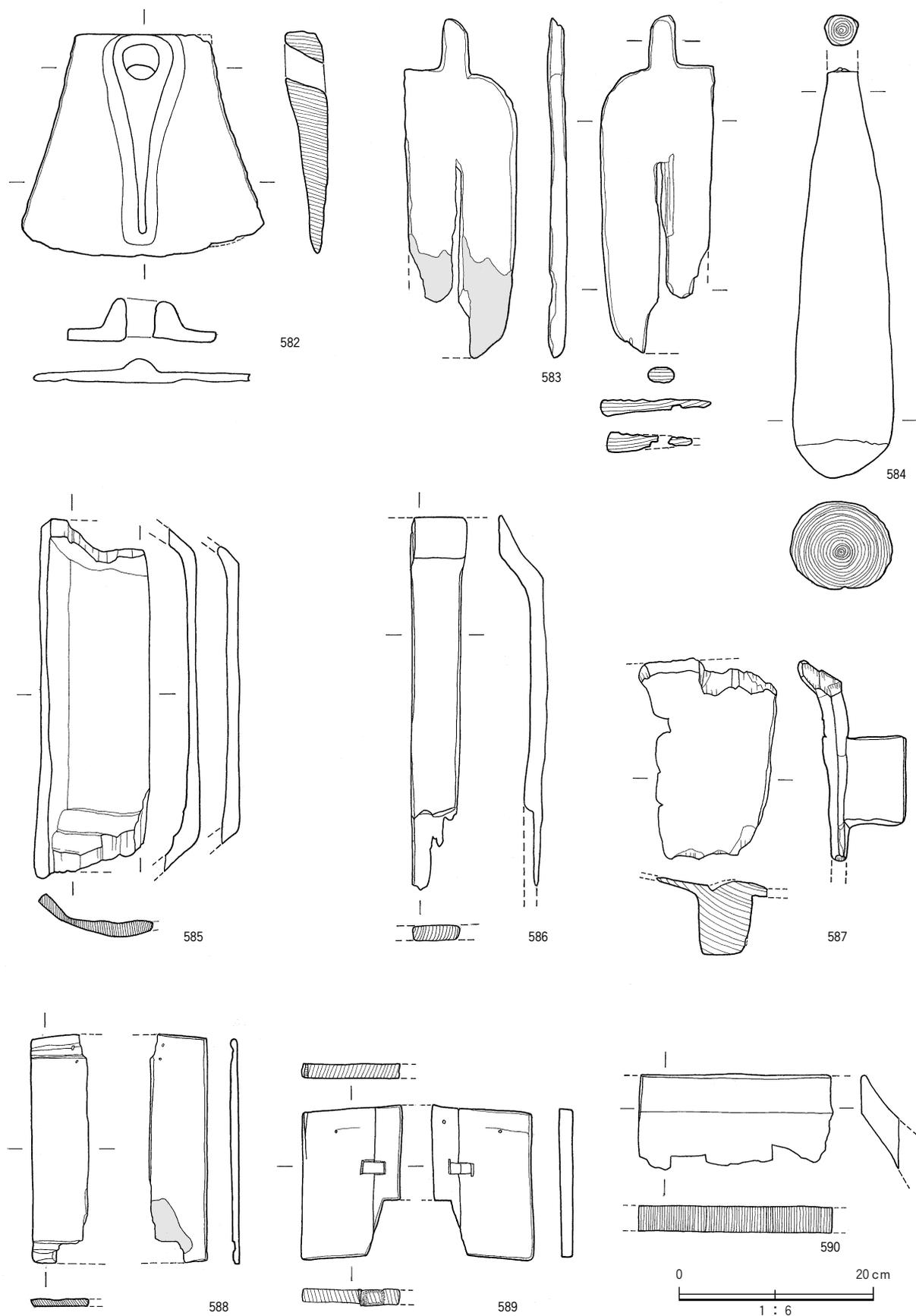
遺構外の遺物には、遺構確認面の上を覆う遺物包含層から出土したものと、遺構確認面直下に部分的にレンズ状に入る間層から出土したものなどがある。前者は、当該遺跡の生活痕跡と時期を同じくするものであり、後者は当該遺跡の生活痕跡が形成される以前のものである。

### 包含層の遺物（第111～117図）

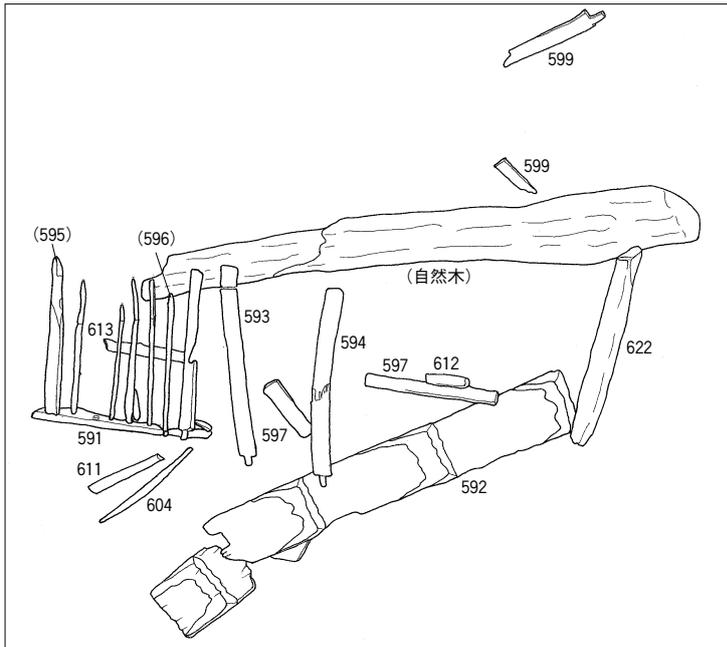
遺物包含層が遺構確認面の上を覆っており、包含層の遺物を取り上げてから遺構検出を行った。出土状況から、遺構に帰属し得るものか否か、判断に迷うものが多く、そのため、遺構から切り離して包含層の遺物として一括した。

### 間層出土の遺物（第118～121図）

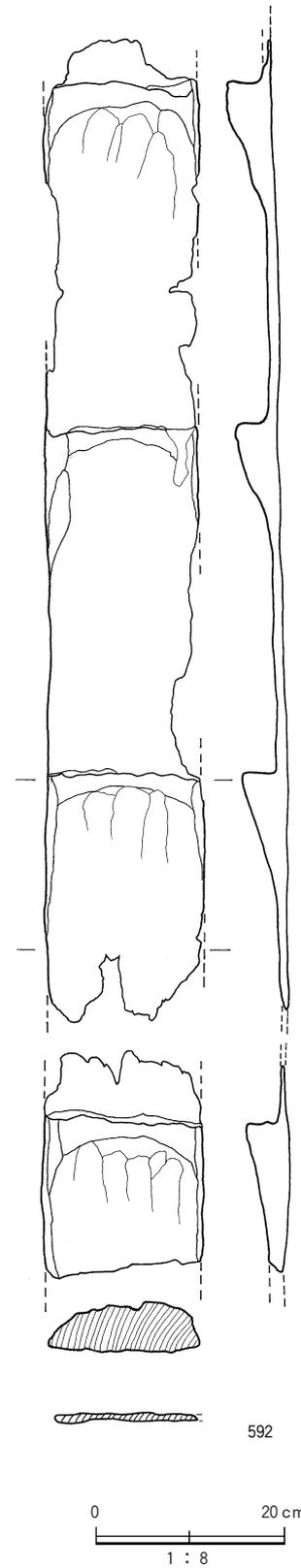
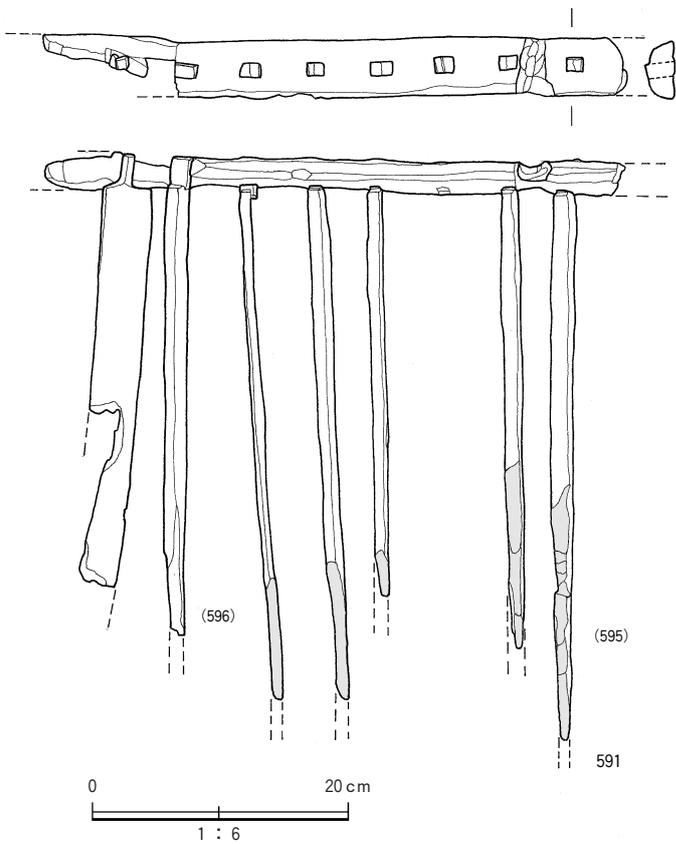
本遺跡は、低湿地に位置していることもあって、土壌がグライ化している。そのため、遺構



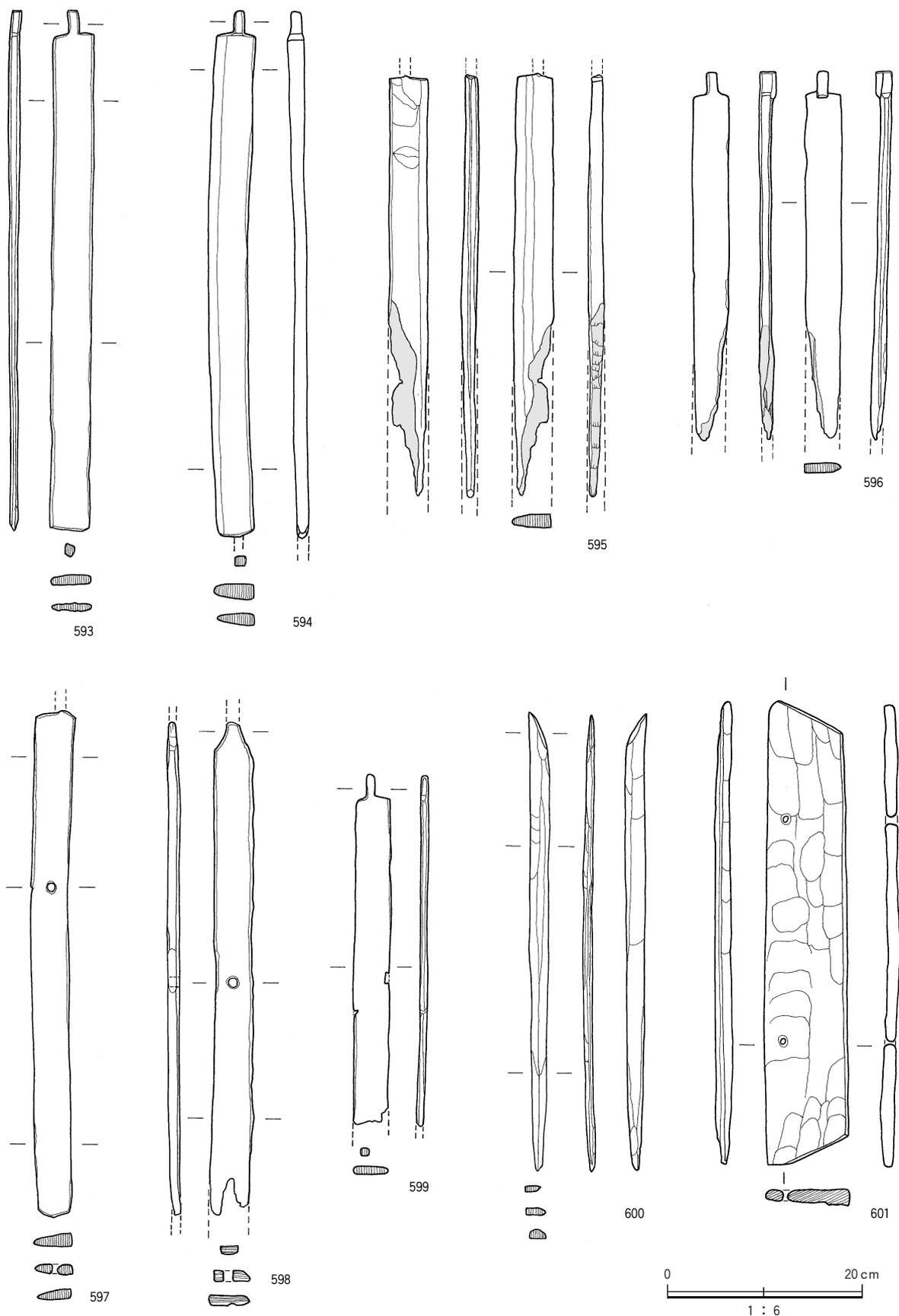
第106図 S G252川跡出土遺物 (10)



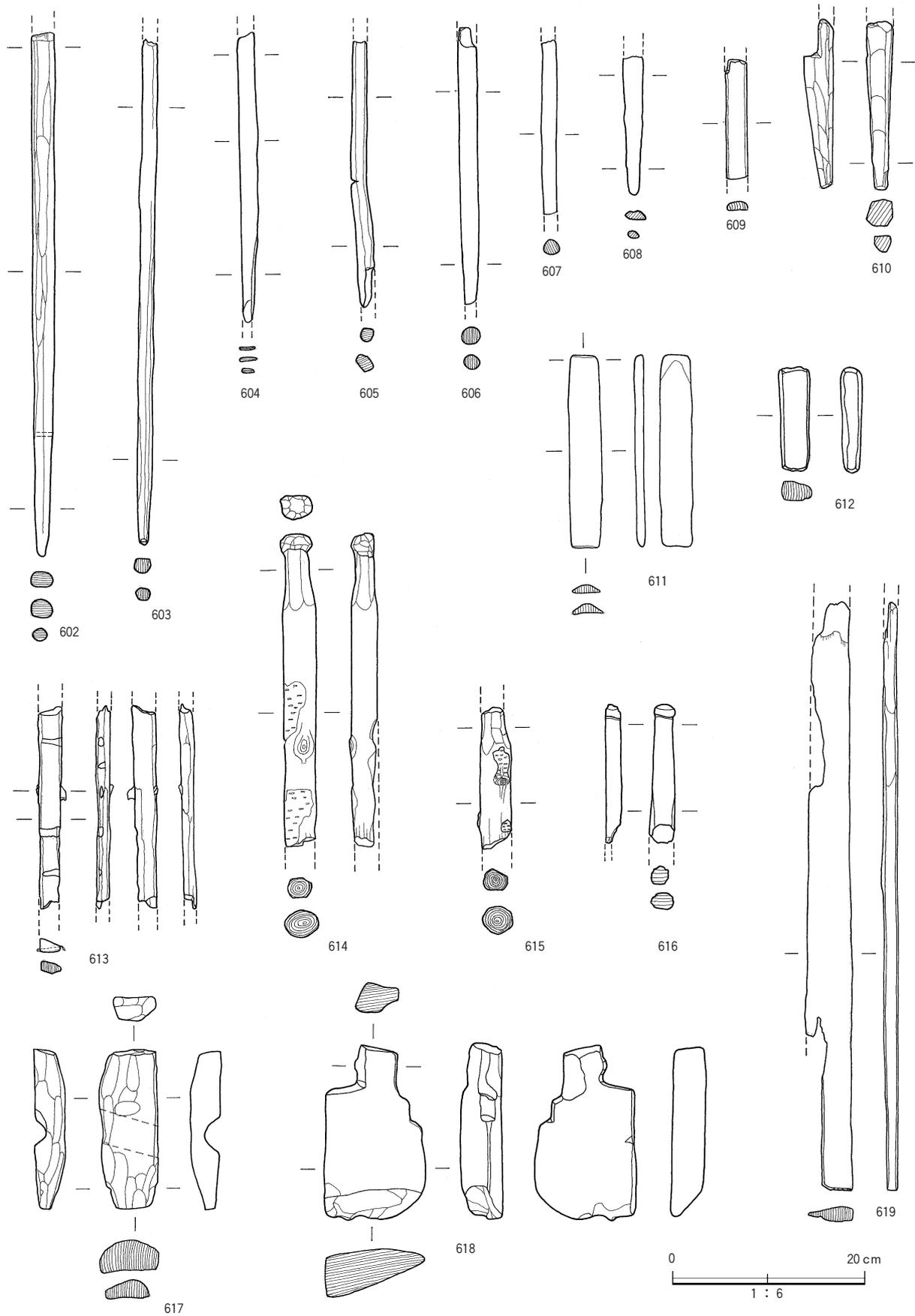
木製品出土状況概念図



第107図 S G252川跡出土遺物 (11)



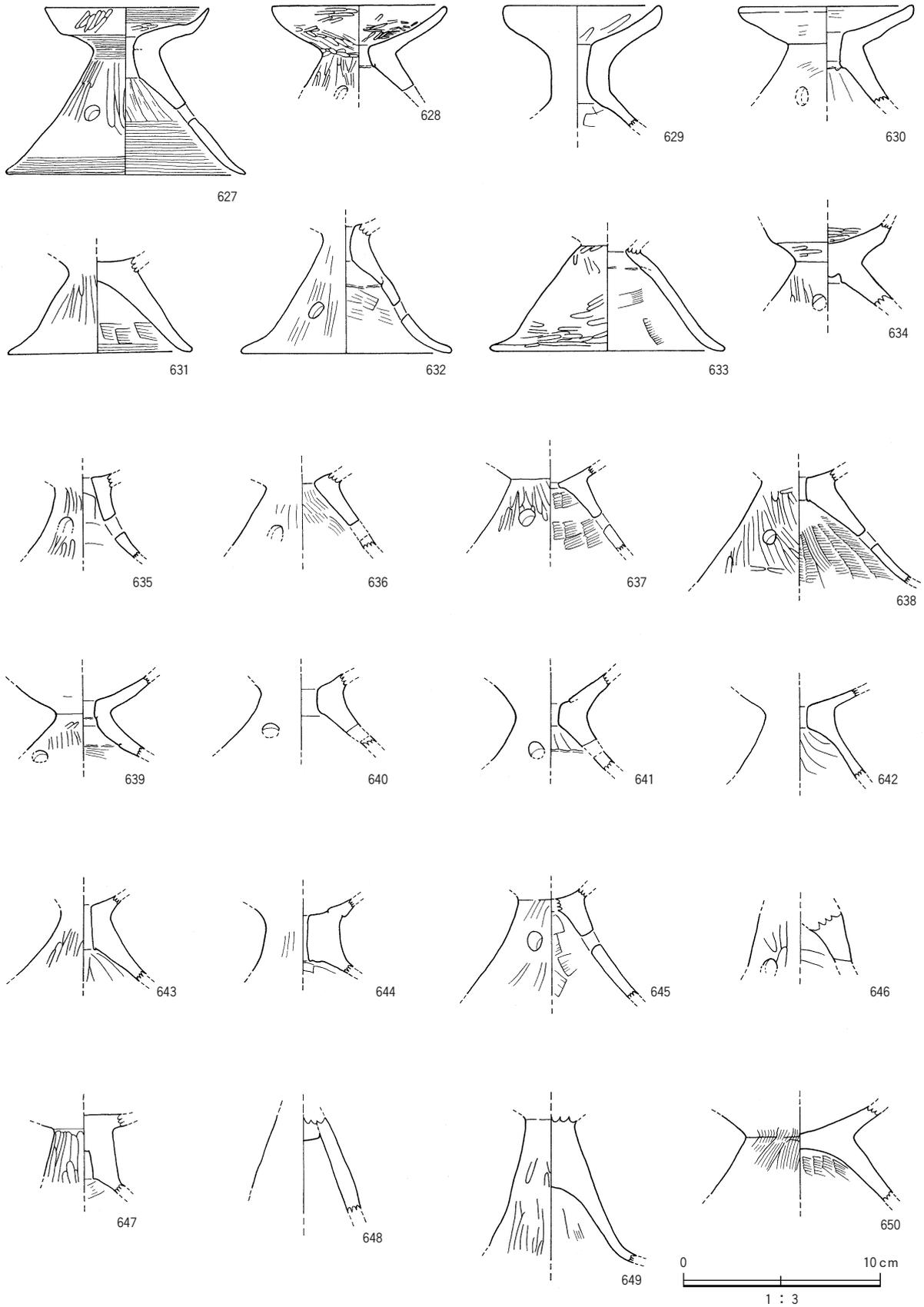
第108図 S G252川跡出土遺物 (12)



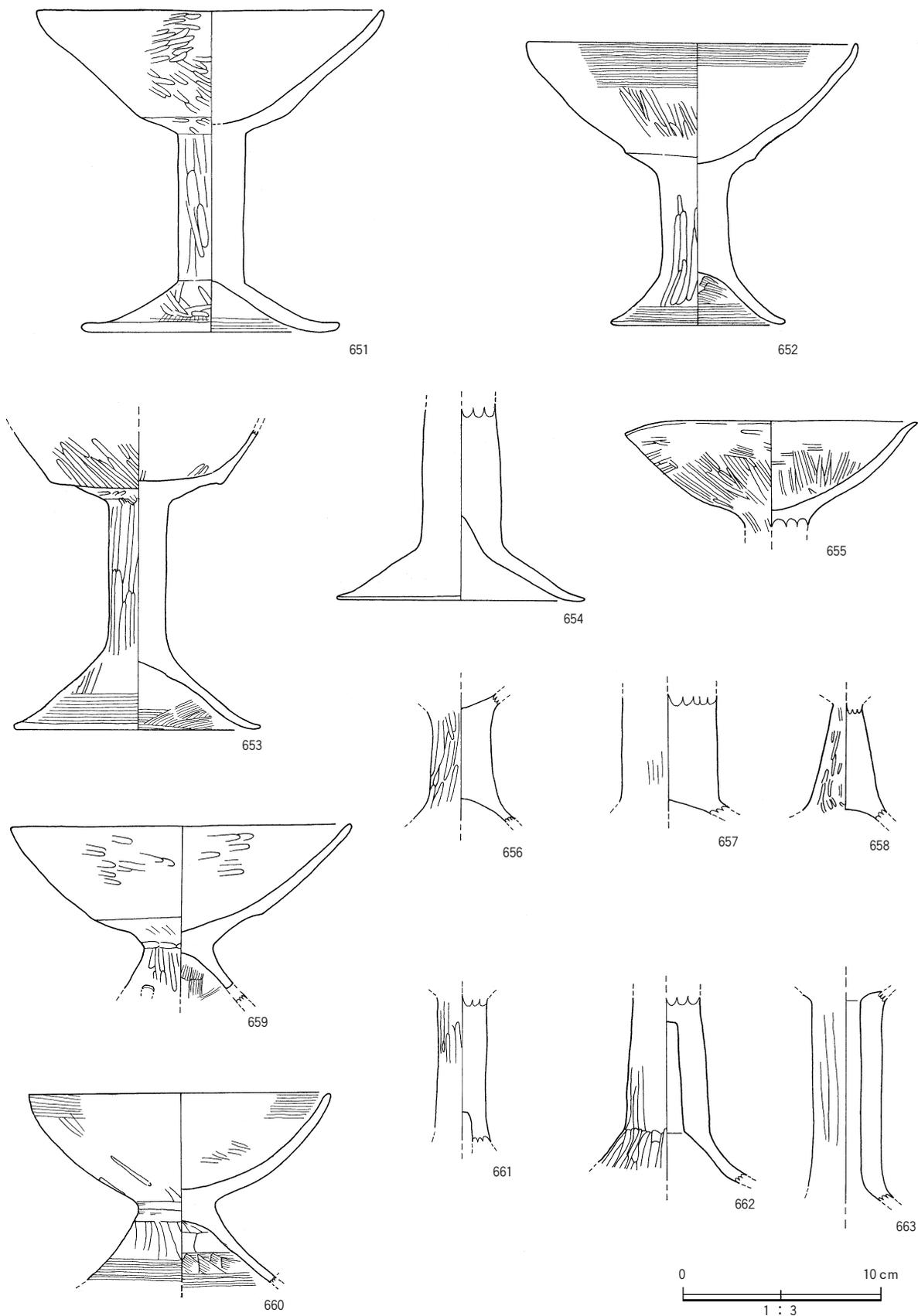
第109図 S G252川跡出土遺物 (13)



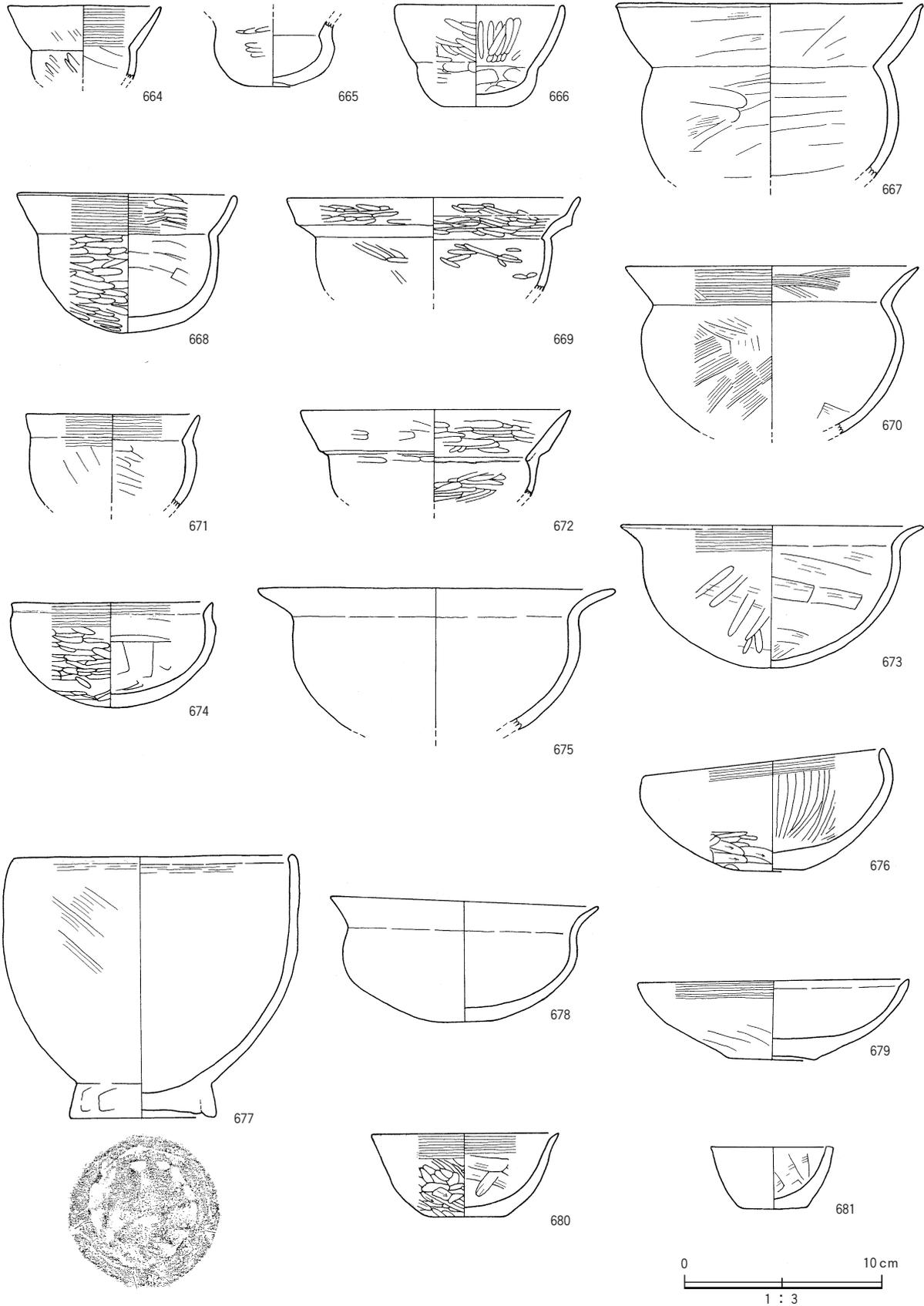
第110図 S G252川跡出土遺物 (14)



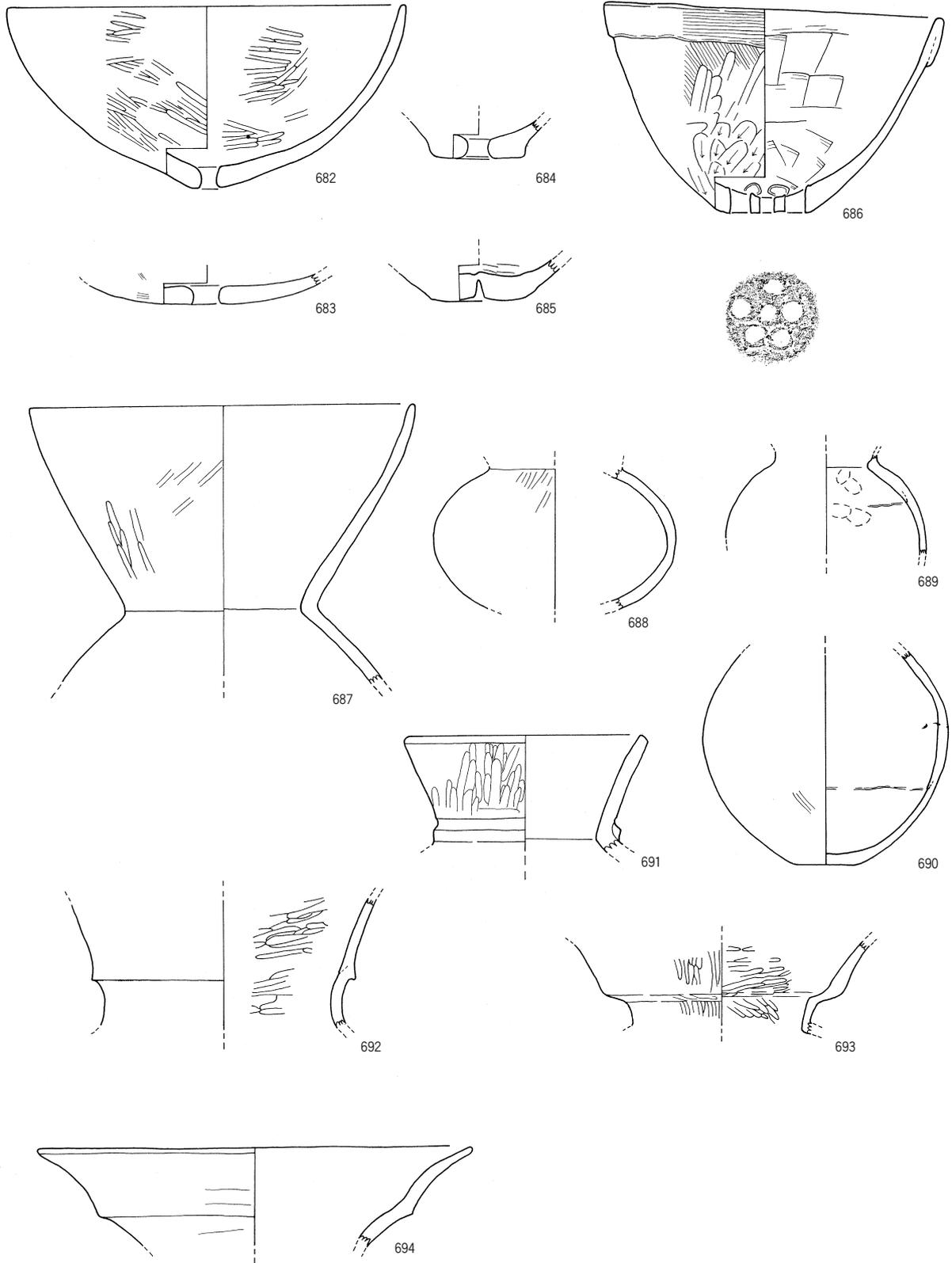
第111図 包含層出土遺物(1)



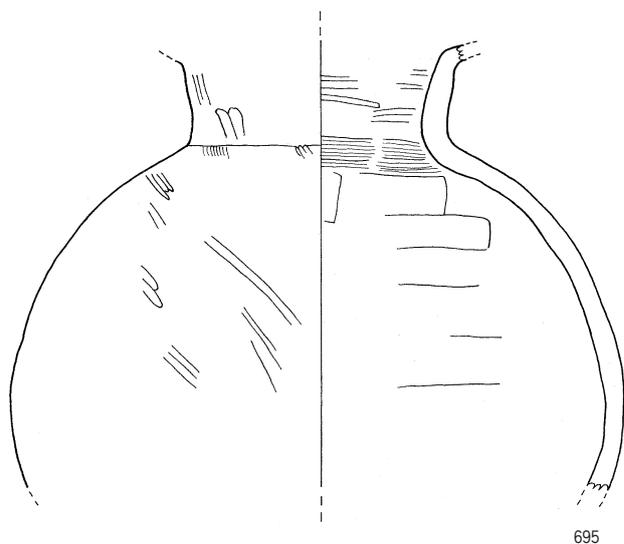
第112図 包含層出土遺物(2)



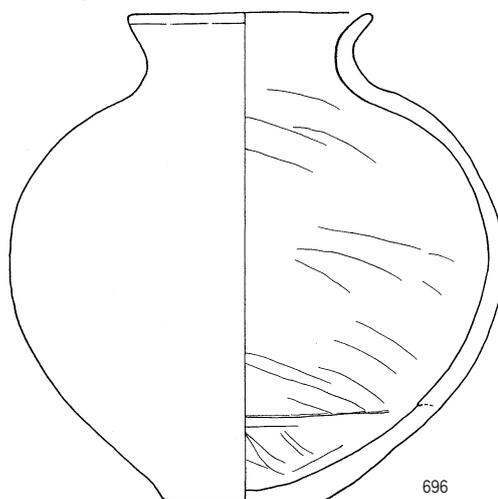
第113図 包含層出土遺物(3)



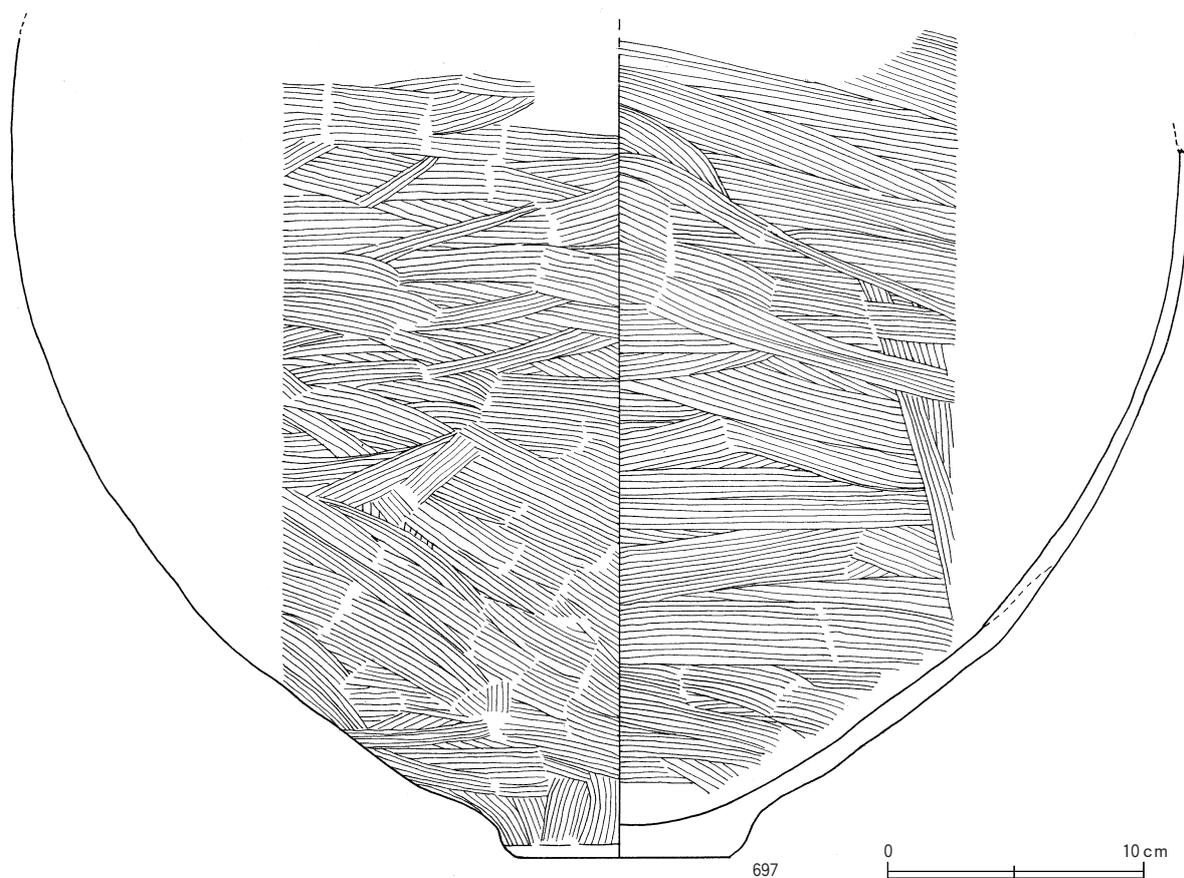
第114図 包含層出土遺物(4)



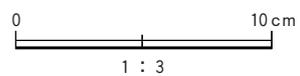
695



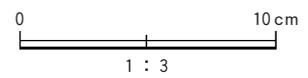
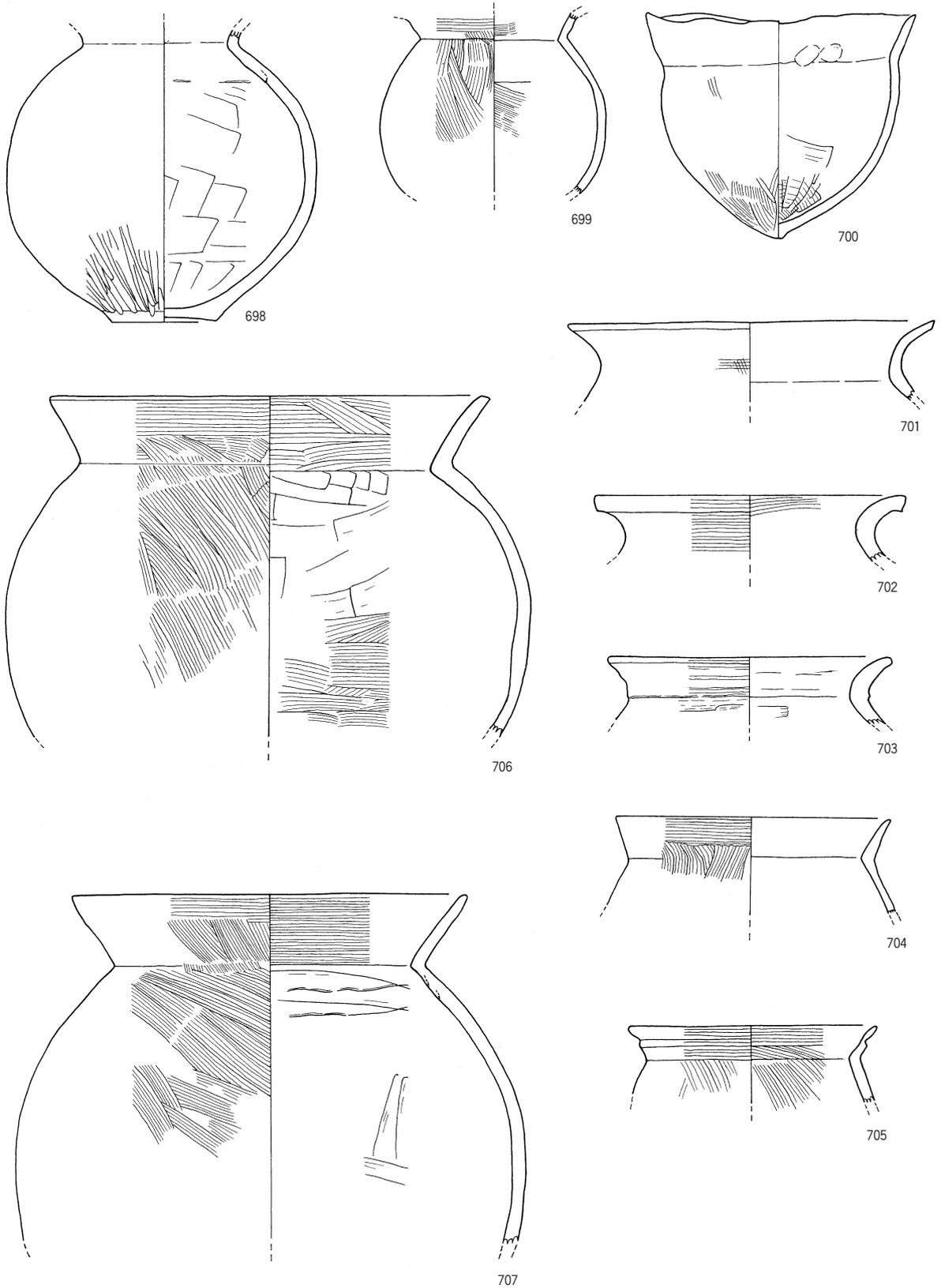
696



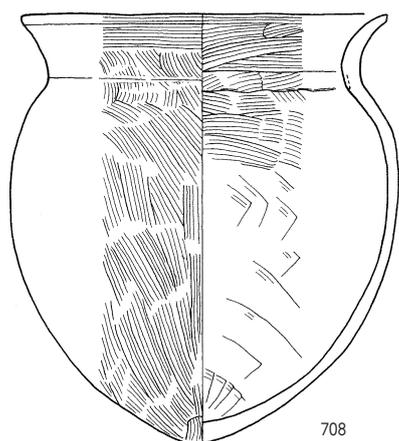
697



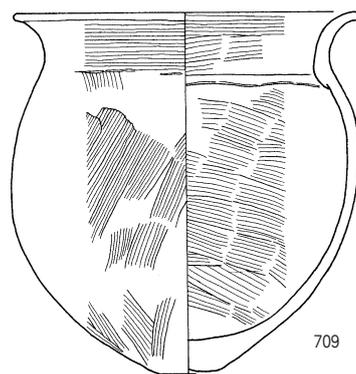
第115図 包含層出土遺物(5)



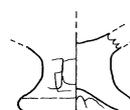
第116図 包含層出土遺物 (6)



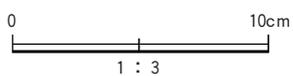
708



709



710



1 : 3



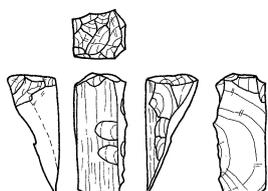
711



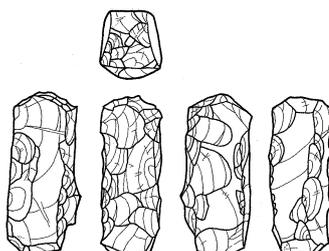
712



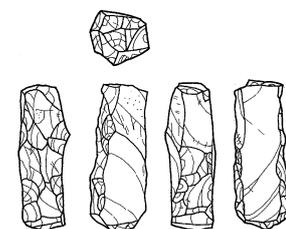
713



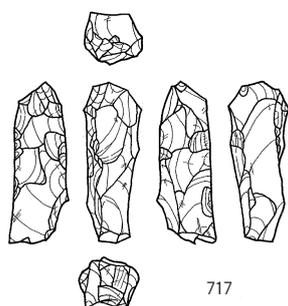
714



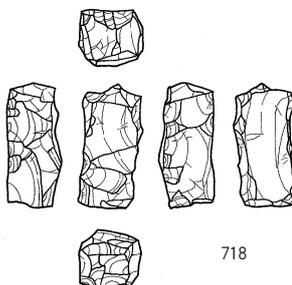
715



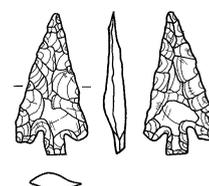
716



717



718

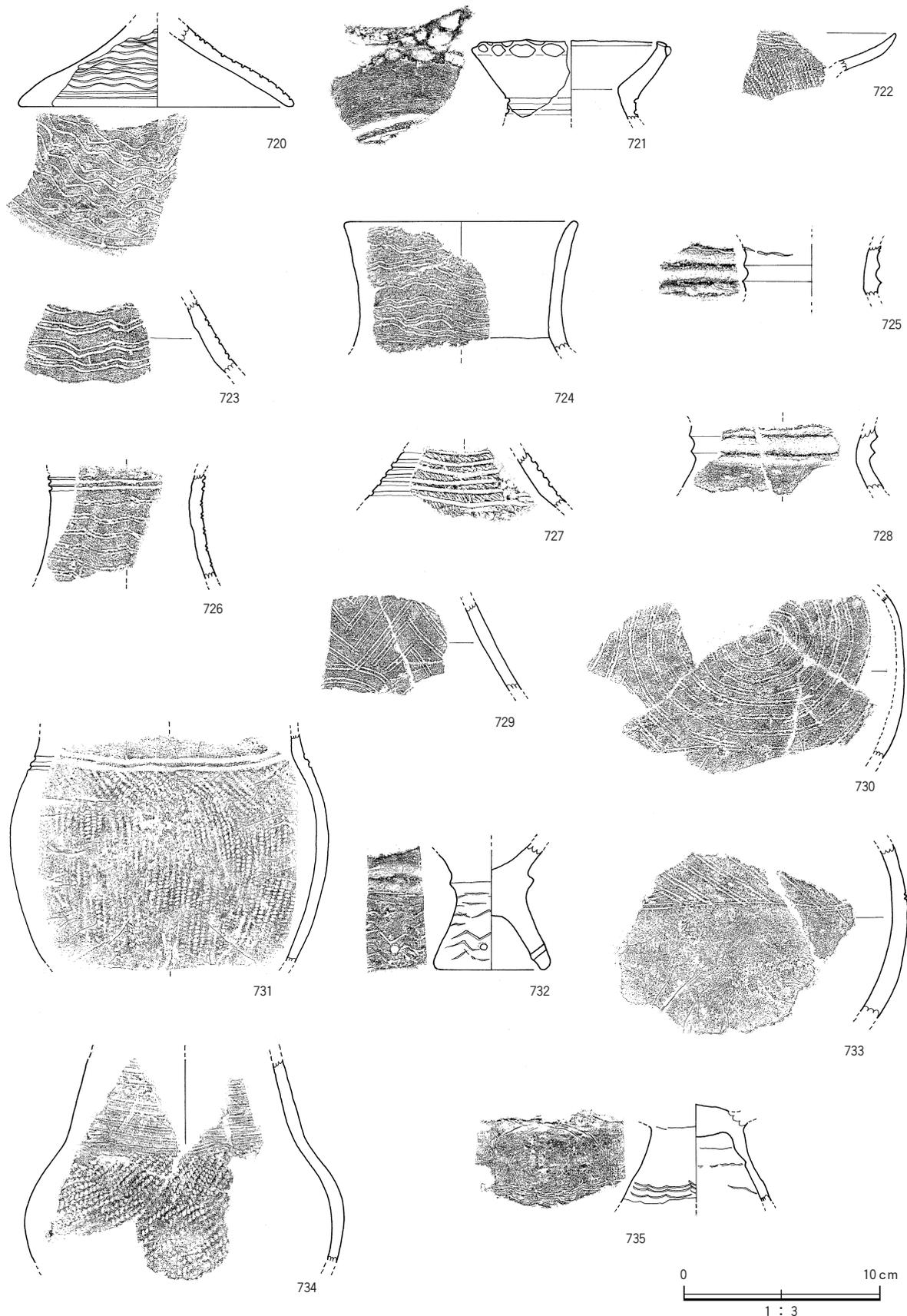


719

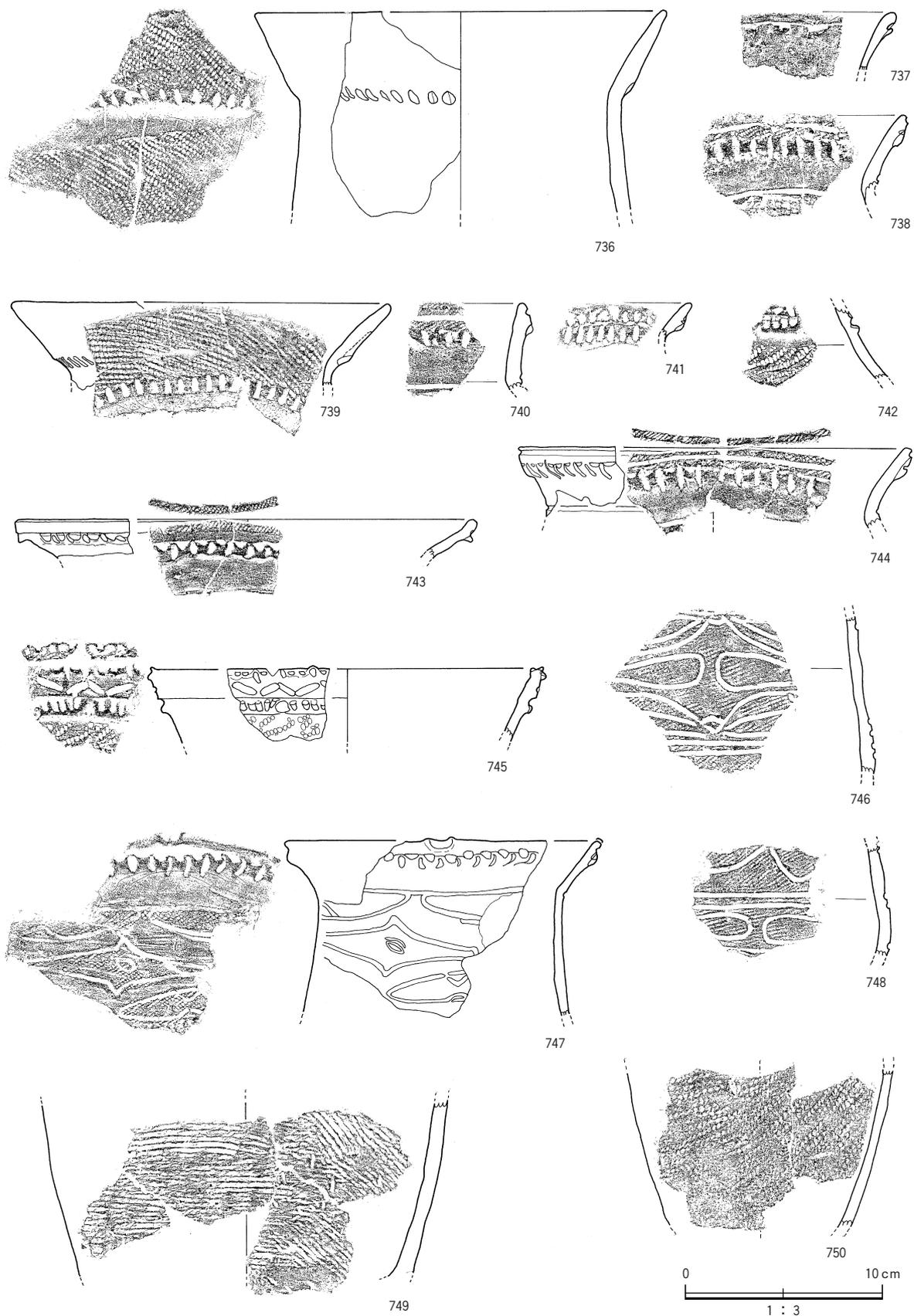


1 : 1

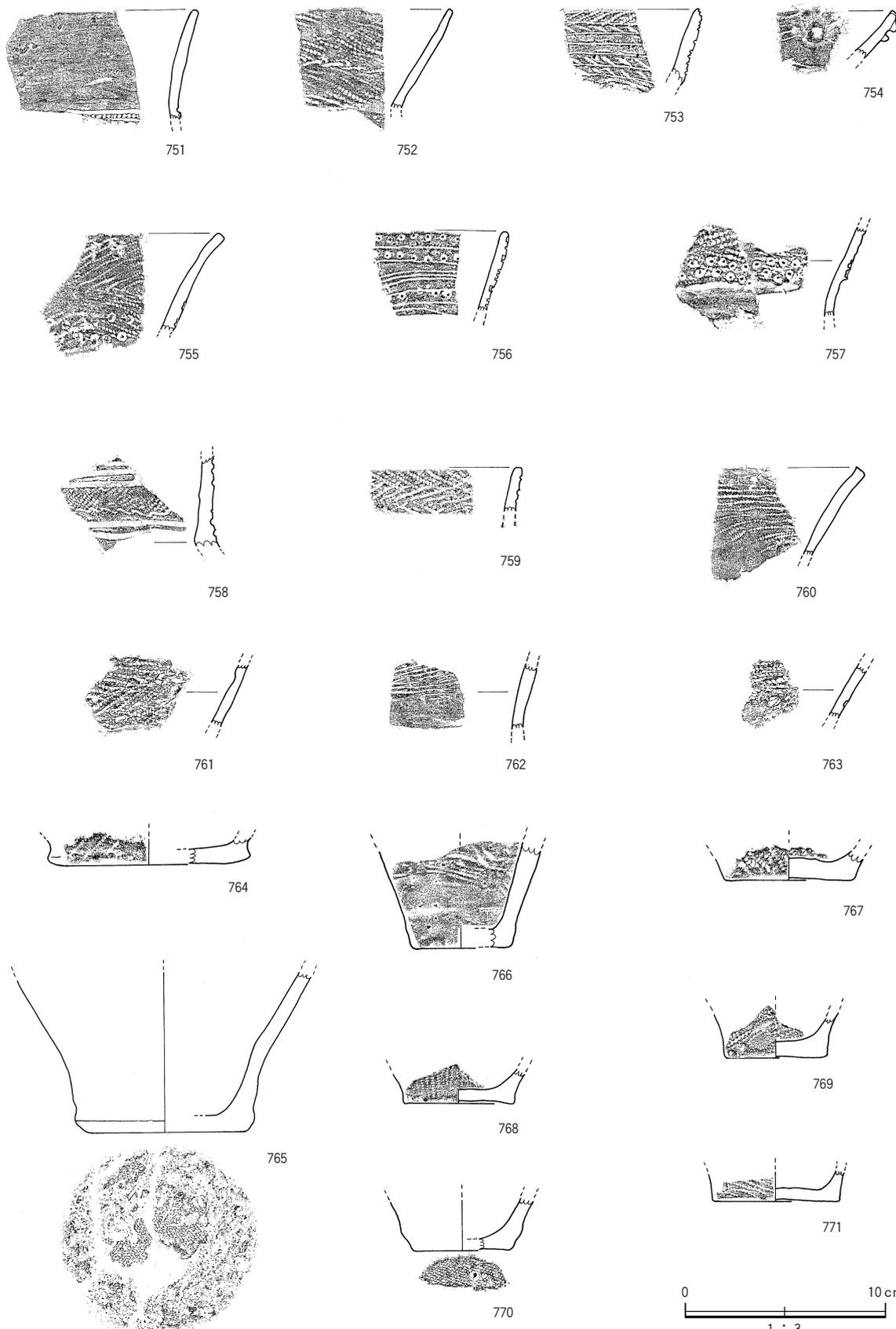
第117図 包含層出土遺物 (7)



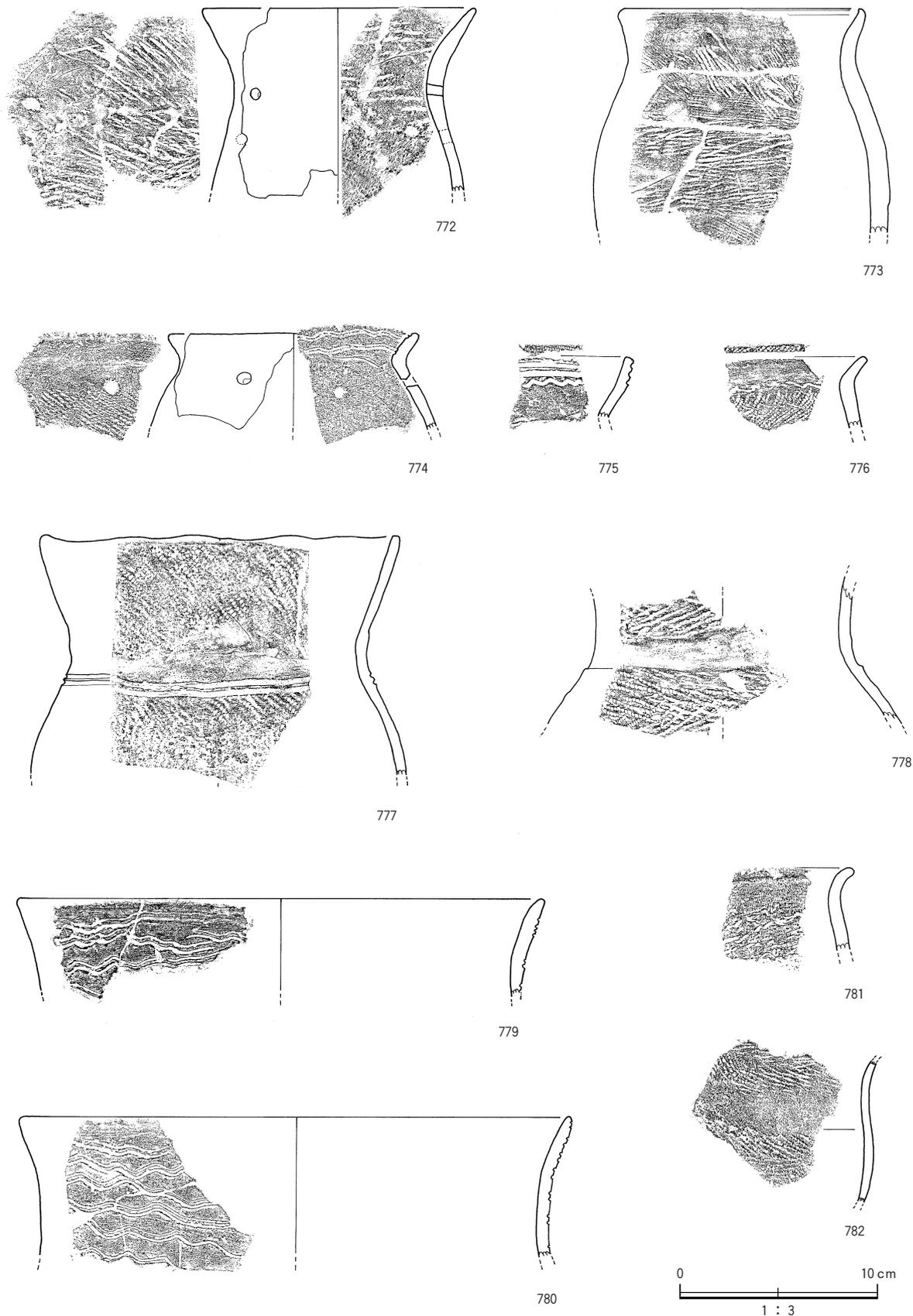
第118図 間層出土遺物(1)



第119図 間層出土遺物(2)



第120図 間層出土遺物 (3)



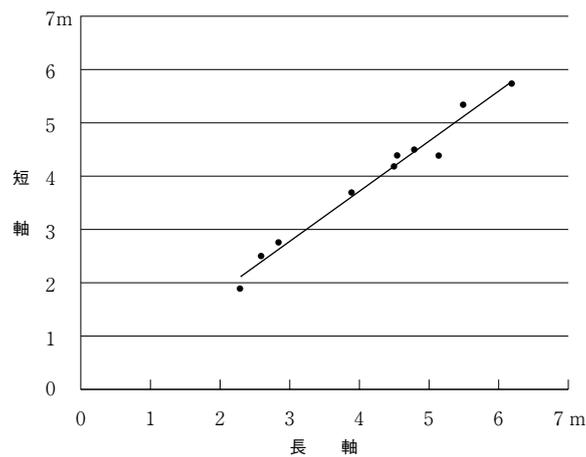
第121図 間層出土遺物(4)

確認作業時にはどうしても面を下げ気味にする傾向がある。その作業中、S D260とS G252に挟まれた、190・360～206・390区付近で、遺構確認面直下に部分的にレンズ状の間層が認められ、そこから時期の異なる土器片が出土している。観察の結果、前時代の地表に廃棄されたものと考えられ、その後土壌の堆積が進んで、それらが覆われた後、当該遺跡での生活痕跡が刻み込まれたものであろう。この前時代の部分的廃棄痕跡を「溜まり」と表現する。

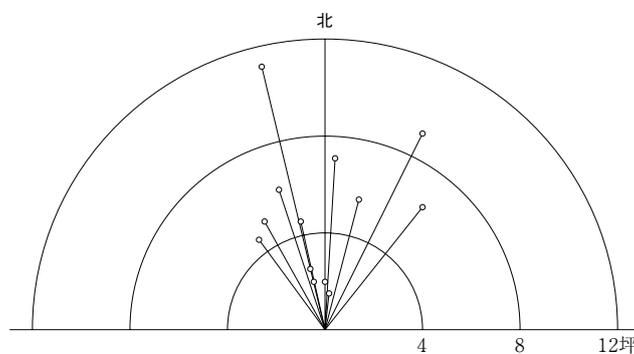
溜まりからの出土遺物は、この度の調査に伴う生活痕跡と直接結びつくものではないが、参考のためその主なものを収録した。ほぼ桜井式から天王山式、あるいはそれに後続する時期のものと思えられる。

### 3 竪穴住居跡の方向と規模

竪穴住居跡の主軸方向については、長軸、短軸が不明なものもあるため、南北軸を主軸とした。また座北は、当該地域では真北より $0^{\circ} 18' 24''$ 西に偏しているが、ここでは座北をもって北とした。南北軸は座北を基準に、東西辺が遺っている場合は両辺の方向の平均値を、片辺



第122図 竪穴住居跡の軸長比



第123図 竪穴住居跡の主軸方向と規模

のみの遺存の場合は残存辺の方向を主軸方向とした。規模については、両辺が判るものについてはその平均値を、片辺が不明の場合は残存長を軸長とした。

住居跡の面積は、各軸長を乗じて算出した。この方法で面積を算出すると誤差を多分に含むことになるが、概観するのが目的であるのでこの方法を採用し、さらに数値を丸めるために坪数に換算した。坪数については、①1尺を30.303cmとして算出した3.30578㎡、②1尺を30.3cmとして算出した3.305124㎡、③坪数の概数値である3.3㎡の3通りで計算してみたが、0.5坪を基準値として丸めたとき、いずれも同じ値を示したので、1坪=3.3㎡という概数を計算基礎とした。

第1次調査と第2次調査で25棟の竪穴住居跡を検出したが、そのうち、規模の判明したものの13棟を対象に主軸方向や平面規格、面積などについてみると次のようになる。

主軸方向は、概ね4つのグループに分けることができる。A；20度以上西に偏するもの（2, 210）、B；20度未満西に偏するもの（6, 12, 202, 204, 206, 209）、C；20度未満東に偏するもの（205, 212, 213）、D；20度以上東に偏するもの（208, 211）である。

長軸の方向は、東西に長軸を持つもの（2, 12, 202, 204, 210, 213）と、南北に長軸を持つもの（6, 205, 206, 208, 209, 211, 212）とに二分される。

面積は、4坪未満の小型住居（6, 204, 206, 213）、4坪以上8坪未満の中型住居（2, 12, 205, 208, 209, 210, 212）、8坪以上の大型住居（202, 211）とに分類することが可能である。

平面規格は、短軸を100として長軸の割合が105までのものを正方形、111以上のものを長方形と仮に呼んだ場合、正方形は7棟（6, 12, 204, 206, 209, 210, 211）、長方形は3棟（2, 205, 213）となる。また、これら13棟を、長軸をX、短軸をYとしてプロット（第122図）すると、全体が $y = 0.94x - 0.0361$ で直線回帰し、回帰直線の標準誤差は0.208となる。これから、長軸と短軸の比率は基本的に同様と考えることができ、住居同士の重複がほとんど見られないことなども併せて、さほど隔たらない時期にこれらの住居が造られたであろうことが想定される。

これまで竪穴住居跡の特徴を4つの面から見てきたが、主軸の方向で大まかに括ってみると205と213がほぼ同方向でありながら位置が近すぎる嫌いはあるが、他は無理なく同時存在している位置関係にある。また長軸方向で見ると、東西棟で20度以上東に偏するものはなく、南北棟で20度以上西に偏するものはない。そして213以外の東西棟は西に偏するということが判る。

この2つを組み合わせると、東西棟で3グループ、南北棟で3グループの、計6グループに分けることができる。即ち、①東西棟で主軸が東に偏するもの（213）、②東西棟で20度未満西に偏するもの（12, 202, 204）、③東西棟で20度以上西に偏するもの（2, 210）、④南北棟で20度未満東に偏するもの（205, 212）、⑤南北棟で20度以上東に偏するもの（208, 211）、⑥南北棟で20度未満西に偏するもの（6, 206, 209）である。

このように、長軸の向きと主軸の方向で仲間分けしたとき、それぞれのグループでは、各住居は適度な間隔を持ち、同時存在しても不自然ではない配置を示す。さらにS D260溝跡や沼沢を取り巻くように位置するS D261・262溝跡などの先後関係によって、概ね住居の移り変わりを把握しようと思われるが、ここでは詳細に立ち入らずグループ分けにとどめておく。

## 4 出土木製品の分類

### 1 出土木製品の概略

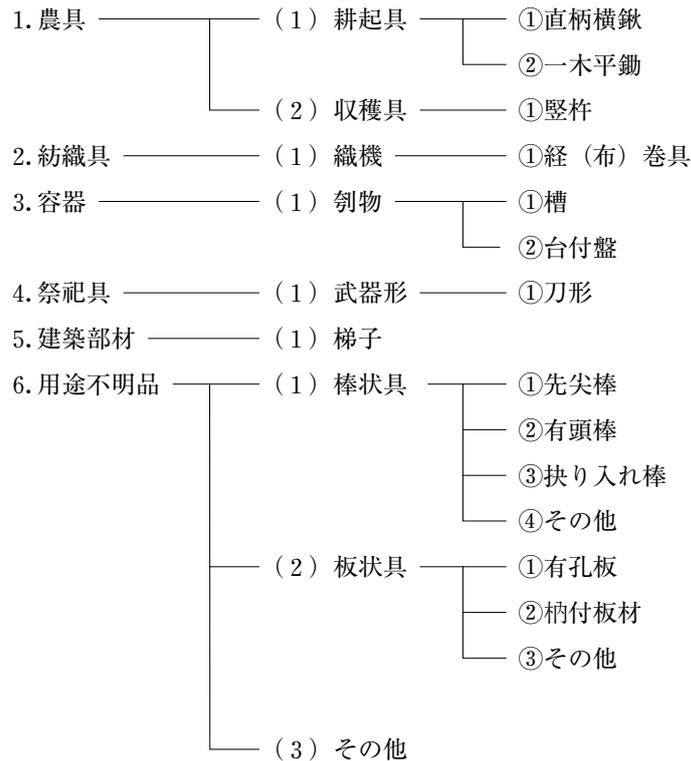
木製品はそのすべてが自然河川 S G 252からの出土品である。S G 252は調査区の東端で検出され、流路の西側斜面にあたる部分が調査範囲となっている。調査範囲内において、確認できた最下層は18層に達している。木製品が出土した「18」層は基本層序のⅢ層が河岸部の斜面に沿って底面まで入り込んでいるものである。基本層序Ⅲ層は遺構の掘り込み面であることから、河川「18」層も当該時期であると考えられることができる。

出土状況を観察すると木製品と共に土器類が斜面に貼り付くように出土しており、特に甕などの完形遺物は底面から斜面への立ち上がり部分に集中して出土している。木製品は河川跡底部付近に集中しており、付近からは大きな自然木が横転した状態で出土している。現地調査においては、人為的な加工の痕跡のない木片、自然木、流木の取り上げは行っていない。祭祀的要素を持つものに刀形の木製品の出土があるが、出土状況からは具体的な祭祀行為の復元は不可能であり、出土状況に特別の意味は見出せなかった。その他の出土木製品も部分的に欠損したり焼けたりしているものがほとんどであり、おそらく、集落の東端に位置する河川には、使えなくなった生活用具の投棄の場としての役割があったと考えられる。

### 2 木製品の分類

高嶺南遺跡出土の木製品について『木器集成図録 近畿原始篇』(奈良国立文化財研究所 1993)(以下『木器集成図録』と略記する)に従って機能分類を行い、用途不明のものについては形態分類を行った。下記の6項目に分類整理した。

1. 農具 (耕起具、収穫具)
2. 紡織具 (織機)
3. 容器 (刳物)
4. 祭祀具 (武器形)
5. 建築部材 (梯子)
6. 用途不明品 (棒状具・板状具・その他)



## 1. 農具

### (1) 耕起具

#### ①直柄横鋤

582は身部の平面形は横の長さが縦の長さよりわずかに大きく、刃縁に向かって広がる台形を呈する。柄孔は上端近くに穿たれ、断面形は円形である。身部後面の柄穴周囲は段をなして流線型に隆起する。木取りは横木取りの柁目板である。着柄角度は65°である。着柄角度からは打ち鋤としての機能が考えられるが、地面に対して木目が平行に入る場合、耕起具として刃先を土に打ち込んだり、柄の基部を持ち上げて土塊を引き起こす作業としては破損しやすい。比較的やわらかい土の耕起や土の表面を引き寄せるための作業などの引き鋤としての用いられ方などが考えられよう。用材はクヌギ節である。

身の形態は『木器集成図録』で「横鋤Ⅱ式」に分類され、柄穴周囲の隆起部分は「A4型」に細分されるものである。

#### ②一木平鋤

583は身と柄を一木から作り出す一木平鋤である。柄と身がほぼ一直線をなす形態と考えられる。肩の平面形は左右の肩が丸形と角形を呈し、左右対称にはならない。刃部の断面形は、身の前面・後面の区別が不明瞭で平坦な板状のものである。身は中心部をスリット状に欠損しており、先端が焼けている。柄部の基部の断面形は幅広の隅丸方形である。

樹種はスギで軽軟の材質であるため、農具にするには無理があり、掘削以外の用途も考えられよう。

『木器集成図録』で「Ⅰ式」とされるものである。

### (2) 収穫具

## ① 竪杵

584は片方の握部・搗部のみ残存している。搗部端で径が最大となり、搗部より握部にかけて漸次細くなる。搗部と握部の境は不明瞭である。搗部端が半球状に加工される。『木器集成図録』で「C類」とされるものである。

## 2. 紡織具

## (1) 織機

## ① 経（布）巻具

616は端部を一面から削り出して瘤を作り出した棒状のもの。経（布）巻具の一部分と考えられる。瘤部分は原始機の各部材を引っ張るための紐かけとみられ、経糸あるいは織りあがった布は、身の中央部を一段深く掘り下げた部分に巻かれたものと思われる。他端は欠損している。

## 3. 容器

## (1) 刳物

## ① 槽

585は側面の立ち上がりは緩やかで底面と側面の境は不明瞭である。破片資料であり全体の形状はうかがえない。586は側面の立ち上がりは緩やかで底面と側面の境は不明瞭である。破片資料であり全体の形状はうかがえない。590は側面部分のみの遺存である。厚手で大型品であったと考えられる。

## ② 台付盤

587は平面形が長方形を呈する盤状の台付容器と考えられる。盤と台とを一木で作りに出した刳物である。盤の上面はほぼ平坦で側面から見た場合、両端に向けて緩やかに反りあがる。台は盤側面よりやや内側から作り出す。長軸方向に造り出され、2列に平行するものと考えられる。

## 4. 祭祀具

## (1) 武器形

## ① 刀形

600は刀身部のみで抜身の状態である。鋒部より刃部を若干薄く削りだし、刃先部分を両端から削り出している。

## 5. 建築部材

## (1) 梯子

592は一本梯子である。足掛部は4段残存し、側面からみて上部を直角に、下部をなだらかに削って作り出している。端部の形態等は不明である。現場での取り上げ時に破損したため、実測図では欠落部分が生じてしまった。

## 6. 用途不明品

加工は施されているが、用途同定できないものを一括した。

## (1) 棒状具

## ① 先端棒

棒状具の一端が尖ったもののうち、刃材利用で丁寧な仕事で作られたもの、及び芯持ちの丸

木状の細棒利用のものでも削り出しによる整形が加えられた作りのものである。

603・602・610は細棒の先端部を多面に丁寧に削り出し尖らせているものである。他端が欠損している。621は割材を加工している。先端は4方向から削り出し尖らせている。杭としての使用も考えられる。623は割材を加工している。両端が焼けているため端部の加工は明らかでない。603・602・610は細棒の先端部を多面に丁寧に削り出し尖らせているものである。他端が欠損している。

②有頭棒

棒状具の一端に頭部を作り出しているものである。

614は棒状具の端部を全面より抉り込み頭部を形作る。胴部は自然木のままで樹皮が残る。他端は折損している。615は棒状具の端部を多面に削っている。胴部は自然木のままで樹皮が残る。両端は欠損している。

③抉り入れ棒

610は細棒の先端部を多面に丁寧に削り出し尖らせているものである。抉りを入れて段を作り出している。他端が欠損している。

④その他

棒状具で①、②以外のものを一括する。

角材（620・623）分割材（622・624）丸材（625）がある。613は両端が欠損している棒状のものである。側面に樹皮が差し込まれている。柁目板を使用し、片面は、緩やかな凹みをもつ。両端に切断痕がみられるもの（620・625）がある。

（2）板状具

①有孔板

調整加工された板材に孔をもつものである。

601は両面平坦に加工され左側縁よりに2カ所の孔を穿つ。

②柄付板材

調整加工された板材に孔をもつものである。

598は両端を欠損する。中央に孔を穿つ。先端部に出柄を持つと考えられる。

③その他

板状具で①、②以外のものを一括する。588は組み合わせ部材である。抉りを入れた部分に別材を当てて木釘でまとめたと考えられる。木釘の痕跡が2カ所残る。589は板材を樹皮で綴じ合わせている。木釘が2カ所穿たれている。611は丁寧な調整である。626は両端に切断痕がみられるものである。

（3）その他

591は枠組み木製品である。方形枠型田下駄とも考えられるが足板が出土していないこと、田下駄としては幅が広いことから枠組み木製品とする。枠木には、横木を挿入するための方形孔をほぼ等間隔に穿ち、端部には紐かけと考えられる刳りこみを入れている。横木は枠木孔に挿入するための方形出柄を端部に削り出し、枠木柄穴横木を挿入したうえで楔を打ち込んで枠木と横木の固定をより強固なものにしている。横木の片側は両面を削り角を作り出している。

枠木、横木その他端は焼けて欠損している。枠木はカツラ、横木はスギ、と部位によって用材

の選択を行っている。617は上下を切断し、側面を面取りして丸みをつけている。中心に斜めに溝が掘られ、棒状具が組み込まれる形状である。618は上下は切断痕がみられる。一方の側面は刃先のように薄く作り出されるが他方は平坦である。上方は柄か柄のように削り出されている。

## 5 出土土師器の分類

今回の調査で出土した土器は、ポリコンテナにして200箱近くに及んでおり、そのほとんどがいわゆる「古式土師器」として認識できる土器である。おもに堅穴住居跡・溝跡・土坑・自然河川・包含層からの出土である。自然流路から出土した遺物は土器類が斜面に貼り付くように出土しており、特に甕などの完形遺物は底面から斜面への立ち上がり部分に集中して出土しており、廃棄されたものと考えられる。また、包含層の土器は遺構内の土器と接合するものが多く、包含層中からの遺構の掘り込みが推測された。今回の調査は限られた範囲に留まるため、分類にあたっては、未調査部を含む本遺跡の概要を類推するために、自然流路、包含層出土、土坑の土器までを含んで行った。また、破片資料も出来るだけ図化を行った。個々の遺構出土の分類のために土器分類組成表を付した。

### 鉢形土器（第124・125図）

口縁部断面形態、体部形態から分類した。法量は口径で大形品（20～30cm前後）中形品（13～19cm前後）小形品（12cm前後）がある。出土点数の内訳は中形品、小形品が多く、大形品はごくわずかである。調整は大形品には内外面にハケメが多用されるが、中形品、小形品にはミガキを入念に施すものが多い。

#### 鉢A類 大形の鉢

A 1 類 口縁部が有段のもの

A 2 類 口縁部が内彎するもの。内彎する長い口縁をもつもの（A 2 a）、短い口縁をもつもの（A 2 b）がある。

鉢B類 有孔鉢。底部に孔を穿ったもので、甌としての機能も考えられる。単孔（B 1）、多孔（B 2）がある。B 2は新しい要素がみられる。包含層から1点のみの出土である。

鉢C類 無頸の鉢。底部の形状で細分する。

平底（C 1）、丸底状（C 2）、のものがある。底部が欠損しているものでC類としたものには、有孔鉢が含まれているかもしれない。

鉢D類 脚台をもつ鉢。

単純口縁で片口をもつもの（D 1）と無頸のもの、無頸で片口をもつもの（D 2）がある。

鉢E類 口縁部が有段で、浅い体部を有するもの。

鉢F類 口縁部が有稜で、浅い体部を有するもの。

口縁径が器高より大きいもの（F 1）、ほぼ等しいもの（F 2）がある。

鉢G類 単純口縁で浅い体部をもつもの。

G 1 類 口縁部が外反するもの（G 1 a）、と外傾するもの（G 1 b）がある。

G 2 類 口縁部が内彎し、底部が上げ底のもの (G 2 a) と、口縁部が外反し底部が平底のもの (G 2 b) である。G 1 類に比べ、体部が扁平である。

鉢H類 椀状の浅い体部を有するもの。胎土が精製され軟質であることでも鉢C類と分けられる。鉢形土器の中でも新しい様相を持つ。

鉢I類 単純口縁でやや深い体部をもつもの。

I 1 類 口縁部が外反するもの。

I 2 類 口縁部が短く外反し、底部が平底のもの。

I 3 類 口縁部が外反し、底部は上げ底のもの。

I 4 類 口縁部が内彎し、底部が平底のもの。

I 5 類 凹み底に焼成後穿孔されたもの。

鉢J類 小型で平底の鉢を一括する。

鉢K類 丸みをもつ体部と、体部から大きく屈曲して開く口縁部をもつもの。

K 1 類 口縁部が内彎するもの。

K 2 類 口縁部が外傾するもの。

鉢L類 いわゆる小型丸底土器と称されるもの。口縁部と体部の相関関係と口縁部の形状から細分する。L 1～L 5 は定型化した「小型丸底鉢」として、器台との対応関係が明瞭なものである。小型精製 3 器種の小型丸底鉢がこれにあたる。

L 1 類 口縁部高が体部高の 2 分の 1 以下であるもの。口縁部は内彎する。

L 2 類 口縁部高が体部高のほぼ 2 分の 1 であるもの。口縁部は外傾する。

L 3 類 口縁部高が体部高とほぼ等しいもの。口縁部は内彎する。

L 4 類 口縁部高が体部高を凌駕するもの。口縁部は内彎する。

L 5 類 口縁部高が体部高と等しいか、凌駕するもの。ほぼ球形の体部をもち、頸部が強くくびれ、屈曲部内面に明瞭な稜線をもつ。

鉢M類 平底の鉢で容量の小さなもの。

口縁部の形態には、小さく外反する口縁をもつもの (M 1)、体部がやや内彎して上方にのびるもの (M 2)、内彎するもの (M 3) がある。

#### 器台形土器 (第125図)

受部・脚部の形態、受部から脚部への貫通孔の有無により分類した。脚部円窓の数については観察表に呈示した。調整は高坏とほぼ同じく、坏部内外面がタテやヨコ方向のミガキ、ヘラナデ、脚部外面はタテ方向のミガキである。

器台A類 鉢と器台を結合したような形態をもついわゆる「結合器台」である。北陸地方に系譜がたどれる。非日常的な祭祀に伴う土器と考えられている。

調整は受部・脚部外面はタテ方向のミガキ、脚部外面には前段階のハケメ調整が残る。脚部内面は指でナデ調整をしている。脚部裾部は欠失している。

器台B類 「八」の字状に開く脚部をもつもの。受部に対して脚部高の割合が高いもの。受部の形状で細分する。

B 1 類 内彎する小さな受部をもつもの。受部から脚部への貫通孔をもつもの (B 1 a) と

もたないもの（B 1 b）がみられる。調整は受部外面はヨコ方向のミガキ、脚部外面はタテ方向のミガキである。

B 2 類 内彎して口縁端部が外折するもの。

B 3 類 口縁部と底部との境に、稜をもつもの。受部外面は不定方向のミガキ、脚部外面はタテ方向のミガキである。赤彩の施されているものもある。

貫通孔をもつもの（B 3 a）と、もたないもの（B 3 b）がみられる。

B 4 類 浅い皿形で受け口状のもの。受部から脚部への貫通孔をもつ。調整は受部内外面・脚部外面にタテ方向のミガキが施されている。なかには、暗文風に、入念にミガキの施されているものもある。

B 5 類 内彎しながら外方に伸びる受部をもつもの。全体に器壁の厚いことに特徴がある。受部から脚部への貫通孔をもつ。不定方向のミガキで調整され、1次調整のハケメが残るものも見受けられる。

B 6 類 内彎しながら外方に伸びる受部をもち、「X字形」を呈するもの。

器台C類 無頸の鉢に台が付いたようなもので、厚手のものである。

器台D類 脚部がやや内彎して開くもの。

器台E類 B類に較べ脚裾部の広がり小さいもの。

器台F類 脚部上部が筒状にすぼまり、下部は外反して開くもの。

器台G類 脚部が台形状に開くもの。厚手で小型の精製器種とは様相が異なる。

器台H類 異形器台。炉形器台とも称されるものである。厚手で受部端部は丸みをもち、受部から脚部への貫通孔をもつものである。関東地方に類例が多くみられる。

#### 高坏形土器（第126図）

脚部の形態差でA～F類に大別する。坏部・脚部の形状や坏部と脚部の相関関係でさらに細分する。調整は坏部内外面がタテやヨコ方向のミガキ、ヘラナデ、脚部外面はタテ方向のミガキである。

高坏A類 「八」の字状に開く脚部をもつもの。畿内系ないし東海系土器の影響が考えられる。

坏部の形態でさらに細別する。

A 1 類 内彎しながら大きく開く椀形の坏部をもつ。県内では下槇遺跡に類例がみられる。

河川跡から1点のみの出土である。

A 2 類 坏部底面が平らなもの。口縁部形状は不明である。

A 3 類 口縁と底部の境が稜をなして屈曲し、内彎しながら外上方に開く坏部をもつ。脚部中位に円窓を4個穿つ。

A 4 類 口縁部が屈曲して立ち上がり外反するもの。口縁端部は面をつくる。

高坏B類 脚部上半が柱状で、下半が「八」の字状に開くもの。

B 1 類 脚部上半が柱状中空を呈し、脚部下半が外反しながら開くもの。口縁と底部の境が稜をなして屈曲し内彎しながら外傾してのびる坏部をもつ。円窓を3個穿つ。

B 2 類 脚部上半が柱状中実を呈し、脚部下半が外反しながら開くもの。坏部の底面が平坦で、口縁と底部の境が稜をなして屈曲する。

高坏C類 脚上部が柱状中空で、脚下部が屈曲して外反しながら開くもの。坏部は口縁と底部の境が稜をなして屈曲し大きく外傾し、口縁端部は内折する。坏部高が脚部高のほぼ2分の1である。

高坏D類 脚部柱状部の上半が中実で、下半が中空のもの。脚下部は、屈曲して外反しながら「ハ」の字状に開くとおもわれる。坏部の形状は不明である。

高坏E類 脚上部が柱状中実のもの。坏部と脚部の高さの比により細分する。E1～E3にかけて、坏部高の脚部高に対する割合が大きくなる。

E1類 坏部高：脚部高がほぼ1：2であるもの。脚部下部は屈曲して内彎しながら外方にのびる。坏部は口縁と底部の境が稜をなして屈曲する。

E2類 坏部高：脚部高がほぼ1：1～2であるもの。坏部高が脚部高の2分の1以上のものである。脚下部は屈曲して外反しながら「ハ」の字状に開く。坏部は大きく外傾し口縁と底部の境が稜をなして屈曲する。脚部外面にハケメの痕跡を残す。

E3類 坏部高と脚部高がほぼ等しいもの。脚下部が屈曲して外反しながら「ハ」の字状に開く。

口縁と底部の境が稜をなして屈曲し、坏部が大きく外傾するもの（E3a）と、明瞭に段をもち、内彎しながら外上方に開く坏部をもつもの（E3b）がある。

高坏F類 脚部が中膨らみの円錐状で、脚裾部の開きが大きいもの。高坏形土器の中でも新しい様相を持つ。SG252から1点のみの出土である。

#### 壺形土器（第126・127・128図）

口縁部の形態により分類する。壺は口縁部の形態の違いで二重口縁壺と単純口縁壺に大きく分けられる。ここでは二重口縁壺に含まれる有段口縁壺（壺A）と折り返し口縁壺（壺B）、単純口縁壺（壺C）に大別する。さらに口縁部や体部の形態差で細分をした。法量の扱いは甕形土器と同じである。調整は、口縁部内外面がヨコナデ、ミガキ、体部外面はハケ目の後、ミガキ、内面はヘラナデ、ハケ目を施しているものが多い。

壺A類 有段口縁のもの。

A1類 有段口縁を加飾したもの。東海系のパレス壺の影響が考えられる。

棒状浮文と円形浮文で装飾したもの（A1a）と、口縁下端部に刻目のみられるもの（A1b）がある。

A2類 有段口縁を加飾しないもの。

口縁内面の段が明瞭に作り出されたもの（A2a）と、内面の段が簡略化し、痕跡的になってきたもの（A2b）、内面に段が見られないもの（A2c）がある。

壺B類 折り返し口縁のもの。

B1類 折り返し口縁を加飾したもの。棒状浮文で装飾し、頸部に刻目をもつ突帯を巡らせている。

B2類 折り返し口縁を加飾していないもの。

一般的な壺形のもの（B2a）と、広口壺の系譜を引くと考えられるもの（B2b）がある。

壺C類 単純口縁のもの。

C 1 類 口縁部が外反し口縁端部を丸くおさめるもの。

体部が丸みをもつもの (C 1 a) と、体部がやや長胴のもの (C 1 b) がある。

C 2 類 口縁部が外反し口縁端部に面をもつもの。

頸部で屈曲し、外反するもの (C 2 a)、口縁内面に木口による刺突をしたもの (C 2 b)、口頸部が直立し、口縁部にかけて外反するもの (C 2 c) がある。

C 3 類 口縁部が外傾し、頸部に突帯が巡るもの。

C 4 類 口縁部が直立するもの。

C 5 類 口縁部が内彎するもの。

頸部で屈曲し、内彎するもの (C 5 a) と、頸部が直立し、口縁にかけて内彎するもの (C 5 b) がある。

壺D類 直口の壺である。

D 1 類 長頸の口縁部をもつもの。頸部で屈曲し、わずかに内彎しながら大きく開く。

D 2 類 短頸の口縁部をもつもの。

頸部のしまりが比較的強いもの (D 2 a) としまりの弱いもの (D 2 b) がある。

D 1 類とは、器高に占める口縁部の高さの割合が低く、頸部のしまりも弱いものであることで識別される。

壺E類 小形の壺で口縁部が短いもの。

口縁部が外反するもの (E 1) と、口縁部が内彎するもの (E 2)、口縁部が直立するもの (E 3) がある。

壺F類 小形品より小さく、ミニチュア土器といわれるものである。

### 甕形土器 (第129・130図)

分類は、おもに口縁部断面形態により A～F に大別し、体部形態からさらに細別した。

法量は器高により、大形品 (40cm前後) 中形品 (25cm前後) 小形品 (15cm前後) がある。出土点数の内訳は中形品、小形品の順に多く、大形品はごくわずかである。調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面はハケ目、内面はヘラナデ、ハケ目が施されているものが多い。

甕A類 口縁部が有段で大きく外反するもの。北陸地方に通有にみられる壺形土器の口縁に類似するが、頸部のしまりの弱いこと、外面に煤の付着の顕著なことから甕に分類した。

体部は倒卵形で最大径を中程より上にもつ。外面の口縁部はヨコナデ、体部はハケメのあとヨコナデで調整する。

甕B類 口縁部が単純口縁で大きく外反するもの。

甕C類 口縁部が「く」の字状もしくは「コ」の字状を呈するもの。北陸北東部の「千種型甕」、  
「能登甕」などとよばれるものに近似する。

口縁部の微細な形状、体部形態により細分する。

C 1 類 口縁部が外反して口縁端部を上方につまみ上げて面を作り出すもの。

体部が倒卵形で最大径を中程より上にもつもの (C 1 a)、体部がやや長く、最大径を中程にもつもの (C 1 b)、体部が丸みをもつもの (C 1 c) などがある。

- C 2 類 口縁部が外反して口縁端部に面を作り出すが、上方につまみ上げられないもの。  
体部が倒卵形で、最大径を中程より上にもつもの (C 2 a)、体部がやや長く最大径を中にもつもの (C 2 b)、体部が球形に近い丸みをもつもの (C 2 c) がある。
- C 3 類 口縁部が外反して、口縁端部が丸くおさまるもの。  
体部の最大径を中程よりやや上にもつもの (C 3 a)、体部がやや長く、最大径を中程にもつもの (C 3 b)、体部が丸みをもつもの (C 3 c) がある。
- C 4 類 口縁部が外傾して、口縁端部が丸くおさまるもの。  
体部の最大径を、中程よりやや上にもつもの (C 4 a)、体部がやや長く、最大径を中程にもつもの (C 4 b)、体部が丸みをもつもの (C 4 c) がある。
- 甕D類 口縁部の断面がいわゆる「S字状」をなすもの。東海地方の系譜に連なるものと考えられるが、東海地方のものと比較するとかなり変形している。
- 甕E類 脚台をもつもの。甕D類の台部と考えられる。  
台部外面はハケメのあとナデ消している。内面は砂混じりの土を補充し、なでつけている。
- 甕F類 A～Dの概念より外れるもの。
- F 1 類 口縁径が器高とほぼ同じか、超えるもの。体部最大径を中程より上にもつ。  
口縁部が外反するもの (F 1 a) と、内彎するもの (F 1 b) がある。
- F 2 類 口縁径が器高とほぼ同じか、超えるもの。体部が丸みをもつもの。
- F 3 類 口縁径が器高を超えるもの。体部の膨らみが少ないもの。
- F 4 類 口縁径が器高を超えるもの。体部が底部にかけてすぼまり、尖底のもの。
- F 5 類 手捏ねで全体に稚拙な作りのもの。輪積み痕が顕著に残る。

#### 小型土器 (第126図)

手捏成形によるもので、壺形、高坏形、鉢形などの形態がある。

#### 蓋 (第126図)

主に鉢や壺の蓋に用いられたものである。

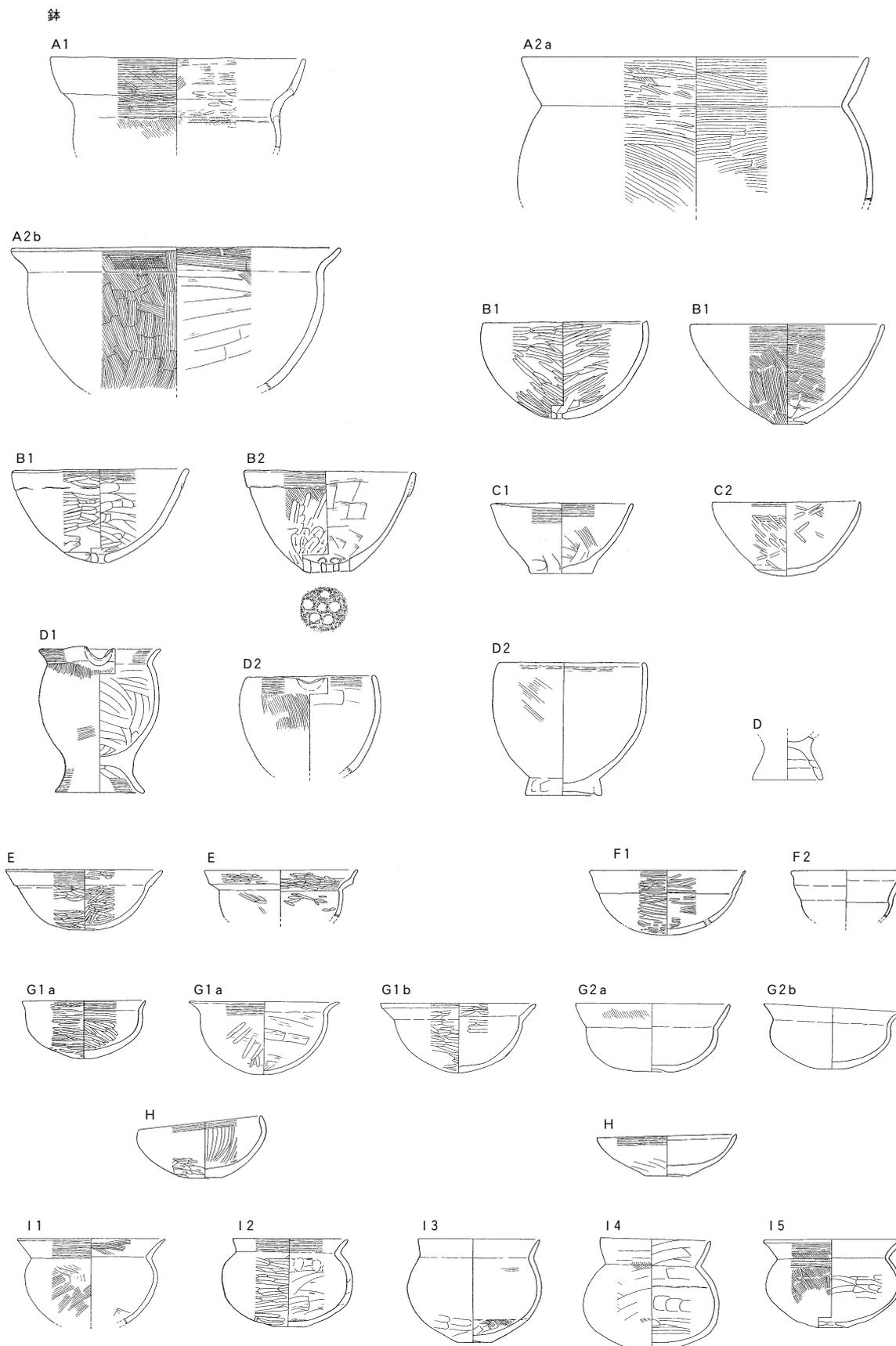
わずかに内彎する体部をもつ。頂部の形態は不明である。一点のみの出土である。

高嶺南遺跡からは、古墳時代前期のものと考えられる住居跡が25棟検出されている。出土遺物も古墳時代前期に比定されるものである。包含層・河川跡出土を含めて分類を行ったために土器の様相に時間的な幅をもつ結果となった。ここでは、竪穴住居出土の土器群を「新潟シンポジウム編年」(1993) に対比し、概ね2期に分けて述べることにする。

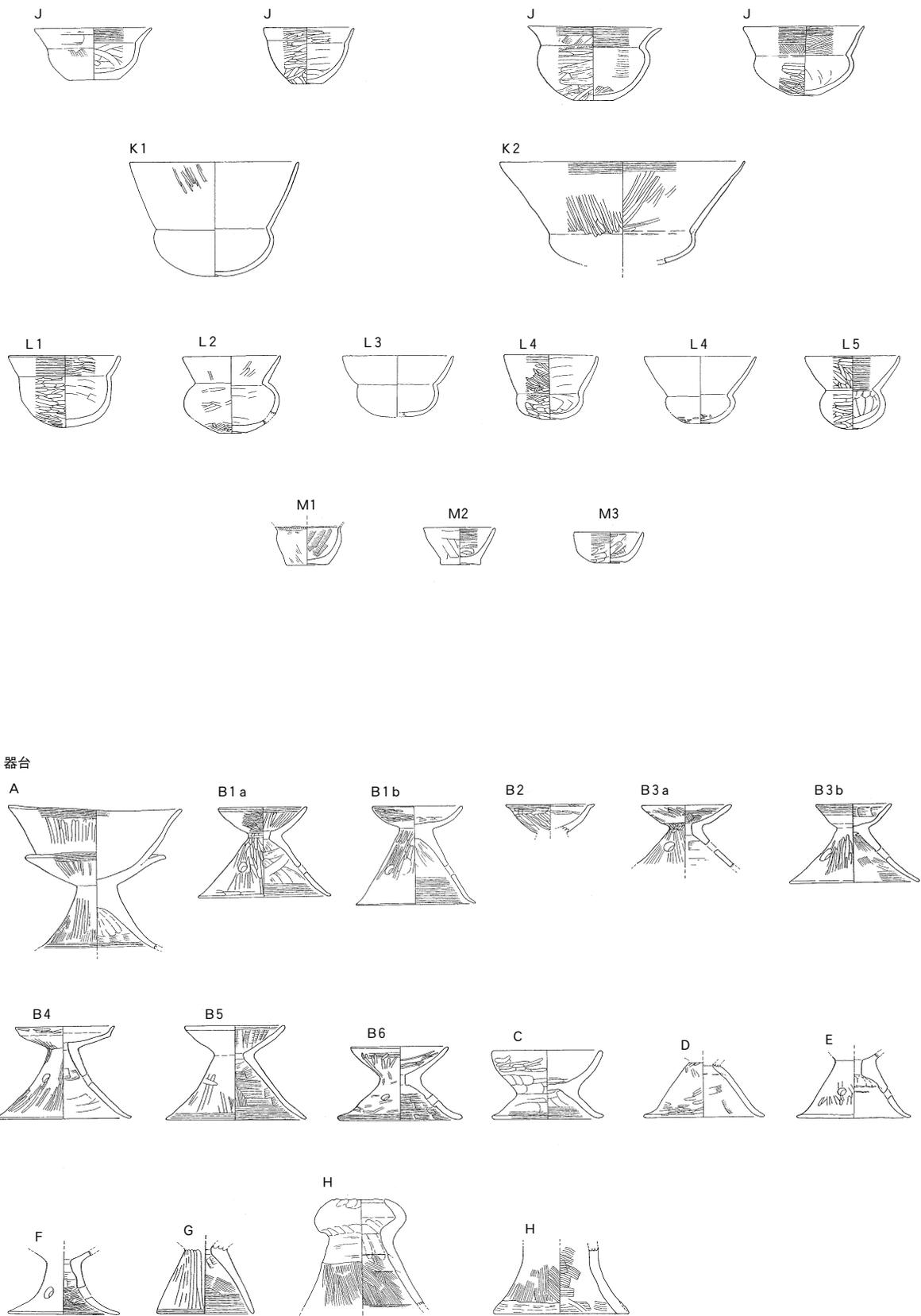
1期 ST 9・ST 205・ST 209・ST 212出土の土器が相当する。

壺はC 1 a、C 1 b、D 1、D 2 b類、甕はB 3 a、C 3 a、C 4 c、C 5 b類が認められる。C類は北陸北東部(能登)に系譜がもとめられる、所謂「く」の字口縁甕で、口縁端部を丸くおさめるものである。

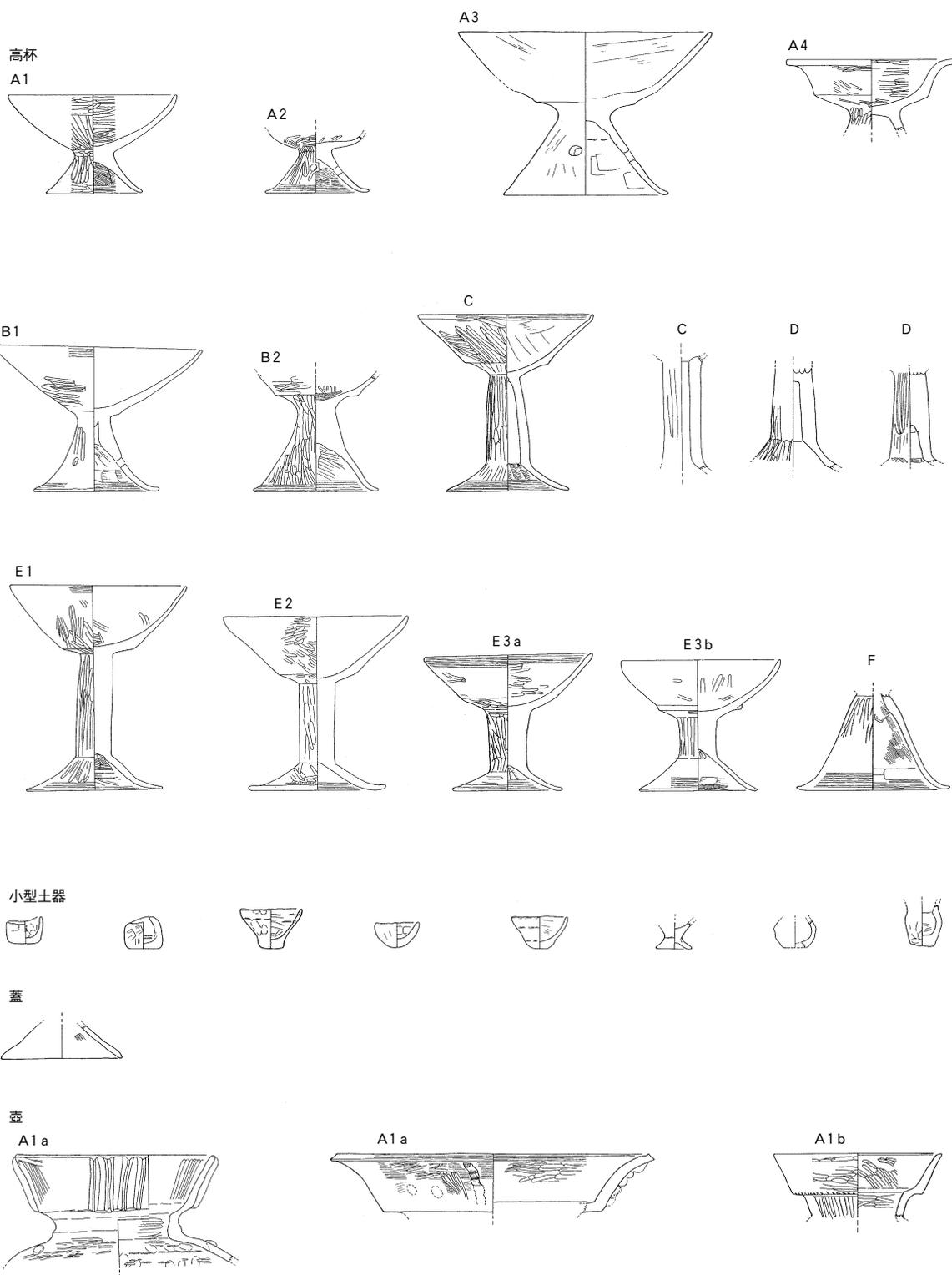
器台はB 4類がある。鉢はA 2 a、B 1、K 2類で大形のものである。高坏はA 1・A 3、



第124図 土師器分類図(1)



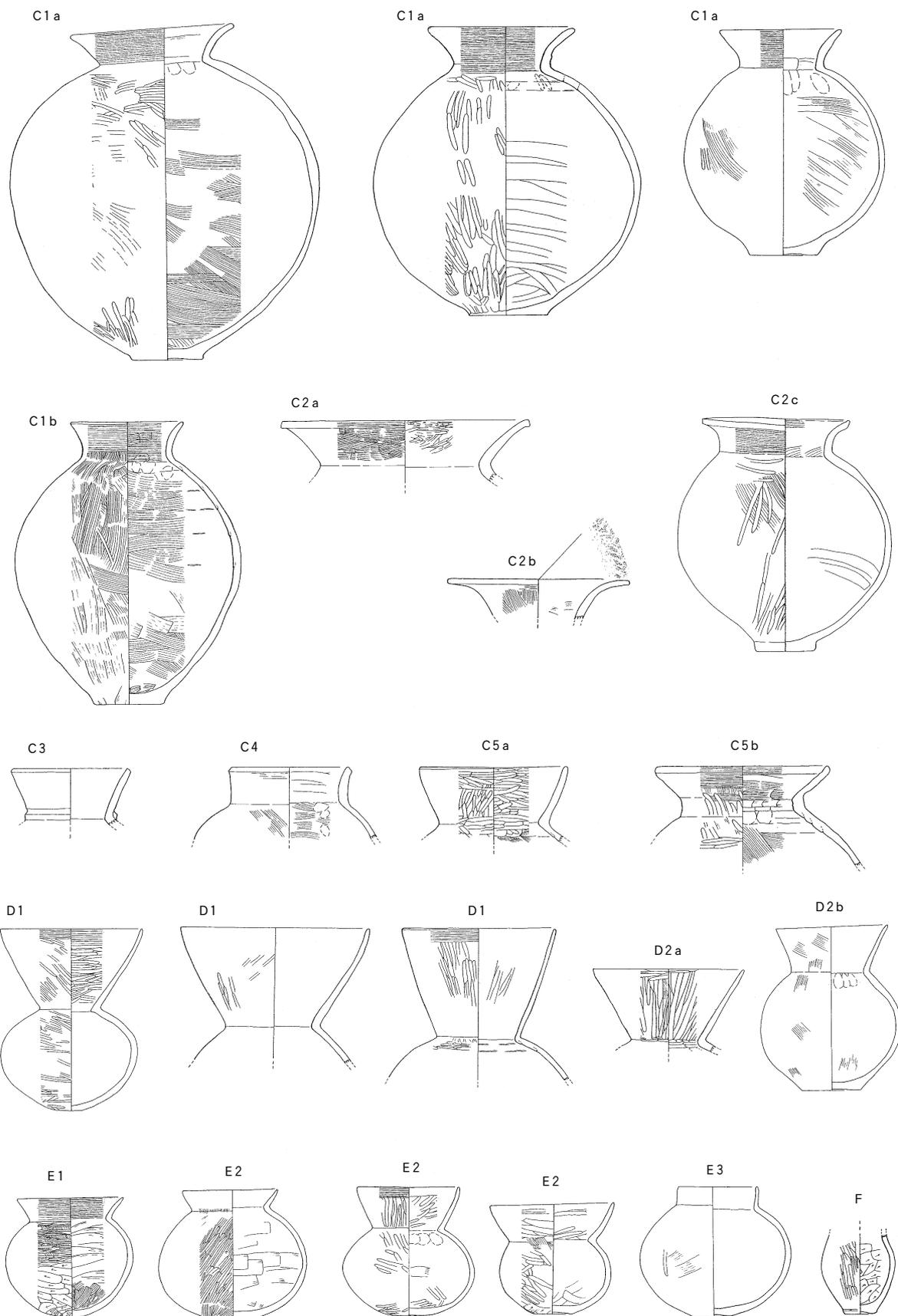
第125図 土師器分類図(2)



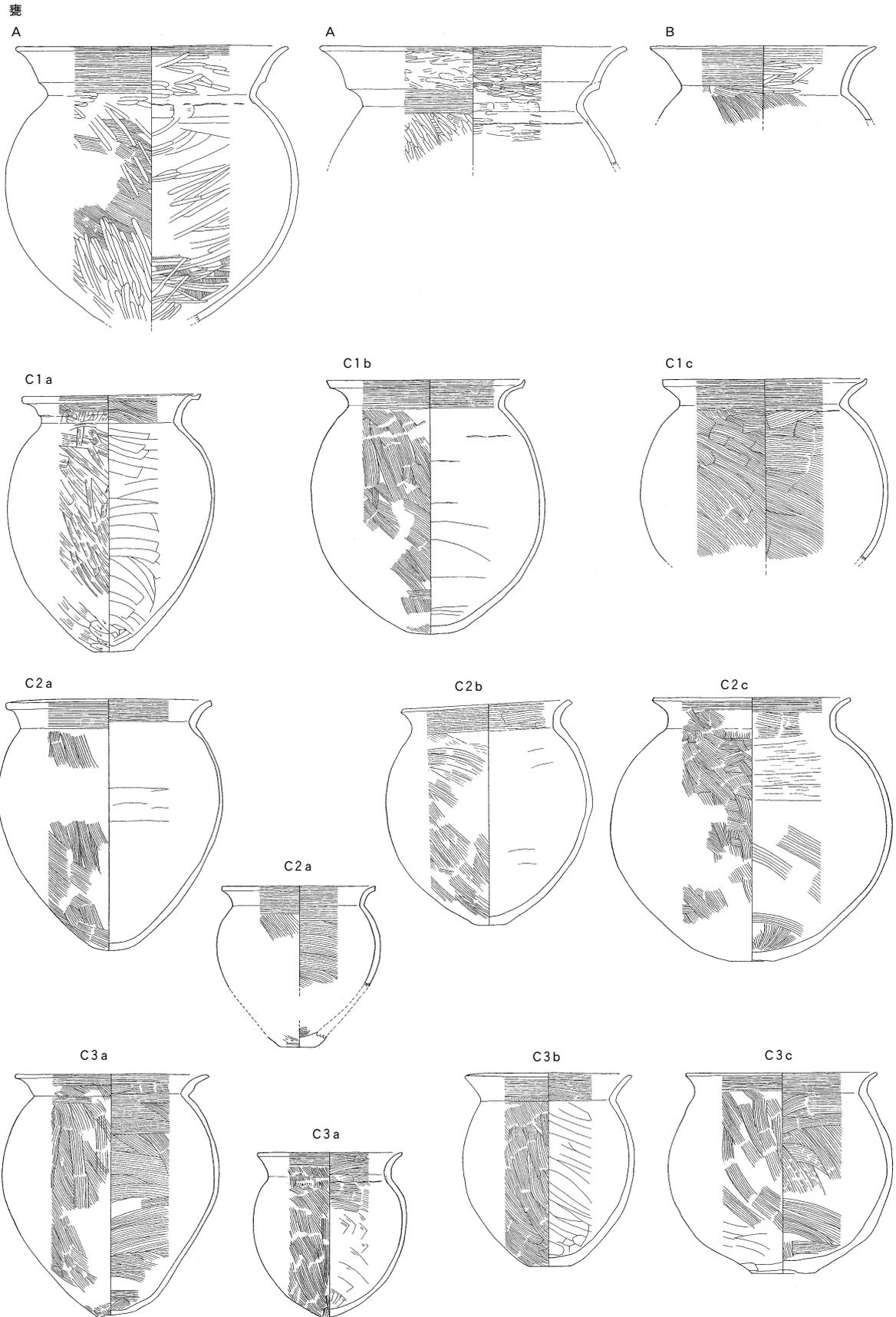
第126図 土師器分類図(3)



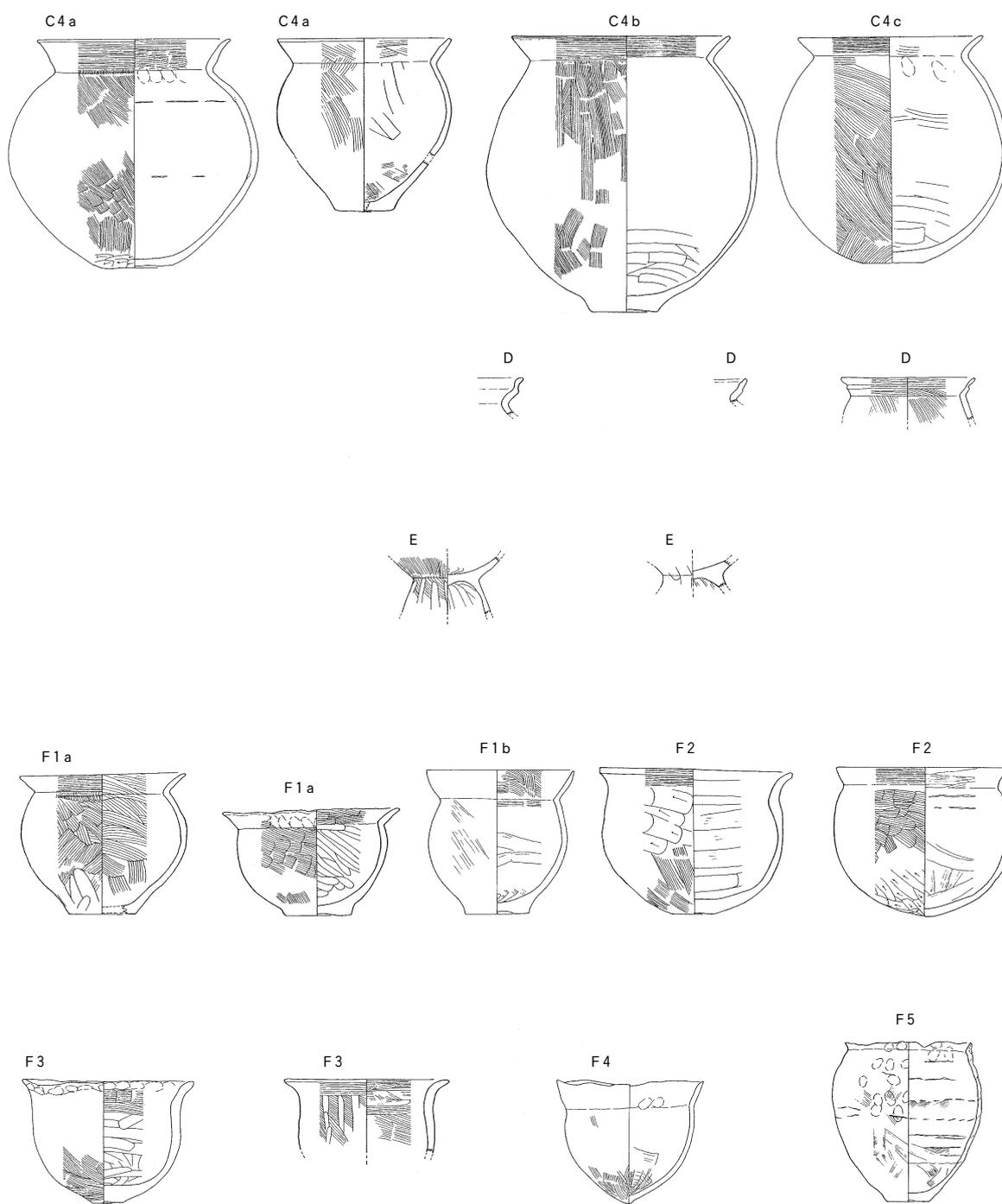
第127図 土師器分類図(4)



第128図 土師器分類図 (5)



第129図 土師器分類図(6)



第130図 土師器分類図(7)





A 4 類で、脚部が円錐台状のものである。これらは、東海地方の元屋敷土器に系譜がもとめられるもので、東日本に定着をみている。A 3 類は S T 9 床面からの 1 点のみの出土である。

古墳時代前期において、高坏の坏部は椀形から扁平化し、脚部は内彎から内反、柱状化の変遷が認められている。

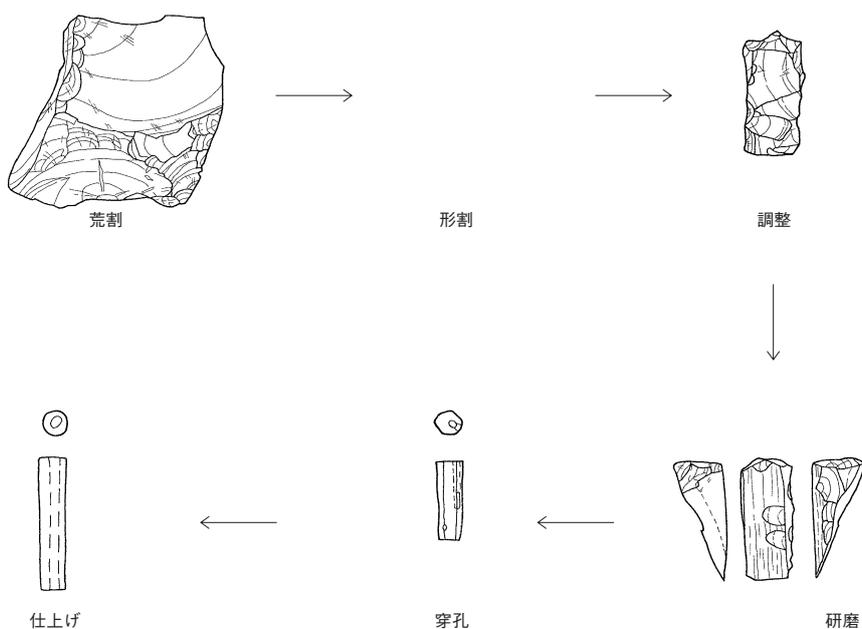
2 期 S T 7・S T 15・S T 201・S T 202・S T 210・S T 211 出土の土器が相当する。

壺は、A 1 a、A 2 a、A 2 b、B 1、B 2 a、B 2 b、C 1 a 類が認められる。A 1 a 類は有段口縁を棒状浮文や円形浮文で加飾したもので、東海系の系譜がうかがえるものである。B 2 b 類は広口壺の系譜を引くと考えられるもので、関東地方にその系譜がうかがえるものである。有段口縁で頸部に隆帯を巡らす壺 B 1 類は漆町編年では 7～8 期、辻編年では II 期に確認例が多いとされ、浮文で加飾したものは漆町編年では 7～8 期、辻編年では II-1～III-2 期に比定されている。

甕は B 2 a、C 1 a、C 1 b、C 2 c、C 4 b、C 4 c、D 2 a、D 2 b、E 1、F 1 a、F 2 類とバラエティーに富んでいる。C 類は、北陸北東部に系譜がもとめられる所謂「く」の字口縁甕で、C 1 a、C 1 b、C 2 c は口縁端部に面をもつ。

器台は、A、B 3 b、B 4、H 1 類が認められ、A 類は装飾器台で北陸地方に系譜がたどれるものである。H 1 類は、関東地方に特に多く分布する異形器台であり、炬形器台とも呼称されているものである。B 3 b、B 4 類は浅い坏部をもつ所謂幾内系の小型器台である。

鉢は E 2、F 1、G 2 a、G 2 b、J、L 1、L 3、L 4 類が認められる。L 類は小型精製



第131図 管玉製作工程図

土器の小型丸底土器である。

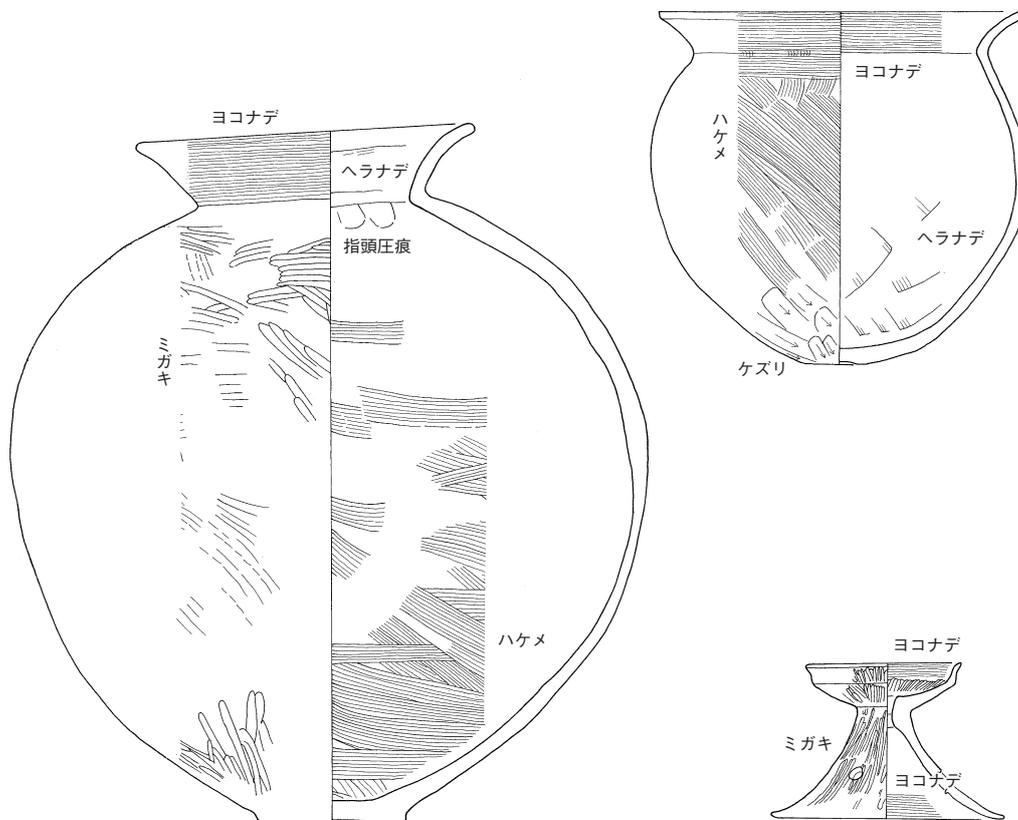
高坏はC、E 1、E 2、E 3類が認められる。C類は脚部が棒状中空・E類は棒状中実化したものであるが、S T 211 堅穴住居跡からは両者が共伴して出土している。S T 202 堅穴住居跡からは、精製品を中心として、多様な器種の土器が出土している。

これらを「新潟シンポジウム編年」に対比するならば、1期は同編年の7期段階を中心とした時期に位置づけられる。S T 9 堅穴住居跡は、脚部が円錐台状の高坏A 3類の出土がみられることから、この中でも古い様相をもつものである。2期は同編年の8～9期段階を中心とした時期と考えられる。1期・2期は4世紀初頭から中葉に位置づけられるものである。

## 6 管玉の製作工程

今回の調査では、住居跡内の床面及び堆積土中、包含層などから管玉完成品3点、製作途中の未成品7点、剥片2点、製作段階に生じた細片が出土した。製作に伴う用具は、砥石1点が認められた。

古墳時代の管玉製作工程については、寺村光晴氏によれば、荒割→形割→調整（押圧剥離）→研磨→穿孔→仕上げの6工程が認識されている。当遺跡の出土遺物には、母岩（石核）から



第132図 土師器調整痕凡例

剥片を作り出す荒割工程段階のもの（313・433）、荒割したのから角柱状の素材を作り出す形割工程段階を経て、角柱状の側面に押圧剥離の細かな調整を加え四角柱に作り出された調整段階のもの（29・715・716・717・718）がみられる。さらに研磨して多角柱を作り出す過程において欠けたものが（714）である。

研磨は、長軸に対して平行に施され、側面が多角柱状に作り出された素材に穿孔される。（713）は穿孔が斜めに施され、その後の仕上げの全面研磨において側面に孔が貫通してしまったものである。多角柱状の外表面を全面研磨して仕上げた完成品として（335・371・372）がみられる。これらは上下両端から穿孔され、中央付近で貫通している。砥石（70）は研磨行程の段階に使用したものである。

作り出された管玉は、細形管玉の範疇に入るものであり、材質は玻璃質流紋岩や泥岩を使用している。

古墳時代前期後半以降～中期にかけて、全国的に北陸産の緑色凝灰岩や流紋岩が流通する。グリーン・タフを形成する新第三紀の諸累層は、山形盆地をとりまく丘陵および山地地域にも厚く形成されており、石材の採取は可能と考えられる。管玉の製作技法からは、出土土器と同様に北陸地方及び新潟県の日本海沿岸から攻玉の技術の導入がなされたことが考えられ、古墳時代前期における当地方との交流が窺えるものである。

これらの未成品、剥片、製作段階に生じた細片などの出土から、本遺跡は管玉の生産遺跡であることが考えられる。今回の調査範囲からは、生産遺跡としての工房跡は確認されなかったが、さらに南西に延びる遺跡範囲に、種々の要素が存在する可能性が指摘できよう。消費地の検討は今後の課題である。

## 7 調整技法凡例

土器の記述や観察表に表した調整の技法に関連して、本報告で使用した用語の概念を凡例として次に述べる。（第132図、写真図版21）

**ケズリ** いわゆる従来の「ヘラケズリ」であり、ヘラ状の工具によって粘土を削り取ったもので、実測図には削平幅とその方向を矢印で表現した。器面の粘土を削り取ることによって、器厚を調節することを目的とする。器種を問わずみられるが、体部下半に多く施される。

**ハケメ** 板片を工具として用いていると考えられる。甕・壺・鉢の体部にみられ、余分な粘土の移動を行うことにより、器厚の均一化、器壁の平滑化などを図っているものと考えられる。また、条痕による表面積の増大などの効果も得られると推量される。

甕や鉢の底部内面、高坏・器台の脚部内面などには、明らかに器面の粘土のカキとりを目的として調整をおこなっているものも見られる。

工具幅は認められるが、条痕が明瞭でないものも見られる。これは、工具の角度や力の入れ方など、作業の状況によって生じ得るものとも推量される。

このように、同じ板状工具を用いて様々な機能を果たしていることが観察されるが、ここでは、条痕が観察されるものを一括してハケメとして表記する。

**ヘラナデ** 板片を工具として用いると考えられ、工具幅の内側に細かい擦痕を伴うことが多い。内面調整に多用されることが多く、ハケメに比べて、より平滑化に力点を置いているものと推

量される。甕・壺・鉢の内面、高坏・器台の脚部内面などに最終的な器面調整として用いられる。実測図には、工具幅とその軌跡のみを表現した。

**ヨコナデ** 微細な平行線が認められるもので、指・布・皮などを工具としたと考えられる。すべての器種にみられ、口縁部や高坏・器台の脚部下半に施される。最終的に器面をなでて仕上げる手法。

**ナデ** ナデ調整とされるもので、指頭あるいは布・皮などを用いたと考えられるが、具体的な道具は推定しがたい。器面の凹凸はほとんど見られないため、実測図には表現しない。

**ミガキ** いわゆる「ヘラミガキ」で、ヘラ状工具で器面の粘土を押しつけて緻密にし、光沢仕上げをする方法である。一般に数ミリから1cm内外の幅を持つものが多いが、細線を暗文風に施したものもある。すべての器種にみられるが、とくに壺外面や精製土器には多用される。

**指頭圧痕** いわゆる「指オサエ」で、調整というよりはむしろ成型作業上の一行為である。押捺により、粘土紐接合面を密着させて器壁を締め、平滑にする。甕・壺・鉢などの内面に多く用いられる。いわゆる手捏土器などの成形手法でもある。また、丸底の鉢の底部内面には、指頭でナデつけた圧痕が放射状に施されるものもある。ここでは、指オサエやナデつけなどを、指頭圧痕として一括した。

## 8 調査のまとめ

高楯南遺跡の発掘調査は、山形県警察本部による山形県総合交通安全センター（仮称）の建設事業に伴って、2次にわたって実施されたものである。調査の成果について以下にまとめてみたい。

1. 高楯南遺跡は、立谷川を挟んで山形市に隣接する天童市の南端部に所在し、立谷川と村山高瀬川によって形成された複合扇状地である立谷川扇状地の前縁帯に立地する遺跡であることがわかった。
2. 高楯南遺跡の1次調査と2次調査で検出された遺構は、竪穴住居跡、土坑、溝跡、畝状遺構、河川跡などがあり、時期的には、いずれも古墳時代前期に属するものであることがわかった。
3. 第1次調査では、14棟の竪穴住居跡、7基の土坑のほか、畝状遺構、河川跡などが検出され、土師器や土玉などの土製品、砥石や管玉などの石製品が出土した。
4. 第2次調査では、11棟の竪穴住居跡、9基の土坑、5条の溝跡のほか、畝状遺構、性格不明遺構、河川跡などが検出され、土師器や土玉、紡錘車などの土製品、農具や紡織具などの木製品、砥石や管玉などの石製品が出土した。また、遺構検出面の下から弥生時代後期の土器が出土し、生活の痕跡が認められないことから、当該集落が営まれる以前に、何らかの状況で投棄されたものであることがわかった。
5. 第1次調査の成果から、遺構は遺跡の東半部に集中し、西半部は、泥炭が露頭する低湿地であることがわかった。また第2次調査の成果から、集落は河川跡によって東を画されているであろうことが推察できた。総じて当該集落は、立谷川の自然堤防上の微高地に立地し、河川によって東を画され、集落の中心部は第2次調査区の西に求められるであろう

ことが推量される。

6. 第1次、第2次の調査を通して、管玉に関わる遺物が多く出土し、製作途中の未成品や管玉を研磨したと考えられる砥石などもあることから、工房跡こそ検出できなかったが、玉作を行っていた集落であることが考えられる。また織具の部品や紡錘車の出土、鋏などの農具、祭祀に用いたと考えられる刀形木製品、それに管玉関係遺物などから、米作りを主体にしながらも、玉作や紡織を行っていた当該集落のくらしのようすが推察される。
7. 出土した土師器には、北陸地方の特徴を残すものや東海・関東地方の特徴を残すものがみられるほか、かなり地域色の濃いものもみられる。北陸地方や関東地方の特徴を残すことについては、当該遺跡の土器群が、この地に到るまでに辿った道程を示唆しているのではないかと考えられる。

北陸系の文化と関東系の文化が出会うことについては、『古事記』の「四道將軍」派遣に係る「相津」説話が、実に示唆に富んでいると思われる。『古事記』には「……またこの御世に、大毘古の命を高志の道に遣わし、その子健沼河別の命を東の方十二道に遣して、そのまつろはぬ人どもを言向け和さしめたまひ、……かれ大毘古の命は、命のまにまに、高志の國に罷り行でましき。ここに東の方より遣わしし健沼河別、その父大毘古と共に、相津に往き遇ひき。かれ其地を相津といふ。……」と見える。

『日本書紀』には、「相津」に係る話はないが、四道將軍の派遣については、崇神天皇10年9月のこととしており、大毘古は大彦、健沼河別は武渟川別と表記されている。

少し乱暴な言い方をすれば、北陸方面と関東方面の土器が途中の地域色を吸収しながら、北上して会津（相津）で出遇い、檜原峠や大峠、白布峠など吾妻連峰の鞍部を経て、内陸路により当該地に到るルートが想起されるのではないだろうか。これについては、向後の資料の増加によって解明される時期を俟ちたい。

#### 引用・参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡1』  
 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書集第10集  
 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 新潟大会シンポジウム2『東日本における古墳出現過程の再検討』  
 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』  
 寺村光晴 2002 『玉作とその流通』『ものづくりの考古学-原始・古代の人々の知恵と工夫-』大田区立郷土博物館編・東京美術

表3 竪穴住居跡観察表

遺構番号	位置	平面形	主軸方向	規模(m)	深さ(cm)	長辺方向	ピット貯蔵穴	炉	柱穴	出土遺物(主なもの)	備考
S T 1	173・392～ 177・394	方形	N-41-W	(3.6)×(2.1)	32	不明	不明	不明	不明	土師器(壺2、甕1)	焼失家屋
S T 2	167・393～ 173・397	長方形	N-29-W	3.4×4.7	12	東西	不明	地床炉	なし	土師器(蓋1、壺1、甕3)	焼失家屋
S T 3	168・391～ 172・393	方形	N-5-W	(3.3)×3.4	16	南北	不明	地床炉	なし	土師器(鉢2、壺1、甕9)	焼失家屋
S T 4	165・390～ 168・392	方形	N-13-W	(2.4)×(2.2)	20	不明	不明	不明	なし	土師器(高坏1、鉢2、壺2、甕2)管玉1	焼失家屋
S T 5	163・389～ 166・391	方形	N-34.5-W	(2.4)×(2.1)	12	不明	不明	不明	なし	土師器(高坏1、鉢1、壺1)	
S T 6	143・384～ 145・386	正方形	N-1-W	2.5×2.4	12	南北	ピット3	地床炉	なし	土師器(鉢1、甕1)	
S T 7	136・384～ 143・388	方形	N-13-W	(4.5)×5.2	24	不明	不明	地床炉	(2)	土師器(器台1、鉢2、壺4、甕9)土玉2	焼失家屋
S T 8	124・378～ 132・382	方形	N-41.5-E	(5.1)×5.4	20	不明	不明	地床炉	なし	土師器(器台4、高坏1、鉢2、甕2)砥石1	焼失家屋
S T 9	120・379～ 126・382	方形	N-21-E	(4.3)×6.1	8	不明	不明	地床炉	なし	土師器(高坏1)	
S T 10	115・377～ 121・381	方形	N-44-E	(4.2)×5.7	28	不明	不明	不明	なし	土師器(器台1、甕3)砥石1	
S T 11	118・375～ 122・377	方形	N-38-E	(1.2)×(4.4)	20	不明	不明	不明	不明	なし	
S T 12	112・374～ 117・379	正方形	N-12.5-W	3.8×4	32	東西	不明	地床炉	なし	土師器(器台1、鉢3、壺5、甕5)	焼失家屋
S T 14	109・377～ 111・378	方形	N-49-W	(2.4)×(1.5)	28	不明	不明	不明	不明	土師器(鉢1)	
S T 15	106・371～ 111・374	方形	N-26.5-W	(1)×5.2	28	不明	貯蔵穴1	不明	不明	土師器(高坏2、壺1、甕4)	
S T 201	174・384～ 180・390	方形	N-16.5-E	(3.9)×5	25	不明	なし	地床炉	なし	土師器(器台1、高坏4、鉢3、壺2、甕5、小型土器1)	焼失家屋
S T 202	174・353～ 181・360	方形	N-13.5-W	5.75×6.2	22	東西	貯蔵穴1 ピット3	なし	4	土師器(器台6、高坏3、鉢7、壺19、甕11)土玉1、砥石1	焼失家屋
S T 204	189・351～ 192・354	正方形	N-12.5-W	2.5×2.6	2	東西	なし	地床炉	なし	土師器(高坏1、壺1、甕6)	焼失家屋
S T 205	169・362～ 173・368	長方形	N-3.5-E	5.15×4.4	3	南北	なし	地床炉	なし	土師器(器台2、高坏1、鉢5、壺10、甕7)	焼失家屋
S T 206	170・370～ 183・373	正方形	N-12.5-W	2.85×2.75	6	南北	貯蔵穴1	なし	なし	土師器(鉢1、壺6)	焼失家屋
S T 208	162・381～ 169・386	擬正方形	N-39-E	4.8×4.5	25	南北	土坑1 ピット2	地床炉	なし	土師器(器台3、鉢1、壺2、小型土器1)	焼失家屋
S T 209	195・370～ 201・376	正方形	N-18.25-W	4.55×4.4	8	南北	なし	地床炉	なし	土師器(壺4、甕2)	焼失家屋
S T 210	190・380～ 195・385	正方形	N-36.5-W	3.7×3.9	4	東西	なし	地床炉	なし	土師器(鉢1、壺4)	焼失家屋
S T 211	193・383～ 200・390	正方形	N-26.5-E	5.5×5.35	25	南北	貯蔵穴1 ピット2	地床炉	4	土師器(器台2、高坏5、鉢4、壺6、甕4)管玉原石1	
S T 212	177・377～ 182・382	擬正方形	N-14.5-E	4.5×4.2	7	南北	ピット2	地床炉	なし	土師器(器台2、鉢3、壺4、甕3)土製紡錘車1、管玉1	焼失家屋
S T 213	169・359～ 171・362	長方形	N-6-E	1.9×2.3	0	東西	なし	地床炉	なし	なし	焼失家屋

表4 土坑観察表

遺構番号	位置	平面形	規模 (cm)		深さ (cm)	出土遺物 (主なもの)	備考
			長軸	短軸			
S K 24	146・384～ 148・385	不整形	178	158	45	土師器 (鉢2、小型土器1、壺1、甕1)	
S K 26	151・387～ 152・388	楕円形	155	83	14	土師器 (壺1、甕1)	
S K 27	153・388～ 154・388	不整形	180	75	27	土師器 (鉢1、甕1)	S K 26を切る
S K 28	149・388～ 150・389	不整形	90	68	12	土師器 (器台1)	
S K 31	117・377～ 119・378	隅丸方形	198	110	60	土師器 (器台3、高坏1、鉢3、壺3、甕15)	
S K 32	145・387～ 147・387	不整形	175	185	64	土師器 (鉢4、壺3、甕4)	
S K 33	123・377～ 123・778	楕円形	175	117	18	土師器細片	
S K 253	199・344～ 201・344	不整形	70	61	26	土師器 (壺1)	
S K 255	189・370～ 190・371	不整形	136	93	12	土師器細片	S D 260を切る
S K 258	172・366～ 174・365	不整形	228	89	34	土師器 (器台2、高坏1、鉢2、壺2、甕9)	
S K 278	178・379～ 179・381	不整形	328	137	62	土師器 (器台6、鉢2、壺4、甕6) 石製品 (管玉2)	
S K 304	165・373～ 165・374	不整形	90	88	18	土師器 (壺1)	
S K 318	186・363～ 188・365	不整形	231	204	22	土師器細片	S D 260を切る
S K 337	189・384～ 190・386	不整形	130	90	23	土師器 (器台2)	
S K 340	193・363～ 195・362	方形	126	108	14	土師器 (鉢1、壺3、甕2)	
S K 348	207・381	円形	52	48	19	土師器 (甕1)	

表5 溝跡観察表

遺構番号	位置	長さ (m)	幅 (cm)		深さ (cm)	出土遺物 (主なもの)	備考
			最長幅	最短幅			
S D 260	170・345～ 208・392	63	210	90	43.5	土師器 (器台11、高坏5、鉢6、壺15、甕14) 石製品 (剥片1)	S T 202に切られる
S D 261	178・366～ 182・376	10.4	160	60	45	土師器 (器台2、高坏3、壺4、甕11)	
S D 262	164・375～ 169・383	8.8	95	45	22.5	土師器 (器台6、高坏3、鉢8、壺8、甕19)	
S D 319	179・361～ 182・363	9.3	25	15	6	なし	円形周溝 長さは外径を表す
S D 344	198・368～ 202・367	4.5	70	50	8	土師器 (鉢1、壺1、甕1)	

表6 木製品観察表

図版	写真 図版	器 種 名			法量(mm)			木取り等	樹 種	RWN <sub>0</sub>	備考
					全長	幅	厚さ				
582	16	農具	耕起具	直柄横鋏	231	250	44	柃目	ブナ科コナラ属 コナラ亜属クスギ節	2045	
583	16	農具	耕起具	一木平鋤か	(352)	(115)	20	板目	スギ科スギ属スギ	2163	スリット状の部分は欠損部
584	16	農具	収穫具	竖杵	(426)	104	(32)	芯持ち削り出し	ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ節	2159	端部欠損
585	16	容器	刳物	槽	(373)	(120)	(52)	割材削り出し	スギ科スギ属スギ	1979	
586	16	容器	刳物	槽	(386)	(58)	25	割材削り出し	スギ科スギ属スギ	2094	木釘痕
587	16	容器	刳物	台付盤	(199)	99	38	割材削り出し	トチノキ科トチノキ属 トチノキ	2151	
588	16	用途不明品	板状具	その他	243	(61)	8	柃目	ヒノキ科アスナロ属	2160	木釘痕
589	16	用途不明品	板状具	その他	(165)	(107)	14	柃目	スギ科スギ属スギ	2162	樺皮とじ・くさび付き・木釘痕
590	16	容器	刳物	槽	(199)	99	38	割材削り出し	スギ科スギ属スギ	2127	
591	17	用途不明品	枠組木製品		(453)	(462)	(46)	枠木 割材削り出し 横木 柃目	縦枠 カツラ科カツラ属カツラ 横棧 スギ科スギ属スギ	2070	
592	17	建築部材	梯子		(1,353)	171	49	割材削り出し	ヤナギ科ヤナギ属	2071	
593	17	用途不明品	枠組木製品か		(539)	415	12	柃目	スギ科スギ属スギ	2070	柄付
594	17	用途不明品	枠組木製品		542	42	16	柃目	スギ科スギ属スギ	2070	柄付 端部欠損
595		用途不明品	枠組木製品		436	40	16	柃目	スギ科スギ属スギ	2070	591に含む
596		用途不明品	枠組木製品		380	37	16	柃目	スギ科スギ属スギ	2070	591に含む
597	17	用途不明品	枠組木製品か		(528)	42	11	柃目	スギ科スギ属スギ	2070	穿孔1 両端欠損
598	17	用途不明品	板状具	有孔板	(51)	42	11	板目	ヒノキ科アスナロ属	2017	穿孔1 両端欠損 端部柄
599	17	用途不明品	枠組木製品か		(372)	38	7	柃目	スギ科スギ属スギ	2070	柄付 端部欠損
600	18	祭祀具	形代	刀形	(487)	21	10	柃目	ヒノキ科アスナロ属	2156	
601	18	用途不明品	板状具	有孔板	477	86	14	割材削り出し	スギ科スギ属スギ	2095	穿孔2
602	18	用途不明品	棒状具	先尖棒	(550)	(18)	(23)	割材削り出し	スギ科スギ属スギ	2038	端部欠損
603	18	用途不明品	棒状具	先尖棒	(530)	15	12	割材削り出し	スギ科スギ属スギ	2019	端部欠損
604	18	用途不明品	板状具	先尖棒	(306)	19	4	板目	スギ科スギ属スギ	2087	片面浅く緩やかな丸みに削る
605	18	用途不明品	棒状具	先尖棒	(149)	20	11	割材削り出し	スギ科スギ属スギ		
606	18	用途不明品	棒状具	先尖棒	291	20	20	割材削り出し	スギ科スギ属スギ	2089	両端欠損
607	18	用途不明品	棒状具		(183)	16	9	割材削り出し	スギ科スギ属スギ	2307	両端欠損
608	18	用途不明品	棒状具	先尖棒	(286)	18	18	割材削り出し	スギ科スギ属スギ		
609	18	用途不明品	棒状具	その他	(126)	13	19	柃目	スギ科スギ属スギ	2090	両端欠損
610	18	用途不明品	棒状具	先尖棒	(150)	33	27	割材削り出し	モクセイ科トネリコ属	2093	先端他面多段削り尖らせる
611	18	用途不明品	板状具	その他	202	34	9	柃目	スギ科スギ属スギ	2072	
612	18	用途不明品	棒状具	その他	110	33	20	柃目	スギ科スギ属スギ	2070	
613	18	用途不明品	棒状具	その他	215	25	15	柃目	スギ科スギ属スギ	2308	両端欠損 樺皮とじ
614	18	用途不明品	棒状具	有頭棒	(330)	36	28	丸太材	カバノキ科ハンノキ属	2016	樹皮残る
615		用途不明品	棒状具		(151)	32	29	丸太材	カバノキ科ハンノキ属	2025	両端欠損 先端多面に削り出し 樹皮残る
616	18	紡織具	織機	経(布)巻具	(248)	26	17	割材削り出し	ヒノキ科クロベ属クロベ	2167	端部欠損
617	18	用途不明品	その他		170	61	(33)	割材削り出し	ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ節	2157	ソケットか
618	18	用途不明品	その他		(187)	(108)	45	割材削り出し	クロウメモドキ科 ケンボナシ科ケンボナシ	2152	片側側面を刃状に削り出している
619	18	用途不明品	板状具	その他	(616)	49	16	割材削り出し	スギ科スギ属スギ	1978	両端欠損
620	19	用途不明品	棒状具	その他	1,065	105	65	割材削り出し	ニレ科ニレ属	2154	建築部材か
621	19	用途不明品	棒状具	先尖棒	(810)	45	38	割材削り出し	モクセイ科トネリコ属	2142	端部他面に削り出し尖らせる 他端欠損
622	19	用途不明品	棒状具	その他	(556)	69	39	割材削り出し	クルミ科クルミ属オニグルミ	2086	両端欠損
623	19	用途不明品	棒状具	先尖棒	(515)	47	48	割材削り出し	クワ科クワ属	1977	両端焼け痕
624	19	用途不明品	棒状具	その他	(479)	37	23	割材削り出し	スギ科スギ属スギ		端部尖らせる
625	19	用途不明品	棒状具	その他	(138)	100	63	芯持ち削り出し	カバノキ科ハンノキ属	2309	両端切断痕
626	19	用途不明品	板状具	その他	872	162	54	割材削り出し	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	2155	建築部材か

表7 土師器観察表(1)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎 土	焼 成	色 調	調 整 技 法				分 類	備 考		
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面				
6	1	39	包含層	甕	—	—	(35)	細	普	赤褐色					D	S字口縁 内外面摩滅		
	2		ST1	壺	—	—	(74)	粗	堅	暗褐色		ハケメ→ミガキ		ハケメ・ヘラナデ				
	3	39	ST1	215	甕	—	—	(52)	細	普	赤褐色		ハケメ			E	台付甕	
	4		ST1	壺	(147)	—	(53)	粗	普	暗褐色	ヘラナデ					B a	内外面摩滅	
9	5		ST2	蓋	114	—	(31)	粗	堅	褐色		ナデ	ハケメ				内外面赤彩	
	6		ST2	216	甕	—	55	(24)	細	普	褐色			ヘラナデ		B 2 a	内外面摩滅	
	7		ST2	甕	—	65	(33)	粗	普	赤褐色							内外面摩滅	
	8		ST2	甕	198	—	(33)	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ						
	9		ST2	壺	—	—	(37)	細	普	褐色	ヘラナデ							
	10		ST3	甕	—	—	(36)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ				内外面摩滅	
	11		ST3	甕	—	—	(28)	細	普	褐色	ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ					
	12		ST3	鉢	—	—	(28)	細	普	白褐色	ヘラナデ		ヘラナデ	ハケメ		E		
	13		ST3	鉢	(111)	(24)	(66)	細	普	白褐色		ミガキ		ミガキ		L 5	内外面赤彩	
	14		ST3	壺	—	—	(49)	緻	普	白褐色	ミガキ							
	15		ST3	甕	—	(36)	(12)	粗	普	褐色								
	16		ST3	甕	—	(34)	(16)	粗	普	暗褐色		ハケメ						
	17		ST3	甕	—	(48)	(17)	細	普	赤褐色							外面摩滅 内面炭化物付着	
	18		ST3	甕	(196)	—	(28)	細	普	褐色						C 1	内外面摩滅	
	19		ST3	甕	—	(55)	(24)	細	普	褐色		ヘラナデ						
	20		ST3	甕	—	(40)	(15)	粗	普	褐色		ハケメ						
	21		ST3	甕	(176)	—	(25)	粗	普	褐色	ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ					
	22		ST4	鉢	(111)	—	(41)	緻	普	褐色	ヨコナデ・ミガキ		ヨコナデ・ミガキ			F 2		
	23		ST4	壺	—	—	(37)	細	普	褐色		ハケメ		ヘラナデ			外面摩滅	
	24		ST4	甕	(164)	—	(28)	細	普	褐色	ヨコナデ							
	25		ST4	鉢	—	—	(32)	細	普	褐色								
	26		ST4	高坏	—	—	(42)	細	普	褐色	ミガキ							
	27		ST4	壺	—	—	(35)	細	普	褐色		ハケメ・ミガキ					内外面摩滅	
	28		ST4	甕	—	30	(19)	粗	普	赤褐色		ハケメ						
	30		ST5	高坏	—	—	(45)	緻	普	赤褐色	ミガキ						内外面摩滅	
	31		ST5	鉢	—	(14)	(11)	細	普	褐色		ヘラナデ		ヘラナデ		L		
	32		ST5	壺	—	—	(26)	細	普	白褐色		ミガキ		ミガキ				
	10	33		ST6	鉢	—	—	(23)	細	普	暗褐色						L	内外面摩滅
		34		ST6	甕	—	(64)	(30)	粗	普	暗褐色		ハケメ					
	11	35	24	ST7	25	鉢	(113)	(30)	60	粗	普	褐色	ナデ		ナデ		L 3	
		36		ST7	壺	(129)	—	(49)	細	普	褐色	ハケメ→ミガキ		ミガキ			B 2 a	
		37		ST7	3	甕	—	—	(24)	粗	普	赤褐色		ヘラナデ		ナデ		E 3
38		23	ST7	16	鉢	(156)	31	68	粗	普	褐色	ハケメ→ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		G 2 a	S K 31出土土器と接合
39			ST7	壺	—	—	(46)	細	普	白褐色	ミガキ						内面摩滅	
12	40	34	ST7	22	壺	83	40	134	粗	脆弱	褐色		ハケメ→ミガキ			E 3	内外面摩滅 口縁外面に赤彩痕残る	
	41		ST7	2	壺	—	—	(52)	緻	堅	褐色		ハケメ	ヘラナデ			外面摩滅	
	42		ST7	8	甕	—	(56)	(20)	緻	堅	暗褐色		ハケメ					
	43		ST7	甕	—	(56)	(16)	細	普	褐色		ヘラナデ						
	44		ST7	甕	—	(48)	(22)	粗	普	暗褐色		ハケメ						
	45		ST7	甕	—	(64)	(24)	細	普	赤褐色		ヘラナデ					外面摩滅	
	46		ST7	13	甕	—	88	(26)	粗	普	白褐色						輪台技法 内面剥離 外面摩滅	
	49	26	ST7	21	器台	92	—	(105)	細	堅	褐色					H 1	異形器台	
	50	39	ST7	24	鉢	—	70	(44)	細	普	褐色		ナデ		ナデ			台付鉢脚部

表8 土師器観察表(2)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎土	焼成	色調	調整技法				分類	備考
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面		
12	51		ST7	甕	(192)	—	(78)	粗	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ		
13	52		ST8	59 器台	(82)	—	(58)	細	普	白褐色	ヨコナデ			ヘラナデ	ヘラナデ	B1a 円窓(2)「ㇿ」 調整粗い
	53	26	ST8	器台	—	(110)	(63)	粗	普	暗褐色						F 円窓(3)「ㇿ」 外面摩滅
	54		ST8	29 器台	—	—	(32)	細	普	赤褐色						B 円窓(1)「ㇿ」 内外面摩滅
14	55		ST8	57 高坏	(124)	—	(30)	細	普	白褐色		ハケメ	ヘラナデ			外面摩滅 内面輪積痕
	56		ST8	56 鉢	(70)	—	(30)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ					内面摩滅
	57		ST8	58 壺	(148)	—	(55)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ			内面摩滅
	58		ST8	54 壺	—	—	(91)	細	普	褐色		ミガキ		ヘラナデ		赤彩 (口縁内外面、体部外面)
	59		ST8	— 壺	—	—	(41)	細	普	褐色	ハケメ		ハケメ			D2a
	60		ST8	— 器台	—	—	(27)	細	普	褐色		ハケメ		ハケメ		H 異形器台脚部か 円窓(1)「ㇿ」
	61		ST8	62 壺	—	—	(52)	緻	堅	褐色	ミガキ			ヨコナデ		A2b 内外面赤彩
	62		ST8	27 壺	—	—	(65)	緻	普	褐色	ハケメ→ミガキ			ハケメ		外面摩滅
	63		ST8	— 壺	—	—	(94)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ	ハケメ	ハケメ・ヘラナデ		
	64		ST8	39 壺	—	—	(61)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ		
	65		ST8	27 壺	—	83	(51)	緻	堅	暗褐色		ミガキ		ハケメ		
	66		ST8	鉢	—	(42)	(16)	細	堅	暗褐色						B1 有孔鉢
	67		ST8	壺	—	30	(15)	粗	普	赤褐色						
	68		ST8	甕	—	(82)	(23)	細	普	褐色						輪台技法
69		ST8	57 甕	(166)	—	(30)	粗	普	暗褐色	ハケメ		ハケメ				
15	71	27	ST9	92 高坏	235	153	(154)	粗	堅	褐色	ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	ヨコナデ・ハケメ	A3 円窓4 内外面赤彩	
16	72	26	ST10	器台	—	(135)	(67)	細	普	褐色	ハケメ				H 異形器台脚部か	
	73		ST10	213 甕	—	66	(18)	粗	普	白褐色					輪台技法	
	74		ST10	212 甕	—	80	(19)	粗	堅	暗褐色		ヘラナデ			底部外面粉圧痕	
	75		ST10	211 甕	—	—	(54)	緻	堅	褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ		
	77	34	ST12	179 壺	115	61	169	粗	脆弱	褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ		D2b	
18	78		ST12	79 壺	(101)	—	(47)	粗	普	褐色	ハケメ				B2a 内外面摩滅	
	79		ST12	壺	—	—	(35)	緻	普	赤褐色		ミガキ		ハケメ		
	80		ST12	器台	—	—	(42)	緻	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	B 円窓(2)「ㇿ」	
	81		ST12	鉢	(78)	—	(20)	細	普	褐色	ヨコナデ・ミガキ		ヘラナデ→ミガキ			
	82	24	ST12	206 鉢	68	31	30	細	堅	褐色	ヨコナデ	ケズリ	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ	M3	
	83	33	ST12	壺	(184)	—	(37)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ		C2b 口縁内面木口圧痕	
	84		ST12	壺	—	—	(45)	細	普	褐色	ミガキ		ハケメ			
	85		ST12	78 鉢	(131)	—	(25)	細	普	褐色					I	
19	86		ST12	79 甕	—	—	(36)	粗	普	暗褐色	ヨコナデ		ヨコナデ			
	87		ST12	79 甕	(156)	(52)	(157)	粗	普	暗褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ		
	88	37	ST12	179 甕	192	63	206	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C3c 輪台技法 外面煤付着	
	89		ST12	77 甕	(148)	—	(68)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	外面煤付着	
	90		ST12	甕	—	(60)	(91)	粗	普	褐色		ハケメ		ハケメ		
	91	23	ST14	219 鉢	128	37	67	細	脆弱	白褐色		ハケメ		ヘラナデ	G2b 内外面摩滅	
21	92		ST15	高坏	—	(82)	(17)	細	普	赤褐色	ヨコナデ			ヨコナデ・ハケメ	内面赤彩痕 外面摩滅	
	93		ST15	高坏	—	—	(32)	細	普	褐色						
	94		ST15	壺	—	—	(30)	粗	普	褐色	ミガキ				A2b 内面摩滅	
	95		ST15	甕	—	41	(15)	粗	普	褐色		ハケメ				
	96		ST15	甕	(109)	—	(25)	細	普	白褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ			
	97		ST15	甕	(168)	—	(41)	粗	普	赤褐色	ヨコナデ				内面摩滅	
	98		ST15	甕	(190)	—	(44)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ			内面摩滅	

表9 土師器観察表(3)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎 土	焼 成	色 調	調整技法				分 類	備 考	
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面			
22	99		S K 24		鉢	—	—	(37)	細	普	褐色			ヘラナデ	ヘラナデ	L 5	
	100	41	S K 24	26	小型 土器	21	31	30	細	堅	褐色	ナデ	ヘラナデ	ナデ	ナデ		手握成形
	101		S K 24		壺	(117)	—	(48)	細	普	赤褐色	ミガキ→ヨコナデ	ハケメ		ハケメ		
	102		S K 24		甕	(182)	—	(43)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ		
23	103		S K 26	143	甕	(139)	—	(29)	細	普	褐色	ヨコナデ		ヨコナデ			
	104		S K 26	143	鉢	(109)	—	(45)	細	普	赤褐色			ミガキ			外面摩滅
	105		S K 27	144	鉢	—	64	(38)	粗	普	白褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	M 1	
	106		S K 26	143	壺	—	(74)	(303)	粗	普	赤褐色		ハケメ		ヘラナデ		内外面摩滅
24	107	26	S K 28		器台	—	(110)	(64)	細	普	赤褐色		ミガキ		ナデ	E	円窓(2)「2」 内面摩滅
26	108	25	S K 31	127	器台	90	(120)	97	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ		ヨコナデ・ナデ	B 1 b	円窓 3
	109		S K 31		器台	—	—	(52)	緻	堅	褐色		ミガキ		ハケメ	B	
	110		S K 31		高坏	—	111	(64)	細	堅	白褐色		ミガキ		ハケメ→ヨコナデ	B 2	
	111		S K 31		器台	—	—	(40)	緻	堅	褐色		ミガキ			B 1	
	112	22	S K 31		鉢	163	—	98	細	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	B 1	
	113		S K 31		鉢	(117)	—	(75)	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	F 2	
	114	24	S K 31	112	鉢	95	24	65	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	ハケメ・ヘラナデ	L 3	
	115	34	S K 31		壺	(124)	—	(106)	緻	堅	褐色	ヨコナデ ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ヘラナデ	D 2 a	
	116	29	S K 31		壺	156	—	(60)	緻	堅	褐色	ミガキ		ミガキ		A 1 b	口縁下端に刻目
	117	39	S K 31		甕	(281)	—	(283)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ヘラナデ・ハケメ→ミガキ	A 1 b	
	118		S K 31		甕	(140)	—	(55)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ		
119		S K 31		甕	(190)	—	(52)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ			
27	120		S K 31		甕	(186)	—	(36)	細	普	褐色	ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ			
	121		S K 31		甕	180	—	40	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ	ハケメ		
	122		S K 31		甕	(201)	—	(73)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ		外面煤付着
	123		S K 31		甕	(192)	—	(41)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ			
	124	39	S K 31		甕	136	58	132	粗	普	暗褐色	ナデ・ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	F 1 b	
	125	37	S K 31		甕	152	—	(147)	粗	普	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ・ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	C 3 a	
	126		S K 31		甕	(168)	—	(94)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ		
	127	39	S K 31		甕	179	(31)	169	粗	堅	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 3 c	外面煤付着
128	37	S K 31		甕	(197)	—	249	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C 3 a		
28	129		S K 31		甕	166	—	(145)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 3 c	
	130		S K 31		甕	196	—	(91)	細	普	褐色	ヨコナデ→ヘラナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ		
	131		S K 31		甕	(190)	—	(216)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 2 b	
	132	36	S K 31		甕	178	28	174	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ・ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 2 c	
	133		S K 32		鉢	—	—	(33)	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ナデ	L	
30	134		S K 32		鉢	(158)	—	(54)	緻	堅	褐色	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	E	
	135		S K 32		鉢	(168)	—	(30)	緻	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	E	
	136		S K 32		壺	(223)	—	(33)	粗	堅	暗褐色	ヨコナデ→ミガキ		ミガキ		A 2 a	
	137		S K 32		壺	(135)	—	(35)	細	普	褐色	ヨコナデ		ヨコナデ		A 2 c	
	138		S K 32		壺	(160)	—	(62)	細	普	赤褐色			ハケメ	ハケメ		内外面摩滅
	139		S K 32		甕	—	64	(31)	細	普	白褐色		ハケメ				台付鉢か
	140	35	S K 32		甕	207	34	259	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 2 a	外面煤付着 内面下半炭化物付着
	141		S K 32		甕	(152)	—	(40)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C 1	
	142		S K 32		甕	(150)	—	(65)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	F 3	外面煤付着
	143	36	S K 32	5	甕	200	(40)	270	細	普	白褐色	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ	C 2 c	
	33	144		S G 114	7	器台	85	—	(42)	粗	普	赤褐色					B 1 a
145			S G 114		高坏	—	—	(24)	緻	堅	褐色		ミガキ		ミガキ		円窓(2)「1」

表10 土師器観察表(4)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎 土	焼 成	色 調	調整技法				分 類	備 考
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面		
33	146		S G114	高坏	—	—	(105)	緻	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	E 2	
	147		S G114	3 鉢	(120)	—	(60)	細	普	褐色	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	C	
	148	24	S G114	1 鉢	(139)	32	88	粗	堅	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ	ナデ・ハケメ		ヘラナデ	I 5	底部穿孔
	149		S G114	16 壺	188	—	(48)	細	普	褐色	ヨコナデ		ヘラナデ		A 2 b	
	150		S G114	15 壺	(176)	—	(81)	細	普	赤褐色					A 2 b	内外面摩減
	151		S G114	10 壺	—	(30)	(116)	細	堅	暗褐色		ヨコナデ・ミガキ		ナデ・ヘラナデ・ハケメ		
	152		S G114	17 甕	—	55	(110)	細	普	褐色		ハケメ・ミガキ		ハケメ・ミガキ		
	153		S G114	12 甕	(166)	23	183	粗	普	褐色	ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	C 3 a	
154		S G114	11 甕	228	—	(76)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ	B		
34	155		S G114	9 甕	(184)	—	(51)	細	普	白褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ		
	156		S G114	3 甕	218	—	(168)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	C 4 c	
	157	140	S G114	3 甕	173	40	135	粗	普	白褐色	ヨコナデ	ハケメ・ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	F 2	
37	158		S T201	高坏	—	(120)	(25)	緻	堅	褐色		ミガキ		ヨコナデ・ヘラナデ		
	159		S T201	鉢	(70)	—	(27)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ナデ・ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	L 1	
	160		S T201	1425 鉢	(98)	—	56	緻	堅	暗褐色	ハケメ	ハケメ→ミガキ	ハケメ	ミガキ	L 4	
	161		S T201	1415 高坏	—	—	(28)	緻	普	白褐色						内外面摩減
	162		S T201	高坏	(187)	—	(65)	緻	普	赤褐色			ミガキ			外面摩減
	163		S T201	1426 高坏	—	—	(120)	緻	普	褐色		ミガキ		ヘラナデ	E 1	
	164		S T201	高坏	—	(130)	(37)	緻	普	褐色				ハケメ	E	内外面摩減
	165		S T201	鉢	—	—	(38)	緻	普	褐色			ヨコナデ	ミガキ	E	外面摩減
	166		S T201	小型 土器	—	(23)	(26)	緻	普	暗褐色						手捏成形
	167		S T201	1424 鉢	—	42	(39)	粗	普	白褐色		ヘラナデ		ヘラナデ	B 1	
	168		S T201	壺	—	—	(34)	細	堅	褐色	ヨコナデ		ハケメ→ミガキ			
	169		S T201	甕	(158)	—	(50)	細	堅	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ			
	170		S T201	727 甕	(186)	—	(35)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C 2	
	171		S T201	甕	—	—	(33)	細	普	褐色	ヨコナデ		ヨコナデ			
	172		S T201	756 甕	—	—	(34)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ			
	173		S T201	壺	(154)	—	(32)	細	普	褐色	ヨコナデ		ヨコナデ・ヘラナデ		A 2 c	
	174		S T201	甕	(148)	—	(33)	細	普	赤褐色		ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 2	
175		S T201	750 甕	(138)	—	(38)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C 2		
176		S T201	甕	—	(76)	(25)	粗	堅	暗褐色							
177		S T201	728 壺	—	(53)	(23)	細	普	赤褐色		ヘラナデ					
40	178	25	S T202	2268 器台	73	127	77	細	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ		ヘラナデ	B 3 b	円窓 3
	179	26	S T202	1813 器台	(94)	118	94	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ		ヘラナデ	B 4	円窓 3
	180	26	S T202	1865 器台	97	133	91	粗	堅	褐色	ミガキ	ミガキ		ヘラナデ	B 4	円窓 3
	181		S T202	1807 器台	88	—	(21)	細	普	白褐色	ハケメ	ハケメ			B 1 b	内外面摩減
	182		S T202	1444 器台	—	—	(55)	緻	普	褐色						円窓(3)「D」 内外面摩減
	183		S T202	1476 高坏	—	109	(85)	緻	堅	白褐色		ミガキ		ヘラナデ→ヨコナデ	E 3 a	外面摩減
	184		S T202	1820 高坏	166	—	(62)	緻	普	赤褐色		ミガキ	ヨコナデ	ミガキ		内外面摩減
	185		S T202	1859 器台	—	(170)	(17)	緻	堅	白褐色		ミガキ→ヨコナデ		ミガキ→ヨコナデ		内外面赤彩
	186	24	S T202	1812 鉢	87	16	60	粗	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ・ケズリ	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ	L 1	
	187		S T202	1806 鉢	(96)	26	(76)	緻	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	L 2	
	188		S T202	1451 鉢	(183)	—	(64)	細	普	白褐色	ハケメ		ナデ・ヘラナデ	ナデ	L	
	189		S T202	1851 鉢	(138)	—	(49)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ		K 2	
	190	24	S T202	1801 鉢	131	38	74	細	堅	赤褐色	ヨコナデ→ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	ヨコナデ	ヨコナデ	G 2 b	
	191	23	S T202	1726 鉢	(144)	—	(57)	緻	普	褐色					G 2 b	内外面摩減
	192		S T202	1727 鉢	(115)	—	(58)	細	普	白褐色	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ		ヘラナデ	L 4	内面摩減
	193		S T202	2292 鉢	(159)	—	(68)	緻	堅	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	F 1	

表11 土師器観察表(5)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎 土	焼 成	色 調	調 整 技 法				分 類	備 考		
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面				
41	194	34	S T 202	1814	鉢	126	40	115	細	普	赤褐色	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ・ケズリ	ミガキ	ヘラナデ	E 2		
	195	34	S T 202	1473	壺	121	—	(127)	緻	普	赤褐色	ヨコナデ・ミガキ		ヨコナデ・ミガキ		D 2 b	内外面摩減	
	196		S T 202	1765	壺	—	—	(19)	細	普	赤褐色		ハケメ		ヘラナデ			
	197		S T 202	2269	壺	—	40	(55)	細	普	褐色		ハケメ		ナデ・ヘラナデ		異質の胎土	
	198		S T 202		壺	—	—	(73)	緻	堅	白褐色		ミガキ		ミガキ			
	199		S T 202	2297	壺	(124)	—	(80)	緻	堅	白褐色	ハケメ→ミガキ		ハケメ→ミガキ		D 2 a		
	200	34	S T 202	1809	壺	(152)	—	(85)	緻	堅	赤褐色	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	D 2 a	1次調整のハケメ残る	
	201	32	S T 202	1805	壺	141	—	(96)	細	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ →ミガキ	ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ヘラナデ	C 1 a	内面接合痕顕著 指頭圧痕	
	202	23	S T 202	1800	鉢	113	30	88	細	普	白褐色	ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ	I 2	内面指頭圧痕	
	203	34	S T 202	1803	甕	110	—	123	粗	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ・ミガキ・ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ	E 1		
204	32	S T 202	1821	壺	148	78	297	緻	堅	白褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 1 a			
42	205	29	S T 202	1815	壺	189	—	(103)	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	A 1 a	194の置き台として出土	
	206		S T 202	1811	甕	(167)	—	(42)	粗	普	暗褐色	ヘラナデ・ハケメ		ヘラナデ・ハケメ				
	207		S T 202	1858	器台	(149)	—	(66)	粗	脆弱	褐色	ヨコナデ		ハケメ			器台の脚部か	
	208		S T 202	1766	壺	—	—	(248)	細	普	赤褐色		ハケメ・ミガキ		ヘラナデ・ハケメ			
	209	31	S T 202	1817	甕	233	85	315	粗	普	赤褐色	ヘラナデ・ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	B 2 b	輪台技法	
	210		S T 202		壺	(170)	—	(60)	粗	普	赤褐色	ハケメ				B 2 a	内外面摩減	
	211		S T 202	1852	鉢	124	—	(27)	緻	堅	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ミガキ		I		
43	212	31	S T 202	1861	壺	139	68	285	細	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	B 2 a		
	213	40	S T 202	1808	甕	148	(60)	129	細	堅	褐色	ハケメ	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ	ハケメ	F 1 a		
	214	35	S T 202	1804	甕	139	52	145	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 2 c		
	215	40	S T 202	2083	甕	158	—	136	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ・ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	F 2		
	216		S T 202	1477	甕	(155)	—	(32)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ			
	217		S T 202	1476	甕	(153)	—	(20)	細	普	暗褐色	ヨコナデ		ヨコナデ				
	218		S T 202	1863	甕	—	68	(270)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ		外面剥落	
	219	38	S T 202	1818	甕	196	60	252	細	普	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 4 b	内面摩減	
44	220	38	S T 202	1816	甕	(158)	54	214	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	C 4 c	底部外面粉圧痕	
	221	35	S T 202	1765	甕	(199)	45	261	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 1 b		
	222	35	S T 202	1819	甕	180	41	265	粗	堅	暗褐色	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ・ケズリ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	C 1 a		
	223		S T 202	2267	甕	224	—	(53)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	C 4		
47	226	34	S T 204	1122	壺	117	38	136	粗	堅	褐色	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	D 2 b		
	227	38	S T 204	1118	甕	(131)	(50)	123	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	C 4 a	内外面摩減	
	228		S T 204	2174	鉢	(122)	—	(68)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ヘラナデ		ヘラナデ			
	229		S T 204	1124	甕	(156)	—	(47)	細	普	褐色	ヨコナデ・ハケメ		ヘラナデ				
	230	27	S T 204	1120	高坏	190	—	(74)	緻	普	赤褐色					A 4	内外面摩減	
	231	36	S T 204	1119	甕	174	33	227	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ナデ・ヘラナデ	C 2 b	外面煤付着 内面下半炭化物付着	
	232		S T 204	1121	甕	—	62	(197)	粗	普	暗褐色		ハケメ		ハケメ			
	233		S T 204	1122	甕	168	—	209	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ・ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	C 2 b	外面煤付着	
	49	234	26	S T 205	1211	器台	76	115	77	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ヨコナデ	ヨコナデ	B 4	内外面赤彩
		235	27	S T 205	1208	高坏	160	—	(65)	緻	堅	赤褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	A 5	
236		27	S T 205	1841	高坏	197	118	139	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ミガキ		ナデ・ヨコナデ・ハケメ	B 1	円窓3 坏部内面摩減	
237		33	S T 205	1954	壺	(157)	—	(156)	緻	普	白褐色	ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ミガキ		D 1	内外面摩減	
238			S T 205	1957	壺	(110)	—	(134)	細	普	褐色	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ハケメ	D 2 b		
239			S T 205	988	鉢	113	—	(50)	細	普	白褐色			ハケメ		L 5 外	外面摩減	
240			S T 205	1827	壺	—	50	(30)	細	普	褐色		ハケメ		ヘラナデ			
241		22	S T 205	1823	鉢	(340)	—	(150)	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ	A 2 a		
242			S T 205	1838	鉢	203	22	133	細	普	褐色		ハケメ	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	B 1		
243		24	S T 205	977	鉢	(240)	—	(101)	細	堅	赤褐色	ヨコナデ・ハケメ→ミガキ		ミガキ	ミガキ	K 2	体部内外面摩減	

表12 土師器観察表 (6)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎 土	焼 成	色 調	調整技法				分 類	備 考	
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面			
50	244		S T205	1842	鉢	(164)	—	(33)	細	普	赤褐色	ハケメ		ミガキ		C	
	245		S T205	1218	壺	188	—	(53)	粗	堅	白褐色	ヨコナデ・ハケメ		ヘラナデ		C5b	
	246		S T205	1832	壺	—	75	(185)	級	堅	褐色		ミガキ		ミガキ		
	247	32	S T205	1210	壺	166	71	343	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヘラナデ	ハケメ	C1a	
51	248	31	S T205	1831	壺	122	69	232	細	普	白褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	C1a	内外面摩滅
	249		S T205	1830	壺	(150)	(65)	(355)	細	普	褐色	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	C1b	
	250		S T205	1950	壺	(127)	72	(357)	粗	普	白褐色	ハケメ→ヘラナデ	ミガキ	ハケメ	ハケメ	C1b	
52	251	24	S T205	995	鉢	121	34	104	細	普	赤褐色		ヘラナデ		ヘラナデ・ハケメ	L3	内外面摩滅
	252		S T205	1950	甕	—	—	(22)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ				D	
	253		S T205	1833	甕	(148)	43	(143)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ		
	254		S T205	1824	甕	(187)	—	(63)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ		
	255		S T205	1840	甕	161	—	(131)	細	普	褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	C4	
	256		S T205	1824	甕	(180)	—	(165)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C4	
	257	37	S T205	1828	甕	187	57	243	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	B3a	外面煤付着
	258	38	S T205	1829	甕	164	60	203	細	普	褐色	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	C4c	
	54	259		S T206	847	鉢	—	28	(28)	細	普	白褐色		ミガキ			L
260			S T206	837	鉢	(144)	—	(40)	細	普	褐色	ミガキ		ミガキ			内外面摩滅
261			S T206	1183	壺	—	—	(35)	細	普	褐色	ミガキ					
262			S T206	1698	壺	(180)	—	(25)	粗	脆弱	褐色	ヘラナデ		ヘラナデ		B2a	
263			S T206	834	壺	(193)	—	(52)	粗	普	褐色	ハケメ→ヘラナデ		ハケメ		B2a	
264			S T206	1699	壺	106	—	(62)	粗	脆弱	暗褐色	ヘラナデ		ミガキ		B2a	264・265は同一個体
265			S T206	1700	壺	—	80	(47)	粗	脆弱	暗褐色						
266			S T206		壺	—	(30)	(19)	細	普	赤褐色						
267			S T206	1622	甕	—	90	(24)	粗	普	暗褐色						内外面摩滅
268			S T206	1516	壺	—	77	(318)	粗	脆弱	暗褐色		ハケメ		ハケメ		外面摩滅
56	269	26	S T208	1521	器台	(98)	(136)	93	細	普	褐色	ナデ	ヨコナデ・ハケメ→ミガキ	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラナデ・ハケメ	B5	円窓なし
	270		S T208	715	器台	—	101	(54)	細	堅	褐色		ミガキ→ヨコナデ		ヘラナデ	E	円窓なし
	271		S T208	1440	鉢	—	33	(22)	細	普	白褐色		ハケメ→ミガキ		ミガキ	L	
	272	24	S T208	1439	鉢	63	15	44	細	普	褐色	ヨコナデ	ナデ・ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	M3	
	273		S T208	1437	高坏	(159)	—	(30)	級	堅	暗褐色	ミガキ→ヨコナデ		ミガキ			
	274		S T208	1524	壺	(200)	—	(75)	細	堅	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ→ミガキ		ヘラナデ→ヨコナデ・ミガキ		A2b	
	275		S T208		壺	(192)	—	(56)	細	普	白褐色	ヨコナデ・ミガキ		ミガキ			
	276		S T209	2195	甕	(124)	—	(55)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ			
58	277		S T209	2193	壺	(118)	—	(43)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ			
	278		S T209	2197	甕	(126)	—	(44)	粗	堅	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ		
	279		S T209	2199	甕	—	62	(25)	細	普	暗褐色		ハケメ		ハケメ		底部木葉痕
	280		S T209	2192	甕	(160)	—	(140)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	C4c	
	281		S T209		甕	(206)	—	(38)	粗	普	褐色			ハケメ			
	282	32	S T209	2191	壺	114	72	291	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	C1b	
	283	23	S T210	1879	鉢	(152)	—	(85)	細	普	白褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ→ミガキ	I3	
60	284	34	S T210	1881	壺	98	46	132	細	普	赤褐色		ミガキ		ヘラナデ	E2	口縁部内外面摩滅
	285		S T210	1883	鉢	—	—	(34)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ			
	286		S T210	1973	壺	(188)	—	(52)	粗	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ→ヘラナデ		B2a	
	287		S T210	1162	甕	(171)	—	(45)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ			
	288		S T210	1872	甕	—	60	(24)	細	普	白褐色		ヘラナデ				内面炭化物付着
	289		S T210	1162	壺	—	(78)	(25)	細	普	赤褐色		ヘラナデ				
	290		S T210	1882	壺	—	(90)	(22)	細	普	褐色		ヘラナデ				
	291	30	S T210	1871	壺	184	75	30	細	堅	褐色	ハケメ・ミガキ	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ヘラナデ	B1	頸部突帯(木口刻目) 棒状浮文(2本1組を4ヶ所)

表13 土師器観察表(7)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎 土	焼 成	色 調	調整技法				分 類	備 考	
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面			
63	292	25	S T211	1898	器台	171	—	(144)	緻	堅	白褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ	指頭ナデ→ハケメ→ヨコナデ	A	裝飾器台
	293	26	S T211	1893	器台	—	(94)	(65)	緻	堅	褐色		ミガキ		ミガキ→ヨコナデ・ハケメ	G	
	294	27	S T211	1897	高坏	163	115	167	緻	堅	赤褐色	ヨコナデ	ミガキ→ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ	C	
	295		S T211		高坏	(195)	—	(38)	緻	普	赤褐色	ハケメ		ハケメ・ヨコナデ			
	296		S T211		高坏	(184)	—	(56)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ	ミガキ		
	297		S T211	1780	高坏	—	(120)	(114)	緻	普	白褐色		ミガキ		ヨコナデ	E	
	298		S T211	1779	高坏	—	(134)	(105)	緻	普	白褐色		ミガキ			E	内外面摩減
	299		S T211	1907	鉢	—	34	(27)	粗	普	褐色		ヘラナデ			L	内面摩減
	300		S T211	1415	鉢	—	17	(41)	細	普	褐色	ケズリ	ナデ・ケズリ	ハケメ	ヘラナデ	L	
	301	24	S T211	1778	鉢	117	25	70	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヨコナデ→ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	J	
	302	24	S T211	1896	鉢	116	50	51	緻	堅	褐色	ヘラナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	J	
	303	30	S T211	1781	壺	196	—	(240)	粗	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	A 2 b	
	64	304		S T211	1783	甕	—	—	(150)	細	堅	褐色		ハケメ		ヘラナデ・ハケメ	
305			S T211	1891	壺	—	—	(382)	細	堅	褐色		ハケメ→ミガキ		ヘラナデ・ハケメ		
65	306		S T211	1891	壺	—	36	(147)	細	普	褐色		ハケメ・ヘラナデ・ミガキ		ハケメ		
	307		S T211	1900	甕	—	46	51	細	堅	褐色		ヘラナデ・ハケメ		ヘラナデ		
	308		S T211	1899	壺	—	70	(309)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ・ケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ・ハケメ		
	309	37	S T211	1908	甕	179	—	(175)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	C 3 b	
	310		S T211	1908	甕	186	—	(130)	粗	普	褐色	ヨコナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ハケメ	C 3	
66	311	40	S T211	1914	甕	(112)	39	146	細	普	暗褐色	ナデ	ナデ・ヘラナデ	ナデ	ナデ・ヘラナデ・ハケメ	F 5	
	312		S T211	1784	甕	152	—	(141)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	C 3	外面煤付着
68	314		S T212		器台	—	—	(27)	細	普	褐色					B	内外面摩減
	315		S T212		器台	—	—	(34)	細	普	褐色		ミガキ		ヘラナデ	B	円窓3
	316		S T212		鉢	(98)	—	(40)	細	堅	褐色	ミガキ		ミガキ			
	317		S T212		鉢	—	—	(38)	細	普	褐色					L 1	
	318		S T212	1391	壺	143	—	(199)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	C 1 b	体部内面摩減
	319		S T212	1507	壺	—	—	(55)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ミガキ		ヘラナデ		
	320		S T212	1402	壺	(282)	—	(58)	粗	普	赤褐色	ハケメ→ミガキ		ヨコナデ		A 2 a	
	321		S T212		鉢	(130)	—	(58)	細	普	褐色	ヘラナデ・指頭オサエ	ハケメ	指頭オサエ	ヘラナデ	C	体部内面弧状の沈線
	322		S T212	1498	壺	—	(80)	(99)	細	普	赤褐色		ヘラナデ・ハケメ→ミガキ		ヘラナデ		
	323		S T212		甕	—	(42)	(22)	粗	普	褐色						
	324		S T212	1500	甕	—	(58)	(24)	細	普	褐色						
	325		S T212		甕	—	(30)	(14)	粗	普	白褐色		ハケメ				底部内面指頭による窪み
	326		S T212		甕	—	(26)	(30)	粗	普	白褐色		ハケメ				
	327		S T212		壺	—	51	(15)	緻	普	赤褐色						
	328		S T212		甕	—	34	(15)	細	堅	褐色		ハケメ				
	329		S T212	1502	甕	—	(58)	(35)	粗	普	褐色		ハケメ				
	330		S T212	1509	壺	—	30	(20)	緻	堅	白褐色		ミガキ		ミガキ		
69	331		S T212	1366	甕	141	—	(37)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ			
	332		S T212	1504	甕	(152)	—	(69)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ		
	333		S T212	1508	甕	(188)	70	(251)	細	堅	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ヘラナデ	C 3 a	底部外面ワラ状圧痕
72	336		S K253	2305	壺	—	36	(84)	細	普	赤褐色		ミガキ		ヘラナデ		底部内面剥離
	337	25	S K258	1759	器台	82	—	(22)	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ	ミガキ	B 1 a	
	338		S K258	984	器台	86	—	(62)	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	B 3 a	円窓3 赤彩(受部内外面・脚部外面)
	339		S K258	1731	壺	(189)	—	(40)	細	堅	赤褐色	ミガキ		ミガキ			
	340		S K258	1757	高坏	—	110	(78)	緻	堅	暗褐色		ミガキ		ハケメ→ヨコナデ	B	
	341		S K258	1742	鉢	—	—	(32)	粗	堅	暗褐色		ヘラナデ・ミガキ		ナデ・ミガキ	L 4	
342		S K258	1760	鉢	(128)	—	(37)	細	普	褐色					I	内外面摩減	

表14 土師器観察表 (8)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎 土	焼 成	色 調	調 整 技 法				分 類	備 考
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面		
72	343		S K 258	1761	甕	—	68	(21)	粗 普	褐色						
	344		S K 258	1792	壺	(146)	—	(44)	粗 堅	白褐色	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ		
	345		S K 258	1735	甕	157	39	(104)	粗 普	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C 2 a	底部外面粉痕
	346		S K 258	981	甕	(179)	—	(75)	粗 普	褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ		
	347		S K 258	1748	甕	(188)	—	(41)	細 普	褐色	ヨコナデ		ハケメ	ハケメ		
	348		S K 258	1748	甕	(183)	—	(26)	細 普	赤褐色	ヨコナデ・ハケメ		ハケメ	ハケメ		
	349		S K 258	1752	甕	(168)	—	(46)	細 普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ		
	350		S K 258	1791	甕	(195)	—	(44)	粗 普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ・ヨコナデ	ハケメ		外面煤付着
	351		S K 258	1750	甕	(221)	—	(48)	粗 堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ	ヘラナデ		
	352		S K 258	983	甕	(190)	—	(52)	細 普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ		
74	353	26	S K 278	709	器台	96	122	73	細 堅	暗褐色	ヨコナデ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ハケメ	B 6	円窓(1)「1」
	354	26	S K 278	1583	器台	(101)	(131)	76	細 堅	褐色	ミガキ	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	ナデ・ハケメ→ヨコナデ	B 6	円窓(2)「2」
	355		S K 278	1584	器台	(95)	—	(21)	緻 堅	褐色	ミガキ		ミガキ		B 2	内外面赤彩
	356		S K 278	1534	器台	—	—	(35)	細 普	白褐色		ミガキ		ヘラナデ	B	円窓3
	357		S K 278	1489	器台	—	(105)	(61)	細 普	赤褐色		ミガキ		ハケメ	E	円窓3 内外面摩滅
	358		S K 278		鉢	(134)	—	(40)	細 普	赤褐色	ミガキ		ミガキ		E	
	359		S K 278		器台	—	—	(16)	緻 堅	褐色	ミガキ		ミガキ			
	360		S K 278	1586	壺	(92)	—	(46)	緻 普	白褐色	ヨコナデ・ハケメ・ミガキ		ヨコナデ・ハケメ→ミガキ			
	361		S K 278	1488	鉢	—	19	(34)	細 普	赤褐色		ミガキ		ヘラナデ	L	
	362	29	S K 278	1513	壺	(302)	—	(56)	粗 堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ →ミガキ		ヨコナデ・ミガキ			棒状浮文(木口刻目) 円形浮文貼付痕跡
	363		S K 278	1490	壺	(298)	—	(73)	粗 堅	白褐色	ハケメ→ミガキ		ヘラナデ			
	364	30	S K 278		壺	(252)	—	(60)	粗 堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ・ミガキ		ヨコナデ・ミガキ			
	365		S K 278	1535	甕	175	—	(127)	粗 普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ・ハケメ	C 3	
	366		S K 278	1532	甕	170	—	(36)	粗 普	褐色						内外面摩滅
	367		S K 278	1531	甕	(156)	—	(71)	細 普	褐色	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ			
	368		S K 278	1494	甕	(185)	—	(35)	細 普	白褐色	ヨコナデ・ハケメ		ヨコナデ・ハケメ		C 1	
	369		S K 278	1533	甕	(219)	—	(56)	細 堅	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	C 1	
370		S K 278	1537	甕	(22)	—	(47)	粗 堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ			
75	373	34	S K 304	2293	壺	(105)	35	133	細 普	白褐色	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ミガキ→ヘラナデ	ヘラナデ		
	374		S K 337	2301	器台	(166)	—	(45)	細 普	赤褐色		ミガキ		ミガキ	B 5	
	375		S K 337	2301	器台	—	—	(55)	粗 普	褐色		ミガキ		ハケメ→ヘラナデ・ヨコナデ	B 5	円窓(3)「3」
76	376	23	S K 340	1933	鉢	155	28	61	緻 堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	E	
	377		S K 340	2190	壺	—	28	(21)	細 普	暗褐色		ハケメ		ハケメ		
	378		S K 340	1431	壺	—	54	(24)	細 堅	白褐色		ミガキ		ミガキ		
	379		S K 340	1942	壺	—	(76)	(21)	緻 堅	暗褐色		ミガキ		ヘラナデ		
	380		S K 340	2184	甕	230	—	(42)	細 普	褐色					C 1	
	381		S K 340	2183	甕	—	—	(220)	細 普	褐色		ハケメ		ハケメ→ヘラナデ		
	382	36	S K 348	2181	甕	195	61	257	粗 普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ	B 2 c	
80	383	26	S D 260	2206	器台	103	—	(85)	細 普	赤褐色		ミガキ		ヨコナデ・ヘラナデ	B 1 a	円窓4 外面摩滅
	384	25	S D 260	993	器台	88	—	(28)	細 堅	赤褐色	ミガキ		ミガキ		B 2	
	385		S D 260	2240	器台	82	—	(45)	緻 堅	褐色	ミガキ	ミガキ		ミガキ	B 1 a	円窓3 内面摩滅
	386		S D 260	2247	器台	—	—	(25)	緻 普	褐色						内外面摩滅
	387	25	S D 260	799	器台	76	112	74	細 普	白褐色		ミガキ→ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ	B 4	円窓3 赤彩(受部内外面・脚部外面)
	388		S D 260	1866	器台	—	—	(51)	細 普	白褐色		ミガキ		ヘラナデ		円窓3
	389		S D 260	2272	器台	—	—	(29)	緻 堅	白褐色		ミガキ		ハケメ		円窓3 内外面赤彩
	390		S D 260	1166	器台	—	—	(48)	緻 普	赤褐色		ミガキ		ハケメ		
	391	26	S D 260	1262	器台	83	115	83	細 堅	褐色	ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	B 1 b	円窓2 内外面赤彩
	392		S D 260	2286	器台	—	113	(70)	細 堅	褐色		ミガキ		ヨコナデ・ハケメ		円窓2

表15 土師器観察表(9)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎 土	焼 成	色 調	調 整 技 法				分 類	備 考	
					口径	底径	器高				口縁部(坯部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坯部・受部) 内面	体部(脚部) 内面			
80	393		S D260	894	高坏	—	—	(44)	細	普	赤褐色		ミガキ				
	394		S D260	2257	高坏	—	—	(55)	細	堅	白褐色		ミガキ		ヘラナデ	E 3	外面赤彩
	395		S D260	2239	高坏	—	—	(70)	緻	堅	褐色		ミガキ			E	
	396		S D260	880	高坏	—	—	(95)	緻	堅	白褐色		ミガキ		ハケメ	E 2	
	397		S D260		高坏	—	—	(50)	緻	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	E	
	398	26	S D260	2287	器台	111	(112)	78	粗	普	褐色	ミガキ	ヘラナデ		ヨコナデ・ヘラナデ	C	坯部内面摩減
	399		S D260	2288	鉢	—	33	(37)	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	K	
	400	23	S D260		鉢	(157)	—	70	緻	堅	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	G 1 b	
	401	40	S D260	2258	甕	(159)	61	98	粗	普	褐色	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	F 1 a	外面煤付着
	402		S D260	2217	鉢	(206)	—	(106)	細	普	赤褐色	ヨコナデ・ハケメ			ヘラナデ	A 2 b	外面煤付着
	403		S D260	889	鉢	—	28	(32)	緻	堅	暗褐色		ミガキ		ヘラナデ	L 5	
404		S D260	890	鉢	(90)	—	48	細	普	赤褐色	ヘラナデ	ミガキ	ヨコナデ	ミガキ			
405		S D260	703	鉢	—	32	(17)	細	普	赤褐色		ヘラナデ			B 1		
81	406		S D260	797	壺	(106)	—	(41)	緻	普	白褐色	ミガキ		ミガキ		A 2 b	内外面赤彩
	407		S D260	2231	壺	(152)	—	(51)	緻	普	褐色	ミガキ		ミガキ			
	408	33	S D260	2213	壺	125	—	(75)	粗	脆弱	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ	C 4	内外面摩減
	409	30	S D260	2169	壺	160	—	(262)	緻	堅	褐色	ヨコナデ・ヘラナデ・ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	A 2 c	
	410		S D260	2233	壺	(102)	—	(48)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヨコナデ	ヘラナデ	C 4	
	411		S D260	2245	壺	(236)	80	(372)	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ ハケメ→ナデ	ハケメ・ヨコナデ・ミガキ	ヘラナデ・ハケメ	A 2 a	
82	412		S D260	2245	壺	(243)	—	(110)	緻	堅	褐色	ヨコナデ・ヘラナデ・ミガキ	ミガキ	ヨコナデ・ヘラナデ・ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	A 2 a	
	413		S D260	2204	壺	—	—	(63)	細	普	褐色	ヨコナデ			ハケメ	A 2 a	
	414		S D260	2237	壺	(256)	—	(65)	細	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ		ミガキ		C 2 a	外面煤付着
	415		S D260	2219	壺	(129)	—	(51)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ミガキ	ハケメ		G 1 b	
	416		S D260	2285	壺	(168)	—	(52)	粗	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ		A 2 c	内面摩減
	417		S D260	2253	甕	—	(60)	(39)	細	普	褐色		ハケメ		ヘラナデ		
	418		S D260		壺	—	44	(16)	緻	普	白褐色						
	419		S D260	2244	甕	—	62	(31)	細	堅	褐色		ハケメ		ヘラナデ		
	420		S D260		壺	—	80	(31)	粗	普	暗褐色		ミガキ		ミガキ		底部外面木葉痕
	421		S D260	2203	甕	—	79	(39)	粗	普	赤褐色				ヘラナデ		
	422		S D260	2220	壺	—	88	(49)	細	普	褐色		ミガキ		ハケメ→ミガキ		
	423		S D260	2246	甕	—	27	(29)	細	普	褐色	ハケメ		ハケメ→ヘラナデ			
	424		S D260	2171	壺	—	38	(44)	細	普	赤褐色		ハケメ		ヘラナデ		
	425		S D260	1793	甕	—	(62)	(47)	粗	普	褐色		ハケメ				内外面摩減
	426		S D260		甕	(166)	—	(55)	粗	普	白褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ		
83	427		S D260	2254	甕	198	—	(106)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C 1	
	428		S D260	2250	甕	(180)	—	(42)	細	普	褐色	ヨコナデ・ハケメ		ヨコナデ		C 1	
	429		S D260	2224	甕	(215)	—	(56)	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C 1	外面煤付着
	430		S D260	873	甕	180	—	(75)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ		
	431		S D260	2172	甕	(143)	—	(60)	細	普	褐色	ヘラナデ	ハケメ		ヘラナデ		内面摩減
	432		S D260	2212	甕	(170)	—	(199)	細	普	褐色	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	C 3 c	外面煤付着
	433		S D260	2212	甕	(170)	—	(199)	細	普	褐色	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	C 3 c	外面煤付着
85	434		S D261	2009	器台	89	—	(40)	粗	普	褐色	ナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	B 1 a	調整粗い
	435		S D261	2014	器台	—	—	(25)	緻	普	白褐色				ハケメ		内外面摩減
	436		S D261	2005	高坏	—	—	(52)	細	普	白褐色				ヘラナデ		
	437	28	S D261	1203	高坏	175	113	150	緻	堅	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ヨコナデ	ハケメ	E 2	
	438		S D261	2012	高坏	—	—	(142)	緻	普	赤褐色		ミガキ		ヘラナデ	E	
	439		S D261	1128	壺	—	—	(54)	細	普	白褐色	ミガキ		ミガキ		D 1	内外面赤彩
	440		S D261		壺	—	47	(47)	細	普	赤褐色		ミガキ				内面摩減
	441		S D261	2022	甕	(184)	—	(39)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ		ヘラナデ・ヨコナデ	ハケメ	C 1	
	442		S D261	1995	甕	(178)	—	(38)	粗	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ		C 1	外面煤付着

表16 土師器観察表 (10)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎 土	焼 成	色 調	調 整 技 法				分 類	備 考	
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面			
85	443		S D261	甕	(183)	—	(66)	細	普	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ		C 1	内面摩滅	
	444		S D261	2006 甕	(209)	—	(46)	細	普	褐色	ヘラナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ			外面煤付着
	445		S D261	2011 甕	(166)	—	(38)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ			
	446		S D261	2001 甕	(154)	—	(46)	細	普	赤褐色		ハケメ	ハケメ	ハケメ			内外面摩滅
	447		S D261	1343 甕	—	86	(32)	粗	普	暗褐色		ハケメ		ハケメ			
	448		S D261	甕	—	(25)	(23)	細	堅	褐色		ハケメ		ハケメ			
	449		S D261	壺	—	(64)	(18)	緻	堅	褐色				ヘラナデ			内外面赤彩
	450		S D261	2010 壺	—	(44)	(34)	緻	普	赤褐色		ハケメ					内面摩滅
	451		S D261	甕	—	(54)	(25)	細	堅	褐色		ハケメ					
	452		S D261	2004 甕	—	65	(37)	緻	堅	褐色	ヘラナデ			ヘラナデ			
453		S D261	864 甕	—	(38)	(178)	細	普	褐色		ハケメ		ハケメ			外面煤付着	
87	454	25	S D262	1620 器台	76	111	64	緻	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ		ヘラナデ→ヨコナデ	B 1 a	円窓 4 内外面赤彩	
	455	25	S D262	1616 器台	81	109	57	緻	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヨコナデ・ヘラナ デ	B 1 a	円窓 (2)「2」 内外面赤彩	
	456	25	S D262	1613 器台	79	120	68	緻	堅	白褐色	ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ヨコナデ・ヘラナ デ	B 1 a	円窓 5 内外面赤彩	
	457		S D262	1767 器台	—	(110)	(65)	緻	堅	赤褐色		ヨコナデ・ミガキ		ハケメ	D	円窓 (2)「2」	
	458		S D262	1541 器台	—	(100)	(56)	細	普	白褐色		ハケメ→ミガキ		ハケメ	E	円窓 3	
	459		S D262	1669 高坏	—	—	(43)	細	普	赤褐色				ハケメ			円窓 (2)「2」 外面赤彩 外面摩滅
	460		S D262	1590 器台	—	—	(47)	細	普	赤褐色		ハケメ					円窓 3 内外面摩滅
	461	28	S D262	1615 高坏	158	102	129	緻	堅	白褐色	ヨコナデ	ミガキ→ヨコナデ	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	E 3 a		内外面赤彩
	462		S D262	1645 高坏	—	—	(86)	細	普	赤褐色		ミガキ		ハケメ	D		外面赤彩
	463		S D262	768 鉢	190	—	(82)	細	普	白褐色	ヨコナデ	ハケメ→ナデ・ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ミガキ			
	464	22	S D262	1635 鉢	177	19	95	細	普	褐色	ヨコナデ	ヘラナデ・ミガキ	ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ	B 1		
	465		S D262	1706 壺	—	—	(81)	緻	堅	褐色		ハケメ→ミガキ		ナデ・ヘラナデ			
	466		S D262	1658 壺	—	20	(101)	緻	堅	褐色		ハケメ		ヘラナデ			内外面摩滅
	467		S D262	鉢	(100)	—	(49)	細	普	褐色	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	ヨコナデ		L 1		
	468	22	S D262	1708 鉢	128	—	(97)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ	D 2		
	469	22	S D262	1567 鉢	(148)	61	75	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	C 1		丸みを持つ平底
	470	22	S D262	1633 鉢	(141)	63	71	粗	普	暗褐色	ヨコナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 1		
	471		S D262	1553 鉢	(200)	—	(58)	粗	堅	褐色	ハケメ→ミガキ		ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	A 2 b		
	472		S D262	1681 小型土器	—	23	(40)	細	堅	褐色		ナデ		ナデ			手捏成形
	88	473	29	S D262	1602 壺	240	96	431	緻	堅	白褐色	ヨコナデ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ハケメ	A 2 a	底部ワラ状圧痕
474			S D262	1694 壺	(134)	—	(48)	粗	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C 2 c		
475			S D262	1719 壺	(131)	—	(45)	粗	普	白褐色	ハケメ→ミガキ		ハケメ	ハケメ	C 2 c		
476		33	S D262	1314 壺	172	—	(123)	粗	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヨコナデ・ヘラナデ・ハケメ	ハケメ	C 5 b		
477		22	S D262	1769 鉢	—	—	(89)	粗	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ミガキ	ハケメ	A 1		
89	478		S D262	1545 甕	(228)	—	(67)	細	脆弱	褐色	ハケメ	ハケメ		ハケメ	B	外面煤付着 内外面摩滅	
	479		S D262	1715 甕	(215)	—	(38)	粗	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ			外面煤付着
	480		S D262	1600 甕	209	—	(189)	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C 1 c	外面煤付着	
	481		S D262	1660 甕	223	—	(162)	粗	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C 2 a		
	482		S D262	1571 壺	—	76	(65)	粗	普	白褐色		ハケメ→ミガキ		ヘラナデ			
	483		S D262	1741 甕	—	69	(26)	緻	堅	暗褐色				ハケメ			
	484		S D262	甕	—	(78)	(32)	粗	普	褐色		ミガキ					内面剥離
	485		S D262	1674 甕	—	82	(35)	粗	堅	暗褐色	ハケメ→ヘラナデ			ハケメ			
	486		S D262	1647 甕	—	32	(17)	粗	普	褐色		ハケメ		ハケメ			
	487		S D262	1704 甕	—	30	(112)	粗	普	暗褐色		ハケメ		ハケメ			底部内面調整痕凡例写真
90	488		S D262	1708 甕	(180)	—	(103)	粗	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ			
	489		S D262	1091 甕	(201)	—	(126)	粗	普	白褐色	ヘラナデ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ	C 3	外面煤付着	

表17 土師器観察表 (11)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎 土	焼 成	色 調	調 整 技 法				分 類	備 考		
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面				
90	490		S D262	1594	甕	200	—	(80)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ・ナデ	C 3		
	491		S D262	1550	甕	(253)	—	(63)	粗	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ・ミガキ	ハケメ		外面煤付着	
	492		S D262	1632	甕	(180)	—	(78)	粗	普	白褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ			
	493		S D262	1704	甕	(150)	—	(31)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ			
	494		S D262	1551	甕	(153)	—	(39)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ			
	495		S D262	1544	甕	(168)	—	(50)	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ			内面摩滅	
	496		S D262	1569	甕	(181)	—	(51)	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ			
	497		S D262	1552	甕	(180)	—	(47)	細	普	白褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ			
92	498		S D344	2263	壺	—	26	(63)	緻	普	白褐色		ミガキ		ヘラナデ			
	499	24	S D344	2259	鉢	168	21	113	緻	堅	赤褐色	ミガキ				K 1	内外面摩滅	
	500	35	S D344	2260	甕	(208)	—	(187)	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C 1 c		
94	501		S X273	1433	壺	(304)	—	(88)	緻	堅	白褐色	ハケメ・ミガキ ヨコナデ・ミガキ		ハケメ→ミガキ				
	502		S X273	1431	壺	220	98	(400)	粗	普	褐色	ヨコナデ・ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ハケメ			
97	503	25	S G252	1985	器台	89	114	84	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ →ヨコナデ	B 1 a	円窓3	
	504	25	S G252	2131	器台	88	120	77	緻	堅	赤褐色	ミガキ	ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ・ミガキ	B 1 a	円窓3 + 小孔1	
	505	25	S G252	2040	器台	(86)	(130)	89	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ミガキ→ヨコナデ	ヘラナデ→ヨコナデ	B 1 a	円窓(2)「C」	
	506	25	S G252	2037	器台	85	100	70	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ	B 1 a	円窓3	
	507	25	S G252	2047	器台	(99)	(140)	90	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	B 5	円窓3 調整粗い	
	508		S G252	2148	器台	—	(140)	(67)	緻	堅	褐色		ミガキ→ヨコナデ		ヘラナデ・ヨコナデ		円窓3	
	509		S G252	2126	器台	(79)	—	(42)	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ	B 1 a	円窓3確認 赤彩 (受部内外面 脚部外面)	
	510	27	S G252	2029	高坏	—	100	(57)	緻	堅	褐色		ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	A 2	円窓3	
	511		S G252	867	器台	—	—	(54)	緻	堅	褐色		ミガキ		ハケメ	D		
	512		S G252	2034	高坏	—	101	(36)	細	堅	褐色		ミガキ		ナデ・ミガキ			
	513	27	S G252	2082	高坏	158	89	94	緻	堅	暗褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	A 1		
	514		S G252	1983	高坏	—	—	(83)	緻	堅	白褐色		ミガキ			E 3	外面赤彩	
	515	28	S G252	2042	高坏	167	130	194	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ・ ヨコナデ	E 1	脚部に1次調整のハケメ 残る	
	516		S G252	1976	高坏	—	(111)	(78)	緻	堅	暗褐色		ミガキ	ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	A 1		
	517		S G252	2024	高坏	—	111	(83)	緻	堅	暗褐色		ハケメ→ヨコナデ・ミガキ		ハケメ→ヨコナデ	E		
	98	518	28	S G252	2044	高坏	152	112	123	緻	普	褐色	ナデ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ・ナデ・ハケメ	E 3 b	外面赤彩
		519		S G252	2153	高坏	—	108	(90)	緻	堅	褐色		ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ→ヨコナデ	A 1	
520		27	S G252	2028	高坏	—	(120)	(110)	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	B 2		
521			S G252	2102	高坏	—	128	(67)	緻	堅	暗褐色		ミガキ→ヨコナデ		ヘラナデ・ミガキ	E		
522			S G252		高坏	183	—	(71)	緻	堅	褐色	ミガキ		ミガキ		E		
523		28	S G252	1058	高坏	—	142	(90)	緻	普	褐色		ヨコナデ・ミガキ		ヨコナデ・ヘラナ デ・ハケメ	F	外面に赤彩わずかに残る	
524		24	S G252	2032	鉢	92	15	72	緻	堅	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ヨコナデ	ナデ	L 5		
525			S G252	2028	鉢	104	20	72	緻	堅	褐色		ミガキ→ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ	L 5		
526			S G252	2132	鉢	—	25	(35)	緻	堅	褐色	ミガキ				L 5		
527			S G252	1059	鉢	—	(38)	(52)	細	普	褐色		ハケメ・ヘラナデ			L	調整粗い	
528			S G252	1286	鉢	—	17	(40)	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	L		
529			S G252	2035	鉢	—	44	(26)	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	L 4	底部内面剥離	
530		24	S G252	2041	鉢	(100)	14	70	細	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	L 4		
531		24	S G252	2030	鉢	(92)	20	66	緻	堅	褐色	ミガキ→ヨコナデ	ミガキ・ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	L 4		
532		24	S G252	1989	鉢	88	28	56	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ・ヘラナデ	J		
533			S G252		鉢	(107)	—	(55)	細	普	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	L 1		
534		23	S G252		鉢	(129)	—	67	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ・ケズリ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ			
535		S G252	2048	鉢	122	—	58	緻	堅	暗褐色	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	ヨコナデ	ミガキ				
536		S G252	2118	鉢	140	58	48	細	堅	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 1			

表18 土師器観察表 (12)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎 土	焼 成	色 調	調整技法				分 類	備 考
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面		
99	537		S G 252	鉢	(139)	—	(47)	緻	普	赤褐色	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	ハケメ→ミガキ		
	538		S G 252	鉢	(143)	—	(53)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ヘラナデ		ナデ・ヘラナデ	G 1 b	
	539		S G 252	鉢	(140)	—	(47)	緻	堅	暗褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	G 1 c	
	540		S G 252	鉢	(188)	—	(33)	緻	普	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	E	
	541		S G 252	2074 鉢	(162)	—	(64)	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ	ミガキ	G 1 a	
	542		S G 252	鉢	(190)	—	(65)	細	堅	褐色	ヨコナデ→ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ	C	
	543		S G 252	鉢	(260)	—	(88)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ナデ・ヘラナデ・ハケメ	ハケメ→ミガキ	A 2 b	外面煤付着
	544	22	S G 252	2099 鉢	(328)	—	(141)	粗	堅	褐色	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	A 2 b	
	545		S G 252	鉢	(163)	46	80	緻	堅	褐色	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	C 1	
	546	22	S G 252	2158 鉢	192	33	100	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	B 1	
	547		S G 252	2109 鉢	133	27	87	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	B 1	
100	548	22	S G 252	1987 鉢	(120)	82	148	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ナデ	ハケメ・ヨコナデ	ヘラナデ	D 1	片口台付鉢
	549	40	S G 252	2085 甕	158	27	112	粗	堅	褐色	指頭オサエ	ナデ・ハケメ	指頭オサエ	ハケメ・ヘラナデ	F 3	
	550	33	S G 252	2030 壺	146	30	188	緻	普	赤褐色	ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	ミガキ→ヨコナデ	ヘラナデ	D 1	
	551	34	S G 252	2274 壺	115	—	(99)	細	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ	E 2	
	552		S G 252	2059 壺	—	26	(104)	緻	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ		
	553	33	S G 252	2110 壺	150	—	(79)	粗	堅	褐色	ミガキ		ミガキ	ハケメ	C 5 a	
	554		S G 252	1994 鉢	—	20	(92)	緻	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ・ハケメ		
	555	32	S G 252	壺	(200)	—	(88)	細	普	白褐色	ハケメ→ミガキ		ハケメ→ミガキ		D 1	
	556	33	S G 252	2114 壺	149	61	240	細	普	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ハケメ・ヨコナデ	ヘラナデ	C 2 c	内面摩滅
	101	557	23	S G 252	2027 鉢	(110)	35	112	粗	堅	赤褐色	ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	I 4
558			S G 252	壺	(113)	—	(53)	細	普	褐色		ミガキ		ヘラナデ	E 2	内外面摩滅
559			S G 252	2018 壺	—	—	(90)	細	堅	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ		
560			S G 252	2146 壺	(150)	—	(136)	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ヘラナデ		G 1 b	
561			S G 252	2138 壺	(114)	—	(132)	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ナデ・ヘラナデ	G 1 b	
562			S G 252	2111 壺	182	78	334	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ→ミガキ	ミガキ	ヨコナデ→ミガキ	ヘラナデ	A 2 b	
102	563	39	S G 252	2600 甕	314	—	(121)	緻	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	A 2 b	外面煤付着
	564		S G 252	1976 壺	—	109	(501)	粗	堅	褐色		ハケメ→ヘラナデ		ハケメ・ヘラナデ		
103	565		S G 252	2026 壺	(149)	—	(98)	細	堅	白褐色	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	B 2 a	
	566		S G 252	2066 壺	216	—	(130)	細	堅	褐色	ハケメ→ヨコナデ→ミガキ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	A 2 b	
	567		S G 252	1976 壺	256	90	493	粗	普	白褐色	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ヘラナデ・ハケメ	A 2 a	
104	568		S G 252	2144 壺	—	55	(220)	緻	堅	褐色	ハケメ	ハケメ→ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ		
	569		S G 252	2147 甕	(184)	—	(160)	細	堅	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	C 2 a	
	570		S G 252	2051 甕	188	—	(167)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ	ハケメ→ヘラナデ	C 4	
	571		S G 252	2084 甕	173	25	173	細	堅	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C 3 c	外面煤付着
	572	36	S G 252	2039 甕	170	41	231	細	普	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	C 2 a	外面煤付着
	573	40	S G 252	2145 甕	143	38	134	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ→ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	F 1 a	外面煤付着 内面炭化物付着
105	574	38	S G 252	2124 甕	(177)	61	210	細	普	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ケズリ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	C 4 a	外面煤付着 内面炭化物付着
	575	37	S G 252	2036 甕	(172)	46	200	細	普	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	C 3 b	
	576	34	S G 252	2168 壺	—	34	(83)	緻	堅	褐色		ミガキ		ケズリ	F	
	577	24	S G 252	2149 鉢	72	40	36	粗	普	褐色	ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	ハケメ	ハケメ	M 2	
	578		S G 252	小型 土器	—	33	(24)	緻	堅	褐色		ナデ		ナデ		手握成形
	579	41	S G 252	小型 土器	34	—	(32)	細	普	褐色	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		手握成形
	580	41	S G 252	2064 小型 土器	57	23	38	細	堅	褐色	ナデ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		手握成形
581	41	S G 252	2063 小型 土器	54	13	30	細	堅	褐色	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラナデ→ナデ		手握成形	
111	627	26	包含層	968 器台	(83)	(122)	86	緻	堅	褐色	ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ→ヨコナデ	B 4	円窓(1)「 <sup>+</sup> 」

表19 土師器観察表 (13)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎 土	焼 成	色 調	調整技法				分 類	備 考	
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面			
111	628		包含層	885	器台	89	—	(44)	粗	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ		B 1 a	円窓 3
	629		包含層	501	器台	80	—	(62)	緻	普	赤褐色			ミガキ			内外面摩滅
	630		包含層	547	器台	(89)	—	(49)	細	普	褐色	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	B 1 a	円窓 3 調整粗い
	631		包含層		器台	—	(94)	(48)	細	堅	褐色		ミガキ		ハケメ→ヨコナデ	E	
	632		包含層	1060	器台	—	109	(66)	粗	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	B	円窓 (3)「2」
	633	26	包含層	1320	器台	—	(120)	(56)	細	堅	褐色		ミガキ		ハケメ	D	
	634		包含層	87	器台	—	—	(44)	緻	堅	暗褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ			円窓 3
	635		包含層	1966	器台	—	—	(44)	緻	堅	褐色		ミガキ		ハケメ		円窓 (2)「2」
	636		包含層	1392	器台	—	—	(38)	細	普	白褐色		ミガキ		ハケメ	D	円窓 3
	637		包含層	803	器台	—	—	(48)	緻	堅	褐色		ミガキ		ハケメ		円窓 3
	638		包含層	718	器台	—	—	(59)	細	普	白褐色		ミガキ		ハケメ		円窓 3
	639		包含層	1257	器台	—	—	(42)	細	普	褐色		ハケメ		ミガキ		円窓 (1)「+」
	640		包含層	690	高坏	—	—	(40)	細	普	暗褐色						円窓 (2)「2」 内外面摩滅
	641		包含層	559	器台	—	—	(49)	細	普	白褐色						円窓 3 内外面摩滅 赤彩(受部の内外面・脚部の外面)
	642		包含層	502	器台	—	—	(46)	細	普	赤褐色						内外面摩滅
	643		包含層	689	器台	—	—	(43)	細	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ		
	644		包含層	1385	高坏	—	—	(32)	緻	普	白褐色		ミガキ		ヘラナデ		内外面摩滅
	645		包含層	802	器台	—	—	(56)	細	普	白褐色		ミガキ		ヘラナデ		円窓 (2)「2」
	646		包含層		高坏	—	—	(28)	細	普	白褐色		ミガキ		ハケメ		円窓 (1)「+」
	647		包含層		高坏	—	—	(41)	細	堅	赤褐色		ミガキ		ハケメ		
648		包含層		高坏	—	—	(48)	細	普	赤褐色						内外面摩滅	
649		包含層	503	高坏	—	—	(74)	細	普	褐色		ミガキ		ハケメ		内外面摩滅	
650	39	包含層	1013	甕	—	—	(48)	粗	普	褐色		ハケメ		ハケメ	E	台付甕か	
112	651	28	包含層	965	高坏	(177)	130	164	緻	堅	褐色	ミガキ	ハケメ→ミガキ		ヨコナデ	E 2	内面摩滅
	652	28	包含層	380	高坏	(169)	(89)	144	緻	堅	褐色	ミガキ→ヘラナデ	ミガキ→ヨコナデ		ハケメ→ヨコナデ	E 3 a	
	653		包含層	625	高坏	—	(126)	(152)	緻	普	赤褐色		ミガキ→ヨコナデ		ハケメ	E 1	
	654		包含層	624	高坏	—	(124)	(102)	細	普	赤褐色					E	内外面摩滅
	655		包含層	1238	高坏	150	—	(55)	緻	普	赤褐色	ミガキ		ミガキ		E	
	656		包含層	561	高坏	—	—	(64)	細	堅	白褐色		ミガキ			E 3	内面摩滅
	657		包含層	1297	高坏	—	—	(60)	緻	普	白褐色		ミガキ				外面摩滅
	658		包含層	1361	高坏	—	—	(60)	細	堅	褐色		ミガキ		ハケメ		
	659		包含層	1032	高坏	(172)	—	(92)	緻	普	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ハケメ	A 3	円窓 3
	660		包含層	824	高坏	(153)	—	(97)	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ→ヨコナデ	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ→ヘラナデ→ヨコナデ	A 1	
	661		包含層	1967	高坏	—	—	(72)	緻	普	赤褐色		ミガキ			D	
	662		包含層	512	高坏	—	—	(94)	細	普	白褐色		ミガキ			D	
	663		包含層	957	高坏	—	—	(105)	細	普	赤褐色		ミガキ			C	
113	664		包含層	1324	鉢	(78)	—	(38)	緻	普	白褐色	ミガキ	ミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ		
	665		包含層	763	鉢	—	21	(33)	緻	普	白褐色		ミガキ			L	内外面摩滅
	666	24	包含層	75	鉢	88	34	52	細	堅	褐色	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	L 4	
	667		包含層		鉢	(156)	—	(91)	細	堅	褐色	ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		
	668	24	包含層	19	鉢	112	—	71	細	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ→ミガキ	ヘラナデ	L 1	
	669	23	包含層	218	鉢	(151)	—	(47)	緻	堅	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	E	
	670		包含層	1161	鉢	(150)	—	(85)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	I 1	
	671		包含層		鉢	(88)	—	(48)	細	普	褐色	ヨコナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ→ミガキ	L 1	
	672		包含層	1391	鉢	(138)	—	(44)	細	普	赤褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	E	外面摩滅
	673	23	包含層	1239	鉢	153	—	73	細	普	赤褐色		ハケメ→ミガキ		ヘラナデ	G 1 a	内外面摩滅
	674	23	包含層	1971	鉢	102	20	53	緻	堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ	G 1 a	
675		包含層	1010	鉢	182	—	(72)	細	脆弱	赤褐色					G 1 a	内外面摩滅	

表20 土師器観察表 (14)

図版	写真 図版	出土 地点	登録 番号	器種	計測値(mm)			胎土	焼成	色調	調整技法				分類	備考	
					口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部) 外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部) 内面			
113	676	23	包含層	1057	鉢	123	34	63	細 普	白褐色	ヨコナデ	ミガキ・ケズリ	ヨコナデ	ミガキ	H		
	677	22	包含層	1241	鉢	148	76	134	粗 脆弱	赤褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ナデ	D 2	台付鉢 内外面摩滅	
	678		包含層		鉢	140	32	65	緻 脆弱	赤褐色					G 2 b	内外面摩滅	
	679	23	包含層	688	鉢	139	44	43	細 普	白褐色	ヨコナデ	ヘラナデ			H	内外面赤彩痕残る 内面摩滅	
	680	24	包含層		鉢	96	40	43	細 堅	褐色	ヨコナデ	ミガキ・ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	M 3		
	681		包含層		鉢	61	35	29	細 普	白褐色			ヘラナデ		M 3	外面摩滅	
114	682		包含層	681	鉢	(198)	—	90	細 普	白褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	B 1		
	683		包含層		鉢	—	(35)	(15)	粗 普	褐色		ハケメ			B 1	内外面摩滅	
	684		包含層	975	鉢	—	47	(18)	細 普	褐色					B 1	内外面摩滅	
	685		包含層	628	甕	—	(48)	(19)	細 普	赤褐色							底部外面刺突
	686	22	包含層	1910	鉢	171	45	106	粗 普	褐色	ヨコナデ	ナデ・ケズリ・ハケメ→ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	B 2	鉢形甕 多孔(6孔)	
	687	33	包含層		壺	194	—	(138)	緻 普	赤褐色	ミガキ				D 1		
	688		包含層	1097	壺	—	—	(71)	細 普	白褐色			ミガキ				
	689		包含層	1354	壺	—	—	(48)	細 普	白褐色				ナデ			内外面摩滅
	690		包含層	1465	壺	—	32	(106)	緻 普	赤褐色	ミガキ						
	691	33	包含層		壺	(123)	—	(57)	緻 普	白褐色	ミガキ				C 3	頸部突帯	
	692		包含層	507	壺	—	—	(63)	細 普	褐色			ミガキ				内外面赤彩
	693		包含層	817	壺	—	—	(46)	緻 普	白褐色	ミガキ		ミガキ		A 2 b	内外面赤彩	
694		包含層	1176	壺	(215)	—	(49)	細 普	白褐色	ヘラナデ		ミガキ		A 2 b	内外面摩滅		
115	695		包含層	93	壺	—	—	(175)	細 普	赤褐色							
	696		包含層	646	壺	(95)	64	192	粗 脆弱	褐色				ヘラナデ	C 1 a	内外面摩滅	
	697		包含層	1776	壺	—	84	(325)	粗 普	赤褐色		ハケメ		ハケメ			
116	698		包含層	71	壺	—	52	(147)	細 普	褐色			ミガキ		ヘラナデ		
	699		包含層	217	壺	—	—	(89)	粗 普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ			
	700	40	包含層	1018	甕	135	—	112	細 普	褐色	ナデ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	F 4	成形指頭圧痕多用	
	701		包含層	924	甕	(183)	—	(37)	細 脆弱	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ						内外面摩滅
	702		包含層	1038	甕	(157)	—	(30)	粗 普	褐色	ヨコナデ		ハケメ				
	703		包含層		甕	(140)	—	(33)	細 普	赤褐色	ヨコナデ		ヘラナデ				
	704		包含層		甕	(138)	—	(47)	細 普	赤褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ					内面摩滅
	705	39	包含層		甕	(122)	—	(39)	粗 普	暗褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	D		
	706		包含層	1363	甕	216	—	(170)	粗 普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ・ヘラナデ	C 4 c		
	707		包含層	1117	甕	(200)	—	(173)	細 普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	C 4		
117	708	35	包含層	557	甕	146	—	171	細 普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ	C 2 b	外面煤付着	
	709		包含層	557	甕	135	25	142	細 普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	C 3 a		
	710		包含層	1075	小型土器	—	46	(31)	粗 普	白褐色		ヘラナデ		ヘラナデ		手握成形	
	711	41	包含層	1301	小型土器	42	—	23	緻 普	白褐色	ナデ	ヘラナデ・ナデ	ナデ	ヘラナデ・ナデ		手握成形	
	712	41	包含層	509	小型土器	35	—	26	細 普	白褐色	ヘラナデ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	ナデ	ヘラナデ・ナデ		手握成形	

※ 備考中、高坏・器台の円窓についての記述は次のとおりである。  
 円窓 3・円窓なし…完形品での確認  
 円窓(3)…遺存部で確認できた数  
 円窓の記載なし…小片のため確認不能

「」は円窓に掛かる部分の横断面の模式図である。  
 実線は遺存している部分の外形線を表し、確認できた円窓の位置を記した。

表21 土製品計測表

図版	写真 図版	名称	出土地	径 (m/m)	孔径 (m/m)	厚さ (m/m)	重量 (g)	調整	
12	47	41	土玉	S T 7	27	6	28	16.3	ナデ
	48	41	土玉	S T 7	27	5	27	16.2	ナデ
45	224		土玉	S T 202	長径27 短径24	7	33	18.3	ナデ
69	334	41	紡錘車	S T 212	49	9	15	38.2	縄文 (R L)

表22 管玉及び同未成品計測表

図版	写真 図版	名称	出土地	長さ (m/m)	径(最大・最少)		孔径(最大・最少)		重量 (g)	研磨面	石質	備考	
					上径	下径	上径	下径					
9	29	41	管玉未成品	S T 4	22.2	8.55 8.35	9.25 8.20	-	-	3.6		玻璃質流紋岩	
66	313	41	剥片	S T 211	44.9	-	-	-	-	50.93		玻璃質流紋岩	
69	335	41	管玉	S T 212	26.5	4.95 4.90	4.95 4.90	2.15 1.65	2.15 1.60	0.9	-	玻璃質流紋岩	
74	371	41	管玉	S K 278	22.5	5.35 5.30	5.55 5.45	2.15 2.10	2.05 1.95	1.18	-	泥岩	
	372	41	管玉	S K 278	20.9	6.00 5.90	6.10 6.10	3.15 2.80	3.00 2.50	1.02	-	玻璃質流紋岩	
83	433	41	剥片	S D 260	38.5	-	-	-	-	38.31	-	玻璃質流紋岩	
117	713		管玉未成品	包含層	15.4	4.70 4.20	5.45 4.65	-	1.65 1.60	0.56	7	玻璃質流紋岩	
	714	41	管玉未成品	包含層	23.9	9.65 9.35	8.50 0.25	-	-	2.37	-	玻璃質流紋岩	研磨途中
	715	41	管玉未成品	包含層	31.4	11.90 11.70	10.00 9.00	-	-	8.01	-	玻璃質流紋岩	
	716	41	管玉未成品	包含層	29.1	8.60 6.80	10.60 7.65	-	-	4.33	-	玻璃質流紋岩	
	717	41	管玉未成品	包含層	31.8	9.60 8.90	8.00 5.60	-	-	4.51	-	玻璃質流紋岩	
	718	41	管玉未成品	包含層	24.5	10.50 9.30	9.30 8.35	-	-	4.9	-	玻璃質流紋岩	

表23 石製品計測表

図版	写真 図版	名称	出土地	長さ (m/m)	幅 (m/m)	厚さ (m/m)	重量 (g)	石質	備考
14	70	41	砥石	S T 8	184	184	51	3,152	石英安山岩 管玉用
16	76	41	砥石	S T 10	110	87	52	678	石英安山岩
45	225	41	砥石	S T 202	125	97	55	644	緑色凝灰岩
117	719		石鏃	包含層	27.6	14	3.4	1	頁岩

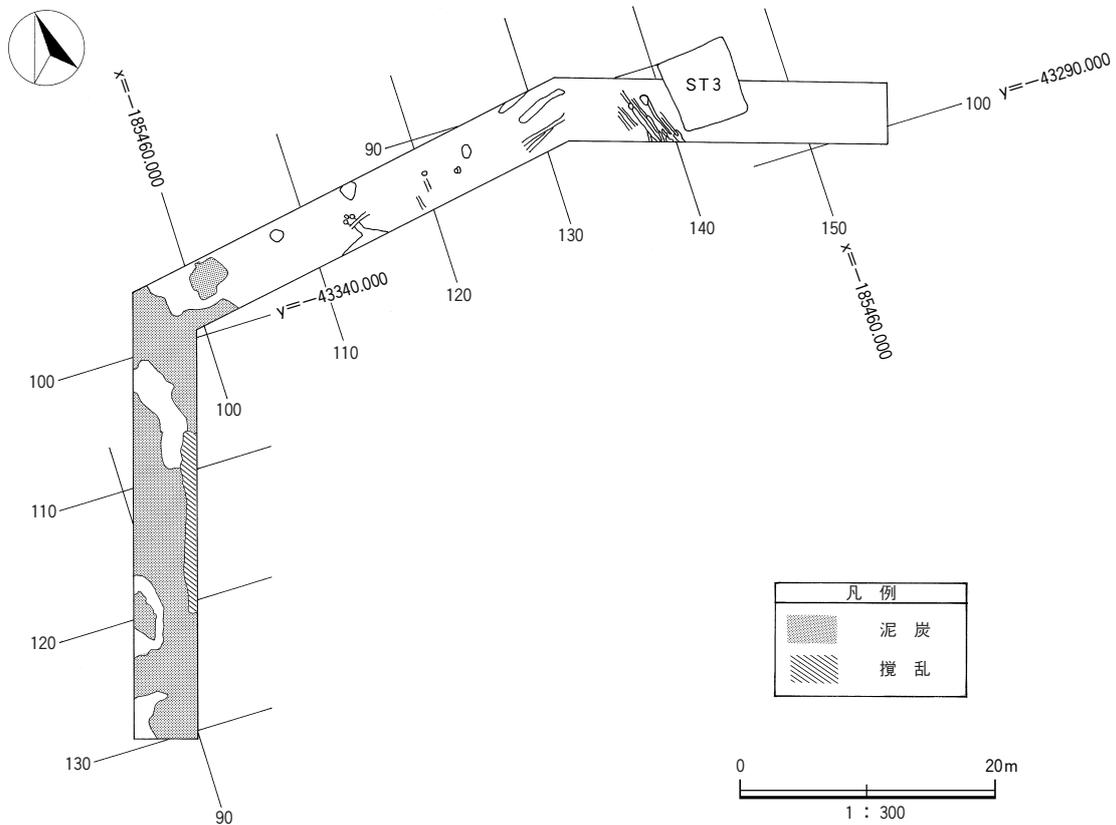
表24 弥生土器観察表(1)

図版	写真 図版	器種	出土地点	特徴(外面)	特徴(内面)
118	720	42 蓋	200-390	平行沈線による波状文, 端部平行沈線文	ナデ調整
	721	42 壺	195-360	ナデ調整, 朱彩, 口縁端部指頭圧痕文	ナデ調整
	722	42 壺	205-360	口縁部撚糸文	ナデ調整
	723	42 壺	200-380	平行沈線による波状文	ナデ調整
	724	壺	200-380	平行沈線による波状文	ナデ調整, 口縁端部に平行沈線による波状文
	725	42 壺	195-365	頸部に2条の凸帯, 沈線文	ナデ調整
	726	壺	205-380	平行沈線による波状文	ナデ調整
	727	壺	180-360	縄文+沈線文	ナデ調整
	728	42 壺	200-380	ナデ調整により稜を形成	ナデ調整
	729	42 壺	205-385	体部平行沈線による山形文	ナデ調整
	730	42 壺	205-380	体部上半に平行沈線による渦卷文	器面剥離
	731	42 壺	205-380	頸部無文帯, 体部上半に平行沈線文, 体部無文帯	ナデ調整
	732	42 台付壺?	200-300	体部と台部の境に凸帯, 台部に平行沈線による山形文	ナデ調整
	733	42 壺	200-300	体部上半平行沈線による山形文, 体部下半無文	ナデ調整
	734	42 壺	200-370	頸部に横位の連続した平行沈線文, 体部縄文	ナデ調整
735	42 高坏	205-360	脚部下半に平行沈線による連弧文, 付部下端に連弧文	ナデ調整	
119	736	甕	190-365	口縁部縄文, 頸部縦位連続刺突文, 体部縄文	ナデ調整
	737	42 甕	195-360	口縁部刺突文風指頭圧痕文	ナデ調整
	738	42 甕	200-375	口縁上部縄文+沈線文, 刺突文, 口縁下部無文帯, 頸部沈線文	ナデ調整
	739	42 甕	180-370	二重口縁, 口縁部縄文, 頸部縦位連続刺突文	ナデ調整
	740	甕	200-370	口縁端部縄文, 口縁上部沈線文+縦位の刺突文, 口縁下部無文帯, 頸部沈線文	ナデ調整
	741	甕	195-360	口縁部交互刺突文	口縁部撚糸文
	742	壺	175-365	体部縄文+交互刺突文	ナデ調整
	743	42 甕	205-380	口縁部交互刺突文, 口縁端部縄文	ナデ調整
	744	42 甕	195-380	口縁端部押圧縄文, 口縁部沈線文, 交互状刺突文, 頸部沈線文	ナデ調整
	745	42 甕	205-380	口縁端部押圧縄文, 刺突文, 口縁部山形文, 口縁下部縦位の刺突文, 体部縄文	ナデ調整
	746	42 甕	200-375	工字状および楕円状の磨消縄文	ナデ調整
	747	42 甕	205-380	口縁端部縄文, 二山突起, 口縁上部交互刺突文, 体部工字状磨消縄文	ナデ調整
	748	壺	205-390	体部楕円状の磨消縄文	ナデ調整
	749	甕	200-395	体部撚糸文	ナデ調整
	750	壺	200-370	体部縄文	ナデ調整
120	751	甕	205-390	口縁部無文帯, 頸部沈線文に挟まれた凸帯に刺突列点文	ナデ調整
	752	甕	175-380	口縁部縄文+綾線文	ナデ調整
	753	鉢	205-380	口縁端部押圧縄文, 口縁部沈線文+刺突文, 体部縄文	ナデ調整
	754	鉢?	200-375	口縁端部刻目2, 口縁部円形刺突文	ナデ調整
	755	甕	200-375	口縁部上半撚糸文, 口縁部下半撚糸文+円形刺突文	ナデ調整
	756	甕	185-375	口縁部沈線+刺突列点文	ナデ調整
	757	42 壺	185-375	口縁部縄文, 口縁部下端円形刺突文, 頸部無文帯	ナデ調整
	758	甕	195-380	頸部~口縁部平行沈線文, 口縁部縄文+綾線文	ナデ調整
	759	42 甕	205-385	網状の撚糸文	ナデ調整
	760	42 甕	180-375	口縁部撚糸文, 頸部無文帯	ナデ調整
	761	甕	180-365	体部縄文, 刴痕あり	ナデ調整
	762	甕	195-385	口縁部撚糸文	ナデ調整
	763	甕	180-365	体部縄文, 刴痕あり	ナデ調整
	764	甕	190-375	体部撚糸文	ナデ調整
	765	甕	200-390	体部ナデ→ハケ目調整, 底部布目状圧痕	剥離が多く不明

表25 弥生土器観察表（2）

図版	写真 図版	器種	出土地点	特徴（外面）	特徴（内面）
120	766	壺	205-385	体部捺糸文	ナデ調整
	767	甕	205-385	体部下端縄文，底部ナデ調整	ナデ調整
	768	壺	190-375	体部捺糸文	ナデ調整
	769	壺	205-385	体部縄文	ナデ調整
	770	甕	200-390	体部ナデ調整，底部布目状圧痕	ナデ調整
	771	壺？	205-390	体部捺糸文，底部ミガキ	ナデ調整
121	772	42 壺	205-385	口縁部～体部捺糸文，補修孔2	口縁部捺糸文，体部ナデ調整
	773	42 甕	205-385	口縁部横ナデ，頸部横位捺糸文+斜位捺糸文，体部捺糸文	ナデ調整
	774	42 甕	205-390	口縁部無文，体部縄文，補修孔	口縁部平行沈線による波状文，体部ナデ調整
	775	甕	195-360	口縁部端部縄文，口縁部平行沈線文+波状沈線文	ナデ調整
	776	42 甕	200-375	口縁部端部縄文，口縁部横ナデ，頸部綾線文，体部縄文	ナデ調整
	777	42 甕	205-380	口縁部縄文，頸部無文帯，肩部平行沈線文，体部縄文	ナデ調整
	778	42 壺	205-390	頸部捺糸文，頸部下端無文帯，頸部下端に稜，体部捺糸文	ナデ調整
	779	42 甕	205-385	平行沈線による波状文	ナデ調整
	780	甕	205-385	平行沈線による波状文	ナデ調整
	781	甕	205-380	体部捺糸文，口縁部横ナデ	口縁部横ナデ，体部ナデ調整
	782	42 甕	205-380	体部捺糸文，頸部無文帯	ナデ調整

## IV 菖蒲江1遺跡



第133図 菖蒲江1遺跡遺構配置図

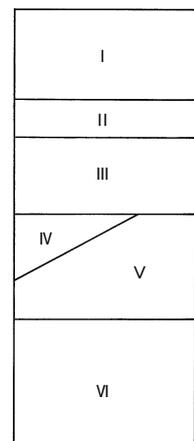
### 1 遺構と遺物

竪穴住居跡1棟、土坑、畝状遺構などを検出した。

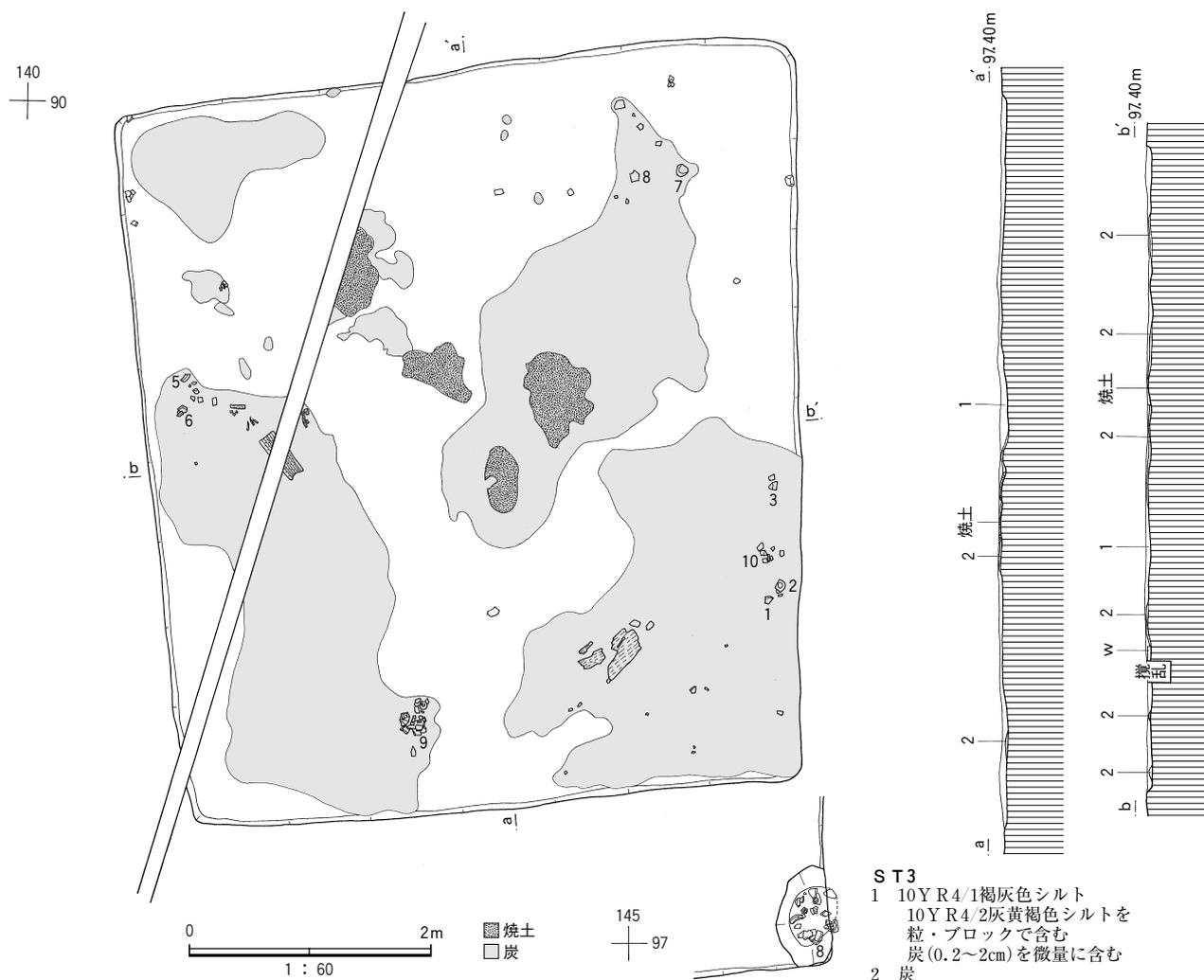
遺構は東西に延びる微高地上に立地している。調査区の南部は僅かに低くなっていて、当時もところどころ泥炭が露頭した湿地帯となっていたものと考えられる。

遺跡の基本層序は次のようになる。Ⅰ層は水田の耕作土で、Ⅱ層は水田の基盤土である。Ⅲ層は遺物包含層で、褐灰色粘質シルトに酸化土の褐色シルトが筋状に混じる。この層中に遺構の掘り込み面が想定されるが、現実的には認識不可能である。Ⅳ層は黒褐色シルト、いわゆる泥炭である。分布は全面的ではなく、Ⅲ層の直下が次に述べるⅤ層となることもある。Ⅴ層は黄灰色砂質シルトに酸化土の褐色シルトが筋状に混じるもので、調査に際しては、この層を地山と称した。Ⅵ層は灰色微砂で、遺構検出面のさらに下層に位置する。洪水に伴う河川堆積物と思われるが、拡がりは確認していない。

以下に種別毎に遺構と遺物を概述する。



第134図 基本層序



第135図 ST3 竪穴住居跡

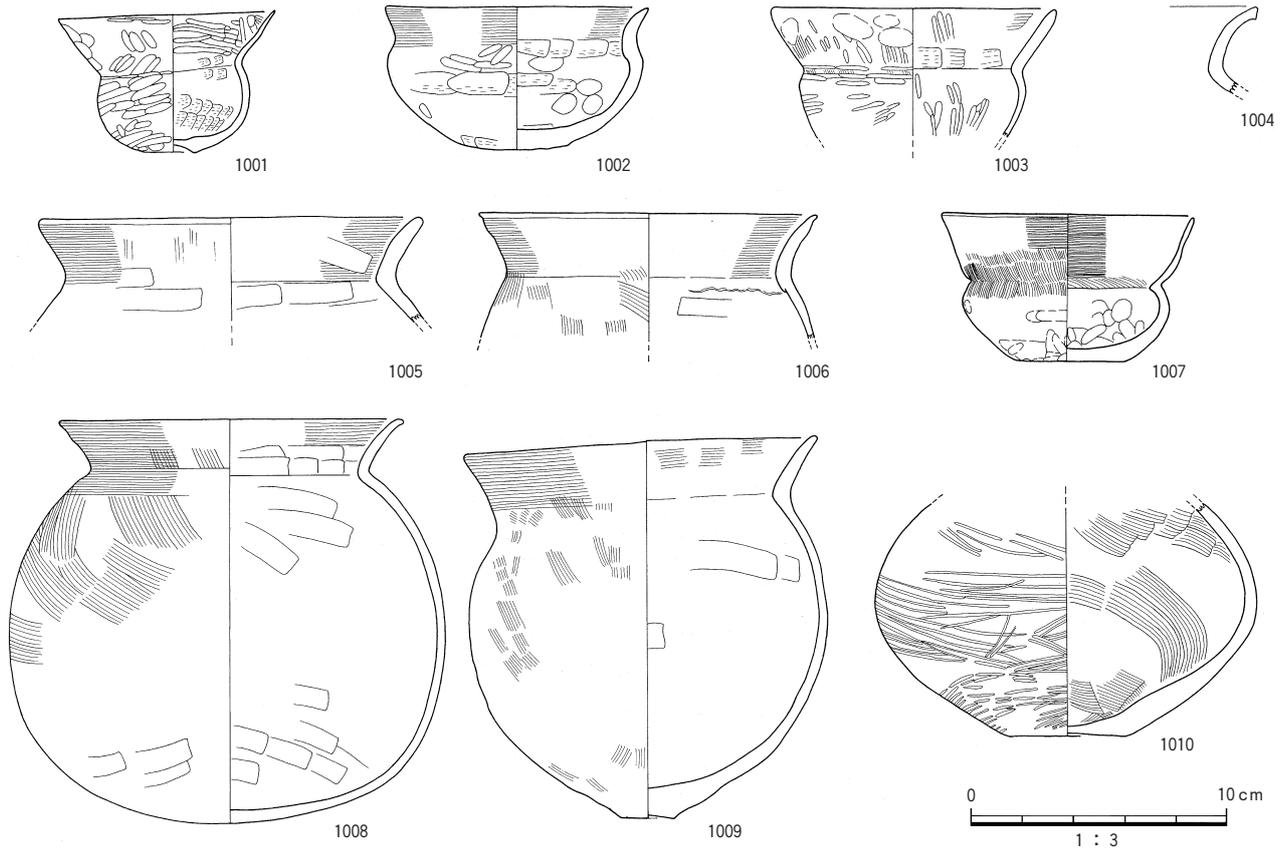
## 竪穴住居跡

### ST3 竪穴住居跡 (第135図)

A区東端、140-90区に所在する。平面形は南北に長い長方形を呈し、東西辺が北側でやや開き、北東隅部がつまみ出されたように張り出す。

規模は南北軸が6.1m、東西軸は5.4mを測る。大形の住居で約10坪ある。

主軸方向はN-3°30'-Wを測り、覆土は1層である。床面のほぼ全域に、炭や燃え残りの建築部材と思われる炭化材が遺存しており、焼失家屋と考えられる。検出面からの深さは最大で約3cmを測る。周溝、柱穴は共に見られず、南東隅に165×100cmの北に長い楕円形の貯蔵穴を持つ。貯蔵穴の東壁は住居の東壁の外まで潜り込んでおり、オーバーハングした形となっている。使用中に何らかの必要性があって作り替えたものであろうか。貯蔵穴の中から鉢(第136図1001)と小形甕(第136図1008)が破片の状態で出土している。貯蔵穴の深さは床面から約12cmを測る。竪穴住居跡ほぼ中央に地床炉と思われる被熱痕跡が見られる。遺物は土師器鉢・壺・甕などが出土している。(第136図)



第136図 ST3 竪穴住居跡出土遺物

## 畝状遺構

畝状遺構は、ほとんど竪穴住居跡の廃絶後に行われたものと考えられ、方向にいくつかの違いが見られる。方向の差が時期差を表すものと思われるが、出土遺物がなく、詳細は不明である。形状は高嶺南遺跡第1次調査で検出した畝状遺構とほぼ同様なので紙幅の関係上、挿図を割愛した。

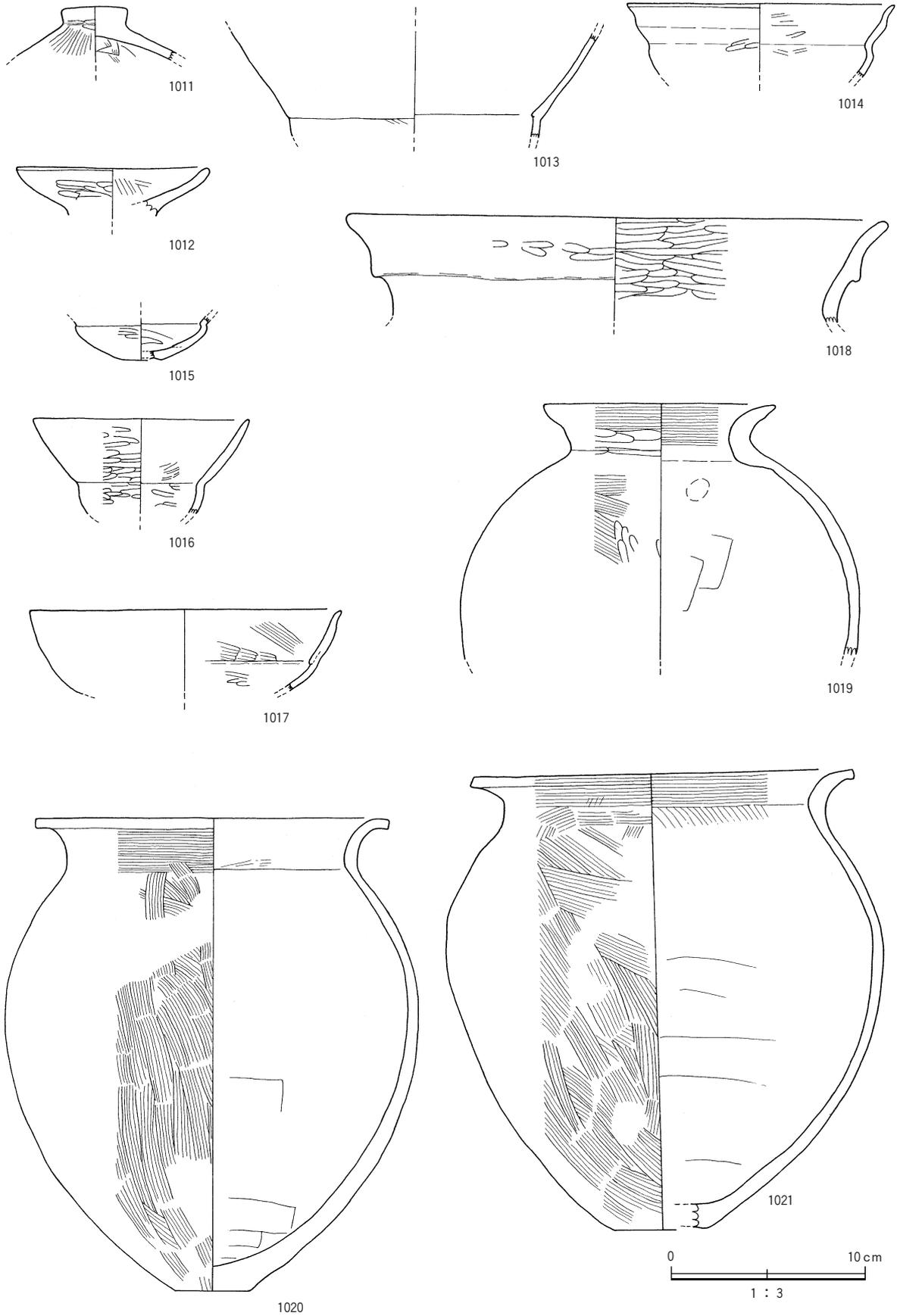
## その他の遺物

遺構外のものとして包含層の遺物がある。位置的に遺構に伴うものもあり得るが、ここでは遺構と切り離し、包含層の遺物として一括した。

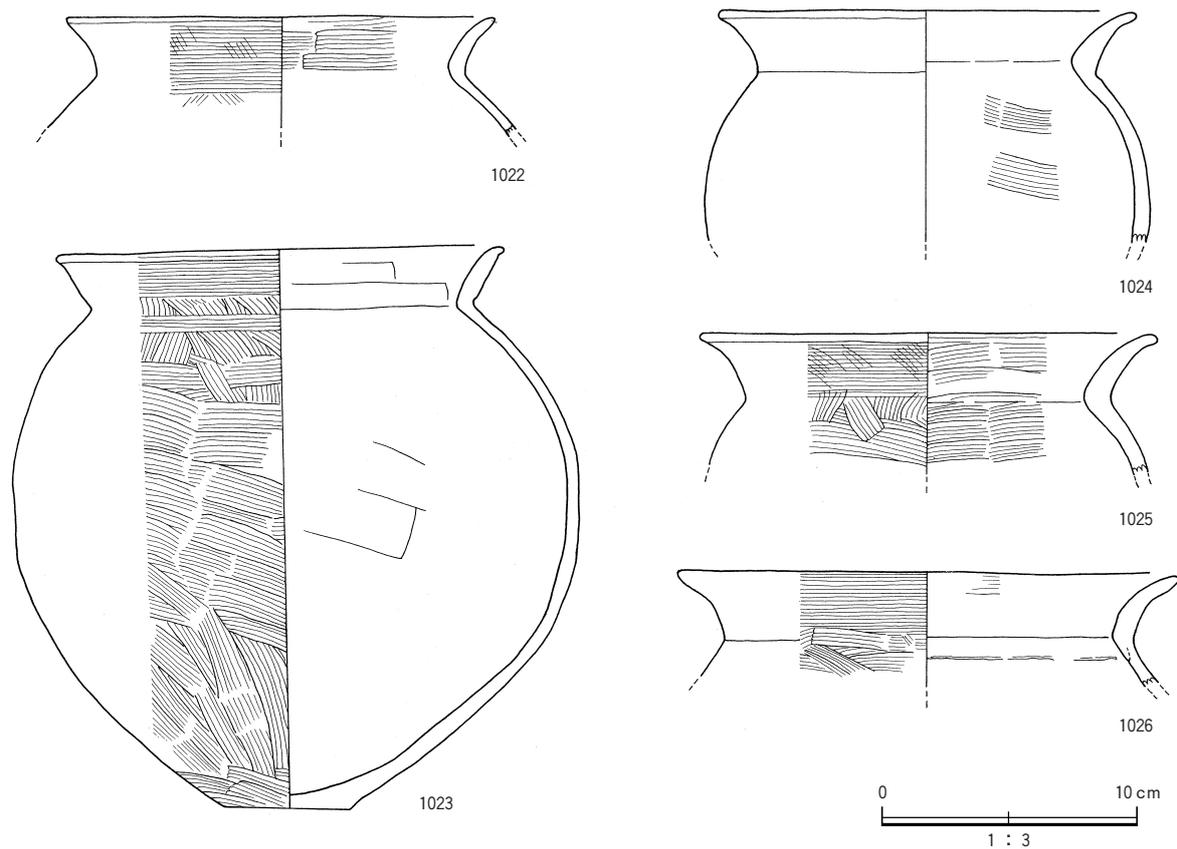
## 2 調査のまとめ

山形県総合交通安全センター（仮称）建設予定地北西隅部の北辺と西辺の調査を行ったが、北辺部で古墳時代前期の竪穴住居跡1棟と数条の畝状遺構を検出した。西辺については、泥炭が露頭する地域で、当時は生活の場所としては不適な低湿地であることが判明した。

山形県総合交通安全センター（仮称）に隣接する、主要地方道天童寒河江線の改良工事に係る発掘調査と並行して調査を実施したが、本遺跡の調査結果を概観すると、泥炭が乾燥して分



第137図 包含層出土遺物(1)



第138図 包含層出土遺物(2)

解し、土壌化の進んだ東西に延びる微高地が居住区域として用いられ、その南北は、居住域より一段低い泥炭の露頭となっていたことがうかがわれる。また重複する住居跡がないことからここでの居住期間がそれほど長いものではないであろうことが推量される。

表26 菖蒲江1遺跡出土土師器観察表

図版	写真 図版	出土地	器種	計測値 (mm)			胎土	焼成	色調	調整技法				備考	
				口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部)外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部)内面		
136	1001	43	S T 3	鉢	85	15	56	細	普	白褐色	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	ヘラナデ	外面赤彩
	1002	43	S T 3	鉢	104	40	57	細	堅	赤褐色	ヨコナデ	ヘラナデ・ミガキ	ヨコナデ	ナデ・ヘラナデ	外面煤付着
	1003		S T 3	鉢	112	-	(51)	細	普	褐色	ナデ・ミガキ	ハケメ→ミガキ	ハケメ・ミガキ	ミガキ	
	1004		S T 3	甕	-	-	(33)	細	普	白褐色	ヘラナデ		ヘラナデ		
	1005		S T 3	甕	152		(40)	緻	堅		ハケメ→ヨコナデ ヘラナデ		ヨコナデ・ヘラナ デ	ヘラナデ	
	1006		S T 3	甕	132		(47)	細	普	褐色	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	
	1007	43	S T 3	鉢	99	41	58	細	普	褐色	ヨコナデ→ハケメ	ヘラナデ・ミガキ	ヨコナデ→ハケメ	ナデ	
	1008	43	S T 3	甕	136	30	159	細	普	暗褐色	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ヘラナデ	外面煤付着
	1009	43	S T 3	甕	138	21	150	粗	脆弱	褐色	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ・ヘラナデ	ハケメ	ヘラナデ	
	1010	43	S T 3	壺	-	44	(89)	細	堅	赤褐色		ミガキ・ヘラナデ		ヘラナデ・ハケメ	外面赤彩・ 細いミガキ
137	1011	43	包含層	蓋	-	-	(29)	緻	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	
	1012		包含層	器台	-	-	(24)	細	普	赤褐色	ミガキ		ミガキ		
	1013		包含層	鉢	-	-	(52)	細	普	赤褐色		ミガキ			内外面摩滅
	1014		包含層	鉢	(138)	-	(35)	緻	普	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
	1015		包含層	鉢	-	(20)	(22)	緻	堅	褐色		ミガキ		ヘラナデ	
	1016		包含層	鉢	(112)	-	(49)	緻	堅	褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
	1017		包含層	鉢	(161)	-	(43)	緻	普	赤褐色			ハケメ		外面摩滅
	1018		包含層	壺	(280)	-	(53)	細	普	赤褐色	ミガキ		ミガキ		
	1019		包含層	壺	119	-	(135)	細	普	褐色	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ・ミガキ		ヘラナデ	
	1020	43	包含層	甕	(183)	38	247	細	普	赤褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	内面摩滅
	1021	43	包含層	甕	196	(50)	238	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	
138	1022		包含層	甕	(166)	-	(46)	細	堅	褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	
	1023	43	包含層	甕	(174)	48	220	細	普	褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	
	1024		包含層	甕	(162)	-	(92)	細	普	褐色				ハケメ	外面摩滅
	1025		包含層	甕	(178)	-	(55)	細	普	褐色	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ	
	1026	43	包含層	甕	(194)	-	-43	細	普	褐色	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ		内面摩滅

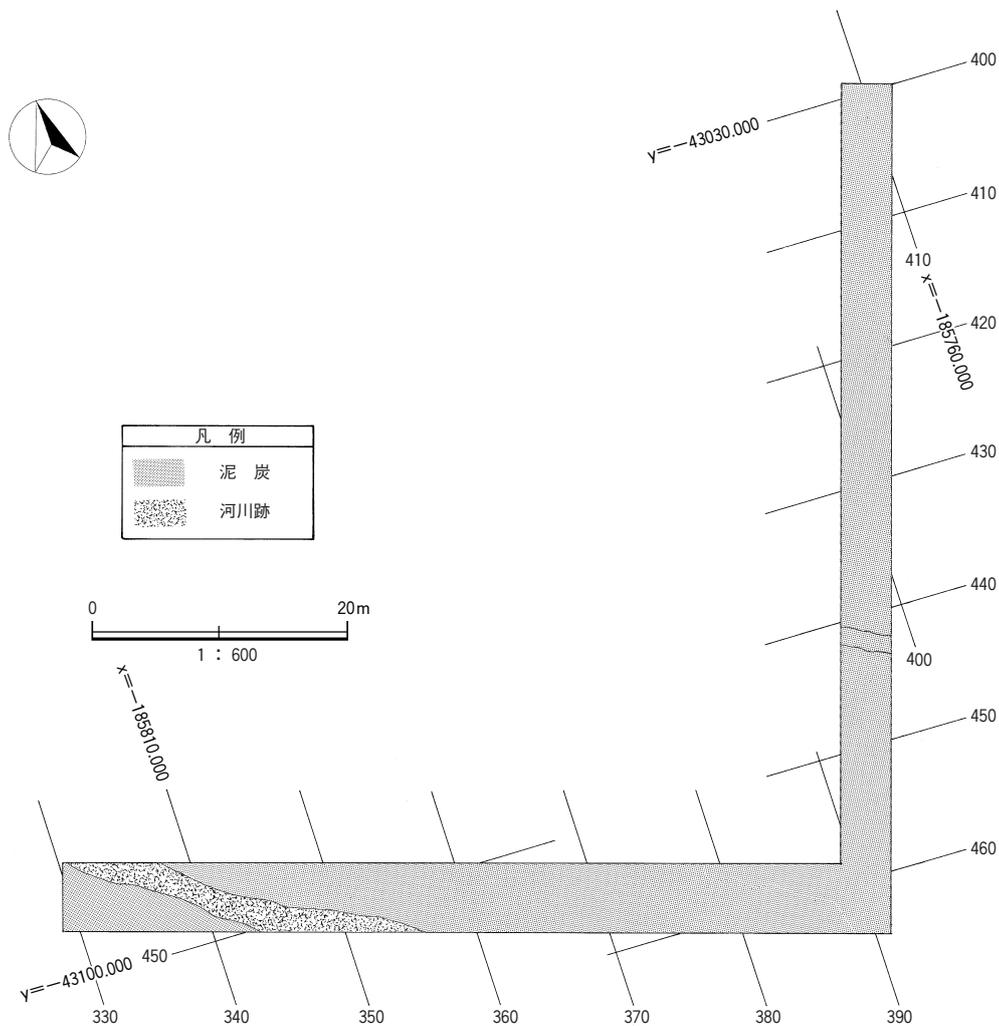
## V 菖蒲江 2 遺跡

### 1 調査の概要

総合交通安全センター（仮称）建設予定地の南東隅を中心に東辺南部と南辺東部を調査区とした。東辺は田植え直後の水田に隣接しており、地下からの漏水により壁面の崩落が懸念されたため、当初より狭めた調査区を設定した。

調査した範囲では、溝跡が 1 条、河川跡が 1 本検出されたのみで、遺構はほとんど認められず、ほぼ全域を泥炭が覆っている状況であった。河川跡は、泥炭の上層部で検出されたものであり、断面形は緩い丸底を呈する。覆土は砂のみの単一層であり、通常の河川跡というより、洪水の際の鉄砲水によって運ばれてきた砂が堆積したものと考えられる。

基本層序は確認し得た範囲で 9 層を数える。Ⅰ層は水田基盤を含む耕作土である。Ⅱ層は黒褐色シルトで、南では削平されたためか消滅する。Ⅲ層は灰黄褐色シルトと礫が互層する。間



第139図 菖蒲江 2 遺跡調査区全図

層として黒褐色シルトと灰色粘質シルトの互層が認められる。IV層は灰黄褐色粘質シルトで、未分解の植物遺体を含み、南にいくにつれて薄くなる。V層は灰色微砂で、後述するVI層の上面に散発的にあらわれる。VI層は黒褐色シルトで、未分解の植物遺体を多く含む。植物包含層である。出土遺物のほとんどはVI層と次述のVII層に含まれる。VII層は灰色を呈するグライ化した砂質シルトで、VIII層を挟るようにレンズ状を呈し、散発的にあらわれる。おそらくは上部をVI層に削られたものと考えられる。VIII層は灰色微砂で、県教育委員会の分布調査において遺構確認面とされた層位である。IX層は砂利や礫で構成され、河川由来のものと考えられる。

## 溝 跡

### SD1 溝跡 (第141図)

395・440区に所在する。ほぼ東西に走る溝跡である。幅約1.3m、深さ約60cmを測り、断面形状は概ね逆台形を呈し、覆土は3層である。第1層と第3層に植物遺体を含む。遺物の出土は認められない。調査範囲が狭いこと、出土遺物が認められないことなどから、性格、時期ともに不明である。

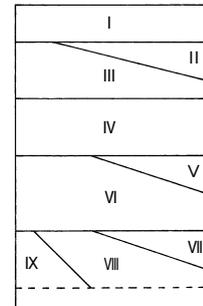
## 2 遺構と遺物

### 出土遺物の概要

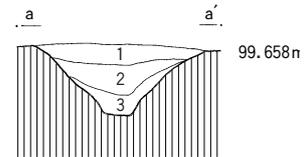
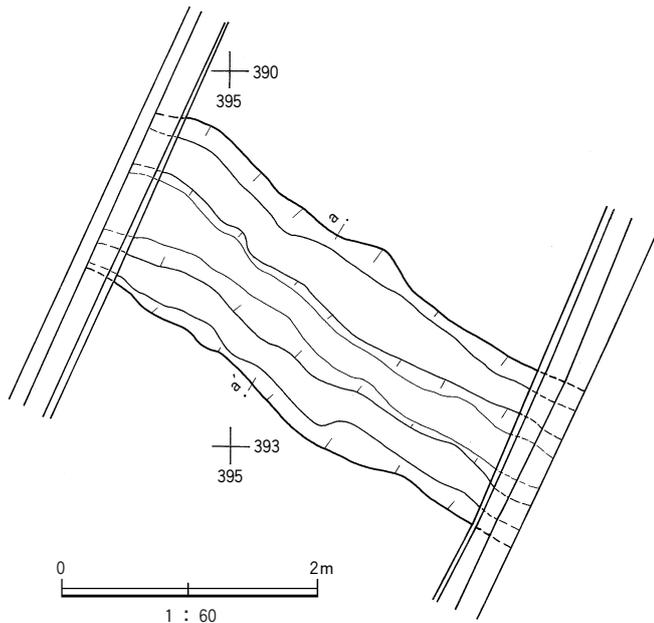
泥炭層中に遺物の包含が認められ、縄文時代後期、古墳時代の土器片などが出土した。基本層序で述べたように、主に第VI層と第VIIからの出土である。量的には縄文土器が主体を占めている。

### 泥炭層中の遺物の分布 (第142図)

泥炭は、調査区ほぼ全域に分布し、395・440区辺りを北限、372・453区辺りを西限とする調査区南東部に土器片が多量に分布する。



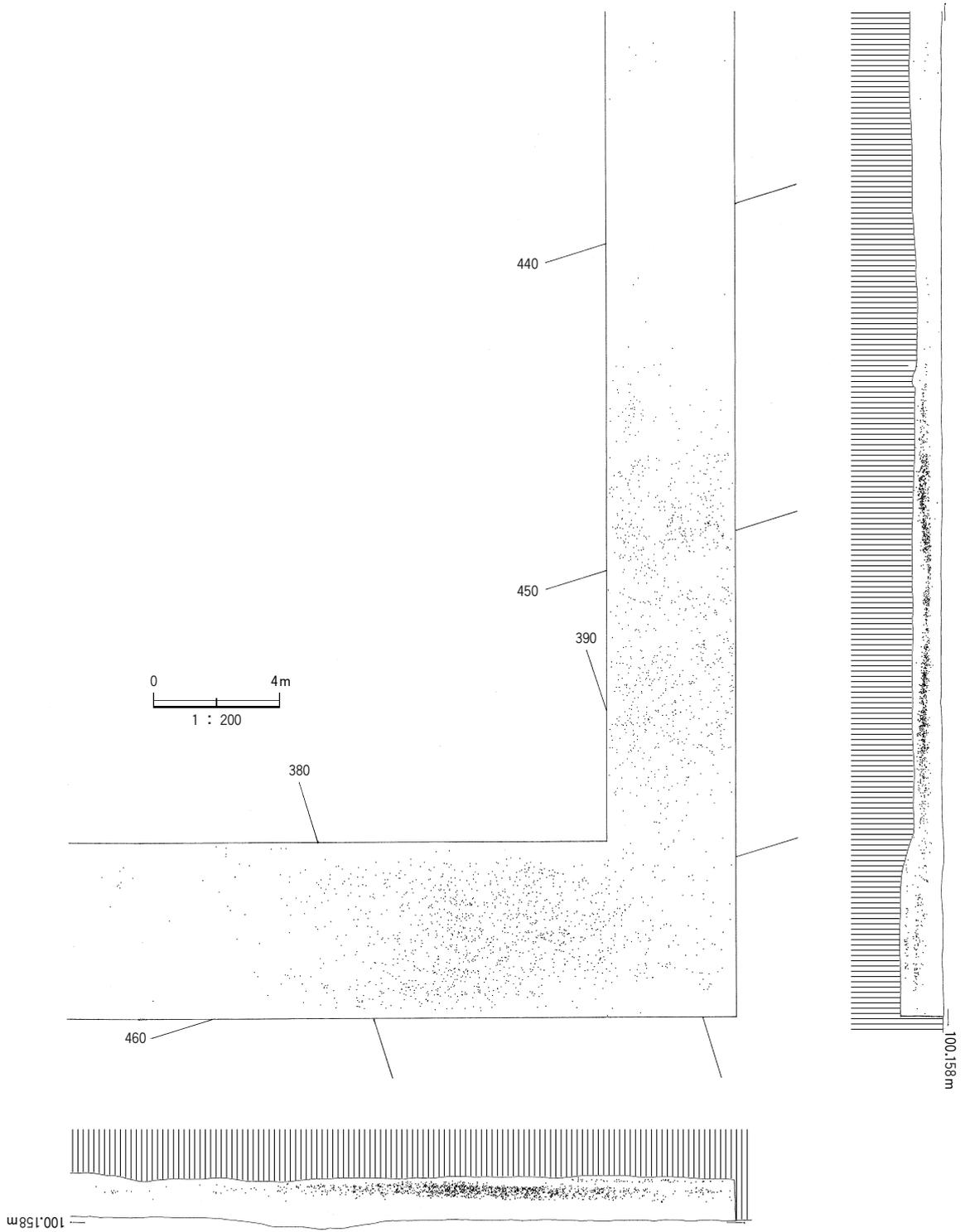
第140図 基本層序



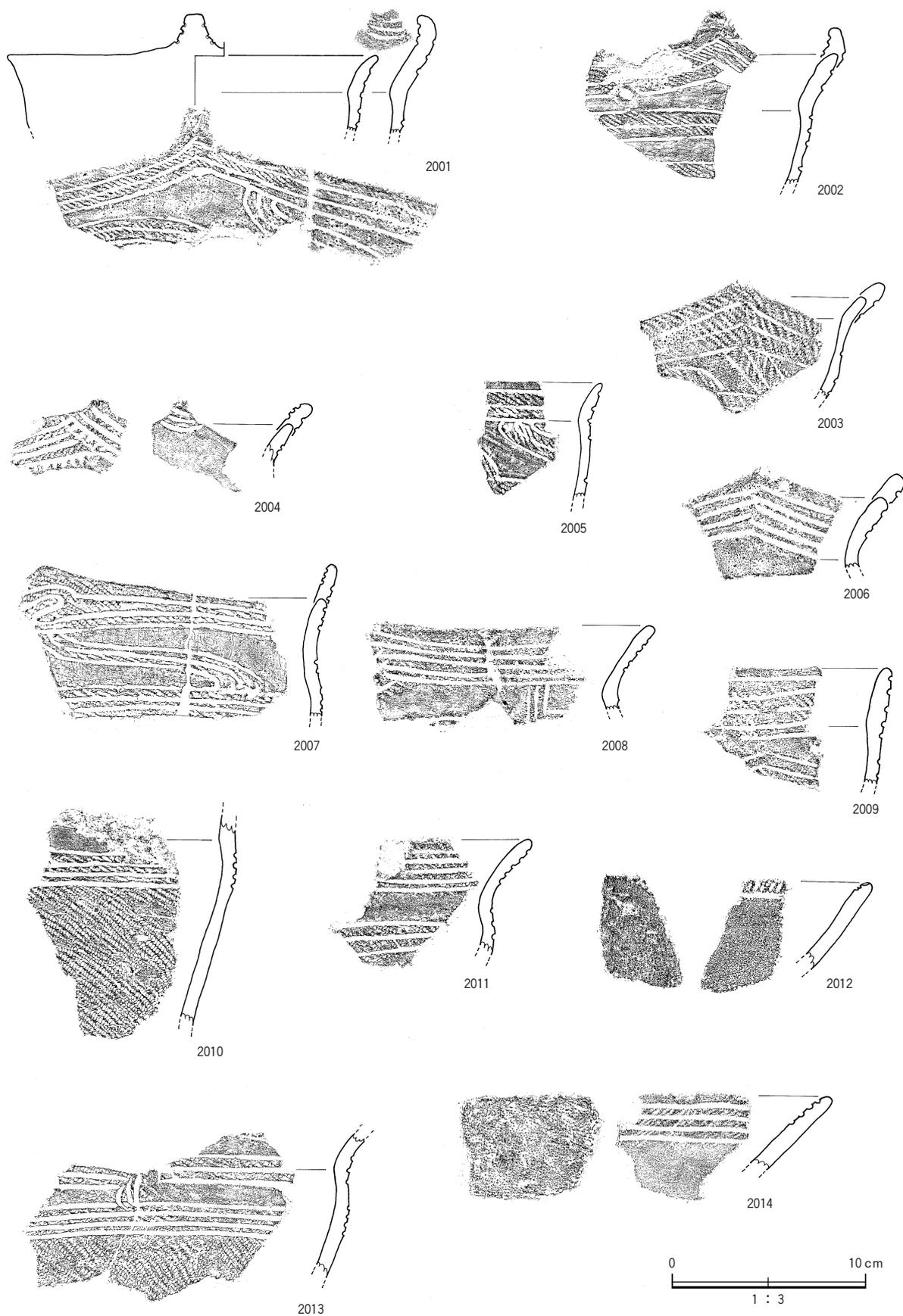
### SD1 溝跡

- 1 10Y R3/1黒褐色シルト  
未分解植物遺体を含む  
粗砂、礫(φ2cm)を含む
- 2 2.5Y3/1黒褐色微砂  
φ0.5~1cmの小石を含む
- 3 5Y3/1オリーブ黒粗砂  
φ0.5~1cmの小石を含む  
植物遺体を含む

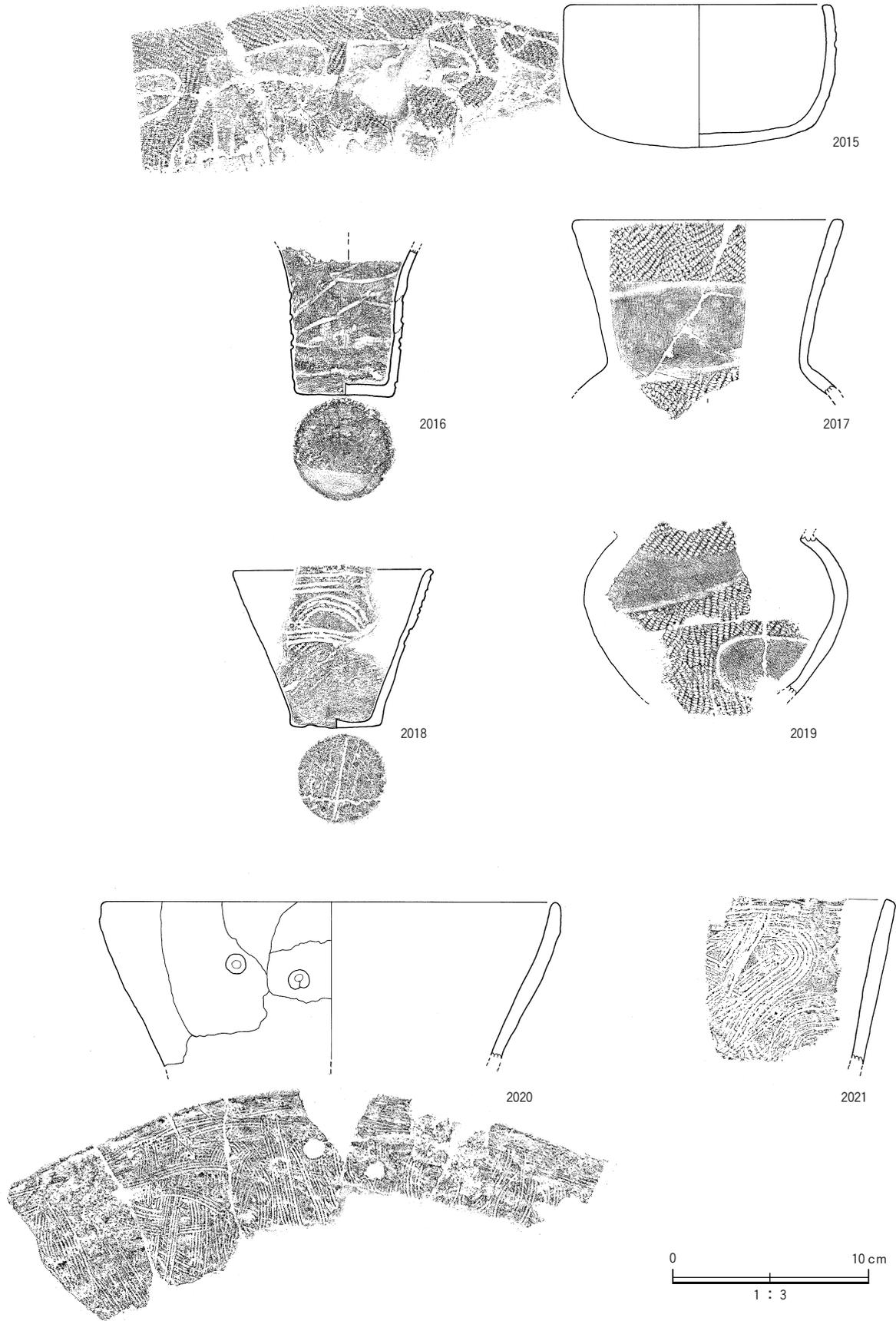
第141図 SD1 溝跡



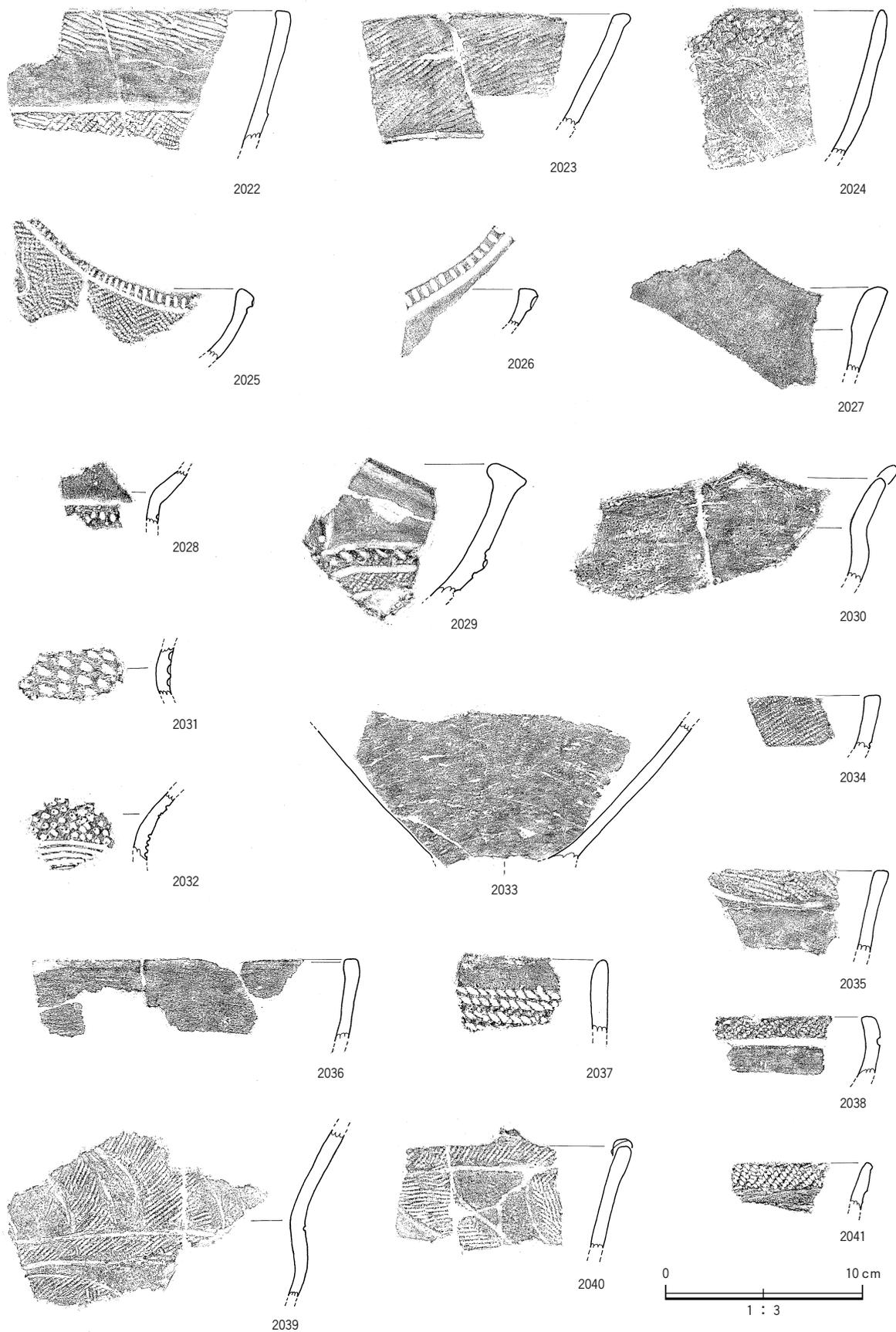
第142図 泥炭層中の遺物分布



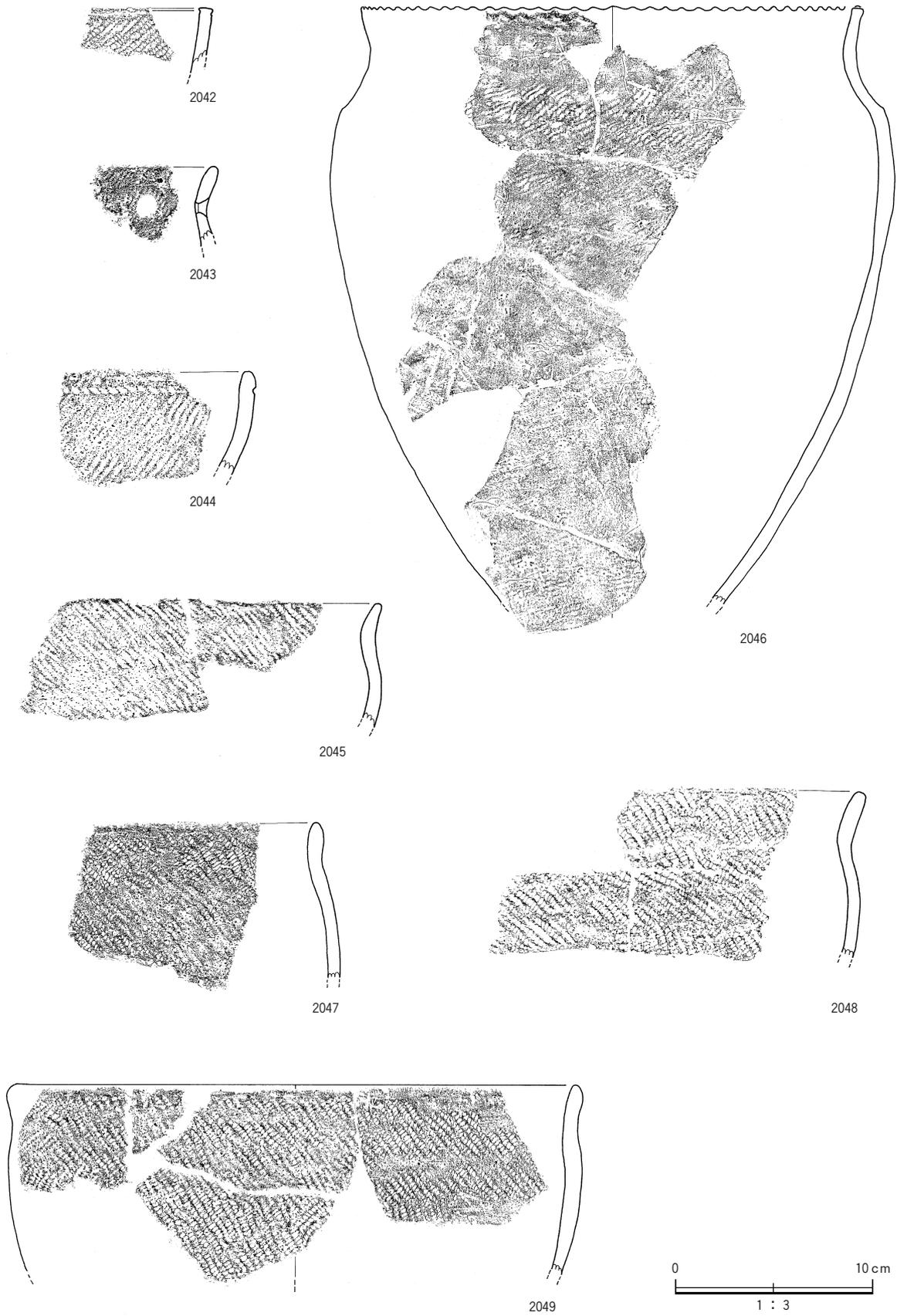
第143図 泥炭層出土遺物(1)



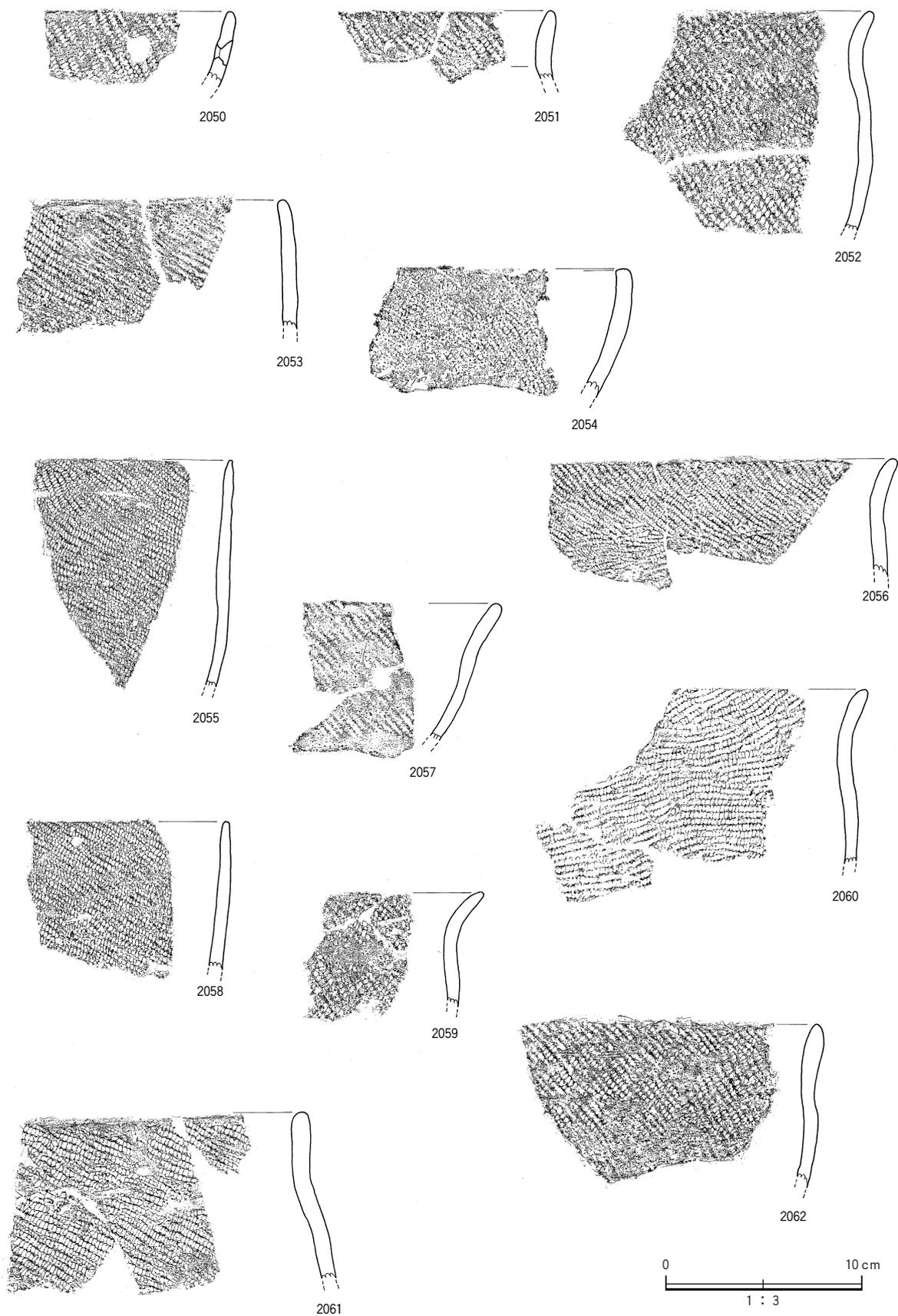
第144図 泥炭層出土遺物（2）



第145図 泥炭層出土遺物(3)



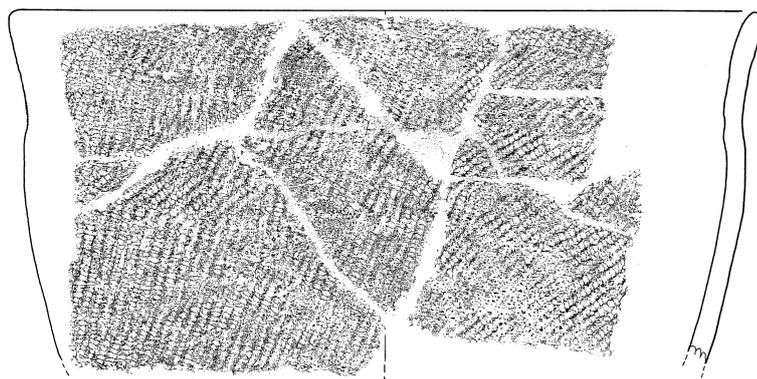
第146図 泥炭層出土遺物（4）



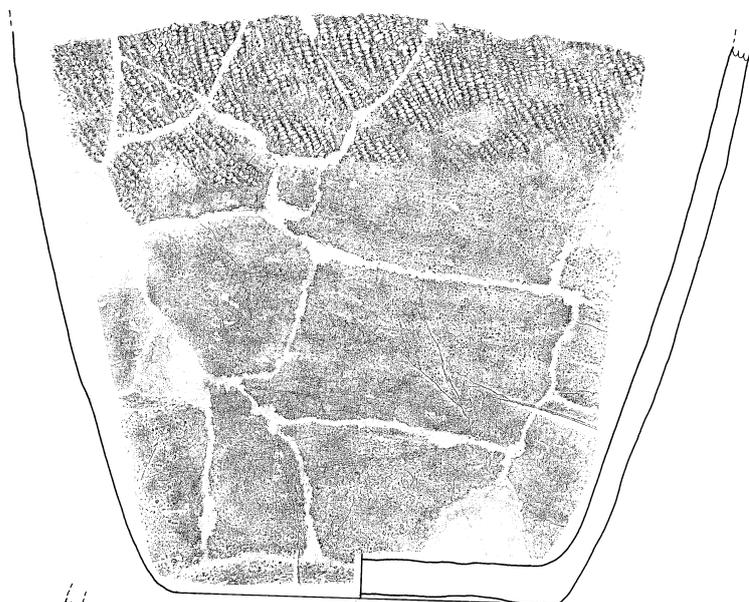
第147図 泥炭層出土遺物 (5)



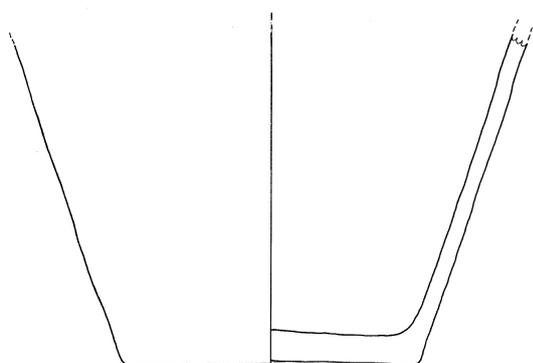
第148図 泥炭層出土遺物（6）



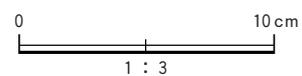
2069



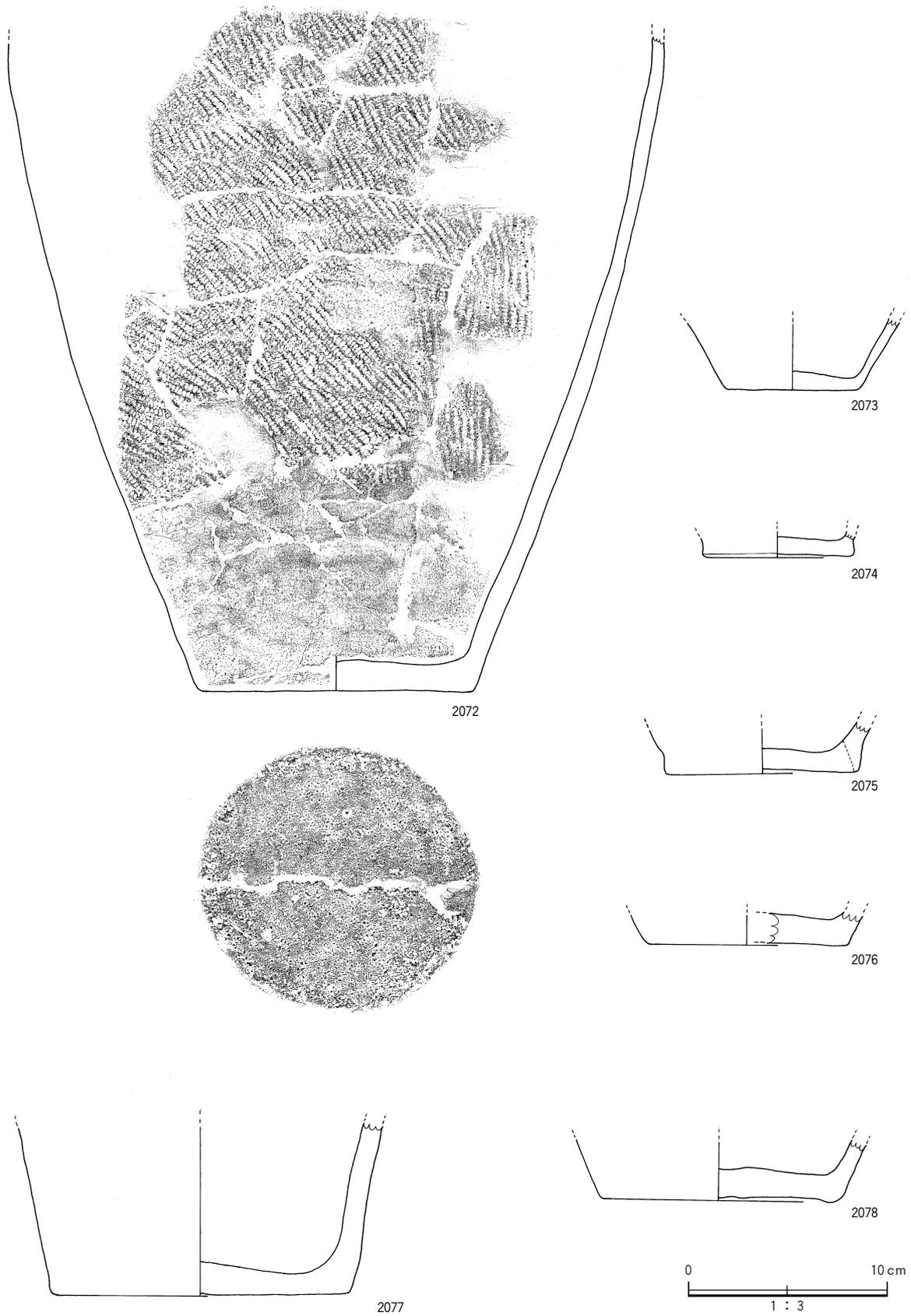
2070



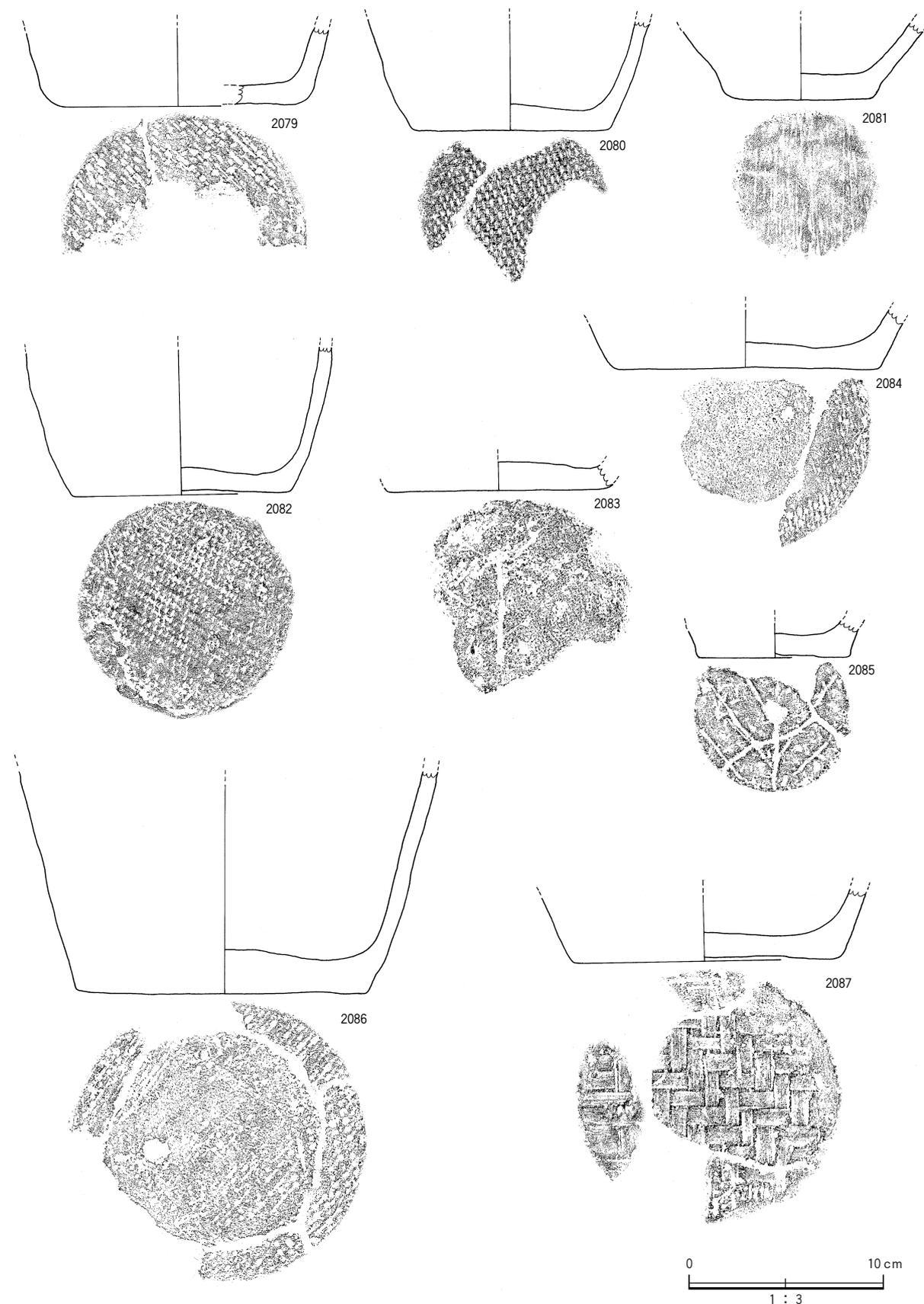
2071



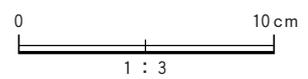
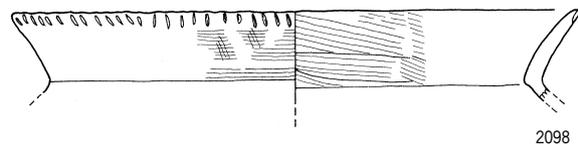
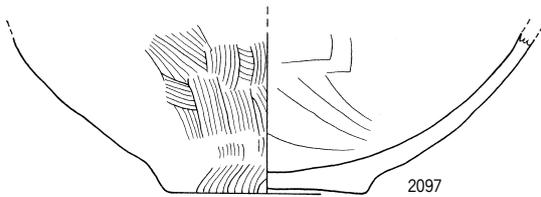
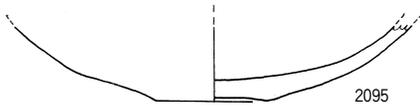
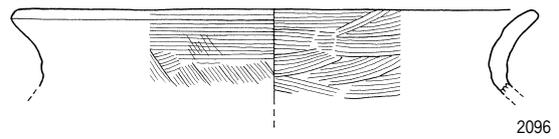
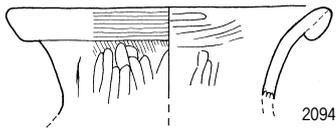
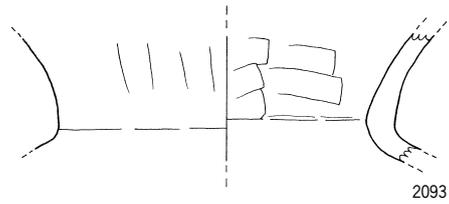
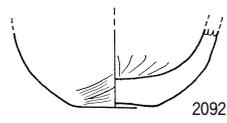
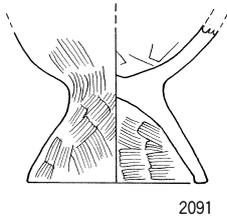
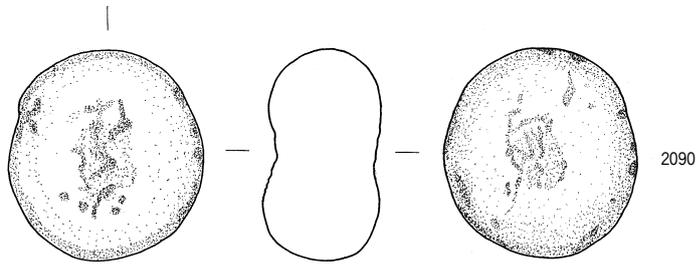
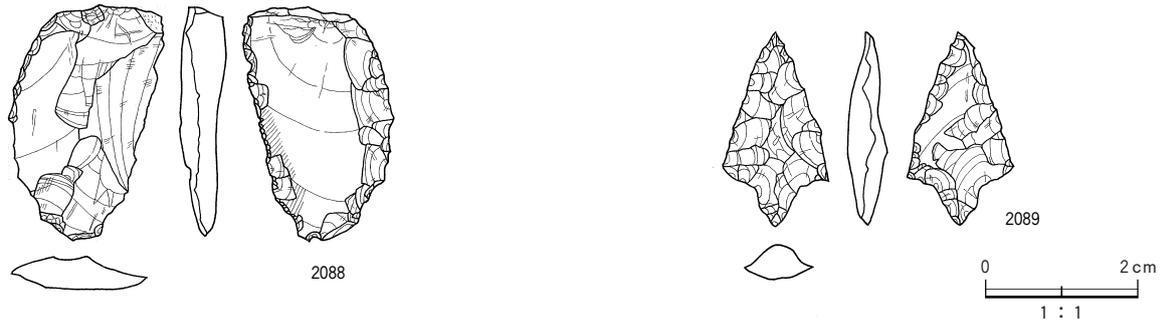
第149図 泥炭層出土遺物（7）



第150図 泥炭層出土遺物(8)



第151図 泥炭層出土遺物（9）



第152図 泥炭層出土遺物 (10)

表27 菖蒲江2遺跡出土縄文土器観察表(1)

図版	器種	出土地点	特徴(外面)	特徴(内面)	備考	写真図版	
143	2001	深鉢	380-450	縄文+沈線文	突起部に沈線文		44
	2002	深鉢	380-460	捺糸文+沈線文	ナデ調整, 山形突起に横位沈線文	補修孔2(内1は未貫通)	44
	2003	深鉢	370-460	縄文+沈線文	ナデ調整		44
	2004	深鉢	380-460	縄文+沈線文+刺突文	ナデ調整, 突起部に横位沈線文		44
	2005	深鉢	380-460	体部磨消縄文+平行沈線文	ナデ調整		44
	2006	深鉢	390-450	磨消縄文+沈線文	ナデ調整		44
	2007	深鉢	380-460	磨消縄文+沈線文	ナデ調整, 突起部に横位沈線文		44
	2008	深鉢	390-450	口縁部沈線文, 頸部ナデ調整	ナデ調整		44
	2009	深鉢	390-450	磨消縄文+沈線文	ナデ調整		44
	2010	深鉢	380-460	体部縄文+横位沈線文	ナデ調整		44
	2011	深鉢	390-450	口縁部縄文+沈線文, 頸部無文帯, 体部縄文+沈線文	ナデ調整		44
	2012	深鉢	390-450	ナデ調整	口縁部斜位刻目文+沈線文, 体部ナデ調整		44
	2013	深鉢	390-450	体部上半~頸部磨消縄文+沈線文, 体部下半縄文	ナデ調整		44
	2014	深鉢	390-440	ナデ調整	口縁部縄文+平行沈線文, 体部ナデ調整		44
144	2015	浅鉢	390-450	磨消縄文(「P」字状, 6単位), 口縁部を平坦に作り出す	ナデ調整		44
	2016	筒状小形鉢	380-450	朱彩, 縄文+沈線文(幾何学模様)	ナデ調整		44
	2017	壺	380-460	口縁部上半縄文, 口縁部下半ミガキ, 肩部縄文	ミガキ		44
	2018	鉢	380-460	体部上半平行沈線文, 三重弧線文(上閉じ), 体部下半縄文, 底部笹葉脈痕	ナデ調整		44
	2019	壺	380-460	体部磨消縄文	ミガキ		44
	2020	鉢	380-450	体部条痕文	ナデ調整	補修孔一対	44
	2021	深鉢	390-450	体部条痕文	ナデ調整		44
145	2022	深鉢	380-450	口縁部捺糸文, 口縁部無文帯, 体部縄文	ナデ調整		45
	2023	深鉢	380-460	口縁部縄文+沈線文, 頸部無文帯, 体部縄文+沈線文	ナデ調整		45
	2024	深鉢	370-450	口縁部・体部捺糸文	ナデ調整, 炭化物付着		45
	2025	深鉢	380-450	口縁部縦位刻目文, 体部綾杉文	ナデ調整		45
	2026	深鉢	390-450	口縁部縦位刻目文+沈線文	ナデ調整		45
	2027	深鉢	390-440	ナデ調整	ナデ調整		
	2028	深鉢	380-450	口縁部ナデ調整, 頸部刺突文	ナデ調整		
	2029	深鉢	390-440	口縁部ナデ調整, 隆帯に斜位刻目文, 体部磨消縄文	ナデ調整		45
	2030	深鉢	380-460	ナデ調整	ナデ調整		45
	2031	深鉢	380-460	頸部横位刺突文	ナデ調整		
	2032	壺	380-450	刺突文+沈線文	ナデ調整		45
	2033	深鉢	390-440	体部下半ナデ, ケズリ	ナデ調整		
	2034	深鉢	390-440	体部縄文+沈線文	ナデ調整		
	2035	深鉢	390-440	口縁部押圧縄文, 体部ナデ調整	ナデ調整		45
	2036	深鉢	390-440	ナデ調整	ナデ調整		
	2037	深鉢	380-450	口縁部ナデ調整, 口縁部押圧縄文	ナデ調整		45
	2038	鉢	390-440	口縁部縄文+横位沈線文, 体部無文帯	ナデ調整		
	2039	深鉢	380-450	磨消縄文, 頸部沈線文	ナデ調整		45
	2040	深鉢	380-460	磨消縄文	ナデ調整		45
	2041	鉢	380-460	口縁部縄文, 頸部無文帯	ナデ調整		

表28 菖蒲江2遺跡出土縄文土器観察表(2)

図版	器種	出土地点	特徴(外面)	特徴(内面)	備考	写真図版	
146	2042	深鉢	390-440	口縁部縄文	ナデ調整		
	2043	深鉢	390-450	口縁部ナデ調整, 頸部捺糸文	ナデ調整	補修孔	
	2044	深鉢	380-450	口縁部縄文+横位押圧縄文	ナデ調整		
	2045	深鉢	390-440	体部縄文	ナデ調整		
	2046	深鉢	380-460	口縁部ナデ調整, 頸部縄文, 体部縄文→ナデ調整	ナデ調整		45
	2047	深鉢	380-460	体部縄文	ナデ調整		
	2048	深鉢	380-460	体部縄文	ナデ調整		
	2049	深鉢	380-460	体部縄文	ナデ調整		
147	2050	深鉢	380-450	口縁部縄文	ナデ調整	補修孔	45
	2051	深鉢	390-440	口縁部縄文	ナデ調整		
	2052	深鉢	380-460	体部縄文	ナデ調整		
	2053	深鉢	380-460	体部縄文	ナデ調整		
	2054	鉢?	380-450	体部縄文	ナデ調整		
	2055	深鉢	380-460	口縁端部ナデ調整, 体部縄文	ナデ調整		
	2056	深鉢	380-460	体部縄文	ナデ調整		
	2057	深鉢	380-450	体部縄文	ナデ調整	補修孔	
	2058	深鉢	380-460	体部縄文	ナデ調整		
	2059	深鉢	380-460	体部縄文	ナデ調整		
	2060	深鉢	380-460	体部縄文	ナデ調整		
	2061	深鉢	380-450	体部縄文	ナデ調整		
	2062	深鉢	390-450	体部縄文	ナデ調整		
	148	2063	深鉢	390-440	体部縄文	ナデ調整	
2064		深鉢	380-450	口縁部縄文			
2065		深鉢	380-450	口縁端部ナデ調整, 体部縄文	ナデ調整		
2066		深鉢	380-460	体部縄文	ナデ調整		45
2067		深鉢	380-460	体部縄文	ナデ調整		
2068		深鉢	380-450	体部縄文	ナデ調整		
149		2069	深鉢	380-460	体部縄文	ナデ調整	
	2070	深鉢	380-460	体部縄文, 体部下半無文帯	ナデ調整		
	2071	深鉢	390-450	体部下半無文帯, 底部笹葉脈痕	ナデ調整		45
150	2072	深鉢	380-460	体部上半縄文, 体部下半無文帯			46
	2073	深鉢	380-460	体部ナデ調整, 底部ナデ調整	ナデ調整		
	2074	深鉢	390-440	体部ナデ調整	ナデ調整		
	2075	深鉢	380-460	体部ナデ調整	ナデ調整		
	2076	深鉢	380-460	体部ナデ調整, 底部ナデ調整	ナデ調整		
	2077	深鉢	380-460	体部ナデ調整	ナデ調整		
	2078	深鉢	390-450	体部ナデ調整	ナデ調整		
	151	2079	深鉢	390-440	体部ナデ調整, 底部網代痕	ナデ調整	
2080		深鉢	390-440	体部ナデ調整, 底部網代痕	ナデ調整		45
2081		深鉢	390-460	体部ナデ調整, 底部笹葉脈痕	ナデ調整		45
2082		深鉢	390-440	体部ナデ調整, 底部網代痕	ナデ調整		
2083		深鉢	380-450	底部木葉痕	ナデ調整		
2084		深鉢	380-466	底部木葉痕	ナデ調整		
2085		深鉢	380-460	底部木葉痕	ナデ調整		
2086		深鉢	380-460	体部縄文, 体部下端無文, 底部網代痕	ナデ調整		
2087		深鉢	380-460	底部網代痕	ナデ調整		45

表29 菖蒲江 2 遺跡出土土師器観察表

図版	写真 図版	器種	出土地	計測値 (mm)			胎土	焼成	色調	調整技法				備考	
				口径	底径	器高				口縁部(坏部・受部) 外面	体部(脚部)外面	口縁部(坏部・受部) 内面	体部(脚部)内面		
152	2091	46	鉢	包含層	-	70	(62)	細	堅	褐色		ハケメ		ヘラナデ、ハケメ	
	2092		壺	包含層	-	32	(30)	細	普	白褐色		ハケメ			外面赤彩
	2093		壺	包含層	-	-	(49)	細	普	褐色	ヘラナデ		ヘラナデ		
	2094	46	壺	包含層	(127)	-	(40)	細	普	褐色	ヨコナデ、ヘラナ デ、ミガキ		ミガキ		
	2095		壺	包含層	-	45	(30)	細	普	赤褐色					内外面摩 減
	2096		甕	包含層	(206)	-	(34)	細	堅	褐色	ヨコナデ、ハケメ		ハケメ		
	2097	46	甕	包含層	-	79	(63)	細	普	暗褐色	ハケメ			ヘラナデ	
	2098		甕	包含層	(222)	-	(36)	細	普	暗褐色	ハケメ		ハケメ		口縁端部 外面刻目

表30 菖蒲江 2 遺跡出土石製品観察表

図版	写真 図版	名称	出土地	長さ (m/m)	幅 (m/m)	厚さ (m/m)	重量 (g)	石質	
152	2088	46	削器	包含層	62.2	40	11.8	25.8	頁岩
	2089	46	石鏃	包含層	38.2	20.7	7.9	3.9	頁岩
	2090	46	凹石	包含層	83	7.6	46	419.4	安山岩

泥炭層中の遺物は、下層に至るほど破片が大きく、上層では小片となる傾向が見られた。これは泥炭がゆっくりと移動したため、重量の大きな破片は重力の影響を受けて沈み込み、重量の小さな破片はあまり重力の影響を受けることなく上層に分布することとなったものと考えられる。これから、当該調査区の遺物は、さほど遠くない上流域から、泥炭とともに洪水などにより運ばれてきたものと考えられる。出土した遺物は、縄文時代後期の土器を主体に、同時期と思われる石器・石製品と古墳時代の土師器が少量みられる。

### 3 調査のまとめ

菖蒲江 2 遺跡では、溝跡が 1 条、河川跡が 1 本検出された。溝跡は性格、時期ともに不明であり、河川跡は洪水時の鉄砲水に伴う砂の移動痕跡と考えられる。他に泥炭層中に縄文時代を主体とする多くの遺物を得たが、これは、より上流域から泥炭とともに移動してきたものと考えられる。

当初認識された「縄文時代（後期）の包蔵地及び古墳時代の集落跡」は、調査の結果「縄文時代（後期）及び古墳時代の包蔵地」であることがわかった。